

小田嶽夫『魯迅伝』の本文異同

松本 和也 MAISUMOTO, Katsuya

ここでは、小田嶽夫（一九〇〇～一九七九、本名・小田武夫）による魯迅の評伝、『魯迅伝』六種の本文異同を具体的に表として示す。

「城外」（『文学生活』昭11・6）による第三回芥川賞作家でもある小田嶽夫は、「中国」をモチーフとした小説を多く書き、魯迅についても、追悼文やモデル小説を含め、少なからぬ文章を書いている¹⁾。そうした小田嶽夫の代表作とも称し得るのが、魯迅の評伝『魯迅伝』である。書籍としての『魯迅伝』は、昭和一六年三月、筑摩書房より刊行される。それに先立ち、原型（の一部）が雑誌に発表され、また戦後にも三度にわたって版元をかえて出版されている。つまり、完全なかたちではないものも含めれば、これまで六種類の小田嶽夫『魯迅伝』が（日本語で）世に問われたことになり、海外でも、范泉訳『魯迅伝』（爾雅社、昭53）として翻訳・刊行されている。

日中戦争下に稿が起こされた『魯迅伝』は、その後、資料的な補足など作者の小田嶽夫に関わる変更にとどまらず、日中関係の直接的・間接的な影響によって、大幅な加筆・削除をはじめ、本文に少なからぬ異同

がみられる。しかし、小田嶽夫に関する研究はきわめて限られたものしかなく、これまで『魯迅伝』の本文異同が本格的に議論されたことはない²⁾。

そこで、この《資料比較》においては、『魯迅伝』を研究対象として位置づけていくための準備作業として、「あとがき」を含めた『魯迅伝』六種の本文の異同を検証する（その意味づけなどに関しては別稿を準備中）。

『魯迅伝』のバリエーション

…小田嶽夫『魯迅伝（第一回）』（『新風』昭15・6）

〔廃刊に伴い連載は一回のみで中断〕

…小田嶽夫『魯迅伝（第一回）・（第二回）・（第三回）』

（『新潮』昭15・9～11）

…小田嶽夫『魯迅伝』（筑摩書房、昭16・3・15）

…小田嶽夫『魯迅の生涯』（鎌倉文庫、昭24・9・20）

…小田嶽夫『魯迅伝』（乾元社、昭28・7・15）

…小田嶽夫『魯迅伝』（大和書房、昭41・10・28）

《凡例》

- 一、引用は、それぞれ先に掲げた雑誌・単行本からとし、旧字は適宜新字に改めた。なお、表では「」の略記を用いる。
- 二、本文の重なりに応じて、表の枠組みを章ごとに変じていく。なお、を一応の完成形とみなして、比較基準とする。
- 三、各版の当該頁を、半角数字でカッコに入れて示す。連載が複数回あるは、その前に1〜3で連載回数を示した。
- 四、各版における異同が、仮名遣いのみの箇所については、それ以外の箇所に異同がある場合のみリストアップした。取り上げられた箇所に ついては、 〃 での表記の異同も示した。
- 五、改段は「／」、形式段落が改まった空所は 〃 で示した。
- 六、他の版に比して、当該箇所が短い場合は章頭に示した。
- 七、各版における異同が微細な場合、適宜傍線を付した。
- 八、「あとがき」などは、稿末に一括して掲載した。

注

- (1) 関連する拙稿として、「小田嶽夫、文学青年から芥川賞作家へ 支那・同人雑誌：『城外』」(『ゲストハウス』平22・4)、「問題領域としての小田嶽夫 「中国」という視座から」(『勉強通信』平22・7・15)、「昭和二〇年代における魯迅受容一面 佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫」(『立教大学日本文学』平22・7)参照。
- (2) 直接の先行研究として、邱嶺「小田嶽夫『城外』と郁達夫『過去』」(『中京大学文学部紀要』平15・12)、李平「小田嶽夫の魯迅観『魯迅伝』を中心として」(『二松』平12・3)がある。また、小田

嶽夫研究の基礎文献としては、小田三月編『小田嶽夫著作目録 七周忌にあたり』(青英舎、昭60)、「特集」田嶽夫・上林暁・木山捷平「(『解釈と観賞』平11・4)がある。

序章「〜」

「原型なし」	(177) 明星映画会社	(6) 明星電影公司	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(174) 情景	(9) 図	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(174) 葬儀場	(6) 殯儀館(葬送の前に屍を安置しておく所)	同じ	同じ	同じ	(10) 殯儀館(葬送の前に屍を安置しておく所)
「原型なし」	(174) 三段ばかり	(9) 三段程	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(174) 憂ひに充ち	(6) 憂へに充ち	(5) 憂ひに充ち	同じ	同じ	(10) 憂いに満ち
「原型なし」	(174) 言ふ程のことには属しないが、	(6) 言ふほどのことには属しないが、	同じ	同じ	同じ	(10) 言つほどのことには属しないが
「原型なし」	(174) 葬列の最先登に	(10) 葬列中に	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(174) 葬儀場で遺骸の到着を待ち迎へてゐる	(10) 葬列に加はらうと して待ち構へた	(4) 葬列に加はらうと待ち構へた	同じ	同じ	(10) 葬列に加わらうと待ち構へた
「原型なし」	同じ	(10) 英雄ではあり	同じ	同じ	(8) 英雄であり	同じ
「原型なし」	(174) けれども私はその葬儀の	(10) けれども葬儀の	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(174) 上海在住の一友からそれは	「該当箇所なし」	同じ	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	同じ	(10) 氣勢を揚げ	同じ	同じ	同じ	(10) 氣勢をあげ
「原型なし」	(174) 策動に基くものだといふことを聞かされたことがあつた。その真偽は	(10) 策動に基くものだといふ説も為されてゐる。果してさうであつたか否かは	同じ	同じ	(8) 政治的策動に基くものだといふ説も為されてゐる。果してさうであつたか否かは	(10) 策動に基くものだといふ説もなされてゐる。果してさうであつたか否かは

<p>「原型なし」</p>	<p>(一)が、今日魯迅が重慶側で抗日陣營の文神として祭り上げられ、魯迅の三年祭など蔣政権下各地方で盛大に行はれたといふ消息は、そのことについても或はあり得たかとも私に思はせる。相手が故人の場合は相当勝手気儘にかついで利用も出来るらしい。と言つても私は何も魯迅を非人民戦線派的とも非抗日的とも言ふわけではない。魯迅の真面目はさういふところによりも他にあつたと言ひたいのである。</p>	<p>(二)が、今日魯迅が重慶側で抗日陣營の文神として祭り上げられ、魯迅の三年祭など蔣政権下各地方で盛大に行はれたといふ消息は、そのことについても或はあり得たかとも私に思はせる。相手が故人の場合は相当勝手気儘にかついで利用も出来るらしい。と言つても私は何も魯迅を非人民戦線派的とも非抗日的とも言ふわけではない。魯迅の真面目はさういふところによりも他にあつたと言ひたいのである。</p>	<p>(三)が、その後魯迅が重慶側で抗日陣營の文神として祭り上げられ、魯迅の忌日祭など蔣政権下各地方で盛大に行はれたといふ消息は、そのことについても或はあり得たかとも私に思はせる。相手が故人の場合は相当勝手気儘にかついで利用も出来るらしい。と言つても私は何も魯迅を非人民戦線派的とも非抗日的とも言ふわけではない。魯迅の真面目はさういふところによりも他にあつたと言ひたいのである。</p>	<p>(四)が、あり得さうなことはある。何れにせよ、死んだ途端にその人の大きさが急に分明するといふことは往々ある例であり、魯迅の場合にはびつたりそれにあてはまつてゐるやうに思はれる。</p>	<p>(二)が、今日魯迅が重慶側で抗日陣營の文神として祭り上げられ、魯迅の三年祭など蔣政権下各地方で盛大に行はれたといふ消息は、そのことについても或はあり得たかとも私に思はせる。相手が故人の場合は相当勝手気儘にかついで利用も出来るらしい。と言つても私は何も魯迅を非人民戦線派的とも非抗日的とも言ふわけではない。魯迅の真面目はさういふところによりも他にあつたと言ひたいのである。</p>
<p>同じ</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 民国共和革命は満洲</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(二) 民国共和革命は、満洲</p>
<p>同じ</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 支那旧文化</p>	<p>(五) 中国旧文化</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(203) 思はれる。この意味深い</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 思はれる。この意味深い</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(二) 思われる。この意味深い</p>
<p>(203) 忘れられてはならない、</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 忘れられてはならない</p>	<p>(五) 忘れられてはならない</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 新支那 (二) 箇所</p>	<p>(五) 新中国 (二) 箇所</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(203) 中身</p>	<p>「原型なし」</p>	<p>(二) 中実</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>

(203) 龐大	「原型なし」	(12) 龐大	に同じ	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(12) 支那	に同じ	に同じ	に同じ
(203) 中身	「原型なし」	(12) 中実	に同じ	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(12) したとごころに	に同じ	に同じ	(二)した所に
(203) 不幸がある。	「原型なし」	(12) 不幸があつた。	に同じ	に同じ	(三)不幸があつた。
(203) 依て	「原型なし」	(12) 依つて	に同じ	に同じ	(三)よつて
(203) 仕事である。 その	「原型なし」	(12) 仕事であり、その	に同じ	に同じ	に同じ
(203) 何人	「原型なし」	(12) 何人 <small>なにびと</small>	に同じ	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(12) 支那民族	(6) 中国民族	に同じ	に同じ
(203) 対する	「原型なし」	(12) たいする	に同じ	に同じ	(12) 対する
(203) 動機について は詳かにしないが	「原型なし」	(12) 動機は彼が出入した広東の伝道会の外人経営者が医学博士だつたことに基く半ば偶然のものらしいが	に同じ	に同じ	(12) 動機は彼が出入した広東の伝道会の外人経営者が医学博士だつたことに基く半ば偶然のものらしいが
に同じ	「原型なし」	(12) 支那改革	(6) 中国改革	に同じ	に同じ
(204) 孫文が初めハワイに学び、後香港に	「原型なし」	(13) 孫文が英領香港に	に同じ	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(13) 支那社会	(6) 中国社会	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(13) 支那旧文化	(6) 中国旧文化	に同じ	に同じ
に同じ	「原型なし」	(13) 支那	(6) 中国	に同じ	に同じ
(204) 根底	「原型なし」	(13) 根底	に同じ	に同じ	に同じ

(204) 勇士が	「原型なし」	(13) 勇士が、	同じ	同じ	同じ
同じ	「原型なし」	(13) 考へて見るに	同じ	同じ	(12) 考えてみるに
(204) 又一応	「原型なし」	(13) 又非常にいびつの形に於てもあれ一応	同じ	同じ	同じ
同じ	「原型なし」	(13) 仮令	同じ	同じ	(12) かりに
同じ	「原型なし」	(13) 傷けられる	同じ	同じ	(12) 傷つけられる
同じ	「原型なし」	(13) 比しては	同じ	同じ	(12) 比して
同じ	「原型なし」	(13) 依る(二箇所)	同じ	同じ	(12) よる
(204) 大きい。／さ ういふ	「原型なし」	(14) 大きい。さういふ	同じ	同じ	(13) 大きい。そういつ
同じ	「原型なし」	(14) ひそやかに	同じ	同じ	(13) ひそかに
「原型なし」	(175) 抱く人も	(14) 抱く人が	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(175) 人生のたれを	(14) 人生について	同じ	同じ	同じ
「原型なし」	(175) 思ひ方には、	(14) 思ひ方には	同じ	同じ	(13) 思い方には
「原型なし」	同じ	(14) 可なり	同じ	同じ	(13) かなり
「原型なし」	(175) それについても彼の生きてゐた支那の環境を十分に知ればすべての疑ひは消失してしまふものと思ふ。	(15) それについても後に本書に少しづつ述べる彼を圍繞してゐた支那の環境を十分に知ればすべての疑ひは消失すると思ふ。	同じ	同じ	(15) それについても後に本書に少しづつ述べる彼を圍繞してゐた支那の環境を十分に知ればすべての疑ひは消失すると思ふ。
同じ	「原型なし」	(15) 訳出して見る。	同じ	同じ	(13) 訳出してみる。
同じ	「原型なし」	(15-22) *魯迅作品群が	「該当箇所なし」	同じ	同じ

			ら七箇所の引用文				
(204)各々	〔原型なし〕	(15)各々	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	に同じ	
に同じ	〔原型なし〕	(16)人性の	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(17)人生の	
に同じ	〔原型なし〕	(17)文章が、恰かも	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(15)文章が恰かも	
に同じ	〔原型なし〕	(17)無くなる	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(15)なくなる	
205 沈没しようとして ある。だが暗黒は 又私を併呑するし、 かと言つて光明は又 私を消失させる。 〔略〕沈没しよう。	〔原型なし〕	(18)沈没しようとして ある。だが暗黒は又私 を併合するし、かと言 つて光明は又私を消失 させる。〔略〕沈没し よう。	〔該当箇所なし〕	(13)沈まうと思ふ。だ が暗黒は又私を呑み込 むだらうし、かと言つ て光明は又私を消えさ せてしまふ。〔略〕沈 むはうがいい。	に同じ	(13)沈 没しようとし ている。だが暗黒は又 私を呑み込むだらうし、 かと言つて光明は又私 を消失させる。〔略〕 沈没しよう。	
に同じ	〔原型なし〕	(18)必ず	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(15)必ず	
に同じ	〔原型なし〕	(19)若し	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(16)もし	
206 意料	〔原型なし〕	(19)意図	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	に同じ	
に同じ	〔原型なし〕	(19)出来ない。	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(16)できない。	
に同じ	〔原型なし〕	(19)今更	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(16)今さら	
に同じ	〔原型なし〕	(20)此の時此の地に生 れ	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(17)この時この地に生 まれ	
に同じ	〔原型なし〕	(20)竟に	〔該当箇所なし〕	(15)竟 <small>ついに</small> に	に同じ	(17)遂に	
に同じ	〔原型なし〕	(20)亦此の	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(17)又この	
に同じ	〔原型なし〕	(20)亦(二箇所)	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(17)又	
に同じ	〔原型なし〕	(20)怡す	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	(17)喜ばす	
207 一九三〇年二月、 鹿地直訳。	〔原型なし〕	(21)一九三〇年二月	〔該当箇所なし〕	に同じ	に同じ	に同じ	

同じ	「原型なし」	(22) 止め度が無い	「該当箇所なし」	同じ	(18) 止め度がない
同じ	「原型なし」	(23) 宥して	「該当箇所なし」	同じ	(18) 許して
同じ	「原型なし」	(23) 魯迅がさうしな ければならなかつたの は、新支那の実現を渴 望してゐるからこそで あり、それを阻むもの は直接の相手は何もの であれ、究極は長い歴 史の期間支那の肉体を 蝕んで来たパチルスで あり、それ故に魯迅の たたかふ相手は常にこ のパチルスに外ならな かつた。	(23) 魯迅は新中国の中 実を作るために終生苦 しんだ、と私は言つた が、じつさいは「苦し んだ」などといふ言葉 で言ひ表はされないう の戦ひであつた。と言 ふのは彼のその努力を 踏みつぶさうとする敵 手の力はあまりにも強 靱である。敵手といふ のは、直接の相手は何 ものであれ、究極は長 い歴史の期間中国の肉 体を蝕んで来たパチル スに外ならない。	同じ	(18) 魯迅がさうしな ければならなかつたの は、新支那の実現を渴 望してゐるからこそで あり、それを阻むもの は直接の相手は何物で は直接の相手は何もの であれ、究極は長い歴 史の期間支那の肉体を 蝕んで来たパチルスで あり、それ故に魯迅の たたかふ相手は常にこ のパチルスに外ならな かつた。
同じ	「原型なし」	(23) 形式的なお座なり 治療を施すに過ぎない のが、	(23) せいで形式的なお 座なり治療を施すほか 術のないところを、	同じ	(19) 形式的なお座なり 治療を施すに過ぎない のだが、
同じ	「原型なし」	(23) 診当てたものを私 流に解釈すれば、それ は孔教と、それに對す る支那民衆の盲従と、 そこから来る支那民心 の	(23) 診当てたものは孔教 と、それに對する中国 民衆の盲従と、そこか ら来る中国民心の	同じ	(19) 診当てたものを私 流に解釈すれば、それ は孔教と、それに對す る支那民衆の盲従と、 そこから来る支那民心 の
同じ	「原型なし」	(24) 毛筆	同じ	同じ	(19) もはや
同じ	「原型なし」	(24) 骨髓にまで	同じ	同じ	(19) 骨髓に迄
同じ	「原型なし」	(24) 支那	(9) 中国	同じ	同じ

「該当箇所なし」	「原型なし」	「該当箇所なし」	⑥ このやうな状態であつたから、魯迅がいつもいかに憂ひ、いかに絶望し、いかに怒つてみたかは、魯迅の作物を少しでも読まれた方はすぐに感じられたことと思ふが、魯迅がさうなるのも無理からぬことではある。が、さういふなかにあつても魯迅はあくまで節を屈せず、又頹廢へ落ちる最後の一線に強く踏みとどまつてゐたのである。	「該当箇所なし」	「該当箇所なし」
「同じ」	「原型なし」	(24) さういふことか び	(10) そんな苦しみ の性質のちがひから	「同じ」	(19) そういふことか ら
(208) 憂ひ	「原型なし」	(24) 憂へ	(10) 憂ひ	「同じ」	(19) 憂い
(208) ものではあるにせよ、孫文に依つて	「原型なし」	(24) ものではあるにせよ、孫文に依つて	(10) ものであるにせよ、孫文に依つて	「同じ」	(16) ものではあるにせよ、孫文によつて
「同じ」	「原型なし」	(24) 爾來常に政治当局者の標語とされてゐる。	「同じ」	(18) 革命後永く政治当局者の標語とされてゐた。	(16) 爾來常に政治当局者の標語とされている。
「同じ」	「原型なし」	(24) 未だ	「同じ」	「同じ」	(19) また
「同じ」	「原型なし」	(25) 幾つか	「同じ」	「同じ」	(16) いくつか
「同じ」	「原型なし」	(25) 支那人	(10) 中国人	「同じ」	「同じ」
「同じ」	「原型なし」	(25) 又	(11) また	「同じ」	「同じ」
「同じ」	「原型なし」	(25) 瞳	「同じ」	「同じ」	(20) 眼
「同じ」	「原型なし」	(25) 如何にも	「同じ」	「同じ」	(20) いかにも

<p>同じ</p>	<p>【原型なし】</p>	<p>(26)と同じ(二箇所)</p>	<p>同じ</p>	<p>(20)所(一箇所)</p>
<p>同じ</p>	<p>【原型なし】</p>	<p>(26)無く</p>	<p>同じ</p>	<p>(20)ない</p>
<p>同じ</p>	<p>【原型なし】</p>	<p>(26)無く</p>	<p>同じ</p>	<p>(20)なく</p>
<p>同じ</p>	<p>【原型なし】</p>	<p>(27)成る</p>	<p>同じ</p>	<p>(21)なる</p>
<p>同じ</p>	<p>【原型なし】</p>	<p>(28)この彼の死んだ年の一九三六年以前と、翌年の一九三七年以後とは支那の歴史に画然とした色分けがつく。即ち支那事変以前と以後である。魯迅が生きてゐて事変に遭遇したならば如何の感想を抱いたかは軽々に判断を許されない。そして私は魯迅が事変の前夜に死んだ事に自分の感傷から無理にも何か意味をつけて考へたがるのである。事変が支那民族にとつても曙となるならば、魯迅は暗黒のさ中に死んだ事になるし、それがより悪い状態を持ち来すならばせめても魯迅は救はれた事になる。若し又支那がかういふ大事変の洗礼の後にも尚本体を改めず、旧態依然を続けるならば魯迅は空しく徒勞を続けたことになる。／遮 莫、孫文はその成した破天荒の業に依つて長く歴史</p>	<p>(29)この彼の死んだ年の一九三六年以前と、翌年の一九三七年以後とは中国の歴史に画然とした色分けがつく。即ち日華事変以前と以後である。魯迅が生きてゐて事変に遭遇したならば如何の感想を抱いたかは軽々に判断を許されない。そして私は魯迅が事変の前夜に死んだ事に自分の感傷から無理にも何か意味をつけて考へたがるのである。事変が中国民族にとつても曙となるならば、魯迅は暗黒のさ中に死んだ事になるし、それがより悪い状態を持ち来すならばせめても魯迅は救はれた事になる。若し又中国がかういふ大事変の洗礼の後にも尚本体を改めず、旧態依然を続けるならば魯迅は空しく徒勞を続けたことになる。／遮 莫、孫文はその成した破天荒の業に依つて長く歴史</p>	<p>(30)この年は日華戦争がはじまる前の年で、中国が日本帝国主義に最後の土壇場まで追ひつめられてゐた、極度に暗い時期であつた。私は以前、日華開戦中「中国がかういふ大事変の洗礼の後にも尚本体を改めず、旧態依然をつづけるならば魯迅は空しく徒勞をつづけたことになる」と書いたことがあつたが、魯迅の労苦は果して徒勞に終つたであらうか？私が説明するまでもなく、ここ数年來の中国の新情勢がそれに答へてくれてゐる。／その新情勢が生れたことについて、魯迅の力がどれほど与つてゐたかについては、私が語るよりも、現中国の首班、毛沢東の言葉に見やう。すなはち「魯迅はこの文化新軍の最も偉大で、最も勇ましい旗手であつた。魯迅は、中国文</p>

に崇められるとは云へ、その主義主張は時と共に改められるであらうし、その彼が革めた政治形態と雖もいつ又変革されない日がないとも保し難い。けれども魯迅が血を以て綴つた国家、社会、民族を思ふ熱誠の文字は、いつの日にも誰かあつて燈の下にその書を繙く若人の胸をあため、その多感な血を熱くたぎらせることであらう。

しかも偉大な文学者であつただけでなく、偉大な思想家であり、偉大な革命家であつた。魯迅の骨はじつに硬く、奴隸根性やへつらひ氣質は毛筋ほどもなかつた。これは植民地、半植民地の人民がもつとも尊重しなければならぬ性格である。魯迅は文化戦線上で、全民族の大多数を代表し、敵人に向つて鋒を衝き、陣を陥れることもつとも正確で、もつとも勇敢で、もつとも堅決で、もつとも忠実で、もつとも熱烈な空前の民族英雄であつた。魯迅の方向こそ中華民族新文化の方向である。／＼私

史に崇められるとは言え、その主義主張は時と共に改められるであらうし、その彼が革めた政治形態といえどもいつ又変革されない日がないとも保し難い。けれども魯迅が血を以て綴つた国家、社会、民族を思ふ熱誠の文字は、いつの日にも誰かあつて燈の下にその書を繙く若人の胸をあため、その多感な血を熱くたぎらせることであらう。

は先きほど魯迅が苦しむ受難者であつたと書いた、が、それはつい数年前までの彼の姿で、今は国の元首に赫々たる英雄としてこのやうにまで推賞されてゐることを感慨深く思ふ。遮々莫々、私は今日の中華人民共和国の真状を詳かにはしないが、中国が多分に変つて来たことは事実らしく、作品「故郷」の終り近く彼が「彼等は新しい見も知らないやうな生活をしなければならぬ

第一章 幼少年時代（一）

	<p>(176)浙江省紹興の産</p>	<p>(33)八月三日浙江省紹興城内東昌坊口で生れた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(27)八月三日浙江省紹興城内東昌坊口で生まれた。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(33)家は代々学者の家筋で、祖父は当時翰林学士として北京にあり、父も相当な読書人であった。生れた時は北京の祖父によつて本名を樟壽、字を豫山と命名されたのであつたが、後に字の豫山は雨傘に発音が近いので祖父にたのんで豫才と改めてもらひ、又長じて南京の学校へ試験を受けに行った際初めて樹人と改名したのであつた。</p>	<p>(17)家は代々学者の家筋で、祖父は当時翰林学士として北京にあり、父も相当な読書人であった。生れた時は北京の祖父によつて本名を樟壽、字を豫山と命名されたのであつたが、後に字の豫山は雨傘に発音が近いので、祖父にたのんで豫才と改めてもらひ、又長じて南京の学校へ試験を受けに行った際初めて樹人と改名したのであつた。</p>	<p>(25)家は代々学者の家筋で、祖父は当時翰林学士として北京にあり、父も相当な読書人であった。生れた時は北京の祖父によつて本名を樟壽、字を豫山と命名されたのであつたが、後に字の豫山は雨傘に発音が近いので祖父にたのんで豫才と改めてもらひ、又長じて南京の学校へ試験を受けに行った際初めて樹人と改名したのであつた。</p>	<p>(27)家は代々学者の家筋で、祖父は当時翰林学士として北京にあり、父も相当な読書人であった。生れた時は北京の祖父によつて本名を樟壽、字を豫山と命名されたのであつたが、後に字の豫山は雨傘に発音が近いので祖父にたのんで豫才と改めてもらひ、又長じて南京の学校へ試験を受けに行った際初めて樹人と改名したのであつた。</p>
	<p>に同じ</p>	<p>(33)十余年前</p>	<p>(17)二十余年前</p>	<p>に同じ</p>
<p>(176)流石に</p>	<p>に同じ</p>	<p>(33)さすがに</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(34)河</p>	<p>に同じ</p>	<p>(24)川</p>
<p>(176)経験内では</p>	<p>に同じ</p>	<p>(34)経験内のことではあるが</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>

いのだ」と、半ば絶望的に言つた言葉が、そのまま実現されたのだとしたなら、そのあまりの早さに地下の魯迅はむしろおどろいてゐるかも知れない。

(176) 澄み通つてをり に同じ	(34) 澄み通つてゐ、 (34) 思ひに頗る	(18) 澄み透つてゐ、 に同じ	に同じ	(24) 澄み通つてゐ、 (24) 思ひに、頗る
(176) 十方位ゐ	(34) 十万ぐらゐ	に同じ	に同じ	(24) 十万ぐらゐ
(176) 掘割の	(34) 掘割の縦横に	(18) 掘割の縦横に	に同じ	に同じ
(176) ところに、「会稽の恥」で知られてゐる会稽山が駘蕩として田園の眺めを劃して	(34) ところに、駘蕩とした田園の眺めを劃して会稽山が	に同じ	に同じ	(24) 所に、駘蕩とした田園の眺めを劃して会稽山が
(176) 魯迅の家は紹興城内東昌坊口に在り、代々学者の家筋であつた。祖父は当時翰林学士として北京に在り、父も相當な讀書人であつた。四歳年下の弟に周作人がゐ、その又四歳下に周建人がゐた。周作人は人も知る中外の文学に通じた碩学で、兼ねて隨筆の大家であり、周建人は日本ではあまり知られてゐないが生物学などに関する幾多の著書を持つてゐる人である。父親は子供等には割合冷やかかな人であつたらしいが、祖父は孫たちを深く愛し、魯迅はこの祖父の影響を受けもし、その性質を受け継いでゐたらしい。	(34) 魯迅の父親は子供等には割合冷やかな人であつたらしいが、祖父は孫たちを深く愛し、魯迅はこの祖父の影響を受けもし、性質も受け継いでゐたらしい。この祖父のことをもう少し詳しく書く必要があるのだが、残念なことに今はごく簡単なことしかわかつてゐない。四歳年下の弟に周作人がゐ、その又四歳下に周建人がゐた。周作人は人も知る中外の文学に通じた碩学で、兼ねて隨筆の大家であり、周建人は日本ではあまり知られてゐないが生物学などに関する幾多の著書を持つてゐる人である。	に同じ	に同じ	(24) 魯迅の父親は子供等には割合冷やかな人であつたらしいが、祖父は孫たちを深く愛し、魯迅はこの祖父の影響を受けもし、性質も受け継いでゐたらしい。この祖父のことをもう少し詳しく書く必要があるのだが、残念なことに今はごく簡単なことしかわかつてゐない。四歳年下の弟に周作人がゐ、その又四歳下に周建人がゐた。周作人は人も知る中外の文学に通じた碩学で、兼ねて隨筆の大家であり、周建人も日本ではあまり知られてゐないが生物学などに関する幾多の著書を持つてゐる人である。
(176) 書くことの一事を	(35) 書くことなどを	に同じ	に同じ	に同じ
(176) 出来る。	(35) 出来るであらう。	に同じ	に同じ	(25) できるであらう。
(176) 文章があるので左に一部分を抜書することにす	(35) 文章がある。／「豫才は小さい時から書画が好きると、彼ははじめのうちには	に同じ	に同じ	(25) 文章がある。／「豫才は小さい時から書画が好き

る。豫才（魯迅の字）は小さい時から書画がすきだつた、といつてもそれは書家や絵かきの肉筆ではなくて、普通の一冊一冊の唐本仕立ての本と画譜だつたが、最初は本が買へないで挿絵小説を借りて来て見るだけだつた。光緒癸己（一八九三）祖父が事につて下獄し、一家分散するや、私は豫才と共に皇甫なる母方の伯父の家に預けられた。そこは范嘯風の家隣の隣だつた。その後、小窮歩に移つたが、そこは秦秋漁の娼園の廂房だつた。たしかまだ皇甫荘にゐた時分だつたが、豫才は表兄から『蕩寇志』の挿絵を一冊借りて来て、『吳公紙』と呼ぶ一種の毛太紙を買つて来て、一枚一枚しき写し、一冊の厚い本に装幀し、あとでたしか一二百文の代価で書塾の同窓に売つたかに記憶する。家に帰つてからも画譜を沢山しき写した。今におぼえてゐるが、あるとき堂前の廊下で馬鏡江の『詩中画』だつたか王治梅の『三十六賞心楽事』だつたかをしき写ししてゐたが、描きさしして他処に行つた間に祖母が見て面白がり、二筆三筆描き加へて絵を駄目にしてしまつた、豫才がそれを破つて描きなほしたので祖母が少々しよげてゐたことがある。その後、お年玉の金などいくらか貯へが来たので本を買ふやうになつた、といつてもそれは書家や画家の肉筆でなく、普通の一冊一冊の糸とちの本と画譜だつたが、最初は本が買へないで挿絵小説を借りて来て見るだけだつた。光緒癸己（一八九三）祖父がある事のために下獄し、一家分散するや、私と豫才は皇甫荘にゐる母方の伯父の家に預けられた。そこは范嘯風の家隣の隣だつたが、そこは秦秋漁の娼園の廂房だつた。たぶんまだ皇甫荘にゐた時分だつたが、豫才は表兄から『蕩寇志』の挿絵を一冊借りて来て、『吳公紙』と呼ぶ一種の毛太紙を買つて来て、一枚一枚しき写し、一冊の厚い本に装幀し、あとでたしか一二百文の代価で書塾の同窓に売つたかに記憶する。家に帰つてからも画譜を沢山しき写した。今におぼえてゐるが、あるとき堂前の廊下で馬鏡江の『詩中画』だつたか王治梅の『三十六賞心楽事』だつたかをしき写ししてゐたが、描きさしして他処に行つた間に祖母が見て面白がり、幾筆か描き加へて絵を駄目にしてしまひ、豫才がそれを破つて別に描きなほしたので祖母が少々しよげてゐたことがある。その後、お年玉の金などいくらか貯へが来たので本を買ふやうになつた、といふことである。

だつた、といつてもそれは書家や画家の肉筆でなく、普通の一冊一冊の糸とちの本と画譜だつたが、最初は本が買へないで挿絵小説を借りて来て見るだけだつた。一八九三年（光緒癸己）祖父がある事の爲下獄し、一家分散するや、私と豫才は皇甫荘にゐる母方の伯父の家に預けられた。そこは范嘯風の家隣の隣だつたが、そこは秦秋漁の娼園の廂房だつた。たぶんまだ皇甫荘にゐた時分だつたが、豫才は表兄から『蕩寇志』の挿絵を一冊借りて来て、『吳公紙』と呼ぶ一種の毛太紙を買つて来て、一枚一枚しき写し、一冊の厚い本に装幀し、あとでたしか一二百文の代価で書塾の同窓に売つたかに記憶する。家に帰つてからも画譜を沢山しき写した。今におぼえてゐるが、ある時堂前の廊下で馬鏡江の『詩中画』だつたか王治梅の『三十六賞心楽事』だつたかをしき写ししてゐたが、描きさしして他処に行つた間に祖母が見て面白がり、幾筆か描き加へて絵をだめにしまひ、豫才がそれを破つて別に描きなほしたので祖母が少々しよげてゐたことがある。その後、お年玉の金などいくらか貯へができたので本を買ふやうになり、もう借り

金などでいくらか貯へが
来たので本を買ふやうにな
り、もう借りて写さずとも
よかつた。一番早く買ひ入
れたのはたしか石印二冊本
の岡元鳳（日本大阪の本
学者）の著した『毛詩品物
図考』だつた。この本は最
初やはり皇甫荘で見たのだ
が非常に羨ましがつた。大
通りの書店から一部買つて
来たが、偶々少し紙が破れ
てゐたり墨でよこれてゐた
りして、満足できないで、
持つて行つて取換へ、それ
が二度か三度も重つたの
で、たうとう本屋の手代が
うるさがり、これは姉さん
の顔よりも白いものに何で
取り換へますとからかつた
ので、ムツとして出て、も
う二度とそこへは本を買ひ
に行かなかつた。（下略）
（松枝茂夫訳）

「該当箇所なし」

り、もう借りて写さなくて
もよかつた。一番早く買ひ
入れたのはたしか石印二冊
本の岡元鳳（日本大阪の本
草学者）の著した『毛詩品
物図考』だつた。この本は
最初やはり皇甫荘で見て非
常に羨ましがつたもので、
大通りの書店から一部買つ
て来たが、偶々少し紙が破
れてゐたり墨でよこれてゐ
たりして、どうしてでも満足
できず、持つて行つて取換
へ、それが二度三度と重つ
たので、たうとう本屋の手
代がうるさがり、これは姉
さんの顔よりも白いものに
何で取り換へますとからか
つたので、ムツとして出て、
もう二度とそこへは買ひに
行かなかつた。（下略）

(37) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時その近
くの趙荘でやつてゐるのを
見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つてでかけるのだ
が、村芝居そのものよりも
往復の途中の楽しさが忘れ
られないらしく、後年特に
「村芝居」といふ題の短編
によつて彼はその頃の思ひ
出を生かしてゐる。その作

(38) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時その近
くの趙荘でやつてゐるのを
見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つてでかけるのだ
が、村芝居そのものよりも
往復の途中の楽しさが忘れ
られないらしく、後年特に
「村芝居」といふ題の短編
によつて彼はその頃の思ひ
出を生かしてゐる。その作

(39) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時その近
くの趙荘でやつてゐるのを
見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つてでかけるのだ
が、村芝居そのものよりも
往復の途中の楽しさが忘れ
られないらしく、後年特に
「村芝居」といふ題の短編
によつて彼はその頃の思ひ
出を生かしてゐる。その作

(40) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時その近
くの趙荘でやつてゐるのを
見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つてでかけるのだ
が、村芝居そのものよりも
往復の途中の楽しさが忘れ
られないらしく、後年特に
「村芝居」といふ題の短編
によつて彼はその頃の思ひ
出を生かしてゐる。その作

(41) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時、その
近くの趙荘でやつてゐるの
を見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つて出かけるのだが、
村芝居そのものよりも往復
の途中の楽しさが忘れられ
ないらしく、後年特に「宮
芝居」という題の短編によ
つて彼はその頃の思ひ出を
生かしてゐる。その作品に

て写さなくても良かった。
一番よく買ひ入れたのはた
しか石印二冊本の岡元鳳（日
本大阪の本草学者）の著し
た『毛詩品物図考』だつた。
この本は最初やはり皇甫荘
で見て非常に羨ましがつた
もので、大通りの書店から
一部買つて来たが、たまた
ま少し紙が破れていたり墨
でよこれてゐたりして、ど
うしても満足できず、持つ
て行つて取換へ、それが二
度三度と重なつたので、と
うとう本屋の手代がうるさ
がり、これは姉さんの顔よ
りも白いものに何で取り換
えますかとからかつたので、
ムツとして出て、もう二度
とそこへは買ひに行かなか
つた。（下略）

(42) 村芝居の方は毎夏母
親の帰省するのに跟いて平
橋村といふ母親の故郷の小
さな部落へ行つた時、その
近くの趙荘でやつてゐるの
を見にでかけるのであつた。
豆麦の畑の間を通る河を五
支里程（我が一里近く）篷
船に乗つて出かけるのだが、
村芝居そのものよりも往復
の途中の楽しさが忘れられ
ないらしく、後年特に「宮
芝居」という題の短編によ
つて彼はその頃の思ひ出を
生かしてゐる。その作品に

品に出てくる趙荘行は夜になつてから大人を交へずになつてから大人を交へずに見物で、船も中で比較的大きい子供たちが漕ぐのである。月の光りが水蒸汽の中にもうろうとし、薄黒い連山は躍り上つた獣の背のやうに見え、遠くに漁火が光つてゐるかと思ふと又どこからともなく横笛の音が宛転悠揚と聞えて来たりする。／舞台は趙荘の村端れの河沿ひの空地に突つ立つてゐ、彼等は遠くから船を止めて船の中にあたまま、まるでまぼろしのやうなその舞台面を眺めるのである。そこで長髯の武者が四つの旗を背に長槍をしごいたり、半裸体の男が何人か蜻蛉返りを打つたり、小旦が出てキーキー甲高い声で歌ふかと思ふと、赤い薄絹を着た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻鬚髯の男に鞭でひつぱたかれたりする。そのうちに彼等は退屈して来、帰途につく。／見物した時間は決して長くないらしく、月はまだ落ちてゐず、趙荘を出ると月の光は一層あざやかになつた。ふりかへつて見ると舞台は灯火の中に来がけに此処から眺めた時と同様、仙山樓閣のやうに縹渺として赤い霞に覆いかぶされてゐた。耳のあたりに吹き寄せるのはやはり横笛で、いかにも悠長	品に出てくる趙荘行は、夜になつてから大人を交へずに見物で、船も中で比較的大きい子供たちが漕ぐのである。月の光りが水蒸汽の中にもうろうとし、薄黒い連山は躍り上つた獣の背のやうに見え、遠くに漁火が光つてゐるかと思ふと又どこからともなく横笛の音が宛転悠揚と聞えて来たりする。／舞台は趙荘の村端れの河沿ひの空地に突つ立つてゐ、彼等は遠くから船を止めて船の中にあたまま、まるでまぼろしのやうなその舞台面を眺めるのである。そこで長髯の武者が四つの旗を背に長槍をしごいたり、半裸体の男が何人か蜻蛉返りを打つたり、小旦が出てキーキー甲高い声で歌ふかと思ふと、赤い薄絹を着た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻鬚髯の男に鞭でひつぱたかれたりする。そのうちに彼等は退屈して来、帰途につく。月はまだ落ちてゐず、趙荘を出ると月の光は一層あざやかになつた。ふりかへつて見ると舞台は灯火の中に来がけに此処から眺めた時と同様、仙山樓閣のやうに縹渺として赤い霞に覆いかぶされてゐる。耳のあたりに吹き寄せるのはやはり横笛で、いかにも悠長である。／まもなく松柏の林がいつのまにか	品に出てくる趙荘行は夜になつてから大人を交へずになつてから大人を交へずに見物で、船も中で比較的大きい子供たちが漕ぐのである。月の光りが水蒸汽の中にもうろうとし、薄黒い連山は躍り上つた獣の背のやうに見え、遠くに漁火が光つてゐるかと思ふと又どこからともなく横笛の音が宛転悠揚と聞えて来たりする。／舞台は趙荘の村端れの河沿ひの空地に突つ立つてゐ、彼等は遠くから船を止めて船の中にあたまま、まるでまぼろしのやうなその舞台面を眺めるのである。そこで長髯の武者が四つの旗を背に長槍をしごいたり、半裸体の男が何人か蜻蛉返りを打つたり、小旦が出てキーキー甲高い声で歌ふかと思ふと、赤い薄絹を着た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻鬚髯の男に鞭でひつぱたかれたりする。そのうちに彼等は退屈して来、帰途につく。／見物した時間は決して長くないらしく、月はまだ落ちてゐず、趙荘を出ると月の光は一層あざやかになつた。ふりかへつて見ると舞台は灯火の中に来がけに此処から眺めた時と同様、仙山樓閣のやうに縹渺として赤い霞に覆いかぶされてゐた。耳のあたりに吹き寄せるのはやはり横笛であつた。わた	品が出てくる趙荘行は夜になつてから大人を交へずになつてから大人を交へずに見物で、船も中で比較的大きい子供たちが漕ぐのである。月の光りが水蒸汽の中にもうろうとし、薄黒い連山は躍り上つた獣の背のやうに見え、遠くに漁火が光つてゐるかと思ふと又どこからともなく横笛の音が宛転悠揚と聞えて来たりする。／舞台は趙荘の村端れの河沿ひの空地に突つ立つてゐ、彼等は遠くから船を止めて船の中にあたまま、まるでまぼろしのやうなその舞台面を眺めるのである。そこで長髯の武者が四つの旗を背に長槍をしごいたり、半裸体の男が何人か蜻蛉返りを打つたり、小旦が出てキーキー甲高い声で歌ふかと思ふと、赤い薄絹を着た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻鬚髯の男に鞭でひつぱたかれたりする。そのうちに彼等は退屈して来、帰途につく。／見物した時間は決して長くないらしく、月はまだ落ちてゐず、趙荘を出ると月の光は一層あざやかになつた。ふりかへつて見ると舞台は灯火の中に来がけに此処から眺めた時と同様、仙山樓閣のやうに縹渺として赤い霞に覆いかぶされてゐた。耳のあたりに吹き寄せるのはやはり横笛で、いかにも悠長であつた。わた
--	--	---	---

	<p>であつた。わたしは老旦<small>ふけおやま</small>がもう引込んだ頃だと思つたが、まさか引返してもう一度見ようともし言ひ出せなかつた。／まもなく松柏の林がいつのまにか船の後ろになり、船あしは決して遅くはなかつた。だがあたりの闇はひたすら濃やかになり、もう夜更けになつてゐるらしかつた。彼等は役者を批評し、罵つたり笑つたりしながらしつかりと船を漕いだ。今度は船首に激する水の音が一時はあざやかに響き、此の乗合船は宛ら一つの大白魚が一群の子供を背負つて浪の中に突入するやうで、夜どおほし漁つてゐる老漁夫たちも船を停めて眺め、思はず喝采した。と魯迅はその帰途の情形を美しく叙景してゐる。やがて漕ぎ手が疲れ、腹が空いたといふので、みんなで陸へ上り豆畑へ入つて羅漢豆を盗み取り、これをさつそく船中に火を起して煮て食べるのである。帰り着いたのは十二時過ぎで、彼の母親が一人橋の上に立つて彼を待ち侘びてゐたのである。</p>	<p>船の後ろになり、あたりの闇はひたすら濃やかになり、いつのまにか夜更けになつてゐるらしい。彼等は役者を批評し、罵つたり笑つたりしながら船を漕ぐ。今度は船首に激する水の音が一時はあざやかに響き、此の乗合船は宛ら一つの大白魚が一群の子供を背負つて浪の中に突入するやうで、夜どほし漁つてゐる老漁夫たちも船を停めて眺め、思はず喝采したりする。やがて漕ぎ手が疲れ、腹が空いたといふので、みんなで陸へ上り豆畑へ入つて羅漢豆を盗み取り、これをさつそく船中に火を起して煮て食べたります。こんなふうにして村に帰り着くのは十二時過ぎで、彼の母親が一人橋の上に立つて彼を待ち侘びてゐるのである。</p>	<p>であつた。わたしは老旦<small>ふけおやま</small>がもう引込んだ頃だと思つたが、まさか引返してもう一度見ようともし言ひ出せなかつた。／まもなく松柏の林がいつのまにか船の後ろになり、船あしは決して遅くはなかつた。だがあたりの闇はひたすら濃やかになり、もう夜更けになつてゐるらしかつた。彼等は役者を批評し、罵つたり笑つたりしながらしつかりと船を漕いだ。今度は船首に激する水の音が一時はあざやかに響き、此の乗合船はさながら一つの大白魚が一群の子供を背負つて浪の中に突入するやうで、夜どおほし漁つてゐる老漁夫たちも船を停めて眺め、思はず喝采した。と魯迅はその帰途の情形を美しく叙景してゐる。やがて漕ぎ手が疲れ、腹が空いたといふので、みんなで陸へ上り豆畑へ入つて羅漢豆を盗み取り、これをさつそく船中に火を起して煮て食べるのである。帰り着いたのは十二時過ぎで、彼の母親が一人橋の上に立つて彼を待ち侘びてゐたのである。</p>	<p>しは老旦<small>ふけおやま</small>がもう引込んだ頃だと思つたが、まさか引返してもう一度見ようともし言ひ出せなかつた。／まもなく松柏の林がいつのまにか船の後ろになり、船あしは決しておそくはなかつた。だがあたりの闇はひたすら濃やかになり、もう夜更けになつてゐるらしかつた。彼等は役者を批評し、罵つたり笑つたりしながらしつかりと船を漕いだ。今度は船首に激する水の音が一時はあざやかに響き、この乗合船はさながら一つの大白魚が一群の子供を背負つて波の中に突入するよつで、夜通し漁つてゐる老漁夫達も船を停めて眺め、思はず喝采した。／と魯迅はその帰途の情形を美しく叙景してゐる。やがて漕ぎ手が疲れ、腹が空いたといふので、みんなで陸へ上り豆畑へ入つて羅漢豆を盗み取り、これをさつそく船中に火を起して煮て食べるのである。帰り着いたのは十二時過ぎで、彼の母親が一人橋の上に立つて彼を待ち侘びてゐたのである。</p>
同じ	(39)係はり	同じ	同じ	(28)かわり
同じ	(40)「長媽媽」七、同家	(22)「長媽媽」七、同家	同じ	(28)「長媽媽」七、同家
同じ	(40)「潤土」	同じ	同じ	(28)潤土、「以後も同様」

ば外から大砲が打てないんですよ、それでも打たうものなら大砲は爆破してしまひますよ」と彼女はいかにも敵かな顔をして言ふのであつた。／或る時魯迅は人から絵入りの「山海経」の話聞き、それには人面の獸だの、九頭の蛇だの、三本足の馬だの、翼を生やした人間だの、頭が無くて両乳を眼としてゐる怪物だのの絵のあることを知り、それが欲しくてたまらず寝ても醒めてもそのことばかり考へてゐたところ、長媽媽も氣になつたと見え、「山海経」といふのは一体どんなものかと彼にたづねたので彼は言つても無駄だと思ひ乍らも訊かれるままに話してやつたら、その後彼女が暇を貰つて四五日里に帰り再び出て来た時いきなり「さあ坊ちゃん、買つて来ましたよ」と言つて彼女の差し出したのがまがひもない四冊本の「山海経」であつた。さうしてこれこそは魯迅が最も早く手に入れ最も心から愛した書物であつた。／魯迅は彼女を追懐する文章の最後で、そのユーモア味たつぷりの書き振りが改まつて「慈み深く暗黒の母なる大地よ、願はくば御身の懐ろのうちに永へに彼女の靈魂を安めしめ給へ」と書いてゐる。

ば外から大砲が打てないんですよ、それでも打たうものなら大砲は爆破してしまひますよ」と彼女はいかにも敵かな顔をして言ふのであつた。／或る時魯迅は人から絵入りの「山海経」の話聞き、それには人面の獸だの、九頭の蛇だの、三本足の馬だの、翼を生やした人間だの、頭が無くて両乳を眼としてゐる怪物だのの絵のあることを知り、それが欲しくてたまらず寝ても醒めてもそのことばかり考へてゐたところ、長媽媽も氣になつたと見え、「山海経」といふのは一体どんなものかと彼にたづねたので彼は言つても無駄だと思ひ乍らも訊かれるままに話してやつたら、その後彼女が暇を貰つて四五日里に帰り再び出て来た時いきなり「さあ坊ちゃん、買つて来ましたよ」と言つて彼女の差し出したのがまがひもない四冊本の「山海経」であつた。さうしてこれこそは魯迅が最も早く手に入れ最も心から愛した書物であつた。

ら大砲が打てないんですよ、それでも打たうものなら大砲は爆破してしまひますよ」と彼女はいかにも敵かな顔をして言ふのであつた。／或る時魯迅は人から絵入りの「山海経」の話聞き、それには人面の獸だの、九頭の蛇だの、三本足の馬だの、翼を生やした人間だの、頭が無くて両乳を眼としてゐる怪物だのの絵のあることを知り、それが欲しくてたまらず寝ても醒めてもそのことばかり考へてゐたところ、長媽媽も氣になつたと見え、「山海経」といふのは一体どんなものかと彼にたづねたので彼は言つても無駄だと思ひ乍らも訊かれるままに話してやつたら、その後彼女が暇を貰つて四五日里に帰り再び出て来た時いきなり「さあ坊ちゃん、買つて来ましたよ」と言つて彼女の差し出したのがまがひもない四冊本の「山海経」であつた。さうしてこれこそは魯迅が最も早く手に入れ最も心から愛した書物であつた。／魯迅は彼女を追懐する文章の最後で、そのユーモア味たつぷりの書き振りが改まつて「慈み深く暗黒の母なる大地よ、願はくば御身の懐ろのうちに永へに彼女の靈魂を安めしめ給へ」と書いてゐる。

んですよ、それでも打たうものなら大砲は爆破してしまひますよ」と彼女はいかにも敵かな顔をして言ふのであつた。／或る時魯迅は人から絵入りの「山海経」の話聞き、それには人面の獸だの、九頭の蛇だの、三本足の馬だの、翼を生やした人間だの、頭が無くて両乳を眼としてゐる怪物だのの絵のあることを知り、それが欲しくてたまらず寝ても醒めてもそのことばかり考へてゐたところ、長媽媽も氣になつたと見え、「山海経」といふのは一体どんなものかと彼にたづねたので、彼は言つても無駄だと思ひながらも訊かれるままに話してやつたら、その後彼女が暇をもらつて四五日里に帰り再び出て来た時いきなり「さあ坊ちゃん、買つて来ましたよ」と言つて彼女の差し出したのがまがひもない四冊本の「山海経」であつた。さうしてこれこそは魯迅が最も早く手に入れ最も心から愛した書物であつた。／魯迅は彼女を追懐する文章の最後で、そのユーモア味たつぷりの書き振りが改まつて「慈み深く暗黒の母なる大地よ、願はくば御身の懐ろのうちに永へに彼女の靈魂を安めしめ給へ」と書いてゐる。

(177)海辺にある少年で、	(177)海辺にある、魯迅家へ 出入りの百姓の子供で、	同じ	同じ	(30)海辺にいる、魯迅家へ 出入りの百姓の子供で、
同じ	(43)竹籬 <small>たけかき</small> (二箇所)	同じ	(32)竹籬 <small>たけかき</small>	(30)竹籬 <small>たけかき</small> (二度目はルビな り)
同じ	(44)出来る	同じ	同じ	(30)できる
同じ	(44)十三歳	同じ	(33)十二歳	(30)十三才
同じ	(44)四五十畝	同じ	(33)四五十畝 <small>ちう</small> (一畝二五〇 歩／一歩五尺四寸)	(30)四五十畝 <small>ちう</small>
同じ	(44)殆んど	同じ	同じ	(30)ほとんど(二箇所)
同じ	(45)位 <small>み</small> (二箇所)	(26)位 <small>み</small> (二箇所)	同じ	同じ
同じ	(45)差し上げ	同じ	同じ	(31)さっ上げ
同じ	(45)蟋蟀	同じ	同じ	(31)蟋蟀 <small>せしせ</small>
(178)入れ難い	(45)入れがたい	同じ	同じ	同じ
(178)廻らねばならなかつ たのだが、後には段々 子供心にもさういふ奇怪な 薬引に信を措かなくなつて 来た。	(45)廻らねばならなかつた のだ。	同じ	同じ	(32)回らねばならなかつた のだ。
(178) この不遇時代に彼 は後年の、人生 現実を 徹底的に見る眼の萌芽を植 ゑつけられた。	(45) 医者は一日置きに往 診し、その往診料が當時で 一弗四十仙であつたから、 すでに家産の傾いた彼の家 でその金を工面するのは仲 々らくではなかつたわけだ である。この医者は約二年間 続けて通ひ、魯迅は彼と次 第に昵懇になり、しまひに 殆んど友達みたいになつた が、二年ばかり後の或る日	同じ	(34) 医者は一日置きに往 診し、その往診料が當時で 一弗四十仙であつたから、 すでに家産の傾いた彼の家 でその金を工面するのは仲 々らくではなかつたわけだ である。この医者は約二年間 続けて通ひ、魯迅は彼と次 第に昵懇になり、しまひに 殆んど友達みたいになつ たが、二年ばかり後の或る	(32) 医者は一日おきに往 診し、その往診料が當時で 一弗四十仙であつたから、 すでに家産の傾いた彼の家 でその金を工面するのはな かなか楽ではなかつたわけ である。この医者は約二年 間続けて通ひ、魯迅は彼と 次第に昵懇になり、しまひ に殆んど友達みたいになつ たが、二年ばかり後のある

彼は陳蓮河といふ他の医師を推薦し、「御病氣はべつに大したことはありません、ただこの方の医术はわしなどよりは大分上ですから、その方にかからなければずつと速くお直りになると思ひます」と言つて歸つて行つた。医師は彼の父親を見放してしまつたのである。が、ともかく改めて陳蓮河先生にかからねばならなかつた。この医師の診察料も一弗四十仙であつた。この医師は又前の医師とは違つたむづかしい薬引を言ひ出したので魯迅の苦勞は倍加した。が結局何れも何の効果もなかつた。

「わしの処に一種の丹があります」とある時陳蓮河先生が言つた。「それを舌の上に点じますときつと効験があると思ひます。舌は心の靈苗なりと申します。でな……値殺もさ程高くはござらん、一盒僅か二弗ぢや……」彼の父親はしばらく考へ込んでゐたが、やがて頭を振つた。

「ある日陳蓮河先生は又言つた。『わしの薬が見えぬとすれば、わしは思ふのぢやが人に見ていただきなされてはどんなものでせう、どういふ前世の業があるものかをな。』」

「医は能く病を癒やすも命を癒す能はずぢや、さうでせうがな？」

日彼は陳蓮河といふ医師を推薦し、「御病氣はべつに大したことはありません、ただこの方の医术はわしなどよりは大分上ですから、その方にかからなければずつと速くお直りになると思ひます」と言つて歸つて行つた。医師は彼の父親を見放してしまつたのである。が、ともかく改めて陳蓮河先生にかからねばならなかつた。この医師の診察料も一弗四十仙であつた。この医師は又前の医師とは違つたむづかしい薬引を言ひ出したので魯迅の苦勞は倍加した。が結局何れも何の効果もなかつた。

「わしの処に一種の丹があります」とある時陳蓮河先生が言つた。「それを舌の上に点じますときつと効験があると思ひます。舌は心の靈苗なりと申します。でな……値殺もさ程高くはござらん、一盒僅か二弗ぢや……」彼の父親はしばらく考へ込んでゐたが、やがて頭を振つた。

「ある日陳蓮河先生は又言つた。『わしの薬が見えぬとすれば、わしは思ふのぢやが人に見ていただきなされてはどんなものでせう、どういふ前世の業があるものかをな。』」

「医は能く病を癒やすも命を癒す能はずぢや、さうでせうがな？」

きつとこりや前世の因縁かも

<p>(178) 医者の上(178)口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)では当時まだ西洋流の医者はあなかつた、それどころか天下に西洋流の医者があらうなんて誰も夢想だもしてゐなかつた。そのため何れにせよ、軒轅・岐伯の嫡流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者と分れてゐなかつた。そこで今日に至つて、なほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』なんて信じてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、これだけは名醫ですらも手の施しやうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>(178) 医者の上(178)口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)では当時まだ西洋流の医者はあなかつた、それどころか天下に西洋流の医者があらうなんて誰も夢想だもしてゐなかつた。そのため何れにせよ、軒轅・岐伯の嫡流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた。それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>因縁かも知れませんが、彼の父親は又しばらく考へ込んでゐたが、やがて又黙つて頭を振つた。</p>
<p>(178) 医者の上(178)口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)には当時まだ西洋流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた。それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>(178) 医者の上(178)口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)には当時まだ西洋流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた。それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>因縁かも知れませんが、彼の父親は又しばらく考へ込んでゐたが、やがて又黙つて頭を振つた。</p>
<p>(20) 口調をこめて、軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた、それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>(20) 口調をこめて、軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた、それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>知れませんが、彼の父親は又しばらく考へ込んでゐたが、やがて又黙つて頭を振つた。</p>
<p>(32) 口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)には当時まだ西洋流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた。それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>(32) 口調をこめて次のやうに書いてある。／「いつたい国手は、みな能く、起死回生」するものだ、われわれは医者、の門前を通れば、常にさういつた文句を書いた匾額がかつてゐるのを見受ける。だが今では少し譲歩して、医者自身ですらかういつてをる、『西洋流の医術は外科に長じ、漢方医は内科に長ずると。しかしS城(紹興)には当時まだ西洋流の門徒の請負にまかせより外なかつた。軒轅の時代には神巫と医者とは分れてゐなかつた。それで今日になつてもなほ彼の門徒は鬼を見、また『舌は心の靈苗なり』などと思つてゐるのだ。これがつまり中国人の『命』なのであつて、名醫ですらも療治して見やうがないのだ。／靈丹を舌に点ずることも肯んぜねば、また前世の『罪業』を伺ひ立てることもしなないとあつて百余日ぐらゐ服んだだけ</p>	<p>同じ</p>

<p>は、むろん『敷鼓皮丸』を百余日ぐらゐ服んだだけで何の役に立たう？ 依然として水腫はつづれず、父はたうとう寢床に横たはつてぜエゼ工喘ぐ始末となつた。そこで、もう一度陳蓮河先生を呼んだ。こんどは特等で、銀十元だつた。先生は例によつて泰然として処方箋を一枚書いてくれたが、すでに敗鼓皮丸は服用するのをやめてゐたし、薬引もあまり神妙でなかつたため、半日かそこらのうちに、ちやんと薬を煎じて服んだ。しかし忽ち戻してしまつた。』（松枝茂夫訳）</p>	<p>(179) 向けた</p>	<p>(179) 二つの絵</p>	<p>(179) 開かされた彼が当時の支那の新風であつた西洋科学に向つたのはあまりにも当然のことである。</p>
<p>で何の役に立たう？ 依然として水腫はつづれず、父はたうとう寢床に寝てぜエゼ工喘ぐ始末となつた。そこで、もう一度陳蓮河先生を呼んだ。今度は特等で銀十元だつた。彼は例によつて泰然として処方箋を一枚書いてくれたが、もう敗鼓皮丸は服むのを止めてゐたし、薬引もあまり神妙でなかつたため、半日かそこらのうちに、薬が煎じ上がり、服んだが、すぐに戻してしまつた。」</p>	<p>(49) 眼を向けてゐた</p>	<p>(49) 二つの絵（前者はいい年のおやぢが子供のやうな恰好に父母の前に倒れて小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、後者は三歳の童子が母親に抱かれてここに笑ひ乍ら矢張り小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、彼の父親郭巨は家が貧しくて老母に思ふやうに食物を供せられないのでこの童子を埋めるために今しも穴を掘つてゐるのである）に</p>	<p>(49) 開かされたことが後年の彼の針路に大きな關係を持つて来た。</p>
<p>何の薬に立たう？ 依然として水腫はつづれず、父はたうとう病床に寝てぜエゼ工喘ぐ始末となつた。そこで、もう一度陳蓮河先生を呼んだ。今度は特等で銀十元だつた。彼は例によつて泰然として処方箋を一枚書いてくれたが、もう敗鼓皮丸は服むのを止めていたし、薬引もあまり神妙でなかつたため、半日かそこらのうちに、薬を煎じ上り、服んだが、すぐに戻してしまつた。」</p>	<p>に同じ</p>	<p>(29) 二つの絵（前者はいい年のおやぢが子供のやうな恰好に父母の前に倒れて小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、後者は三歳の童子が母親に抱かれて、ここに笑ひ乍ら矢張り小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、彼の父親郭巨は家が貧しくて老母に思ふやうに食物を供せられないので、この童子を埋めるために今しも穴を掘つてゐるのである）に</p>	<p>(30) 開かされたことが後年の彼の進路に大きな關係を持つて来た。</p>
<p>何の薬に立たう？ 依然として水腫はつづれず、父はたうとう病床に寝てぜエゼ工喘ぐ始末となつた。そこで、もう一度陳蓮河先生を呼んだ。今度は特等で銀十元だつた。彼は例によつて泰然として処方箋を一枚書いてくれたが、もう敗鼓皮丸は服むのを止めていたし、薬引もあまり神妙でなかつたため、半日かそこらのうちに、薬を煎じ上り、服んだが、すぐに戻してしまつた。」</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(33) 二つの絵（前者はいい年の親父が子供のやうな恰好に父母の前に倒れて小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、後者は三才位の童児が母親に抱かれてここに笑ひ乍ら矢張り小さな玩具の太鼓を振つてゐる図で、彼の父親郭巨は家が貧しくて老母に思ふやうに食物を供せられないのでこの童子を埋めるために今しも穴を掘つてゐるのである）に</p>	<p>(33) 目を向けていた</p>	<p>(33) 開かされたことが後年の彼の針路に大きな關係を持つて来た。</p>	<p>(33) 開かされたことが後年の彼の針路に大きな關係を持つて来た。</p>

<p>(179) 関心が頼に昂まったが、</p>	<p>(50) 関心を昂めさせられたが、</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(179) 力あつた。</p>	<p>(50) 力あつたのであつた。</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(34) 力あつたのであつた。</p>
<p>同じ</p>	<p>(50) 救ふことはまことに</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(34) 救うことは、まことに</p>
<p>同じ</p>	<p>(50) 十六歳の時三十七歳</p>	<p>同じ</p>	<p>(37) 十五歳の時三十六歳</p>	<p>(34) 十六才の時三十七才</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(50) ここで彼の弟作人について一言すると彼は最初魯迅と共に預けられた家から一度他へ移つてゐたが、父親の死んだ翌年十三歳の時杭州花牌樓の宋姨太太(祖父の妾)のもとに預けられる身となり、ここで勉学の傍ら二三日おきには獄舎に祖父を訪れたりしてゐたが、ここで彼は又同年同月生れの親戚の少女と淡い、だが終生忘れられない初恋を楽しんだりしてゐた。</p>	<p>(32) ここで彼の弟作人について一言すると彼は最初魯迅と共に預けられた家から一度他へ移つてゐたが、父親の死んだ翌年十三歳の時、杭州花牌樓の宋姨太太(祖父の妾)のもとに預けられる身となり、ここで勉学の傍ら二三日おきには獄舎に祖父を訪れたりしてゐたが、ここで彼は又同年同月生れの親戚の少女と淡い、だが終生忘れられない初恋を楽しんだりしてゐた。</p>	<p>同じ</p>	<p>(34) ここで彼の弟作人について一言すると彼は最初魯迅と共に預けられた家から一度他へ移つてゐたが、父親の死んだ翌年十三才の時杭州花牌樓の宋姨太太(祖父の妾)のもとに預けられる身となり、ここで勉学の傍ら二三日おきには獄舎に祖父を訪れたりしてゐたが、ここで彼は又同年同月生まれの親戚の少女と淡い、だが終生忘れられない初恋を楽しんだりしてゐた。</p>
<p>(179) 翌々年十八歳の春、彼は</p>	<p>(50) さて魯迅は十八歳の年の春</p>	<p>同じ</p>	<p>(38) さて魯迅は十七歳の年の春</p>	<p>(34) さて魯迅は十八才の年の春</p>
<p>(179) 影響されてゐたことは言ふまでもない。当時は</p>	<p>(50) 影響されてもゐたのである。この前後の彼をとり巻く環境を簡単に述べると、支那が日清戦争に惨敗したのがその前年の彼が十七歳の時、義和団事件で北京が八国連合軍に蹂躪されたのが翌々年の彼が二十歳の時のことであつた。又若き光緒皇帝が広東南海の儒康有為の説を受け容れ西太</p>	<p>(32) 影響されてもゐたのである。この前後の彼をとり巻く環境を簡単に述べると、中国が日清戦争に惨敗したのがその前年の彼が十七歳の時、義和団事件で北京が八国連合軍に攻め入られたのが翌々年の彼が二十歳の時のことであつた。又若き光緒皇帝が広東南海の儒康有為の説を受け容れ西太后</p>	<p>(38) 影響されてもゐたのである。この前後の彼をとり巻く環境を簡単に述べると、中国が日清戦争に惨敗したのがその三年前の彼が十四歳の時、義和団事件で北京が八国連合軍に蹂躪されたのが翌々年の彼が十九歳の時のことであつた。又若き光緒皇帝が広東南海の儒康有為の説を受け容れ西</p>	<p>(34) 影響されてもゐたのである。この前後の彼をとり巻く環境を簡単に述べると、支那が日清戦争に惨敗したのがその前年の彼が十七才の時、義和団事件で北京が八国連合軍に蹂躪されたのが翌々年の彼が二十才の時</p>

<p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(179) 廃止されてゐない時</p>	<p>(52) 廃止されてゐず、</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(35) 廃止されてゐず、</p>
<p>りわたすもの (179) 洋鬼子 (毛唐) に売</p>	<p>わたすもの (52) 洋息子 (毛唐) に売り</p>	<p>の (32) 外国人に売りわたすもの</p>	<p>同じ</p>	<p>渡す者 (35) 洋息子 (毛唐) に売り</p>
<p>りわたすもの (179) 洋鬼子 (毛唐) に売</p>	<p>わたすもの (52) 手わたした</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(35) 手渡した</p>
<p>后を押しつけ秘密裡に政治の大改革を執行しようとして未前に太后に知られるところとなり禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、仏の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の支那国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒滿興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも支那には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動(西洋の科学を研究する運動)が着々進行を見てゐた時だったので、彼のさういふ志は当時のいくらか鋭い青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつた。／＼ただ當時は</p>	<p>を押しつけ秘密裡に政治の大改革を執行しようとして未前に太后に知られるところとなり禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、仏の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の中国国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒滿興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも中国には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動(西洋の科学を研究する運動)が着々進行を見てゐた時だったので、彼のさういふ志は当時のいくらか鋭い青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつた。／＼ただ當時は</p>	<p>太后を押しつけ秘密裡に政治の大改革を執行しようとして未前に太后に知られるところとなり禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、仏の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の支那国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒滿興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも支那には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動(西洋の科学を研究する運動)が着々進行を見てゐた時だったので、彼のさういふ志は当時のいくらか鋭い青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつた。／＼ただ當時は</p>	<p>押しのけ秘密裡に政治の大改革を執行しようとして未前に太后に知られるところとなり禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、仏の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の支那国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒滿興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも支那には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動(西洋の科学を研究する運動)が着々進行を見てゐた時だったので、彼のさういふ志は当時のいくらか鋭い青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつた。／＼ただ當時は</p>	<p>押しのけ秘密裡に政治の大改革を執行しようとして未前に太后に知られるところとなり禁苑内南海の瀛台に幽閉された戊戌政変の悲劇は彼の南京へ出た年のことであつた。すでに旅順、大連、威海衛、膠州湾、広州湾はそれぞれ露、英、独、仏の各国に租借せられてゐ、かういふ状態の支那国家の危急を救はうとしてかの満洲朝の皇帝が起ち上りかけた時にはもう孫文は米英日諸国の間を奔馳し、その同胞の間に倒滿興漢の宣伝につとめることしきりで、政治綱領「三民主義」も完成されてゐた。こんな状態であり、しかも支那には早く一八六〇年代から李鴻章等を主とした「洋務」運動(西洋の科学を研究する運動)が着々進行を見てゐた時だったので、彼のさういふ志は当時のいくらか鋭い青年であつたなら誰しも抱く種類のものであつた。／＼ただ當時は</p>

第二章 日本留学(一)

	た。		た。
<p>(240) 与へられてゐる回数に限りがあるので残念ながら順を追つてゆつくり述べてあるわけにはいかない。でこの回の冒頭はいきなり彼の仙台医学専門学校時代へ飛ぶことにする。一九〇四年二十四歳でその仙台医専へ入るまでに彼は十九歳の年に江南水師学堂から江南陸師学堂附設礦路学堂へ移り、翌々年二十一歳でそこを卒業し、その翌年二十二歳の年江南督練公所から派せられて日本に留学し東京弘文学院に入つたのであつたが、その頃は学業の暇にはよく哲学と文芸の書を読み殊に人性及国民性の問題に注意した。</p>	<p>(55) 魯迅は南京の江南水師学堂へ入つた翌年そこから江南陸師学堂附設礦路学堂へ移り、そこに二年あつた。二十一の年そこを卒業した。この間の彼の生活を叙べるのは我々はあまりにその資料に不足してゐる。ただ彼はここで初めて世の中には物理だとか、数学、地理、歴史、図画、体操などの学課のあることを知つた。木版刷の「全体新論」や「化学衛生論」といふやうなものも見て、漢法医の説や処方が伎つたく意識的無意識的の騙者であつたことを初めてはつきりさつた。日本の維新が西洋医学に端を発してゐたとさつたのもこの時代のことであつた。／そんなふうで彼はこの時代には主として科学に熱中したのであつたが、その外にも支那文に移植された西洋の新しい思想の本や小説類も好んで購読した。嚴幾道及林琴南の訳書がその主なもので、前者には「天演論」(トマス・ハクスレーの「進化と倫理」)、「法意」(モンテスキュー</p>	<p>(37) 魯迅は南京の江南水師学堂へ入つた翌年、そこから江南陸師学堂附設礦路学堂へ移り、そこに二年あつた。二十一の年そこを卒業した。この間の彼の生活を叙べるのは我々はあまりにその資料に不足してゐる。ただ彼はここで初めて世の中には物理だとか、数学、地理、歴史、図画、体操などの学課のあることを知つた。木版刷の「全体新論」や「化学衛生論」といふやうなものも見て、漢法医の説や処方が伎つたく意識的無意識的の騙者であつたことを初めてはつきりさつた。日本の維新が西洋医学に端を発してゐたとさつたのもこの時代のことであつた。／そんなふうで彼はこの時代には主として科学に熱中したのであつたが、その外にも中国文に移植された西洋の新しい思想の本や小説類も好んで購読した。嚴幾道及林琴南の訳書がその主なもので、前者には「天演論」(トマス・ハクスレーの「進化と倫理」)、「法意」(モンテスキュー</p>	<p>(43) 魯迅は南京の江南水師学堂へ入つた翌年そこから江南陸師学堂附設礦路学堂へ移り、そこに二年あつた。二十一の年そこを卒業した。この間の彼の生活を叙べるには我々はあまりにその資料に不足してゐる。ただ彼はここで初めて世の中には物理だとか、数学、地理、歴史、図画、体操などの学課のあることを知つた。木版刷の「全体新論」や「化学衛生論」といふやうなものも見て、漢法医の説や処方が伎つたく意識的無意識的の騙者であつたことを初めてはつきりさつた。日本の維新が西洋医学に端を発してゐたとさつたのもこの時代のことであつた。／そんなふうで彼はこの時代には主として科学に熱中したのであつたが、その外にも支那文に移植された西洋の新しい思想の本や小説類も好んで購読した。嚴幾道及林琴南の訳書がその主なもので、前者には「天演論」(トマス・ハクスレーの「進化と倫理」)、「法意」(モンテスキュー</p>

意」(モンテスキューの「法の精神」)などがあり、後者には小デューマの「茶花女遺事」(椿姫)や、コナンドイルのもの等があり、出る度に彼は尽く買つて読んだ。古書類にたいしてはあまり注意を向けなかつた。ただ文章を書くのは好きで、時に応じてしばしば随筆や詩文をものしてゐる。十九歳の年の「憂剣生雑記」の一に曰く、
 「行人、斜日の將に墮ちなんとする時、溟色人に逼り、四顧満目故郷の人に非ず、細かに聆けば満耳皆異郷の語、一たび、家郷万里、老親弱弟の必らず時々相語り、今当に某処に至るべしと謂ひつつあらんことに念ひ及べば、此の時真に柔腸断えなんと欲し、涕して仰ぐ可からず故に予に句あり云ふ、
 日暮れて客愁集り、烟深うして人語喧しと、皆身ら歴たる所、これを空言に託するに非ざるなり。」
 かういふ感じ易い年少の心に光緒帝の戊戌政変や北京が八国連合軍に蹂躪された事件や国内に根強く底流しはじめた革命の風潮等がそれぞれの意味でどんなに強い刺激を与へたであらうかは想像するに難くない。さて彼は礦路学堂を卒へた翌年二十二歳の年江南督練公所から派せられて日本に留学

の「法の精神」などがあり、後者には小デューマの「茶花女遺事」(椿姫)や、コナンドイルのもの等があり、出る度に彼は尽く買つて読んだ。古書類にたいしてはあまり注意を向けなかつた。ただ文章を書くのは好きで、時に応じてしばしばその感じ易い少年の心を随筆や詩文に託して吐露してゐる。さて彼は礦路学堂を卒へた翌年二十二歳の年江南督練公所から派せられて日本に留学し、東京の弘文学院に入つた。ここは日本語教授を主とする中国留学生の一種の予備校であり、今日の東亜学校の前身とも言ふべきところである。この頃から彼はやうやく学業の暇にはよく哲学と文芸の書に親しむやうになり、殊に人性及国民性の問題に注意しはじめた。渡日した翌々年彼は仙台の医学専門学校へ入学した。かねてから懐抱してゐた西洋医学救国の素志をいよいよ実践に移したといふた。仙台へ赴いたといふのは東京の留学生界の浮薄な雰囲気にあきたらないものがあつてらしい。

の「法の精神」などがあり、後者には小デューマの「茶花女遺事」(椿姫)や、コナンドイルのもの等があり、出る度に彼は尽く買つて読んだ。古書類にたいしてはあまり注意を向けなかつた。ただ文章を書くのは好きで、時に応じてしばしば随筆や詩文をものしてゐる。十八歳の年の「憂剣生雑記」の一に曰く、
 「行人、斜日の將に墮ちなんとする時、溟色人に逼り、四顧すれば満目故郷の人に非ず、細かに聆けば満耳皆異郷の語、一たび、家郷万里、老親弱弟の必らず時々相語り、今当に某処に至るべしと謂ひつつあらんことに念ひ及べば、此の時真に柔腸断えなんと欲し、涕して仰ぐ可からず、故に予に句あり云ふ、
 日暮れて客愁集り、烟深うして人語喧しと、皆身ら歴たる所、これを空言に託するに非ざるなり。」
 かういふ感じ易い年少の心に光緒帝の戊戌政変や北京が八国連合軍に蹂躪された事件や国内に根強く底流しはじめた革命の風潮等がそれぞれの意味でどんなに強い刺激を与へたであらうかは想像するに難くない。さて彼は礦路学堂を卒へた翌年二十二歳の年江南督練公所から派せられて日本に留学し、東京の弘文学院に入つた。ここ

ユーの「法の精神」などがあり、後者には小デューマの「茶花女遺事」(椿姫)や、コナンドイルのもの等があり、出る度に彼は尽く買つて読んだ。古書類に対してはあまり注意を向けなかつた。ただ文章を書くのは好きで、時に応じてしばしば随筆や詩文をものしてゐる。十九歳の年の「憂剣生雑記」の一に曰く、
 「行人、斜日の將に墮ちなんとする時、溟色人に逼り、四顧すれば満目故郷の人に非ず、細かに聆けば満耳皆異郷の語、一たび、家郷万里、老親弱弟の必らず時々相語り、今当に某処に至るべしと謂ひつつあらんことに念ひ及べば、此の時真に柔腸断えなんと欲し、涕して仰ぐ可からず故に予に句あり云う、
 日暮れて客愁集り、烟深うして人語喧しと、皆身ら歴たる所、これを空言に託するに非ざるなり。」
 こういふ感じ易い年少の心に光緒帝の戊戌政変や北京が八国連合軍に蹂躪された事件や国内に根強く底流しはじめた革命の風潮等がそれぞれの意味でどんなに強い刺激を与へたであらうかは想像するに難くない。さて彼は礦路学堂を卒へた翌年二十二歳の年江南督練公所から派せられて日本に留学し、東京の弘文学院に入つた。ここは日本語教

	<p>し、東京の弘文学院に入った。ここは日本語教授を主とする支那留学生の一種の予備校であり、今日の東亜学校の前身とも言ふべきところである。／この頃から彼はやうやく学業の暇にはよく哲学と文芸の書に親しむやうになり、殊に人性及国民性の問題に注意しはじめた。／渡日した翌々年彼は仙台の医学専門学校へ入学した。かねてから懐抱してゐた西洋医学救国の素志をいよいよ実践に移したのであつた。仙台へ赴いたといふのには東京の留学生界の浮薄な雰囲氣にあきたらないものがあつてらしい。</p>		<p>は日本語教授を主とする中国留学生の一種の予備校である。／この頃から彼はやうやく学業の暇にはよく哲学と文芸の書に親しむやうになり、殊に人性及国民性の問題に注意しはじめた。／渡日した翌々年彼は仙台の医学専門学校へ入学した。かねてから懐抱してゐた西洋医学救国の素志をいよいよ実践に移したのであつた。仙台へ赴いたといふのには東京の留学生界の浮薄な雰囲氣にあきたらないものがあつてらしい。</p>	<p>授を主とする支那留学生の一種の予備校であり、今日の東亜学校の前身とも言ふべきところである。／この頃から彼はやうやく学業の暇にはよく哲学と文芸の書に親しむやうになり、殊に人性及国民性の問題に注意しはじめた。／渡日した翌々年彼は仙台の医学専門学校へ入学した。かねてから懐抱してゐた西洋医学救国の素志をいよいよ実践に移したのであつた。仙台へ赴いたといふのには東京の留学生界の浮薄な雰囲氣にあきたらないものがあつてらしい。</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)支那留学生</p>	<p>(39)中国留学生</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)親切なもの</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(39)親切な者</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)眼を以て</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(39)目を以て</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)出来なかつた</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(40)できなかつた</p>
<p>(240)黒い瘦せた</p>	<p>(58)黒い、瘦せた</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(40)黒い、瘠せた</p>
<p>(240)喋りつき</p>	<p>(58)喋りかた</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(40)喋り方</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)手入れのされてない</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(40)手入れされてない</p>
<p>(240)来る</p>	<p>(58)来る</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(58)預かり</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(40)預り</p>
<p>(240)開けて</p>	<p>(59)開けて</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>

<p>に同じ</p> <p>(240)同級百余名のうちま ん中ぐらゐ</p>	<p>(59)ノート訂正</p> <p>(59)同級百四十二名のうち 六十八番</p>	<p>(40)ノートの訂正</p> <p>に同じ</p>	<p>に同じ</p> <p>に同じ</p>	<p>に同じ</p> <p>に同じ</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(59)その時の成績表がある。参考のために掲げて見よう。／解剖 五九・三／組織 七二・七／生理 六三・三／倫理 八三／独逸 六〇／物理 六〇／化学 六〇／平均 六五・五</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>「該当箇所なし」</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(60) 二学年になると藤野教授は解剖実習と局部解剖学の受け持ちとなつたが、解剖実習が始まつて一週間位もたつた頃、教授は魯迅を呼んで上機嫌で例の抑揚ある口調で言つた。／「私は支那の人は大變靈魂を敬ふといふ話を聞いてゐたものだから、ずゐぶん心配した、君が屍体の解剖を厭がりはしないかと思つてね。／がそんなことがなくつてすつかり安心したよ。」／教授は又彼に支那の婦人の纏足といふのはどんな具合に</p>	<p>(40) 藤野教授受け持ちの解剖がもつとも不成績なのはちよつと腑に落ちなくも感ぜられるが、それは結局教授が彼にあれほどの親切をつくしながらも、採点に於ては厳正であつたか、あるひは教授は總体的に点が辛かつたか、どちらかを示すものであらう。</p>	<p>(46) 藤野教授受け持ちの解剖がもつとも不成績なのは、ちよつと腑に落ちなくも感ぜられるが、それは結局教授が彼にあれほどの親切をつくしながらも、採点に於ては厳正であつたかあるひは教授は總体的に点が辛かつたか、どちらかを示すものであらう。</p>	<p>(41) 二学年になると藤野教授は解剖実習と局部解剖学の受け持ちになつたが、解剖実習が始まつて一週間位もたつた頃、教授は魯迅を呼んで上機嫌で例の抑揚ある口調で言つた。／「私は支那の人は大變靈魂を敬ふといふ話を聞いてゐたものだから、ずゐぶん心配した、君が屍体の解剖を厭がりはしないかと思つてね。／がそんなことがなくつてすつかり安心したよ。」／教授は又彼に支那の婦人の纏足といふのはどんな具合に</p>

されてゐるのか、骨がど
 なふうな畸形に變つてゐ
 るのかなどとたづね、しま
 ひには嘆息して、「どうして
 も一度見なくちやわからな
 い、ほんとにどんな具合な
 んだらうかなあ」などと
 言つたりした。／ある日の
 こと同級の学生会幹事が彼
 の下宿へやつて来て彼にノ
 ートを見せてくれと言つた。
 彼がそれを彼等に渡すと一
 と通りバラバラとめくつて
 見ただけですぐに歸つて行
 った。彼等が歸ると間もな
 く一通の匿名の郵便が彼の
 もとへ届いた。明けて見る
 と最初に「汝悔い改めよ！」
 と書いてあり、次いで前学
 年の解剖学の試験問題は藤
 野先生がノートに印をつけて
 置いたからあらかじめ知ら
 されたのだといふやうなこ
 とが書かれてあつた。／彼は
 このことをすぐに藤野教授
 に知らせたが、同時に彼と
 親しかつた数人の学友も甚
 だしく憤慨し、彼と一緒に
 幹事の処へ行きノート検査
 の無礼を詰責し、更に彼等
 に検査の結果を発表するこ
 とを要求したので流言は直
 きに消滅したが、彼は自分
 がこんなふうな低能児扱ひ
 にされるといふのも結局は
 支那が弱国だからだと思ふ
 につけてもますます祖国の
 ために悲しみ、憤起の情を
 そそられないではゐられな
 かにされてゐるのか、骨がど
 なふうな畸形に變つてゐ
 るのかなどとたづね、しま
 ひには嘆息して、「どうして
 も一度見なくちやわからな
 い、ほんとにどんな具合な
 んだらうかなあ」などと
 言つたりした。／ある日の
 こと同級の学生会幹事が彼
 の下宿へやつて来て彼にノ
 ートを見せてくれと言つた。
 彼がそれを彼等に渡すと一
 と通りバラバラとめくつて
 見ただけですぐに歸つて行
 った。彼等が歸ると間もな
 く一通の匿名の郵便が彼の
 もとへ届いた。明けて見る
 と最初に「汝悔い改めよ！」
 と書いてあり、次いで前学
 年の解剖学の試験問題は藤
 野先生がノートに印をつけて
 置いたからあらかじめ知ら
 されたのだといふやうなこ
 とが書かれてあつた。／彼は
 このことをすぐに藤野教授
 に知らせたが、同時に彼と
 親しかつた数人の学友も甚
 だしく憤慨し、彼と一緒に
 幹事の処へ行きノート検査
 の無礼を詰責し、更に彼等
 に検査の結果を発表するこ
 とを要求したので流言は直
 きに消滅したが、彼は自分
 がこんなふうな低能児扱ひ
 にされるといふのも結局は
 支那が弱国だからだと思ふ
 につけてもますます祖国の
 ために悲しみ、憤起の情を
 そそられないではゐられな
 かにされてゐるのか、骨がど
 なふうな畸形に變つてゐ
 るのかなどとたづね、しま
 ひには嘆息して、「どうして
 も一度見なくちやわからな
 い、ほんとにどんな具合な
 んだらうかなあ」などと
 言つたりした。／ある日の
 こと同級の学生会幹事が彼
 の下宿へやつて来て彼にノ
 ートを見せてくれと言つた。
 彼がそれを彼等に渡すと一
 と通りバラバラとめくつて
 見ただけですぐに歸つて行
 った。彼等が歸ると間もな
 く一通の匿名の郵便が彼の
 もとへ届いた。明けて見る
 と最初に「汝悔い改めよ！」
 と書いてあり、次いで前学
 年の解剖学の試験問題は藤
 野先生がノートに印をつけて
 置いたからあらかじめ知ら
 されたのだといふやうなこ
 とが書かれてあつた。／彼は
 このことをすぐに藤野教授
 に知らせたが、同時に彼と
 親しかつた数人の学友も甚
 だしく憤慨し、彼と一緒に
 幹事の所へ行きノート検査
 の無礼を詰責し、更に彼等
 に検査の結果を発表するこ
 とを要求したので流言は直
 きに消滅したが、彼は自分
 がこんなふうな低能児扱ひ
 といふのも結局は支那が
 弱国だからだと思ふにつ
 けてもますます祖国のため
 に悲しみ、憤起の情をそ
 そられないではゐられな
 かつ

<p>(242) 第一学年になると 同じ</p>	<p>(62) 二年には (62) 映画を用ゐて 同じ</p>	<p>「該当箇所なし」 同じ</p>	<p>「該当箇所なし」 同じ</p>	<p>「該当箇所なし」 同じ</p>
<p>(242) 暗い中で、映画面 同じ</p>	<p>(62) 暗い中で映画面 (62) 映り出て 同じ</p>	<p>(43) 暗い中で画面 同じ</p>	<p>(48) くらい中で画面 同じ</p>	<p>同じ (42) 写り出て</p>
<p>同じ</p>	<p>(62) 姿が現はれた。 (62) 銃殺は魯迅の目の前 で行はれた。生徒たちは又 呼の声を挙げた 同じ</p>	<p>(43) 姿があり、 同じ</p>	<p>(48) 姿があつた。 (48) 銃殺は今まさらに行はれ ようとする、で、生徒たち は拍手し、歓呼した。 同じ</p>	<p>(42) 姿が現われた。 (42) 銃殺は魯迅の目の前 で行なわれた。生徒たちは又 拍手し歓呼した。 同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>(63) 銃殺された (63) 嬉々として楽しんでゐ る様 同じ</p>	<p>(43) 嬉々として楽しんでゐ る様 同じ</p>	<p>(49) 銃殺される 同じ</p>	<p>同じ (42) 嬉々として楽しんでい る様子 同じ</p>
<p>(242) 代られた 同じ</p>	<p>(63) 代へられた (63) たいし新しい 同じ</p>	<p>同じ 同じ</p>	<p>同じ (49) たいし新しい 同じ</p>	<p>(42) 代えられた (42) 対し新しい 同じ</p>
<p>(242) その肉体 同じ</p>	<p>(63) その身体 (63) 支那（二箇所） 同じ</p>	<p>同じ (44) 中国（二箇所） 同じ</p>	<p>同じ 同じ</p>	<p>(42) 身体 同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>(63) 描いて (63) 起させられた 同じ</p>	<p>同じ 同じ</p>	<p>同じ (49) 起された 同じ</p>	<p>(43) 置いて 同じ</p>

<p>(241) 約した。が遂に彼は死に至るまで写真を送りもしなければ一通の便りも書かなかつた。が後年彼が書いた「藤野先生」の一文で彼はその約を果したとも言ひ得なくはない。と言ふのは後年昭和十年佐藤春夫、増田渉氏共訳で岩波文庫版「魯迅選集」上梓に当り増田氏が採録の作品名につき魯迅にはかつた際魯迅は「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと言ひ送つて来たとのことであり、そのことに依て彼はその一</p>	<p>(65) 約した。／が、この約束は遂に最後まで実行されなかつたばかりでなく、魯迅は彼に一通の手紙も書かなかつた。けれどもある意味で彼はその約以上のものを果したとも言ひ得なくはない。といふのは後年彼は「藤野先生」なる一文をものしつて、昭和十年佐藤春夫、増田渉両名が岩波文庫版「魯迅選集」上梓の際、採録の作品名につき魯迅にはかつたところ、魯迅が「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと答へてゐるこ</p>	<p>(45) 約した。／が、この約束は遂に最後まで実行されなかつたばかりでなく、魯迅は彼に一通の手紙も書かなかつたのである。けれどももある意味で彼はその約以上のものを果したとも言ひ得なくはない。といふのは彼が故国へ帰つてから、教授に訂正してもらつたノートを三冊の厚い本に装幀して永久の記念にするつもりで保存して置いた(が不幸、後年転居の途中本箱の一つが破損し半数の書籍を失つたことがあつた際にこのノ</p>	<p>(50) 約した。／が、この約束は遂に最後まで実行されなかつたばかりでなく、魯迅は彼に一通の手紙も書かなかつた。けれどもある意味で彼はその約以上のものを果したとも言ひ得なくはない。といふのは後年彼は「藤野先生」なる一文をものしつて、昭和十年佐藤春夫、増田渉両名が岩波文庫版「魯迅選集」上梓の際、採録の作品名につき魯迅にはかつたところ、魯迅が「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと答へてゐるこ</p>	<p>(43) 約した。／が、この約束は遂に最後まで実行されなかつたばかりでなく、魯迅は彼に一通の手紙も書かなかつた。けれどもある意味で彼はその約束以上のものを果したとも言ひ得なくはない。と言ふのは後年彼は「藤野先生」なる一文をものしつて、昭和十年佐藤春夫、増田渉両名が岩波文庫版「魯迅選集」上梓の際、採録の作品名につき魯迅にはかつたところ、魯迅が「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと答へてゐるこ</p>	<p>同じ</p>	<p>(64) 呼んで彼に</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(64) なりました、先生</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(43) になりました。先生</p>	<p>(241) 二学年目の終りに彼は後に述べる理由のために学校を止める決心をしそ</p>	<p>(64) やがて二学年目の終りになつた。彼は仙台を去る</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(43) やがて二学年目の終りになつた。彼は仙台を去る</p>	<p>(242) 民生を思ふ心は熱く、しかも彼は青春最も甜な時にゐた。彼は安閑としてゐられなかつた。で、その年二学年の終りには、はつきり医学と訣別して東京へ舞ひ戻つた。そこで文学運動を起さうとの意図であつた。</p>	<p>(65) 民生への思ひに燃えてゐた心はたださへ熱くたぎつてゐる青春の血に煽られて今はもうじつとしてゐられなくなつた。彼は東京へ戻つて文学運動を起すことを決意した。</p>	<p>同じ</p>	<p>(45) 民生への思ひに燃えてゐた心はたださへ熱くたぎつてゐる青春の血に煽られて今はもうじつとしてゐられなくなつた。彼は東京へ戻つて文学運動を起すことを決意した。</p>	<p>(43) 民生への思ひに燃えてゐた心はたださへ熱くたぎつてゐる青春の血に煽られて今はもうじつとしてゐられなくなつた。彼は東京へ戻つて文学運動を起すことを決意した。</p>
--	---	--	---	--	-----------	-------------------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------------------	-----------	-----------	-----------------------	---	------------------------------------	-----------	-----------	------------------------------------	--	--	-----------	--	--

<p>文が藤野教授の眼に触れることを祈念してゐたのであつた。そしてその目的は達せられたのであつた。</p>	<p>(24)「文学案内」の紹介で</p>	<p>(24)二月のじゆん</p>	<p>(24)あつた。藤野巖九郎氏については紙数が無いので悉しいことは割愛し、当時郷里福井県の一村落で診療に従事してゐたといふことを記すに止めて置かう。</p>
<p>とから見ても、彼はその一文が藤野教授の眼に触れることをひそかに祈念してゐたのであつた。そしてその目的は達せられた。</p>	<p>(65)「文学案内」介で</p>	<p>(65)二月のじゆん</p>	<p>(65)あつた。／序乍ら藤野教授のことに筆を延すと、同教授は明治七年福井県坂井郡本蔵村下番の生れで、愛知県立医学専門学校出身後同校に教鞭を執り、明治三十四年の暮に仙台医学専門学校へ転校したのであり、ここに大正四年春まで在職して、その後は郷里に帰り、三国町で医院を開いた。大正八年に実家でやはり医を開業してゐた実兄が亡くなり長男がまだ修学中</p>
<p>「トも失くなつた」ばかりでなく、教授の例の写真は永くその寓居の書齋の壁間にかかげて、夜倦み疲れて倦怠の情を萌した時、仰いで氣持を振り立たせるよすがともしてゐた。その上にも彼は「藤野先生」なる一文をものしてゐ、昭和十年佐藤春夫、増田涉両名が岩波文庫版「魯迅選集」上梓の際、採録の作品名につき魯迅にはかつたところ、魯迅は「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと答へてゐる。言ふまでもなく彼はその一文が藤野教授の眼に触れることをひそかに祈念してゐたのであり、そしてその目的は達せられた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(46)二月のじゆん</p>	<p>(46)あつた。／序乍ら藤野教授のことに筆を延ばすと、同教授は明治七年福井県坂井郡本蔵村下番の生れで、愛知県立医学専門学校出身後同校に教鞭を執り、明治三十四年の暮に仙台医学専門学校へ転校したのであり、ここに大正四年春まで在職して、その後は郷里に帰り、三国町で医院を開いた。大正八年に実家でやはり医を開業してゐた実兄が亡くなり長男がまだ修学中</p>
<p>とから見ても、彼はその一文が藤野教授の眼に触れることをひそかに祈念してゐたのであつた。そしてその目的は達せられた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(6)あつた。／序乍ら藤野教授のことに筆を延すと、同教授は明治七年福井県坂井郡本蔵村下番の生れで、愛知県立医学専門学校出身後同校に教鞭を執り、明治三十四年の暮に仙台医学専門学校へ転校したのであり、ここに大正四年春まで在職して、その後は郷里に帰り、三国町で医院を開いた。大正八年に実家でやはり医を開業してゐた実兄が亡くなり長男がまだ修学中</p>
<p>とから見ても、彼はその一文が藤野教授の目に触れることをひそかに祈念してゐたのであつた。そしてその目的は達せられた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(7)あつた。／序乍ら藤野教授のことに筆を延すと、同教授は明治七年福井県坂井郡本蔵村下番の生まれで、愛知県立医学専門学校出身後同校に教鞭を執り、明治三十四年の暮に仙台医学専門学校へ転校したのであり、ここに大正四年春まで在職して、その後は郷里に帰り、三国町で医院を開いた。大正八年に実家でやはり医を開業してゐた実兄が亡くなり長男がまだ修学中</p>

<p>だつたので、実家での診療を引き継ぎ、昭和八年に至つて、その当時には亡兄の遺児もすでに同じ郡の蘆原温泉で開業し、相当基礎も固まつていたので、その生家を亡兄遺児の出張診療所とし、自分は生家での診察を打ち切つた。この前後から氏を迎へる運動が各部落に起されてゐたが、氏はあくまで生地を離れず、寺小屋時代の恩師の旧宅前の農家の一部を借りて診療所とし、別に設けた居宅から日々電車で通勤して診察に従つてゐるのである。患者はむろん殆んどすべてが農民であるわけだが、氏の患者にたいする態度はあくまで周到、親切であり、まったく老いの身を彼等村民のために献げてゐる観があり、村民の深い敬慕と信頼を受けてゐるとのことである。／かういふ彼の消息はその地方の新聞記者をしてゐる坪田和雄、川崎義盛、牧野久信の三人が雑誌「日本評論」誌上の増田涉の魯迅追憶記によつて藤野教授のことを知り、同人等が知つてゐる藤野医師のことではないかと訊ね質して見て、果してさうであつたことに依つて判明したものであり、三人の筆になる藤野医師訪問記が「文学案内」に載つたことで初めて一般的に知られたのである。</p>	<p>だつたので、実家での診療を引き継ぎ、昭和八年に至つて、その当時には亡兄の遺児もすでに同じ郡の蘆原温泉で開業し、相当基礎も固まつていたので、その生家を亡兄遺児の出張診療所とし、自分は生家での診察を打ち切つた。この前後から氏を迎へる運動が各部落に起されてゐたが、氏はあくまで生地を離れず、寺小屋時代の恩師の旧宅前の農家の一部を借りて診療所とし、別に設けた居宅から日々電車で通勤して診察に従つてゐるのである。患者はむろん殆んどすべてが農民であるわけだが、氏の患者にたいする態度はあくまで周到、親切であり、まったく老いの身を彼等村民のために献げてゐる観があり、村民の深い敬慕と信頼を受けてゐるとのことである。／かういふ彼の消息はその地方の新聞記者をしてゐる坪田和雄、川崎義盛、牧野久信の三人が雑誌「日本評論」誌上の増田涉の魯迅追憶記によつて藤野教授のことを知り、同人等が知つてゐる藤野医師のことではないかと訊ね質して見て、果してさうであつたことに依つて判明したものであり、三人の筆になる藤野医師訪問記が「文学案内」に載つたことで初めて一般的に知られたのである。</p>	<p>だつたので、実家での診療を引き継ぎ、昭和八年に至つて、その当時には亡兄の遺児もすでに同じ郡の蘆原温泉で開業し、相当基礎も固まつていたので、その生家を亡兄遺児の出張診療所とし、自分は生家での診察を打ち切つた。この前後から氏を迎へる運動が各部落に起されてゐたが、氏はあくまで生地を離れず、寺小屋時代の恩師の旧宅前の農家の一部を借りて診療所とし、別に設けた居宅から日々電車で通勤して診察に従つてゐるのである。患者はむろん殆んどすべてが農民であるわけだが、氏の患者にたいする態度はあくまで周到、親切であり、まったく老いの身を彼等村民のために献げてゐる観があり、村民の深い敬慕と信頼を受けてゐるとのことである。／かういふ彼の消息はその地方の新聞記者をしてゐる坪田和雄、川崎義盛、牧野久信の三人が雑誌「日本評論」誌上の増田涉の魯迅追憶記によつて藤野教授のことを知り、同人等が知つてゐる藤野医師のことではないかと訊ね質して見て、果してさうであつたことに依つて判明したものであり、三人の筆になる藤野医師訪問記が「文学案内」に載つたことで初めて一般的に知られたのである。</p>	<p>中だつたので、実家での診療を引き継ぎ、昭和八年に至つて、その当時には亡兄の遺児も既に同じ郡の蘆原温泉で開業し、相当基礎も固まつていたので、その生家を亡兄遺児の出張診療所とし、自分は生家での診察を打ち切つた。この前後から氏を迎へる運動が各部落に起されてゐたが、氏はあくまで生地を離れず、寺小屋時代の恩師の旧宅前の農家の一部を借りて診療所とし、別に設けた居宅から日々電車で通勤して診察に従つてゐるのである。患者はむろんほとんど全てが農民である訳だが、氏の患者に対する態度はあくまで周到、親切であり、まったく老いの身を彼等村民のために献げてゐる観があり、農民の深い敬慕と信頼を受けてゐるとのことである。／かういふ彼の消息はその地方の新聞記者をしてゐる坪田和雄、川崎義盛、牧野久信の三人が雑誌「日本評論」誌上の増田涉の魯迅追憶記によつて藤野教授のことを知り、同人等が知つてゐる藤野医師のことではないかと訪ね質してみても、果してさうであつたことに依つて判明したものであり、三人の筆になる藤野医師訪問記が「文学案内」に載つたことで初めて一般的に知られたのである。</p>
---	---	---	--

(24) 中で魯迅は次のやうに書いてゐる。「僕が我が師と思つてゐる人の中で先生は最も僕を感激させ、僕を鼓舞激励して下さつた一人であつた。時々よく僕は思ふのだが、先生の僕にたいする熱心な希望と倦まない教誨とは小にして言へば中国のため、即ち中国に新しい医学の起ることを希望されたためであり、大にして言へば學術のため、即ち新しい医学が中国へ伝はることを希望されたためであつた。先生の人格は僕眼中と心中では実に偉大である。先生の姓名は多数の人に知られてゐるわけでは決して無いけれども、先生が訂正して下さつたノートは僕は曾て三冊の厚い本に装幀して永久の記念にするつもりで保存して置いた。が不幸にして七年前転居の際途中で本箱の一つが破損し半数の書籍を失つたのだが生憎このノートもその時失くしてしまつた。運送店に捜すやうに詰貰した。ただ先生の写真だけは今尚僕の北京の寓居の東側の壁に書卓に向けて掛かつてゐ、毎夜倦み疲れて倦怠の情の萌した時頭をもたげて灯光の中に先生の黒い瘦せたお顔を目にすると、まるでその抑揚頓挫のある言葉

(25) 中で魯迅は次のやうに書いてゐる。「僕が我が師と思つてゐる人の中で、先生は最も僕を感激させ、僕を鼓舞激励して下さつた一人であつた。時々よく僕は思ふのだが、先生の僕にたいする熱心な希望と倦まない教誨とは小にして言へば中国のため、即ち中国に新しい医学の起ることを希望されたためであり、大にして言へば學術のため、即ち新しい医学が中国へ伝はることを希望されたためであつた。先生の人格は、僕眼中と心中では実に偉大である。先生の姓名は多数の人に知られてゐるわけでは決して無いけれども、先生が訂正して下さつたノートは僕は曾て三冊の厚い本に装幀して永久の記念にするつもりで保存して置いた。が不幸にして七年前転居の際途中で本箱の一つが破損し半数の書籍を失つたのだが生憎このノートもその時失くしてしまつた。運送店に捜すやうに詰貰したが遂に何の返事も無かつた。だが先生の写真だけは今尚僕の北京の寓居の東側に書卓に向けて掛かつてゐ、毎夜倦み疲れて倦怠の情の萌した時頭をもたげて灯光の中に先生の黒い瘦せたお顔を目にすると、まるでその抑揚頓挫のある言葉

(26) 中で、藤野教授について、先生の自分にたいする熱心な希望と倦まない教誨とは小にして言へば中国のため、即ち中国に新しい医学の起ることを希望されたためであり、大にして言へば學術のため、即ち新しい医学が中国へ伝はることを希望されたためである。先生眼中と心中では実に偉大である。

(27) 中で魯迅は次のやうに書いてゐる。「私が我が師と思つてゐる人の中で彼は最も私を感激させ、私を鼓舞激励してくれ一人であつた。時々よく私は思ふのだが、彼の私にたいする熱心な希望と倦まない教誨とは、小にして言へば中国のため、即ち中国に新しい医学の起ることを希望されたためであり、大にして言へば學術のため、即ち新しい医学が中国へ伝はることをのぞんだためであつた。彼の人格は私の眼中と心中では実に偉大である。彼の姓名は多数の人に知られてゐるわけでは決して無いけれども、先生が訂正して下さつたノートは、私は曾て三冊の厚い本に装幀して、永久の記念にするつもりで保存して置いた。が不幸にして七年前転居の際途中で本箱の一つが破損し、半数の書籍を失つたのだが、生憎このノートもその時失くしてしまつた。運送店に捜すやうに詰貰したが、遂に何の返事も無かつた。だが彼の写真だけは今尚私の北京の寓居の東側に書卓に向けて掛かつてゐ、毎夜倦み疲れて倦怠の情の萌した時、頭をもたげて灯光の中に彼の黒い瘦せた顔を目にすると、まるでその抑揚頓挫のある言葉で話しかけるかの

(28) 中で魯迅は次のやうに書いてゐる。「僕が我が師と思つてゐる人の中で、先生は最も僕を感激させ、僕を鼓舞激励して下さつた一人であつた。時々よく僕は思ふのだが、先生の僕にたいする熱心な希望と倦まない教誨とは小にして言へば中国のため、即ち中国に新しい医学の起ることを希望されたためであり、大にして言へば學術のため、即ち新しい医学が中国へ伝はることを希望されたためであつた。先生の人格は僕眼中と心中では実に偉大である。先生の姓名は多数の人に知られてゐる訳では決してないけれども、先生が訂正して下さつたノートは僕は曾て三冊の厚い本に装幀して永久の記念にするつもりで保存して置いた。が不幸にして七年前転居の際途中で本箱の一つが破損し半数の書籍を失つたのだが、生憎このノートもその時失くしてしまつた。運送店に探すやうに詰貰したが遂に何の返事も無かつた。だが先生の写真だけは今尚僕の北京の寓居の東側の壁に書卓に向けて掛かつてゐ、毎夜倦み疲れて倦怠の情の萌した時頭をもたげて灯光の中に先生の黒い瘦せたお顔を目にすると、まるでその抑揚頓挫のある声で話しか

<p>で話しかけるかのやう突然僕に良心を奮ひ起させ且つ勇氣を増させるのだ。(下略)</p>	<p>(243) ここで一言言ひ添へて置くが文章を書かうと思ふ彼の志は必ずしも例の実写映画の時以来突如として起つたものではなく、すでに医学入学の前年二十三歳の年に彼の同郷の留学生等に依て東京で発刊されてゐた「浙江潮」に彼は「スバルタの魂」といふ支那国民性の改造に心を燃やした一文を寄せてゐる。つまり文学に向ふ心の萌芽は早くから芽生えてゐたのである。</p>	<p>で話しかけるかのやう突然僕に良心を奮ひ起させ且つ勇氣を増させるのだ。(下略)</p>	<p>(68) 魯迅は文学運動の熱に燃えて東京へ戻つた。ここで一言言ひ添へると、文章を書かうと思ふ彼の志は必ずしも例の実写映画の時以来突如として起つたものではなく、すでに医学入学の前年二十三歳の年に同郷出身の留学生等に依つて発刊されてゐた「浙江潮」に「スバルタの魂」といふ支那国民性の改造に心を燃やした一文を寄せたこともあり、つまり文学に向ふ心の萌芽は早くから芽生えてゐたのである。</p>	<p>やう、突然私に良心を奮ひ起させ且つ勇氣を増させるのだ。(下略)</p>	<p>(53) 魯迅は文学運動の熱に燃えて東京へ戻つた。ここで一言言ひ添へると、文章を書かうと思ふ彼の志は必ずしも例の幻灯事件の時以来突如として起つたものではなく、すでに医学入学の前年二十二歳の年に同郷出身の留学生等に依つて発刊されてゐた「浙江潮」に「スバルタの魂」といふ支那国民性の改造に心を燃やした一文を寄せたこともあり、つまり文学に向ふ心の萌芽は早くから芽生えてゐたのである。</p>	<p>けるかのやう突然僕に良心を奮ひ起させ且つ勇氣を増させるのだ。(下略)</p>	<p>(46) 魯迅は文学運動の熱に燃えて東京へ戻つた。ここで一言言ひ添へると、文章を書かうと思ふ彼の志は必ずしも例の幻灯映画の時以来突如として起つたものではなく、すでに医学入学の前年二十三才の年に同郷出身の留学生等に依つて発刊されてゐた「浙江潮」に「スバルタの魂」といふ支那国民性の改造に心を燃やした一文を寄せたこともあり、つまり文学に向ふ心の萌芽は早くから芽生えてゐたのである。</p>
<p>(243) とこころで文学運動の熱に燃えて東京へ戻つた彼に向けられた</p>	<p>(69) さて、魯迅はそんなふうにして東京へ戻つたが、さういふ魯迅に向けられた</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(49) 中国</p>			
<p>同じ</p>	<p>(69) 支那</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>			
<p>同じ</p>	<p>(69) 実学であり随つて</p>	<p>同じ</p>	<p>53 実学であり、随つて</p>	<p>(46) 実学であり随つて</p>			
<p>(243) 省みられ</p>	<p>(69) 顧られ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>			
<p>(243) そして、彼が</p>	<p>(69) そして彼が</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>			
<p>同じ</p>	<p>(69) 見たなどといふ</p>	<p>同じ</p>	<p>(54) 見たなどといふ、</p>	<p>(46) 見た、などという</p>			
<p>同じ</p>	<p>(70) 残して折柄</p>	<p>同じ</p>	<p>(54) 残して、折柄</p>	<p>同じ</p>			
<p>同じ</p>	<p>(70) 弟同人</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>			
<p>(243) 弟周作人</p>	<p>(70) 弟同人</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>			

(243) さて、彼の文学志望は友人知人たちに冷遇されたが彼はあくまで文学にたいする熱意に燃えてゐた。そして故郷から	(70) さうして彼が再び	同じ	同じ	(47) そうして彼が再び
(243) 後はさういふ	(70) 後は、彼にたいする	同じ	同じ	(47) 後は、彼に対する
同じ	(70) 中からもどつにか	同じ	(54) 中からも、どつにか	同じ
同じ	(70) 出来	同じ	同じ	(47) でき
(243) 運びとなり表題を「新生」とした。	(70) 運びとなり、表題も「新生」と定めた。	同じ	同じ	同じ
同じ	(70) ものだつた	同じ	同じ	(47) 者だつた
同じ	(70) そんなわけで	同じ	同じ	(47) そんな訳で
(243) 「新生」の計画が挫折したのでその翌年頃は	(71) 魯迅はむろん甚だしく失望落胆した。が取るべき他の手段は無かつた。その翌年	同じ	同じ	(47) 魯迅はむろん甚だしく失望落胆した。が取るべき他の手段は無かつた。その翌年
同じ	(71) ために	同じ	同じ	(47) 為に
(244) ことなのですべて例へば、今諸レヲ中国ニ索ムルニ精神界之戦士ハ安クニ在リト為ス力、至誠之声ヲ作シ吾人ニ善美剛健ヲ致ス者ハ有リヤ、温煦之声ヲ作シテ吾人ノ荒寒ヨリ出ツルヲ援クル者ハ有リヤ。家國荒ルルモ最末ノ哀歌ヲ賦シテ以テ天下ニ訴ヘテ後人に貽スノ Jeremia は且ツ未だ之有ラザルナリ。(一) 麻羅詩力説「中より」といつた調子の固苦しい古文体で書か	(71) ことなので、全て例へば、今諸れを中国に索むるに精神界の戦士は安くに在りと為すか、至誠之声を作して吾人に善美剛健を致す者は有りや、温煦之声を作して吾人の荒寒より出づるを援くる者は有りや。家國荒るるも最末の哀歌を賦して以て天下に訴へて後人に貽すの Jeremia は且つ未だ之有らざるなり。(一) 麻羅詩力説「中より」といつた調子の固苦しい古文体で書か	(51) ことなので、全て固苦しい古文体で書かれてゐる。	同じ	(47) ことなので、全て例へば、今諸れを中国に索むるに精神界の戦士はいづくに在りと為すか、至誠之声を作して吾人に善美剛健を致す者は有りや、温煦之声を作して吾人の荒寒より出づるを援くる者は有りや。家國荒るるも最末の哀歌を賦して以て天下に訴えて後人に貽すの Jeremia は且つ未だ之有らざるなり。(一) 麻羅詩力説「中より」といつた調子の固苦しい文語体で

れてゐる。	「該当箇所なし」	(77) これだけの引例文に見ても魯迅がいかに祖国のために熱血をたぎらしてゐたかが察せられるではないか。一方彼は医専で憶えた独逸語の勉強をつづけるために独逸語教会学校の聴講生となり、更に友人数名と共同してある亡命ロシア夫人についてロシア語の勉強をはじめたが、この方は財力の関係で長続きしなかつた。	(75) 一方彼は医専で憶えた独逸語の勉強をつづけるために独逸語教会学校の聴講生となり、更に友人数名と共同してある亡命ロシア夫人についてロシア語の勉強をはじめたが、この方は財力の関係で長続きしなかつた。	(75) これだけの引例文に見ても、魯迅がいかに祖国のために熱血をたぎらしてゐたかが察せられるではないか。一方彼は医専で憶えた独逸語の勉強をつづけるために、独逸語教会学校の聴講生となり、更に友人数名と共同してある亡命ロシア夫人についてロシア語の勉強をはじめたが、この方は財力の関係で長続きしなかつた。	(77) これだけの引例文に見ても魯迅がいかに祖国のために熱血をたぎらしてゐたかが察せられるではないか。一方彼は医専で憶えた独逸語の勉強をつづけるために独逸語教会学校の聴講生となり、更に友人数名と共同してある亡命ロシア夫人についてロシア語の勉強をはじめたが、この方は財力の関係で長続きしなかつた。
れてゐる。	(242) 当時祖国支那に於ては清朝を倒壊し新たに漢民族に依て立憲共和政府を樹立しようとする風潮は澎湃として全国を風靡し、革命団体の革興会、光復会及興中会は一九〇五年（魯迅の東京へ戻る前年）、孫文が三年間にわたる	(72) 時は一九〇七年であつたが、是より先一九〇五年には滅満興漢の革命団体たる革興会（湖南の黃興主宰）光復会（浙江の章炳麟主宰）及び興中会（広東の孫文主宰）が、孫文が三年にわたる	に同じ	に同じ	(48) 時は一九〇七年であつたが、是より先一九〇五年には滅満興漢の革命団体である革興会（湖南の黃興主宰）光復会（浙江の章炳麟主宰）及び興中会（広東の孫文主宰）が、孫文が三年に渡る
	(243) 機会に	(72) 機会に	に同じ	に同じ	に同じ
	(243) 結成し	(72) 結成せられ	に同じ	に同じ	に同じ
	(243) 又翌一九〇六年	(72) 又一九〇六年	に同じ	に同じ	に同じ
	(243) 「民報」を創刊して	(72) 「民報」に	に同じ	に同じ	に同じ
	に同じ	(72) 張る等東京	に同じ	(56) 張る等、東京	に同じ
	(243) その年には遅れ馳せながら	(72) 支那国内に於ては同年清朝が遅れ馳せ乍ら	(5) 中国国内に於ては同年清朝が遅れ馳せ乍ら	に同じ	に同じ
	(243) 出たりしたが反対	(72) 出たが反対	に同じ	に同じ	(48) 出たが、反対

(243)ばかりであった。

(77)ばかりで、同じ年に同盟会員が萍郷、醴陵に事を挙げたのを手始めとし、一九〇七年、一九〇八年の二年の間に潮州黄岡の役、惠州の役、欽廉の役、鎮南関の役、欽廉上思の役、雲南河口の役と、事を挙ぐること六度に及び、尚撰政醇親王暗殺を企てた汪兆銘はじめ一身を抛つて政府大官を撃つ者続出する等、燎原の火のやうに革命の風潮が燃え上つたのだから魯迅の若い血潮も切なく燃えたことは当然である。

同じ

(78)ばかりで、同じ年に同盟会員が萍郷、醴陵に事を挙げたのを手始めとし、一九〇七年、一九〇八年の二年の間に潮州黄岡の役、惠州の役、欽廉の役、鎮南関の役、欽廉上思の役、雲南河口の役と、事を挙ぐること六度に及び、尚撰政醇親王暗殺を企てた汪兆銘はじめ一身を抛つて政府大官を撃つ者続出する等、燎原の火のやうに革命の風潮が燃え上つたのだから、魯迅の若い血潮も切なく燃えたことは当然である。

(48)ばかりで、同じ年に同盟会員が萍郷、醴陵に事を挙げたのを手始めとして、一九〇七年、一九〇八年の二年の間に潮州黄岡の役、惠州の役、欽廉の役、鎮南関の役、欽廉上思の役、雲南河口の役と、事を挙ぐること六度に及び、尚撰政醇親王暗殺を企てた汪兆銘はじめ一身を抛つて政府大官を撃つ者続出する等、燎原の火のやうに革命の風潮が燃え上つたのだから、魯迅の若い血潮も切なく燃えたことは当然である。

(244) 翌年二十八歳の年には光復会々員とはならなかつたが、友人数名と共に章炳麟の門に入り、「説文解字」の講義を聴き、又法政大学予科にみた周作人と共同で外国小説の翻訳に着手した。

(73) けれども魯迅は自己の分を心得てゐ、どこまでも文学に依つて支那人性改革を志してゐたので、一九〇八年友人数名と共に章炳麟の門に入り、「説文解字」の講義を聴きはじめた際にも光復会々員とはならなかつた。そしてこの年又彼は法政大学予科にみた弟作人と共同で外国小説の翻訳に着手した。

(52) けれども魯迅は自己の分を心得てゐ、どこまでも文学に依つて中国人性改革を志してゐたので、一九〇八年友人数名と共に章炳麟の門に入り、「説文解字」の講義を聴きはじめた際にも光復会々員とはならなかつた。そしてこの年又彼は法政大学予科にみた弟作人と共同で外国小説の翻訳に着手した。

(56) けれども魯迅は自己の分を心得てゐ、どこまでも文学に依つて中国人性改革を志してゐたので、一九〇八年友人数名と共に章炳麟の門に入り、「説文解字」の講義を聴きはじめた際にも、光復会々員とはならなかつた。そしてこの年又彼は法政大学予科にみた弟作人と共同で、外国小説の翻訳に着手した。

(48) けれども魯迅は自己の分を心得てゐ、どこまでも文学に依つて支那人性改革を志してゐたので、一九〇八年友人数名と共に章炳麟の門に入り、「説文解字」の講義を聴きはじめた際にも光復会々員とはならなかつた。そしてこの年又彼は法政大学予科にいた弟作人と共同で外国小説の翻訳に着手した。

「該当箇所なし」

(73) この頃の彼の身辺の雰囲気を知るに都合のいい一文が後に魯迅に書かれてゐる。それに依ると、彼と同郷の革命の志士徐錫麟が安徽省の巡撫恩銘を刺殺して捕まり、心臓をえぐられて恩銘の親兵に煮て食はれたといふ消息が東京へ

(52) この頃の彼の身辺の雰囲気を知るに都合のいい一文が後に魯迅に書かれてゐる。それに依ると、彼と同郷の革命の志士徐錫麟が安徽省の巡撫恩銘を刺殺して捕まり、心臓をえぐられて恩銘の親兵に煮て食はれたといふ消息が東京へ

(57) この頃の彼の身辺の雰囲気を知るに都合のいい一文が後に魯迅に書かれてゐる。それに依ると、彼と同郷の革命の志士徐錫麟が安徽省の巡撫恩銘を刺殺して捕まり、心臓をえぐられて恩銘の親兵に煮て食はれたといふ消息が東京へ

(49) この頃の彼の身辺の雰囲気を知るに都合のいい一文が後に魯迅によつて書かれてゐる。それに依ると、彼と同郷の革命の志士徐錫麟が安徽省の巡撫恩銘を刺殺して捕まり、心臓をえぐられて恩銘の親兵に煮て食はれたといふ消息が

り、一般留学生を非常に激昂させたが、魯迅等も例によつて同郷会を開き、烈士を弔ひ、清朝政府を罵つた。それから北京へ打電して政府の無道を詰責すべしと主張するものが出た。そこで会衆はそれを是とするものと否とするものとの二派に分れた。魯迅は打電に賛成の旨を述べた。すると部屋の一隅から突然鈍い、不貞腐れたやうな声が上がつて来た。「殺した奴は殺しちまつたんだし、死んだ奴は死んぢまつたんだ、今さら電報も屁つたくれもあるかい」／魯迅はびつくりしてその声のした方を見ると、それは丈の高い、頭髪を長く伸ばしてある男で、畳の上に蹲つたまま白眼勝ちの瞳をぎよるつかせ乍らそつぽを向いてゐた。で、彼がこつそり傍らのものに訊いて見たらその男は范愛農といふ名でしかも徐錫麟の弟子だといふことであつた。それで彼はますますその男の心底を了解しがたく思ひ出したが、結局打電を主張するものが多数を占め、彼も屈服したが、電文の起草者を推薦する段になつて彼は又「推薦なんかする必要があるもんか! 無張した者がやらあね」とほざいた。／後に魯迅にもわかつたが、魯迅は一体に一群の同郷者たちから毛嫌

伝はり、一般留学生を非常に激昂させたが、魯迅等も例によつて同郷会を開き、烈士を弔ひ、清朝政府を罵つた。それから北京へ打電して政府の無道を詰責すべしと主張するものが出た。そこで会衆はそれを是とするものと否とするものとの二派に分れた。魯迅は打電に賛成の旨を述べた。すると部屋の一隅から突然鈍い、不貞腐れたやうな声が上がつて来た。「殺した奴は殺しちまつたんだし、死んだ奴は死んぢまつたんだ、今さら電報も屁つたくれもあるかい」／魯迅はびつくりしてその声のした方を見ると、それは丈の高い、頭髪を長く伸ばしてある男で、畳の上に蹲つたまま白眼勝ちの瞳をぎよるつかせ乍らそつぽを向いてゐた。で、彼がこつそり傍らのものに訊いて見たらその男は范愛農といふ名でしかも徐錫麟の弟子だといふことであつた。それで彼はますますその男の心底を了解しがたく思ひ出したが、結局打電を主張するものが多数を占め、彼も屈服したが、電文の起草者を推薦する段になつて彼は又「推薦なんかする必要があるもんか! 無張した者がやらあね」とほざいた。／後に魯迅にもわかつたが、魯迅は一体に一群の同郷者

伝はり、一般留学生を非常に激昂させたが、魯迅等も例によつて同郷会を開き、烈士を弔ひ、清朝政府を罵つた。それから北京へ打電して政府の無道を詰責すべしと主張するものが出た。そこで会衆はそれを是とするものと否とするものとの二派に分れた。魯迅は打電に賛成の旨を述べた。すると部屋の一隅から突然鈍い、不貞腐れたやうな声が上がつて来た。「殺した奴は殺しちまつたんだし、死んだ奴は死んぢまつたんだ、今さら電報も屁つたくれもあるかい」／魯迅はびつくりしてその声のした方を見ると、それは丈の高い、頭髪を長く伸ばしてある男で、畳の上に蹲つたまま白眼勝ちの瞳をぎよるつかせ乍らそつぽを向いてゐた。で、彼がこつそり傍らのものに訊いて見たらその男は范愛農といふ名でしかも徐錫麟の弟子だといふことであつた。それで彼はますますその男の心底を了解しがたく思ひ出したが、結局打電を主張するものが多数を占め、彼も屈服したが、電文の起草者を推薦する段になつて彼は又「推薦なんかする必要があるもんか! 無張した者がやらあね」とほざいた。／後に魯迅にもわかつたが、魯迅は一体に一群の同郷者

東京へ伝わり、一般留学生を非常に激昂させたが、魯迅等も例によつて同郷会を開き、烈士を弔ひ、清朝政府を罵つた。それから北京へ打電して政府の無道を詰責すべしと主張する者が出た。そこで会衆はそれを是とする者と否とする者との二派に分れた。魯迅は打電に賛成の旨を述べた。すると部屋の一隅から突然鈍い、不貞腐れたやうな声が上がつて来た。「殺したやつは殺しちまつたんだし、死んだやつは死んじまつたんだ。今さら電報も屁つたくれもあるかい」／魯迅はびつくりしてその声のした方を見ると、それは丈の高い、頭髪を長く伸ばしてある男で、畳の上に蹲つたまま白眼勝ちの瞳をぎよるつかせ乍らそつぽを向いてゐた。で、彼がこつそり傍らの者に聞いて見たらその男は范愛農という名で、しかも徐錫麟の弟子だといふことであつた。それで彼はますますその男の心底を了解しがたく思ひ出したが、結局打電を主張するものが多数を占め、彼も屈服したが、電文の起草者を推薦する段になつて彼は又「推薦なんかする必要があるもんか! 無張した者がやらあね」とほざいた。／後に魯迅にもわかつたが、魯迅は一体に一群の同郷者たち

<p>(24)これは翌年「域外小説集」二巻となつて(第一冊は千部、第二冊は五百部、印刷費は友人蔣鴻林の援助立替に依つた)上梓されたが、</p>	<p>(76)魯迅が周作人と共同で着手した翻訳は翌一九〇九年「域外小説集」二巻となつて上梓された。もちろん古文体によつたもので、第一冊は千部、第二冊は五百部で、印刷費は友人蔣鴻林の援助立替に依つた。作品の</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(50)魯迅が周作人と共同で着手した翻訳は翌一九〇九年「域外小説集」二巻となつて上梓された。もちろん文語体によつたもので、第一冊は千部、第二冊は五百部で、印刷費は友人蔣鴻林の援助立替に依つた。作品の</p>
<p>(24)一篇、都合合計三十七編で、一目してスラヴ系、被圧民族のものが尊重されてゐることが看取される。(実際に魯迅の訳したのは独逸語から重訳のアーンドレーフ二篇、ガルシン一篇の三作であつた)／内訳を一見して</p>	<p>(76)一篇で、合計三十七編であつた。(このうち実際に魯迅の訳したのは独逸語から重訳のアーンドレーフ二篇、ガルシン一篇の三作であつた)／内訳を一見して</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(50)一篇で、合計三十七編であつた。(このうち実際に魯迅の訳したのは独逸語から重訳のアーンドレーフ二篇、ガルシン一篇の三作であつた)／内訳を一見して</p>
<p>ひされてゐ、范愛農がそんな態度に出たのはいはばただ彼等の仲間を代表して魯迅に厭がらせを言つたに過ぎなかつたのだ。先に書いた、魯迅が日本婦人と結婚して子供を連れて神田を散歩してゐたなどといふ流言が飛んだのもじつは彼等が魯迅を嫌つて言ひふらしたものだといふのは主として魯迅が心から厭ふ旧支那形式主義や情弱さを彼等はまだまだ多分に身つけてゐ、しかも、魯迅の直情的な性行はそれらにたいする反感が意識的に表面へ露はれ出るのであるに基因するらしい。</p>	<p>ちから毛嫌ひされてゐ、范愛農がそんな態度に出たのはいはばただ彼等の仲間を代表して魯迅に厭がらせを言つたに過ぎなかつたのだ。先に書いた、魯迅が日本婦人と結婚して子供を連れて神田を散歩してゐたなどといふ流言が飛んだのもじつは彼等が魯迅を嫌つて言ひふらしたものだといふのは主として魯迅が心から厭ふ旧中国形式主義や情弱さを彼等はまだまだ多分に身つけてゐ、しかも、魯迅の直情的な性行はそれらにたいする反感が意識的に表面へ露はれ出るのであるに基因するらしい。</p>	<p>たちから毛嫌ひされてゐ、范愛農がそんな態度に出たのはいはば彼等の仲間を代表して魯迅に厭がらせを言つたに過ぎなかつたのだ。先に書いた、魯迅が日本婦人と結婚して子供を連れて神田を散歩してゐたなどといふ流言が飛んだのも、じつは彼等が魯迅を嫌つて言ひふらしたものだといふのは主として魯迅が心から厭ふ旧中国形式主義や情弱さを彼等はまだまだ多分に身つけてゐ、しかも、魯迅の直情的な性行はそれらにたいする反感が意識的に表面へ露はれ出るのであるに基因するらしい。</p>	<p>から毛嫌ひされてゐ、范愛農がそんな態度に出たのはいわばただ彼等の仲間を代表して魯迅に厭がらせを言つたに過ぎなかつたのだ。先に書いた、魯迅が日本婦人と結婚して子供を連れて神田を散歩してゐたなどといふ流言が飛んだのも、じつは彼等が魯迅を嫌つて言ひふらしたものだといふのは主として魯迅が心から嫌う旧支那形式主義や情弱さを彼等はまだまだ多分に身つけてゐ、しかも、魯迅の直情的な性行はそれらにたいする反感が意識的に表面へ露はれ出るのであるに基因するらしい。</p>	<p>から毛嫌ひされてゐ、范愛農がそんな態度に出たのはいわばただ彼等の仲間を代表して魯迅に厭がらせを言つたに過ぎなかつたのだ。先に書いた、魯迅が日本婦人と結婚して子供を連れて神田を散歩してゐたなどといふ流言が飛んだのも、じつは彼等が魯迅を嫌つて言ひふらしたものだといふのは主として魯迅が心から嫌う旧支那形式主義や情弱さを彼等はまだまだ多分に身つけてゐ、しかも、魯迅の直情的な性行はそれらにたいする反感が意識的に表面へ露はれ出るのであるに基因するらしい。</p>

ンドレーフ二篇、ガルシン一篇の三作であつた)

「該当箇所なし」

わかる通り翻訳作品選択にはスラブ系統、被压迫民族のものが中心となつてゐる。そのことで又容易に想像せられるであらうが、この外国作品紹介の主要眼目はやはり読者に压迫に対する反抗心を助成させ民族的自覚を促させるところにあつた。単にこの仕事の目的がさうであつたばかりでなく、魯迅自身の読書の好みも多分にさういふ傾向のものに偏してゐた。そしてそのことは魯迅の文学を志した動機から見てむしろ当然のことである。

(77) 当時の魯迅、周作人二人の読書傾向を知るに都合いゝ周作人の文章があるので、少し長いがその一節を引用しよう。「豫才はなぜか知らんがアンドレーフが大好きだつた。私がわけて好きだつたのは短篇『歯痛』と『絞殺された七人』及び『大時代の小人物の懺悔』の二冊だけだ。当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ大して盛んでなく、わりに早く且つやや多く紹介されたのはツルゲーネフぐらゐのものだつた。私達も熱心に彼の作品を集めたが、それはただ珍重するだけで、別に翻訳する気はなかつた。毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私達は大急ぎでさがして、一篇でも

に同じ

わかる通り翻訳作品選択にはスラブ系統、被压迫民族のものが中心となつてゐる。そのことで又容易に想像せられるであらうが、この外国作品紹介の主要眼目はやはり読者に压迫に対する反抗心を助成させ民族的自覚を促させるところにあつた。単にこの仕事の目的がさうであつたばかりでなく、魯迅自身の好みも多分にさういふ傾向のものに偏してゐた。そしてそのことは魯迅の文学を志した動機から見てむしろ当然のことである。

(55) 当時の魯迅、周作人二人の読書傾向を知るに都合いゝ周作人の文章があるので、少し長いがその一節を引用しよう。「豫才はなぜか知らんがアンドレーフが大好きだつた。私がわけて好きだつたのは短篇『歯痛』と『絞殺された七人』及び『大時代の小人物の懺悔』の二冊だけだ。当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ大して盛んでなく、わりに早く且つやや多く紹介されたのはツルゲーネフぐらゐのものだつた。私達も熱心に彼の作品を集めたが、それはただ珍重するだけで、別に翻訳する気はなかつた。毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私達は大急ぎで探して、一篇でも

ロシア文学に関する紹介や翻訳があると、必ず買つて来、それだけ切り取つて保存しておいた。波蘭のものならもちろんそれ以上に嬉しかつた。が「クオ・ヴァ・デイス」『火と剣』以外には誰も書く人がなかつたのでまるきり希望がなかつた。この外更に英独の書目をさがし、いろいろ苦心して変つた国の作品を買つた。大抵ロシア、波蘭、チエツコ、セルヴィア、ブルガリヤ、ボスニア、フィンランド、ハンガリー、ルーマニア、新ギリシヤを主とし、その次がデンマーク、ノールウェイ、スウェーデン、和蘭等で、スペイン、イタリーはあまり注意しなかつた。当時日本は自然主義全盛で、それも甚だ意義ある事だとは思つたが買つたフランス文学物はせいぜいフロベール、モーパッサン、ゾラ等諸大家の二三冊と、詩人ボードレル、ヴェルレーヌの一二の小冊ぐらゐのものだつた。先きの英訳はきはめて少く、独の英訳はきはめて少く、独に多くレクラム等の叢書に入つてゐるので廉価で手に入れ易く、いつも書付に書き出しては相模屋書店に託して丸善に注文して貰つたが、大きな一枚の書付が合計していくらの金高に名な

介や翻訳があると、必ず買つて来、それだけ切り取つて保存しておいた。波蘭のものならそれ以上に嬉しかつた。が「クオ・ヴァ・デイス」『火と剣』以外には誰も書く人がなかつた。この外更に英独の書目をさがし、いろいろ苦心して変つた国の作品を買つた。大抵ロシア、波蘭、チエツコ、セルヴィア、ブルガリヤ、ボスニア、フィンランド、ハンガリー、ルーマニア、新ギリシヤを主として、その次がデンマーク、ノールウェイ、スウェーデン、和蘭等で、スペイン、イタリーはあまり注意しなかつた。当時日本は自然主義全盛で、それも意義ある事だとは思つてゐたが買つたフランス文学物はせいぜいフロベール、モーパッサン、ゾラ等の大家の二三冊と、詩人ボードレル、ヴェルレーヌの一二の小冊ぐらゐのものだつた。先きに言つた辺鄙な諸国の作品の英訳はきはめて少く、独に多くレクラム等の叢書に入つてゐるので廉価で手に入れ易く、いつも書付に書き出しては相模屋といふ書店に託して丸善に注文して貰つてゐた。これらの多くの作家中、魯迅がアンドレーフを最も好んだことにつき、周作人はことによる

ア文学に関する紹介や翻訳があると、必ず買つてき、それだけ切り取つて保存しておいた。ポーランドのものならもちろんそれ以上に嬉しかつた。が「クオ・ヴァ・デイス」『火と剣』以外には、誰も書く人がなかつたのでまるきり希望がなかつた。この外更に英独の書目をさがし、いろいろ苦心して変つた国の作品を買つた。大抵ロシア、波蘭、チエツコ、セルビア、ブルガリヤ、ボスニア、フィンランド、ハンガリー、ルーマニア、新ギリシヤを主とし、その次がデンマーク、ノールウェイ、スウェーデン、和蘭等で、スペイン、イタリーはあまり注意しなかつた。当時日本は自然主義全盛で、それも甚だ意義ある事だとは思つたが買つたフランス文学物はせいぜいフロベール、モーパッサン、ゾラ等諸大家の二三冊と、詩人ボードレル、ヴェルレーヌの一二の小冊ぐらゐのものだつた。先に言つた辺鄙な諸国の作品の英訳はきはめて少く、独訳はわりに多かつた。それに多くレクラム等の叢書に入つてゐるので廉価で手に入れ易く、いつも書付に書き出しては相模屋書店に託して丸善に注文して貰つたが、大きな一枚の書付が合計していくらの金高にもならな

らなかつた。書店が面倒を
 いたはずやつてくれたこと
 はまことに有りがたかつ
 た。相模屋の主人小澤君が
 肺病で亡くなつたのは、今
 からもう二十年も昔のこと
 だ。(中略)／これらの多
 くの作家中、豫才が最も好
 んだのはアンドレーフだつ
 た。ことによればこれは李
 長吉を愛することと少し関
 連があつたかも知れない。
 もつとも確かにさうと断定
 できないが、この外にガル
 シンがあり、その『四日』
 の一篇はすでに『域外小説
 集』中に訳載したが、『紅
 い花』はレルモンツフの『現
 代の英雄』チエホフの『決
 闘』と共に好きだつたが
 つひに訳さなかつた。又コロ
 レンコが大好きだつたが、
 その後私がその『マカール
 の夢』一篇を訳したきりだ。
 ゴルキーはすでに有名で
 『母』と各種の訳本が出て
 ゐたが、豫才はあまり注意
 しなかつた。彼が最も影響
 を受けたのは実は『ゴリ
 で』、『死せる魂』はまだ二
 の次で、第一番に重要な
 はやはり短篇小説の『狂人
 日記』、『イワン・イワー
 ン・イワーノヴィツチとイ
 ワン・ニキーフオロヴィツ
 チの喧嘩』、『喜劇』、『検
 察官』等であつた。ポーラ
 ンドの作家で最も重要な
 はシエンキヴィツチで、『楽
 人ヤンコ』等三篇を私は訳
 して、『域外小説集』に載せ

と彼が李長吉を愛したこと
 と関連があるかも知れな
 い、と見てゐる。この外に
 ガルシンがあり、その『四
 日』の一篇は、『域外小説集』
 中に訳載したが、『紅い花』
 はレルモンツフの『現代の
 英雄』チエホフの『決闘』
 と共に好きだつたが、つひ
 に訳さなかつた。又コロレ
 ンコが大好きだつたが、こ
 れは周作人がその『マカール
 の夢』一篇を訳したきりだ。
 ゴルキーはすでに有名で
 『母』と各種の訳本が出て
 ゐたが、魯迅はあまり注意
 しなかつた。彼が最も影響
 を受けたのは実は『ゴリ
 で』、『死せる魂』はまだ二
 の次で、第一番に重要な
 はやはり短篇小説の『狂人
 日記』、『イワン・イワー
 ン・イワーノヴィツチとイ
 ワン・ニキーフオロヴィツ
 チの喧嘩』、『喜劇』、『検
 察官』等であつた。ポーラ
 ンドの作家で最も重要な
 はシエンキヴィツチのもの
 で、『楽人ヤンコ』等三篇
 を周作人が訳して、『域外小
 説集』に載せた。その傑作
 『炭画』も後に訳した。チ
 エツコのネルダとフルクリ
 チキー、フィンランドの乞
 食詩人ベフェリントの作つ
 た小説集も魯迅は大好きだ
 つたが、翻訳はしなかつた。
 ハンガリーには革命の戦に
 死んだ詩人ペトーフイが
 ゐる、魯迅は雑誌『河南』の
 ために『麻羅詩力説』を書

かつた。書店が面倒をい
 わずやつてくれたことは誠
 にありがたかつた。相模屋
 の主人小澤君が肺病で亡く
 なつたのは、今からもう二
 十年も昔のことだ。(中略)
 ／これらの多くの作家中、
 豫才が最も好んだのはアン
 ドレーフだつた。ことによ
 ればこれは李長吉を愛する
 ことと少し関連があつたか
 も知れない。もつとも確か
 にさうと断定できないが、
 この外にガルシンがあり、
 その『四日』の一篇はすで
 に『域外小説集』中に訳載
 したが、『紅い花』はレル
 モントフの『現代の英雄』
 チエホフの『決闘』と共に
 好きだつたが、つひに訳さな
 かつた。又コロレンコが大
 きだつたが、その後私がそ
 の『マカールの夢』一篇を
 訳したきりだ。ゴリキーは
 すでに有名で、『母』と各種
 の訳本が出ていたが、豫才
 はあまり注意しなかつた。
 彼が最も影響を受けたのは
 実は『ゴリで』、『死せる
 魂』はまだ二の次で、第一
 番に重要なのはやはり短篇
 小説の『狂人日記』、『イ
 ワン・イワーノヴィツチとイ
 ワン・ニキーフオロヴィツ
 チの喧嘩』、『喜劇』、『検
 察官』等であつた。波蘭の作家で
 最も重要なのはシエンキ
 ヴイツチで、『楽人ヤンコ』
 等三篇を私は訳して、『域外
 小説集』に載せた。その傑

	<p>た。その傑作『炭画』も後に『勝利者バルテック』をまだ訳さないことは今も尚遺憾事だと思つてゐる。ユモレスクな筆法を用ゐて陰惨なことを描くのが、ゴーゴリとシエンキヴィツチ二人の得意とする所であり、『阿Q正伝』の成功の原因もここに在つた。(中略) チエツコにはネルダとフルクリチキーがあつて、それも豫才の好きなものだつたし、又フィンランドの食詩人ペフェリントの作つた小説集も愛読措かなかつたものだが、共に翻訳はしなかつた。ハンガリーには革命の戦に死んだ詩人ペトローフイが、豫才は雑誌『河南』のために『麻羅詩力説』を書いてバイロン等の『サタン派』を表彰したが、ペトローフイをこれが後継者として甚だ讚美してゐる。(後略)</p>
<p>(244) 日本の文学については魯迅は</p>	<p>(80) 一方魯迅は日本の文学については</p>
<p>いてバイロン等の『サタン派』を表彰したが、ペトローフイをこれが後継者としていたく讚美した。</p>	<p>(58) こんなふうで魯迅は日本の文学については</p>
<p>(58) 殆んど顧るところが無かつた。といふのも新興の、又革新の希望に燃えてゐた彼(彼だけでなく周作人や其の他の人々についても同様であるが)には日本的に変形されたものたるとフランス本来のものたるを問はず概して未来にたいする積極性、能動性を持たない</p>	<p>同じ</p>
<p>作『炭画』も後に訳した。又『勝利者バルテック』をまだ訳さないことは今も尚遺憾事だと思つてゐる。ユモレスクな筆法を用ゐて陰惨なことを描くのが、ゴーゴリとシエンキヴィツチ二人の得意とする所であり、『阿Q正伝』の成功の原因もここに在つた。(中略) チエツコにはネルダとフルクリチキーがあつて、それも豫才の好きなものだつたし、またフィンランドの食詩人ペフェリントの作つた小説集も愛読措かなかつたものだが、共に翻訳はしなかつた。ハンガリーには革命の戦に死んだ詩人ペトローフイが、豫才は雑誌『河南』のために『麻羅詩力説』を書いてバイロン等の『サタン派』を表彰したが、ペトローフイをこれが後継者として甚だ讚美してゐる。(後略)</p>	<p>(58) 殆んど顧みるところが無かつた。といふのも新興の、又革新の希望に燃えてゐた彼(彼だけでなく周作人や其の他の人々についても同様であるが)には日本的に変形されたものたるとフランス本来のものたるを問はず、概して未来にたいする積極性、能動性を持つ</p>
<p>(58) 殆んど顧るところが無かつた。といふのも新興の、又革新の希望に燃えてゐた彼(彼だけでなく周作人や其の他の人々についても同様であるが)には日本的に変形されたものたるとフランス本来のものたるを問はず概して未来にたいする積極性、能動性を持たない</p>	<p>同じ</p>

<p>(24) とところで「域外小説集」の当時の状況のことにつき、十一年後の民国九年に重版の際周作人の名前で魯迅が書いた序文の中の一節がそれに触れてゐる。曰く、かくて準備とのひ、一九〇九年二月、第一冊を出版し、六月になつて又第二冊を出版した。委託販売地は上海と東京だつた。半年過ぎて、先づ最寄りの東京委託販売所の分を決算した。都合第一冊は二十一冊、第二冊は二十冊売れて、その後はもう誰も買ふ人が無かつた。その第一冊はなぜ一冊余計に売れたのだらうか？ それは一人のごく親しい友人が、委託販売店で定価通りに売らずに、定価以上にぼつてやしないかと思つて試めに買つてみると、ちやんと定価通りに売つてゐたので安心し、第二冊目には試験しなかつたからだ。だがこれに由つて見れば、その二十人の読者は、</p>	
<p>(8) とところで「域外小説集」上梓の結果はどうであつたか。第一冊は二月、第二冊は六月に出版され、委託販売地は東京と上海だつたが、東京では第一冊第二冊とも僅かに二十冊売れたに過ぎず、上海でも大凡その程度であつた。そのため魯迅兄弟は後尚続々と出す計画であつたが已むなく二冊限りで中止した。</p>	<p>自然主義文学を顧みてゐる余裕は無かつたのである。鷗外、敏、二葉亭等のものは読んでゐたが、それも批評や翻訳だけを重んじ、ただ漱石の作品だけは愛読してゐたが、これも漱石の精神とか人生観に共鳴してゐたのではなくてその諧謔的輕妙な筆致を愛したのであつた。</p>
<p>(59) とところで「域外小説集」上梓の結果はどうであつたか。第一冊は二月、第二冊は六月に出版され、委託販売地は東京と上海だつたが、東京では第一冊第二冊とも僅かに二十冊売れたに過ぎず、上海でも大凡その程度であつた。そのため魯迅兄弟は後尚続々と出す計画であつたが已むなく二冊限りで中止した。</p>	<p>自然主義文学を顧みてゐる余裕は無かつたのである。鷗外、敏、二葉亭等のものは読んでゐたが、それも批評や翻訳だけを重んじ、ただ漱石の作品だけは愛読してゐたが、これも漱石の精神とか人生観に共鳴してゐたのではなくてその諧謔的輕妙な筆致を愛したのであつた。</p>
<p>に同じ</p>	<p>たない自然主義文学を顧みてゐる余裕は無かつたのである。鷗外、敏、二葉亭等のものは読んでゐたが、それも批評や翻訳だけを重んじ、ただ漱石の作品だけは愛読してゐたが、これも漱石の精神とか人生観に共鳴してゐたのではなく、その諧謔的輕妙な筆致を愛したのであつた。</p>
<p>(53) とところで「域外小説集」上梓の結果はどうであつたか。第一冊は三月、第二冊は六月に出版され、委託販売地は東京と上海だつたが、東京では第一冊第二冊とも僅かに二十冊売れたに過ぎず、上海でも大凡その程度であつた。そのため魯迅兄弟は後尚続々と出す計画であつたが已むなく二冊限りで中止した。</p>	<p>い自然主義文学を顧みてゐる余裕はなかつたのである。鷗外、敏、二葉亭等のものは読んでゐたが、それも批評や翻訳だけを重んじ、ただ漱石の作品だけは愛読してゐたが、これも漱石の精神とか人生観に共鳴してゐたのではなくてその諧謔的輕妙な筆致を愛したのであつた。</p>

第二章 郷里生活「〜」

	<p>(245) 彼は「域外小説集」の二冊目を出すとそのまま帰国し、</p>	<p>(85) 魯迅は帰国するとす</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
	<p>出れば必ず購読し、一人も中止することのない人々で、私達は今に至つて非常に感謝してゐる。上海に至つては、今になほ詳細なことはわからない。何でもやはり二十冊ほど売れたきりであつても誰も買ふ人はないとのことであつた。かくて第三冊の出版は中止するより外なかつた。すでに出来た本は全部上海の委託所の納屋に積み上げておいた。四年たつて、この委託所が不幸にも火事を起し、私達の本と紙型を全部灰燼に化してしまつた。私達のこの過去の夢幻のやうな無用の努力も、かうして中国では完全に消滅したわけだ(松枝茂夫訳)</p>	<p>(82) 一方魯迅は故郷の家計を見る責任ありいつまでも東京にゐられない身なので、「域外小説集」の二冊目を出すと多分の未練を残し乍ら故国へ歸つた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(53) 一方魯迅は故郷の家計を見る責任があり、いつまでも東京にゐられない身分なので、「域外小説集」の二冊目を出すと多分の未練を残しながら故国へ歸つた。</p>

<p>〔該当箇所なし〕</p>	<p>(54)道を通ると人々は彼の頭を見、しばしば冷笑し悪罵し、甚だしいのは漢奸扱ひした。</p>	<p>(54)彼は日本に何年もゐたのでもう弁髪をつけてゐなかつた。弁髪の半分は下宿屋の女中に飯髪にやり、半分は床屋へやつた。そこで彼はすべての外国留学生がするやうに上海のつけ弁髪専門の店で大洋四元を出してつけ弁髪を買つて人目をごまかしてゐたが、何しろ帽子をかぶることも出来ず、又人混みの中では揉み落されたり押し歪められる心配があり、いつそ無い方がいいと決心して一月後には彼はさつぱりと又生地<small>（55）</small>の短髪に還つた。</p>
<p>〔該当箇所なし〕</p>	<p>(55)が、この無弁髪の報償は大きかつた。／＼街を通るといつも彼の後ろに笑声が沸き起つた。中には後へ跟いて来て罵るものもある。／＼「無法者めが！」「偽毛唐！」「彼が洋服を止めて支那服に改めると彼等の悪罵は一層激しくなつた。で、しまひには彼は仕方なく一本のステツキを持つて出、悪口を浴せかけるものを片端から叩きのめした。それでやうやく悪罵は鎮まつたが、それもステツキをふるつたことのある場所に限られてゐた。</p>	<p>(55)彼の頭の弁髪は日本にゐた当時半分は下宿屋の女中に飯髪にやり半分は床屋へやつて失くなつてゐたので、すべての外国留学生がするやうに、彼も帰国の途次上海のつけ弁髪専門店で大洋四弗を出して買ひそれをつけて人目をごまかしてゐた。が、何しろあぶなくて帽子をかぶることも出来ず、又人混みの中では揉み落されたり、押し歪められる心配があるばかりでなく、人々はよく彼の弁髪を怪訝さうな眼で見た。で、彼は一月後には意を決してさつぱりともの生地<small>（56）</small>の無弁髪に還り、洋服を着て歩いた。</p>
<p>(64) この弁髪のかつらを</p>	<p>(56)が、この無弁髪の報償は大きかつた。／＼街を通るといつも彼の後ろに笑声が沸き起つた。中には後へ跟いて来て罵るものもある。／＼「無法者めが！」「偽毛唐！」「彼が洋服を止めて中国服に改めると彼等の悪罵は一層激しくなつた。で、しまひには彼は仕方なく一本のステツキを持つて出、悪口を浴せかけるものを片端から叩きのめした。それでやうやく悪罵は鎮まつたが、それもステツキをふるつたことのある場所に限られてゐた。</p>	<p>同じ</p>
<p>(66) この弁髪のかつらを</p>	<p>(56)が、この無弁髪の報償は大きかつた。／＼街を通るといつも彼の後ろに笑声が沸き起つた。中には後へ跟いて来て罵るものもある。／＼「無法者めが！」「偽毛唐！」「彼が洋服を止めて中国服に改めると彼等の悪罵は一層激しくなつた。で、しまひには彼は仕方なく一本のステツキを持つて出、悪口を浴せかけるものを片端から叩きのめした。それでやうやく悪罵は鎮まつたが、それもステツキをふるつたことのある場所に限られてゐた。</p>	<p>同じ</p>
<p>〔該当箇所なし〕</p>	<p>(56)が、この無弁髪の報償は大きかつた。／＼街を通るといつも彼の後ろに笑声が沸き起つた。中には後へ跟いて来て罵るものもある。／＼「無法者めが！」「偽毛唐！」「彼が洋服を止めて支那服に改めると彼等の悪罵は一層激しくなつた。で、しまひには彼は仕方なく一本のステツキを持つて出、悪口を浴せかける者を片端から叩きのめした。それでやうやく悪罵は鎮まつたが、それもステツキをふるつたことのある場所に限られてゐた。</p>	<p>(56)彼の頭の弁髪は日本にゐた当時半分は下宿屋の女中に飯髪にやり半分は床屋へやつてなくなつていたので、すべての外国留学生がするやうに、彼も帰国の途次上海のつけ弁髪専門店で大洋四弗出して買ひそれをつけて人目をごまかしてゐた。が、何しろあぶなくて帽子をかぶることも出来ず、又人混みの中では揉み落とされたり、押し歪められたりする心配があるばかりでなく、人々はよく彼の弁髪を怪訝さうな目で見た。で、彼は一月後には意を決してさつぱりともの生地<small>（57）</small>の無弁髪に還り、洋服を着て歩いた。</p>

つけないことにした事実などは魯迅の潔癖性を示す一つの例と言へ、魯迅の潔癖性は今後も至るところで顔を出すのであるが、彼はこの潔癖性と共にもう一つ執念性とも言ひたいほどの執拗性をその性質に持つてゐた。魯迅は復讐観念が強く、日本に留学当時ひまひまに武芸を修めたりなどもしてゐ、といふのも目的は復讐にあり、幼少年時代彼をさげすみ、だましたものへの怨みは永く忘れられなかつたのである。その仇は魯迅が日本から故郷へ歸つて見たら、ちやうど人聞きのよくない重病にかかり、しかも重態に陥つてゐ、世間の噂ではその患部が脱落してしまつてゐるとかで、これには魯迅も苦笑するよりほかに、それ以来彼は絶えず身につけてゐた匕首を片附けたとのである。(後年魯迅はこの匕首を紙切りナイフに使つてゐたが、その匕首の鞘は、二ヶ所に白い皮紙を巻いて二片の木片をくつつき合はせただけのものであり、それについて魯迅自身次のやうに言つてゐたさうである。そんなふうにしてゐたのは、鞘がしつかりしないでゐたからであり、といふのも、さうしておけば、さぶつかつた場合、特に中味を抜く必要はなく、匕首を

つけないことにした事実などは魯迅の潔癖性を示す一つの例と言へ、魯迅の潔癖性は今後も至るところで顔を出すのであるが、彼はこの潔癖性と共にもう一つ執念性とも言ひたいほどの執拗性をその性質に持つてゐた。魯迅は復讐観念が強く、日本に留学当時ひまひまに武芸を修めたりなどもしてゐ、といふのも目的は復讐にあり、幼少年時代彼をさげすみ、だましたものへの怨みは永く忘れられなかつたのである。その仇は魯迅が日本から故郷へ歸つて見たら、ちやうど人聞きのよくない重病にかかり、しかも重態に陥つてゐ、世間の噂ではその患部が脱落してしまつてゐるとかで、これには魯迅も苦笑するよりほかに、それ以来彼は絶えず身につけてゐた匕首を片附けたとのである。(後年魯迅はこの匕首を紙切りナイフに使つてゐたが、その匕首の鞘は、二ヶ所に白い皮紙を巻いて二片の木片をくつつき合はせただけのものであり、それについて魯迅自身次のやうに言つてゐたさうである。そんなふうにしてゐたのは、鞘がしつかりしないでゐたからであり、といふのも、さうしておけば、さぶつかつた場合、特に中味を抜く必要はなく、匕首を

	(245) 翌年の八月には	同じ	同じ	(245) 翌年の八月彼は杭州から移つて
(245) その時齡はちやうど三十。	(86) 当時齡はまさに三十。	同じ	(67) 当時彼は二十九才。	(56) 当年はまさに三十。
(245) ためには彼は随分長く	(86) ためには彼は甚だしく	同じ	同じ	(57) 為には彼は甚だしく
(245) 併し彼はもちろん	(86) ももちろん彼は	同じ	同じ	同じ
(245) 無い	(86) ない	同じ	同じ	同じ
(245) と言つてこの田舎では文学運動も出来ず、	(86) が他にどうと言つてやるべきことも無かつた。こんな片田舎では文学運動どころではなし、	同じ	同じ	(57) が他にどうと言つてやるべきことも無かつた。こんな片田舎では文学運動どころではなし、
(245) つまりその時の彼はいはば失意落胆、敗北の人であつたのだ。	(86) さういふ意味では彼は一種失意の人であり、寂寞そのものやうな心境にゐた。	同じ	同じ	(57) そついう意味では彼は一種失意の人であり、寂寞そのものやうな心境にいた。
(245) 無弁髪は尚さまだまに彼に崇つた。満洲人の紹興府長官は学校に来る度に彼の頭に迂散臭く瞳をぎよつつかせた。しかも生徒たちの間には弁髪を剪る風潮が起り、多くの生徒が斬髪落さうとしたので彼は狼狽して止めた。すると生徒等は代表を挙げて彼を詰問に来た。弁髪はあるのがよいか無いのがいいか？	(87) しかも無弁髪は尚さまだまな形で彼に崇つた。満洲人の紹興府長官は学校へ来る度に彼の頭に胡散臭さうに瞳をぎよつつかせたし、一方生徒たちの間には弁髪を剪る風潮が起りはじめた。たうたう多数の生徒がそれを剪り落さうとしたので彼は狼狽して止めた。すると生徒たちは代表を挙げて彼を詰問に来た。弁髪	同じ	(67) しかも無弁髪は尚さまだまな形で彼に崇つた。満洲人の紹興府長官は学校へ来る度に彼の頭に胡散臭さうに瞳をぎよつつかせたし、一方生徒たちの間には弁髪を剪る風潮が起りはじめた。たうたう多数の生徒がそれを剪り落さうとしたので彼は狼狽して止めた。すると生徒たちは代表を挙げて彼を詰問に来た。弁髪	(57) しかも無弁髪は尚さまだまな形で彼に崇つた。満洲人の紹興府長官は学校へ来るたびに彼の頭に胡散臭さうに瞳をぎよつつかせたし、一方生徒たちの間には弁髪を剪る風潮が起りはじめた。とつとう多数の生徒がそれを剪り落さうとしたので彼はあわてて止めた。すると生徒たちは代表を挙げて彼を詰問に来た。弁髪

突き刺しさへすれば、鞘は自然に二つに割れてうまく目的が達せられるからだ、と)

要はなく、匕首を突き刺さへすれば、鞘は自然に二つに割れてうまく目的が達せられるからだ、と)

と。彼は無いのがいいが剪らないやうに勧める、と答へた。そしてそれまでは生徒たちに信用のあつた彼は爾来「言行不一致」と言はれて軽蔑され出した。

「該当箇所なし」

はある方がいいか無い方がいいか？と。彼は無い方がいいが剪ることに反対だと答へた。そしてそれ以來彼はそれまで生徒たちに持たれてゐた信用を一度に失し、「言行不一致」と言はれて軽蔑されはじめた。しかも彼等の数人は彼の反対にも拘らず敢然剪りつてしまつたのであつた。彼は毎日氷倉の中に坐つてゐるやうな、刑場の側に立つてゐるやうな憂鬱を覺えた。

(88) そんな頃彼は知人の客間で思ひもかけなく范愛農に出会つた。二人は少時互にじつと顔を見合つた。そして同時に口を開いた。／＼「おお、君は范愛農！」／＼「おお、君は魯迅！」／＼二人は一緒に声を立てて笑ひ合つた。互に自らを嘲り相手を悲しむ笑ひであつた。彼は相変わらず白眼勝ちの瞳をしてゐ、身体は長大であつたが、僅かの間に頭に可なり白髪が交つてゐた。そして古びた木綿の馬褂を着、破れた木綿靴を穿き、見るからに尾羽打枯した風態であつた。彼自身が魯迅に語つたところに依ると、彼はその後学費がなくなつたので已むなく帰郷したが、故郷からは軽蔑、排斥、迫害を受け、ほとんど身を容るるに所無い有様

はある方がいいか無い方がいいか？と。彼は無い方がいいが剪ることに反対だと答へた。そしてそれ以來彼はそれまで生徒たちに持たれてゐた信用を一度に失し、「言行不一致」と言はれて軽蔑されはじめた。しかも彼等の数人は彼の反対にも拘らず敢然剪りつてしまつたのであつた。彼は毎日氷倉の中に坐つてゐるやうな、刑場の側に立つてゐるやうな憂鬱を覺えた。

(89) そんな頃彼は知人の客間で思ひもかけなく范愛農に出逢つた。二人は少時互にじつと顔を見合つた。そして同時に口を開いた。／＼「おお、君は范愛農！」／＼「おお、君は魯迅！」／＼二人は一緒に声を立てて笑ひ合つた。互に自らを嘲り相手を悲しむ笑ひであつた。彼は相変わらず白眼勝ちの瞳をしてゐ、身体は長大であつたが、僅かの間に頭に可なり白髪が交つてゐた。そして古びた木綿の馬褂を着、破れた木綿靴を穿き、見るからに尾羽打枯した風態であつた。彼自身が魯迅に語つたところに依ると、彼はその後学費がなくなつたので已むなく帰郷したが、故郷からは軽蔑、排斥、迫害を受け、ほとんど身を容るるに所無い有様

た。弁髪はある方がいいか無い方がいいか？と。彼は無の方がいいが剪ることに反対だと答へた。そしてそれ以來彼はそれまで生徒たちに持たれてゐた信用を一度に失し、「言行不一致」と言はれて軽蔑されはじめた。しかも彼等の数人は彼の反対にも拘らず敢然剪りつてしまつたのであつた。彼は毎日氷倉の中に坐つてゐるやうな、刑場の側に立つてゐるやうな憂鬱を覺えた。

(90) そんな頃彼は知人の客間で思ひもかけなく范愛農に出会つた。二人は少時互にじつと顔を見合つた。そして同時に口を開いた。／＼「おお、君は范愛農！」／＼「おお、君は魯迅！」／＼二人は一緒に声を立てて笑ひ合つた。互に自らを嘲り相手を悲しむ笑ひであつた。彼は相変わらず白眼勝ちの瞳をしてゐ、身体は長大であつたが、僅かの間に頭に可なり白髪が交つてゐた。そして古びた木綿の馬褂を着、破れた木綿靴を穿き、見るからに尾羽打枯した風態であつた。彼自身が魯迅に語つたところに依ると、彼はその後学費がなくなつたので已むなく帰郷したが、故郷からは軽蔑、排斥、迫害を受け、ほとんど身を容るるに所無い有様

はある方がいいか無い方がいいか？と。彼は無い方がいいが剪ることに反対だと答へた。そしてそれ以來彼はそれまで生徒たちに持たれてゐた信用を一度に失し、「言行不一致」と言はれて軽蔑されはじめた。しかも彼等の数人は彼の反対にも拘らず敢然剪りつてしまつたのであつた。彼は毎日氷倉の中に座つてゐるやうな、刑場の側に立つてゐるやうな憂鬱を覺えた。

(91) そんな頃彼は知人の客間で思ひもかけなく范愛農に出会つた。二人は少時互にじつと顔を見合つた。そして同時に口を開いた。／＼「おお、君は范愛農！」／＼「おお、君は魯迅！」／＼二人は一緒に声を立てて笑ひ合つた。互に自らを嘲り相手を悲しむ笑ひであつた。彼は相変わらず白眼勝ちの瞳をしてゐ、身体は長大であつたが、僅かの間に頭に可なり白髪が混じつてゐた。そして古びた木綿の馬褂を着、破れた木綿靴を穿き、見るからに尾羽打枯した風態であつた。彼自身が魯迅に語つた所に依ると、彼はその後学費がなくなつたので已むなく帰郷したが、故郷からは軽蔑、排斥、迫害を受け、ほとんど身を容るるに所無い有様

で、今は田舎にかくれて数人の子供に書を教へて口を糊してゐるとのことであつた。又、ただ時々くさくさするので城内へ遊びにやつて来るのだと言ひ、今では酒が第一の好物だとも言つた。／＼そこで彼等は一緒に酒を飲んだ。二人は急に親しくなり、それから彼は彼が城内へやつてくる度に魯迅を訪れた。二人は会ふ度に酒を飲み、酔つてたわいも無い無駄話をしたり、出鱈目を言ひ合つて、僅かに心の鬱を晴らした。／＼魯迅はある時彼についてもう忘れてたつねた。／＼君はいつかの同郷会の時わざと僕に反対ばかりしてゐたやうだつたが、ありやどういふ訳だつたのかね?／＼ああ、あれが、君は知らなかつたのかね? 僕はずつと君が嫌ひだつたんだよ、いや僕だけぢやない、僕等がだ。／＼ほう、だが君はあの以前に僕を知つてたのかね?／＼知らなくつてさ! 僕等が横浜へ着いた時君が迎へに来たぢやないか。君は僕等をさげすんで頭を振つたぜ。それが僕等には癪にさはつてゐたのさ。／＼そこで魯迅は、幾年前友人に誘はれて新たに留学して来る同郷人を横浜へ迎へに行つた時のことを思ひ出した。新留学生は十人余

で、今は田舎にかくれて数人の子供に書を教へて口を糊してゐるとのことであつた。又、ただ時々くさくさするので城内へ遊びにやつて来るのだと言ひ、今では酒が第一の好物だとも言つた。／＼そこで彼等は一緒に酒を飲んだ。二人は急に親しくなり、それから彼は彼が城内へやつてくる度に魯迅を訪れた。二人は会ふ度に酒を飲み、酔つてたわいも無い無駄話をしたり、出鱈目を言ひ合つて、僅かに心の鬱を晴らした。／＼魯迅はある時彼についてもう忘れてたつねた。／＼君はいつかの同郷会の時わざと僕に反対ばかりしてゐたやうだつたが、ありやどういふ訳だつたのかね?／＼ああ、あれが、君は知らなかつたのかね? 僕はずつと君が嫌ひだつたんだよ、いや僕だけぢやない、僕等がだ。／＼ほう、だが君はあの以前に僕を知つてたのかね?／＼知らなくつてさ! 僕等が横浜へ着いた時君が迎へに来たぢやないか。君は僕等をさげすんで頭を振つたぜ。それが僕等には癪にさはつてゐたのさ。／＼そこで魯迅は、幾年前友人に誘はれて新たに留学して来る同郷人を横浜へ迎へに行つた時のことを思ひ出した。新留学生は十人余

で、今は田舎にかくれて数人の子供に書を教へて口を糊してゐるとのことであつた。又、ただ時々くさくさするので城内へ遊びにやつて来るのだと言ひ、今では酒が第一の好物だとも言つた。／＼そこで彼等は一緒に酒を飲んだ。二人は急に親しくなり、それから彼は彼が城内へやつてくる度に魯迅を訪れた。二人は会ふ度に酒を飲み、酔つてたわいも無い無駄話をしたり、出鱈目を言ひ合つて、僅かに心の鬱を晴らした。／＼魯迅はある時彼についてもう忘れてたつねた。／＼君はいつかの同郷会の時わざと僕に反対ばかりしてゐたやうだつたが、ありやどういふ訳だつたのかね?／＼ああ、あれが、君は知らなかつたのかね? 僕はずつと君が嫌ひだつたんだよ、いや僕だけぢやない、僕等がだ。／＼ほう、だが君はあの以前に僕を知つてたのかね?／＼知らなくつてさ! 僕等が横浜へ着いた時君が迎へに来たぢやないか。君は僕等をさげすんで頭を振つたぜ。それが僕等には癪にさはつてゐたのさ。／＼そこで魯迅は、幾年前友人に誘はれて新たに留学して来る同郷人を横浜へ迎へに行つた時のことを思ひ出した。新留学生は十人余りあ

で、今は田舎にかくれて数人の子供に書を教へて口を糊してゐるとのことであつた。又、ただ時々くさくさするので城内へ遊びにやつて来るのだと言ひ、今では酒が第一の好物だとも言つた。／＼そこで彼等は一緒に酒を飲んだ。二人は急に親しくなり、それから彼は彼が城内へやつてくる度に魯迅を訪れた。二人は会ふ度に酒を飲み、酔つてたわいも無い無駄話をしたり、出鱈目を言ひ合つて、僅かに心の鬱を晴らした。／＼魯迅はある時彼についてもう忘れてたつねた。／＼君はいつかの同郷会の時わざと僕に反対ばかりしてゐたやうだつたが、ありやどういふ訳だつたのかね?／＼ああ、あれが、君は知らなかつたのかね? 僕はずつと君が嫌ひだつたんだよ、いや僕だけぢやない、僕等がだ。／＼ほう、だが君はあの以前に僕を知つてたのかね?／＼知らなくつてさ! 僕等が横浜へ着いた時君が迎へに来たぢやないか。君は僕等をさげすんで頭を振つたぜ。それが僕等には癪にさはつてゐたのさ。／＼そこで魯迅は、幾年前友人に誘はれて新たに留学して来る同郷人を横浜へ迎へに行つた時のことを思ひ出した。新留学生は十

りみ、彼等が税関で荷物の検査を受ける時傍らで見てゐたら突然模様を刺繍した女沓が一足現はれ、税関吏が珍らしさうに手に取つてと見かう見しはじめ、その時彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。それからみんなで汽車に乗ると、彼等はさつそく座席の譲り合ひを始め、甲が乙に掛けると言へば乙は丙に掛けると言ひ、いつかな埒が明かないでゐるところへ突然ガタンと車体が動き、同時に三四人将棋倒しに折り重なつて倒れ、その時も彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。で、魯迅は訊いて見た。／＼「僕が頭を振つたつてふのはどんな時だつたの？」／＼「税関の検査の時だよ。／＼あ、あさうか、僕はあんな女沓を君等が持つて来てゐたのがわからなかつたのさ、あれは誰のだつたの？」／＼徐錫麟先生の奥さんのぢやなかつたかね？」／＼「東京へ来れば大脚のふりを装はななくちやなんのに、どうして又そんなものを持つて来る必要があつたんだらう？」／＼「誰が知るもんか、奥さんところへ行つて聞いてくれよ。」／＼そこで二人は又カラカラと声を立てて無邪気に笑ひ合つた。／＼この頃魯迅は徒然のままに初めて小説を一篇書いた。東隣

りみ、彼等が税関で荷物の検査を受ける時傍らで見てゐたら突然模様を刺繍した女沓が一足現はれ、税関吏が珍らしさうに手に取つてと見かう見しはじめ、その時彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。それからみんなで汽車に乗ると、彼等はさつそく座席の譲り合ひを始め、甲が乙に掛けると言へば乙は丙に掛けると言ひ、いつかな埒が明かないでゐるところへ突然ガタンと車体が動き、同時に三四人将棋倒しに折り重なつて倒れ、その時も彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。で、魯迅は訊いて見た。／＼「僕が頭を振つたつてふのはどんな時だつたの？」／＼「税関の検査の時だよ。／＼あ、あさうか、僕はあんな女沓を君等が持つて来てゐたのがわからなかつたのさ、あれは誰のだつたの？」／＼徐錫麟先生の奥さんのぢやなかつたかね？」／＼「東京へ来れば大脚のふりを装はななくちやなんのに、どうして又そんなものを持つて来る必要があつたんだらう？」／＼「誰が知るもんか、奥さんところへ行つて聞いてくれよ。」／＼そこで二人は又カラカラと声を立てて無邪気に笑ひ合つた。／＼この頃魯迅は徒然のままに初めて小説を一篇書いた。東隣

彼等が税関で荷物の検査を受ける時傍らで見てゐたら、突然模様を刺繍した女沓が一足現はれ、税関吏が珍らしさうに手に取つてと見かう見しはじめ、その時彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。それからみんなで汽車に乗ると、彼等はさつそく座席の譲り合ひを始め、甲が乙に掛けると言へば乙は丙に掛けると言ひ、いつかな埒が明かないでゐるところへ突然ガタンと車体が動き、同時に三四人将棋倒しに折り重なつて倒れ、その時も彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。で、魯迅は訊いて見た。／＼「僕が頭を振つたつてふのはどんな時だつたの？」／＼「税関の検査の時だよ。／＼あ、あさうか、僕はあんな女沓を君等が持つて来てゐたのがわからなかつたのさ、あれは誰のだつたの？」／＼徐錫麟先生の奥さんのぢやなかつたかね？」／＼「東京へ来れば大脚のふりを装はななくちやなんのに、どうして又そんなものを持つて来る必要があつたんだらう？」／＼「誰が知るもんか、奥さんところへ行つて聞いてくれよ。」／＼そこで二人は又カラカラと声を立てて無邪気に笑ひ合つた。／＼この頃魯迅は徒然のままに初めて小説を一篇書いた。東隣

人余りい、彼等が税関で荷物の検査を受ける時傍らで見ていたら突然模様を刺繍した女沓が一足現われ、税関吏が珍らしさうに手に取つてと見かう見しはじめ、その時彼はぶんとして頭を振つたかも知れないと思つた。それからみんなで汽車に乗ると、彼等はさつそく座席の譲り合ひを始め、甲が乙に掛けると言へば乙は丙に掛けると言ひ、いつかな埒があかないでゐる所へ突然ガタンと車体が動き、同時に三四人将棋倒しに折り重なつて倒れ、その時も彼はブンとして頭を振つたかも知れないと思つた。で、魯迅は訊いて見た。／＼「僕が頭を振つたつていふのはどんな時だつたの？」／＼「税関の検査の時だよ。／＼あ、あさうか、僕はあんな女沓を君等が持つて来てゐたのがわからなかつたのさ、あれは誰のだつたの？」／＼徐錫麟先生の奥さんのぢやなかつたかね？」／＼「東京へ来れば大脚のふりを装はななくちやなんのに、どうして又そんなものを持つて来る必要があつたんだらう？」／＼「誰が知るもんか、奥さんところへ行つて聞いてくれよ。」／＼そこで二人は又カラカラと声を立てて無邪気に笑ひ合つた。／＼この頃魯迅は徒然のままに初めて小説を一篇書いた。東隣

(245) 翌年の十月武昌に革命の烽火が挙り、忽ち全国に波及し、紹興も一応は革命圏下に這入り白旗に埋められた。彼の無弁髪の悩みは一掃された。そして彼は校長にせり上った。ただ新時代の基礎工事が出来てゐなかつたのでここでは革命が起つても内容は旧態依然とした陳腐蒙昧な軍閥政治であつた。それにさまざまの紛糾が起つた。彼はもろろ革命派に味方してゐたが、革命派の若手も大方は一種の無頼漢であつた。彼は間にゐて非常にやり難かつた。

(96)そこへ突然武昌に義軍が起つた。これより先き内閣が外債による鉄道国有策を発表したのにたいし、それを再び利権を外国に与へるものとして武昌に猛烈な反対が起り、殊に四川省では總督と人民の間に大衝突が起り官兵が暴徒に荷担するにさへ至り、武昌に在つた湖廣總督端方が急拠武漢の兵を率ゐて四川へ鎮圧に向つた、実にこの際に革命党は起ち上つたのであつた。そして武昌に留守してゐた官軍の協領黎元洪が推されて革命軍の都統となつた。時に宣統三年八月十九

(70)そこへ突然武昌に義軍が起つた。これより先き内閣が外債による鉄道国有策を発表したのにたいし、それを再び利権を外国に与へるものとして武昌に猛烈な反対が起り、殊に四川省では總督と人民の間に大衝突が起り官兵が暴徒に荷担するにさへ至り、武昌に在つた湖廣總督端方が急拠武漢の兵を率ゐて四川へ鎮圧に向つた、実にこの際に革命党は起ち上つたのであつた。そして武昌に留守してゐた官軍の協領黎元洪が推されて革命軍の都統となつた。時に宣統三年八月十九

(70)そこへ突然武昌に義軍が起つた。これより先き内閣が外債による鉄道国有策を発表したのにたいし、それを再び利権を外国に与へるものとして武昌に猛烈な反対が起り、殊に四川省では總督と人民の間に大衝突が起り官兵が暴徒に荷担するにさへ至り、武昌に在つた湖廣總督端方が急拠武漢の兵を率ゐて四川へ鎮圧に向つた、実にこの際に革命党は起ち上つたのであつた。そして武昌に留守してゐた官軍の協領黎元洪が推されて革命軍の都統となつた。時に宣統三年八月十九

(96)そこへ突然武昌に義軍が起つた。これより先、内閣が外債による鉄道国有策を発表したのに対し、それを再び利権を外国に与へるものとして武昌に猛烈な反対が起り、殊に四川省では總督と人民の間に大衝突が起り官兵が暴徒に荷担するにさへ至り、武昌に在つた湖廣總督端方が急拠武漢の兵を率ゐて四川へ鎮圧に向つた、実にこの際に革命党は起ち上つたのであつた。そして武昌に留守してゐた官軍の協領黎元洪が推されて革命軍の都統となつた。時に宣統三年八月十九日、

の金持をモデルにして革命の前夜のことを書いたもので、得態の知れない革命軍が入城しようとする、その金持が取巻きや遊び人等と相談して迎降するといふ筋の諷刺的色彩に富んだものとのことだが、これは魯迅のどの著書にも入れられてゐない。書きつ放しにして題もつけられてゐなかつたのを二三年後に周作人が題を付けて「小説月報」に寄せたところ編集者から激賞して来、巻頭に載つたことである。／さて、茫愛農は相変らず時々やつて来、会ふ度毎に苦しい生活の中からきまつて酒を飲み「冗談を言ひ合つてゐた。

の金持をモデルにして革命の前夜のことを書いたもので、得態の知れない革命軍が入城しようとする、その金持が取巻きや遊び人等と相談して迎降するといふ筋の諷刺的色彩に富んだものとのことだが、これは魯迅のどの著書にも入れられてゐない。書きつ放しにして題もつけられてゐなかつたのを二三年後に周作人が題を付けて「小説月報」に寄せたところ編集者から激賞して来、巻頭に載つたことである。／さて、茫愛農は相変らず時々やつて来、会ふ度毎に苦しい生活の中からきまつて酒を飲み「冗談を言ひ合つてゐた。

の金持をモデルにして革命の前夜のことを書いたもので、得態の知れない革命軍が入城しようとする、その金持が取巻きや遊び人等と相談して迎降するといふ筋の諷刺的色彩に富んだものとのことだが、これは魯迅のどの著書にも入れられてゐない。書きつ放しにして題もつけられてゐなかつたのを二三年後に周作人が題を付けて「小説月報」に寄せたところ編集者から激賞して来、巻頭に載つたことである。／さて、茫愛農は相変らず時々やつて来、会ふ度毎に苦しい生活の中からきまつて酒を飲み「冗談を言ひ合つてゐた。

篇書いた。東隣の金持をモデルにして革命の前夜のことを書いたもので、得態の知れない革命軍が入城しようとする、その金持が取巻きや遊び人たちと相談して迎降するという筋の諷刺的色彩に富んだものとのことだが、これは魯迅のどの著書にも入れられてゐない。書きつ放しにして題もつけられてゐなかつたのを二三年後に周作人が題を付けて「小説月報」に寄せたところ編集者から激賞して来、巻頭に載つたことである。／さて、茫愛農は相変らず時々やつて来、会ふ度毎に苦しい生活の中からきまつて酒を飲み、冗談を言ひ合つてゐた。

日、一九一一年十月十日であつた。これと同時に各省の革命黨員も約せずして相応じて起ち、またたく間に十一省に及び、紹興もその範囲内にあつた。／茫愛農がいち早く魯迅のところへやつて来て、かつて無い明るいにこに顔で魯迅に言つた。／「迅君、今日は酒はやるまい、光復の紹興を見に行かうぢやないか」／魯迅もいつにない上機嫌で勃つた。二人は意気揚々と城へ出た。城は眼に見る限り白旗で埋められてゐた。今はもう二人は大きな顔で無弁髪を公衆にさらすことが出来た。／が、表面だけは革命でも紹興の實質は依然として変りが無かつた。といふのもこの革命軍政府は幾人かの旧田舎紳士によつて組織されたもので、何とか鉄道の株主が行政司長、両替屋の親爺が軍器司長といふやうな状態だつたからである。しかもこの軍政府も長続きせず、やがて匪賊上りの湯壽潜が杭州から兵隊を率ゐて侵入して来た。が、彼も直きに遊び人や新進の革命党に取り巻かれて湯都督とたてまつられた。そして役所にある人物は、それまで木綿の着物を着てゐたものが十日も少ないうちに立派な毛皮の袍子を着込んで来るやうになつた。／魯迅は師範学校の校長になつた。一九一一年十月十日であつた。これと同時に各省の革命黨員も約せずして相応じて起ち、またたく間に十一省に及び、紹興もその範囲内にあつた。／茫愛農がいち早く魯迅のところへやつて来て、かつて無い明るいにこに顔で魯迅に言つた。／「迅君、今日は酒はやるまい、光復の紹興を見に行かうぢやないか」／魯迅もいつにない上機嫌で勃つた。二人は意気揚々と城へ出た。城は眼に見る限り白旗で埋められてゐた。今はもう二人は大きな顔で無弁髪を公衆にさらすことが出来た。／が、表面だけは革命でも紹興の實質は依然として変りが無かつた。といふのもこの革命軍政府は幾人かの旧田舎紳士によつて組織されたもので、何とか鉄道の株主が行政司長、両替屋の親爺が軍器司長といふやうな状態だつたからである。しかもこの軍政府も長続きせず、やがて匪賊上りの湯壽潜が杭州から兵隊を率ゐて侵入して来た。が、彼も直きに遊び人や新進の革命党に取り巻かれて湯都督とたてまつられた。そして役所にある人物は、それまで木綿の着物を着てゐたものが十日も少ないうちに立派な毛皮の袍子を着込んで来るやうになつた。／魯迅は師範学校の校長になつた。一九一一年十月十日であつた。これと同時に各省の革命黨員も約せずして相応じて起ち、またたく間に十一省に及び、紹興もその範囲内にあつた。／茫愛農がいち早く魯迅の所へやつて来て、かつて無い明るいにこに顔で魯迅に言つた。／「迅君、今日は酒はやるまい、光復の紹興を見に行かうぢやないか」／魯迅もいつにない上機嫌であつた。二人は意気揚々と城へ出た。城は眼に見る限り白旗で埋められていた。今はもう二人は大きな顔で無弁髪を公衆にさらすことができた。／が、表面だけは革命でも紹興の實質は依然として変りが無かつた。といふのもこの革命軍政府は幾人かの旧田舎紳士によつて組織されたもので、何とか鉄道の株主が行政司長、両替屋の親爺が軍器司長といふやうな状態だつたからである。しかもこの軍政府も長続きせず、やがて匪賊上りの湯壽潜が杭州から兵隊を率ゐて侵入して来た。が、彼も直きに遊び人や新進の革命党に取り巻かれて湯都督とたてまつられた。そして役所にいる人物は、それまで木綿の着物を着てゐたものが十日も少ないうちに立派な毛皮の袍子を着込んで来るやうになつた。／魯迅は師範学校の校長になつた。

<p>長になり、范愛農がその下で学監となつた。彼等は忙しくなつて雑談を交すひまも無かつた。愛農は相変らず木綿着物のままだつたが、酒もあまり飲まなくなつた。愛農は相変らず木綿着物のままだつたが、酒もあまり飲まなくなつた。学監の事務の外に教授をも兼ねてゐたのだつたが、実際に勤勉に鮮やかにやつてのけた。ある日、魯迅の教へ子の青年が魯迅を訪ねて来て言つた。「湯壽潜の奴等あてんで問題になりません。私たちは一つ新聞をつくつて彼奴等を監視しようと思ひます。それについて発起人に先生のお名前も拝借したいと思ひます」／魯迅は承諾した。発起人は全部で三人であつた。五日後に新聞が発刊されたが、さかんに軍政府と政府内の人々を罵つてゐた。次いで都督、都督の親戚、同郷人、お妾さん等を罵りはじめた。／かういふ記事が十日あまりも続いた後である消息が彼の家へ伝はつた。彼等は都督の金を詐取してゐ乍ら都督を罵るから、都督は人を派して彼等をピストルで射殺するだらうといふのである。／彼の母親は心配して彼の外出を止めた。が、彼は平気で出て行つた。彼は自分が受け取つてゐるのは校費だし、それが都督にもわかつてゐない筈が無いし、そんなことを言ひふらすのはおどかしに過ぎないと思つた。</p>	<p>長になり、范愛農がその下で学監となつた。彼等は忙しくなつて雑談を交すひまも無かつた。愛農は相変らず木綿着物のままだつたが、酒もあまり飲まなくなつた。学監の事務の外に教授をも兼ねてゐたのだつたが、実際に勤勉に鮮やかにやつてのけた。ある日、魯迅の教へ子の青年が魯迅を訪ねて来て言つた。「湯壽潜の奴等あてんで問題になりません。私たちは一つ新聞をつくつて彼奴等を監視しようと思ひます。それについて発起人に先生のお名前も拝借したいと思ひます」／魯迅は承諾した。発起人は全部で三人であつた。五日後に新聞が発刊されたが、さかんに軍政府と政府内の人々を罵つてゐた。次いで都督、都督の親戚、同郷人、お妾さん等を罵りはじめた。／かういふ記事が十日あまりも続いた後である消息が彼の家へ伝はつた。彼等は都督の金を詐取してゐ乍ら都督を罵るから、都督は人を派して彼等をピストルで射殺するだらうといふのである。／彼の母親は心配して彼の外出を止めた。が、彼は平気で出て行つた。彼は自分が受け取つてゐるのは校費だし、それが都督にもわかつてゐない筈が無いし、そんなことを言ひふらすのはおどかしに過ぎないと思つた。</p>	<p>長になり、范愛農がその下で学監となつた。彼等は忙しくなつて雑談をするひまも無かつた。愛農は相変らず木綿着物のままだつたが、酒もあまり飲まなくなつた。学監の事務の外に教授をも兼ねてゐたのだつたが、実際に勤勉に鮮やかにやつてのけた。ある日、魯迅の教へ子の青年が魯迅を訪ねて来て言つた。「湯壽潜の奴等あてんで問題になりません。私たちは一つ新聞をつくつて彼奴等を監視しようと思ひます。それについて発起人に先生のお名前も拝借したいと思ひます」／魯迅は承諾した。発起人は全部で三人であつた。五日後に新聞が発刊されたが、さかんに軍政府と政府内の人々を罵つてゐた。次いで都督、都督の親戚、同郷人、お妾さん等を罵りはじめた。／かういふ記事が十日あまりも続いた後である消息が彼の家へ伝はつた。彼等は都督の金を詐取してゐ乍ら都督を罵るから、都督は人を派して彼等をピストルで射殺するだらうといふのである。／彼の母親は心配して彼の外出を止めた。が、彼は平気で出て行つた。彼は自分が受け取つてゐるのは校費だし、それが都督にもわかつてゐない筈が無いし、そんなことを言ひふらすのはおどかしに過ぎないと思つた。</p>	<p>長になり、范愛農がその下で学監となつた。彼等は忙しくなつて雑談をするひまも無かつた。愛農は相変らず木綿着物のままだつたが、酒もあまり飲まなくなつた。学監の事務の外に教授をも兼ねてゐたのだつたが、実際に勤勉に鮮やかにやつてのけた。ある日、魯迅の教へ子の青年が魯迅を訪ねて来て言つた。「湯壽潜の奴等あてんで問題になりません。私たちは一つ新聞をつくつて彼奴等を監視しようと思ひます。それについて発起人に先生のお名前も拝借したいと思ひます」／魯迅は承諾した。発起人は全部で三人であつた。五日後に新聞が発刊されたが、さかんに軍政府と政府内の人々を罵つてゐた。次いで都督、都督の親戚、同郷人、お妾さん等を罵りはじめた。／かういふ記事が十日あまりも続いた後である消息が彼の家へ伝はつた。彼等は都督の金を詐取してゐ乍ら都督を罵るから、都督は人を派して彼等をピストルで射殺するだらうといふのである。／彼の母親は心配して彼の外出を止めた。が、彼は平気で出て行つた。彼は自分が受け取つてゐるのは校費だし、それが都督にもわかつてゐない筈が無いし、そんなことを言ひふらすのはおどかしに過ぎないと思つた。</p>
---	---	---	---

どかしに過ぎないと思つてゐた。果して誰も殺しにやつて来なかつたし、経費を欲しいと手紙で言つてやると又二百弗寄越した。だが愛農が彼に新しい消息をもたらした。それは、「詐欺」といふのは学校の経費のことでは無く、新聞社へやつた金のことだと言ふのである。湯壽潜は新聞に罵倒が数日続いた後で新聞社に使ひをやつて五百弗とどけさせた。そこで青年たちの間にこの金を受取るべきや否やで会議が開かれ、結果は受け取ること定まつた。次に受取つた後も罵倒すべきや否やといふことが議題に上つた。最後の決議は、罵るべし、金を受け取れば彼は株主になるわけだが、株主が悪ければ当然罵るべきだといふことになつた。魯迅等の知らない間にさういふことがあつたのだ。／＼魯迅は新聞社へ行つて質して初めてその事実を知つた。そして金を受け取つたことに不満の口吻を漏らしたら、會計と称する男がいきなりむつとした態度で彼に言つた。／＼新聞社がどうして株式資本を受け取つていけないんです？／＼これは株式資本ぢやない。株式資本でなければ何ですか？／＼そこで彼はもう彼等を相手にすることを止めた。革命派の若手

いと思つてゐた。果して誰も殺しにやつて来なかつたし、経費を欲しいと手紙で言つてやると又二百弗寄越した。だが愛農が彼に新しい消息をもたらした。それは、「詐欺」といふのは学校の経費のことでは無く、新聞社へやつた金のことである。湯壽潜は新聞に罵倒が数日続いた後で新聞社に使ひをやつて五百弗とどけさせた。そこで青年たちの間にこの金を受取るべきや否やで会議が開かれ、結果は受け取ること定まつた。次に受取つた後も罵倒すべきや否やといふことが議題に上つた。最後の決議は、罵るべし、金を受け取れば彼は株主になるわけだが、株主が悪ければ当然罵るべきだといふことになつた。魯迅等の知らない間にさういふことがあつたのだ。／＼魯迅は新聞社へ行つて質して初めてその事実を知つた。そして金を受け取つたことに不満の口吻を漏らしたら、會計と称する男がいきなりむつとした態度で彼に言つた。／＼新聞社がどうして株式資本を受け取つていけないんです？／＼これは株式資本ぢやない。株式資本でなければ何ですか？／＼そこで彼はもう彼等を相手にすることを止めた。革命派の若手

どかしに過ぎないと思つてゐた。果して誰も殺しにやつて来なかつたし、経費を欲しいと手紙で言つてやると又二百弗寄越した。だが愛農が彼に新しい消息をもたらした。それは、「詐欺」といふのは学校の経費のことでは無く、新聞社へやつた金のことである。湯壽潜は新聞に罵倒が数日続いた後で新聞社に使ひをやつて五百弗とどけさせた。そこで青年たちの間にこの金を受取るべきや否やで会議が開かれ、結果は受け取ること定まつた。次に受取つた後も罵倒すべきや否やといふことが議題に上つた。最後の決議は、罵るべし、金を受け取れば彼は株主になるわけだが、株主が悪ければ当然罵るべきだといふことになつた。魯迅等の知らない間にさういふことがあつたのだ。／＼魯迅は新聞社へ行つて質して初めてその事実を知つた。そして金を受け取つたことに不満の口吻を漏らしたら、會計と称する男がいきなりむつとした態度で彼に言つた。／＼新聞社がどうして株式資本を受け取つていけないんです？／＼これは株式資本ぢやない。株式資本でなければ何ですか？／＼そこで彼はもう彼等を相手にすることを止めた。革命派の若手

どかしに過ぎないと思つてゐた。果して誰も殺しにやつて来なかつたし、経費を欲しいと手紙で言つてやると又二百弗寄越した。だが愛農が彼に新しい消息をもたらした。それは、「詐欺」といふのは学校の経費のことでは無く、新聞社へやつた金のことである。湯壽潜は新聞に罵倒が数日続いた後で新聞社に使ひをやつて五百弗とどけさせた。そこで青年たちの間にこの金を受取るべきや否やで会議が開かれ、結果は受け取ること定まつた。次に受取つた後も罵倒すべきや否やといふことが議題に上つた。最後の決議は、罵るべし、金を受け取れば彼は株主になるわけだが、株主が悪ければ当然罵るべきだといふことになつた。魯迅等の知らない間にさういふことがあつたのだ。／＼魯迅は新聞社へ行つて質して初めてその事実を知つた。そして金を受け取つたことに不満の口吻を漏らしたら、會計と称する男がいきなりむつとした態度で彼に言つた。／＼新聞社がどうして株式資本を受け取つていけないんです？／＼これは株式資本ぢやない。株式資本でなければ何ですか？／＼そこで彼はもう彼等を相手にすることを止めた。革命派の若手

第四章 北京・沈黙（一）

<p>(245) その翌年一月一日南京に革命の臨時政府が成立したのを機に、郷党の先輩である教育部長蔡元培に招かれ、教育部の職に就くことになつて南京へ出発した。</p>	
<p>(97) こんな状態の中に一九一二年即ち民国元年一月南京に革命の臨時政府が出来上り、孫文が臨時大總統に推され、国号を中華民國と改めた。魯迅の郷党の先輩蔡元培がこの新政府の教育部長に就任したことから魯迅は彼に招かれ、ちやうど郷里のつまらぬ紛糾に気を腐らせてゐた際なのでよくこんで招きに応じ郷里を出発した。</p>	<p>も大方はこんなやうな一種の無頼漢であつた。そこに魯迅は革命の矛盾を感じないわけには行かなかつた。／＼方式昌叛乱の報に震駭した清朝政府は直ちに討伐軍を派遣したが軍隊に戦意なく敗北に終つたので、已むなく当時山東の郷里に引退中だつた北方軍界の領袖袁世凱の出馬を促し、一切の権限を与へて清朝の運命を彼に託した。袁は馮国璋及び段祺瑞を討伐に向はせ、忽ち漢口、漢陽を奪回したが、何故か漢陽以上に追討を許さず、却つて南京へ逃れた革命軍との間に漢口英国總領事を介して妥協をはかつた。</p>
<p>同じ</p>	<p>やうな一種の無頼漢であつた。そこに魯迅は革命の矛盾を感じない訳には行かなかつた。／＼方式昌叛乱の報に震駭した清朝政府は直ちに討伐軍を派遣したが軍隊に戦意なく敗北に終つたので、已むなく当時山東の郷里に引退中だつた北方軍界の領袖袁世凱の出馬を促し、一切の権限を与へて清朝の運命を彼に託した。袁は馮国璋及び段祺瑞を討伐に向はせ、忽ち漢口、漢陽を奪回したが、何故か漢陽以上に追討を許さず、却つて南京へ逃れた革命軍との間に漢口英国總領事を介して妥協をはかつた。</p>
<p>(75) こんな状態の中、一九一二年即ち民国元年一月南京に革命の臨時政府が出来上り、孫文が臨時大總統に推され、国号を中華民國と改めた。魯迅の郷党の先輩蔡元培がこの新政府の教育部長に就任したことから魯迅は彼に招かれ、ちやうど郷里のつまらぬ紛糾に気を腐らせてゐた際なのでよくこんで招きに応じ郷里を出発した。</p>	<p>も大方はこんなやうな一種の無頼漢であつた。そこに魯迅は革命の矛盾を感じないわけには行かなかつた。／＼方式昌叛乱の報に震駭した清朝政府は直ちに討伐軍を派遣したが軍隊に戦意なく敗北に終つたので、已むなく当時山東の郷里に引退中だつた北方軍界の領袖袁世凱の出馬を促し、一切の権限を与へて清朝の運命を彼に託した。袁は馮国璋及び段祺瑞を討伐に向はせ、忽ち漢口、漢陽を奪回したが、何故か漢陽以上に追討を許さず、却つて南京へ逃れた革命軍との間に漢口英国總領事を介して妥協をはかつた。</p>
<p>(63) こんな状態の中に一九一二年即ち民国元年一月南京に革命の臨時政府が出来上り、孫文が臨時大總統に推され、国号を中華民國と改めた。魯迅の郷党の先輩蔡元培がこの新政府の教育部長に就任したことから魯迅は彼に招かれ、ちやうど郷里のつまらぬ紛糾に気を腐らせてゐた際なので喜んで招きに応じ郷里を出発した。</p>	<p>な一種の無頼漢であつた。そこに魯迅は革命の矛盾を感じないわけには行かなかつた。／＼方式昌叛乱の報に震駭した清朝政府は直ちに討伐軍を派遣したが軍隊に戦意なく敗北に終つたので、已むなく当時山東の郷里に引退中だつた北方軍界の領袖袁世凱の出馬を促し、一切の権限を与へて清朝の運命を彼に託した。袁は馮国璋及び段祺瑞を討伐に向はせ、忽ち漢口、漢陽を奪回したが、何故か漢陽以上に追討を許さず、却つて南京へ逃れた革命軍との間に漢口英国總領事を介して妥協をはかつた。</p>

<p>(340)第三の発足は少しも輝かしい</p>	<p>(101)第三の発足は輝かしい</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(340)真の意味で</p>	<p>(101)真に</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(340)からであつた。</p>	<p>(101)からである。</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(340)支持するかの如く</p>	<p>(101)支持するかのやうに</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(66)支持するかのやうに</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)清廷</p>	<p>(79)清朝</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)行はせたが、</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(66)行なわせたが</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)ほんたうに</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(66)本當に</p>
<p>(340)真に (340)なく自ら権力を握り機を見て己れ自身皇帝の位置に就きたい野望</p>	<p>(101)なく自ら至大の権力を握る機会を得たい野望</p>	<p>同じ</p>	<p>(79)なく、自ら至大の権力を握る機会を得たい野望</p>	<p>同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)み乍ら彼が</p>	<p>(79)み乍ら、彼が</p>	<p>同じ</p>	<p>(66)いながら彼が</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)のもつまりは</p>	<p>同じ</p>	<p>(79)のも、つまりは</p>	<p>同じ</p>
<p>同じ</p>	<p>(101)とくるに</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(66)所に</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(101) かくして宣統帝退位は二月十二日に行はれ、ここに清朝二百九十七年の歴史が終つた。退位の上諭は、「朕隆裕皇太后之懿旨ヲ奉シテ曩ニ民事ヲ起シ各省響心シテ国内沸騰シ生靈塗炭タルヤ特ニ袁世凱ニ命シテ委員ヲ派シ民軍代表ト大局ヲ討論シ政体ノ事ヲ公決センコトヲ議セシム。両月以来尙確実ノ辨法無ク南北綱角互相支持シ商売八業ヲ失シ兵士八野二露</p>	<p>同じ</p>	<p>(79) かくして宣統帝退位は二月十二日に行はれ、ここに清朝二百七十余年の歴史が終つた。退位の上諭は、「朕隆裕皇太后之懿旨ヲ奉シテ曩ニ民事ヲ起シ各省響心シテ国内沸騰シ生靈塗炭タルヤ特ニ袁世凱ニ命シテ委員ヲ派シ民軍代表ト大局ヲ討論シ政体ノ事ヲ公決センコトヲ議セシム。両月以来尙確実ノ辨法無ク南北綱角互相支持シ商売八業ヲ失シ兵士八野二露シ、徒</p>	<p>(66) かくして宣統帝退位は二月十二日に行なわれ、ここに清朝二百九十七年の歴史が終つた。退位の上諭は、「朕隆裕皇太后之懿旨ヲ奉シテ曩ニ民事ヲ起シ各省響心シテ国内沸騰シ生靈塗炭タルヤ特ニ袁世凱ニ命シテ委員ヲ派シ民軍代表ト大局ヲ討論シ政体ノ事ヲ公決センコトヲ議セシム。両月以来尙確実ノ辨法無ク南北綱角互相支持シ商売八業ヲ失シ兵士八野二露シ、</p>

(75)かくして彼はその年の四月その実力の後ろ盾に依り第一回臨時總統に立つた孫文からその位を譲られ、翌五月には政府を再び

(76) この清帝退位の三日後に袁は大總統の職を孫から譲られた。これには予め袁は清帝を退位せしめる代りには孫は袁を大總統に

シ、徒ラ二国体一日決セサルヲ以テ生民一日安カラス。今全国人心共和二傾向シ、南部中部各省既二前二義ヲ倡ヘ北方諸省亦後二主張ス。人心ノ嚮フ所天命知ルヘシ。朕又何ソ一人ノ利害二囚テ億兆人民ノ希望二拂ルニ忍ヒンヤ。茲二特二外八大勢二觀、内八与論ヲ審力ニシ皇帝統治權ヲ將テ之ヲ大衆ニ公ニシ全国ヲ定メテ共和立憲政体ト為ス。近ク八内乱ヲ治メ遠ク八古政ニ協ハシムル八天下之公議ナリ。袁世凱曩ニ資政院ノ選舉ヲ經テ總理大臣トナル。方ニ新旧代謝ノ際ニ當リテ宜シク南北統一ノ計ヲナスヘシ、即チ袁世凱全權ヲ以テ臨時共和政府ヲ組織シ民軍ト統一辦法ヲ協商シ以テ人民ノ安堵、海内ノ泰平ヲ期セシメ、即チ滿漢蒙回藏五族ヲ合シテ領土ヲ保全シ一大中華民國ト為サシム。朕既ニ退隱シ歲月ヲ悠遊シ永ヘ二国民ノ優礼ヲ受ケ親シク良政ノ復興ヲ見ル、豈謔ナラスヤ。〃といふもので、無理に清朝の体面を保持しようとしたところに却つて哀れの趣を深くしてゐる。

に同じ

(80) この清帝退位の三月後に袁は大總統の職を孫から譲られた。これには予め袁は清帝を退位せしめる代りには孫は袁を大總統に推

(81) この清帝退位の三日後に袁は大總統の職を孫から譲られた。これには予め袁は清帝を退位せしめる代りには孫は袁を大總統に推

ラ二国体一日決セサルヲ以テ生民一日安カラス。今全国人心共和二傾向シ、南部中部各省既二前二義ヲ倡ヘ北方諸省亦後二主張ス。人心ノ嚮フ所天命知ルヘシ。朕又何ソ一人ノ利害二囚テ億兆人民ノ希望二拂ルニ忍ヒンヤ。茲二特二外八大勢二觀、内八与論ヲ審力ニシ皇帝統治權ヲ將テ之ヲ大衆ニ公ニシ全国ヲ定メテ共和立憲政体ト為ス。近ク八内乱ヲ治メ遠ク八古政ニ協ハシムル八天下之公議ナリ。袁世凱曩ニ資政院ノ選舉ヲ經テ總理大臣トナル。方ニ新旧代謝ノ際ニ當リテ宜シク南北統一ノ計ヲナスヘシ、即チ袁世凱全權ヲ以テ臨時共和政府ヲ組織シ民軍ト統一辦法ヲ協商シ以テ人民ノ安堵、海内ノ泰平ヲ期セシメ、即チ滿漢蒙回藏五族ヲ合シテ領土ヲ保全シ一大中華民國ト為サシム。朕既ニ退隱シ歲月ヲ悠遊シ永ヘ二国民ノ優礼ヲ受ケ親シク良政ノ復興ヲ見ル、豈謔ナラスヤ。〃といふもので、無理に清朝の体面を保持しようとしたところに却つて哀れの趣を深くしてゐる。

徒ラ二国体一日決セサルヲ以テ生民一日安カラス。今全国人心共和二傾向シ、南部中部各省既二前二義ヲ倡ヘ北方諸省亦後二主張ス。人心ノ嚮フ所天命知ルヘシ。朕又何ソ一人ノ利害二囚テ億兆人民ノ希望二拂ルニ忍ヒンヤ。茲二特二外八大勢二觀、内八与論ヲ審力ニシ皇帝統治權ヲ將テ之ヲ大衆ニ公ニシ全国ヲ定メテ共和立憲政体ト為ス。近ク八内乱ヲ治メ遠ク八古政ニ協ハシムル八天下之公議ナリ。袁世凱曩ニ資政院ノ選舉ヲ經テ總理大臣トナル。方ニ新旧代謝ノ際ニ當リテ宜シク南北統一ノ計ヲナスヘシ、即チ袁世凱全權ヲ以テ臨時共和政府ヲ組織シ民軍ト統一辦法ヲ協商シ以テ人民ノ安堵、海内ノ泰平ヲ期セシメ、即チ滿漢蒙回藏五族ヲ合シテ領土ヲ保全シ一大中華民國ト為サシム。朕既ニ退隱シ歲月ヲ悠遊シ永ヘ二国民ノ優礼ヲ受ケ親シク良政ノ復興ヲ見ル、豈謔ナラスヤ。〃といふもので、無理に清朝の体面を保持しようとした所に却つて哀れの趣を深くしてゐる。

北京に移し、この政府の北京移転と共に魯迅も北京へ移った。

推すといふ内約があつたものらしく、結局は袁の実力がものを言つたのであつた。立憲共和の新中華民国の大總統に軍閥の巨頭袁世凱を推すといふことはそもそも革命の精神に非常に反することであり、ここに革命の最大の失敗があつたが、これももとはと言へば革命派が真に実力によらずに袁といふ軍閥との妥協の下に事を為したといふことであつた。(孫文は後に、「革命方略」には革命進行の時期を軍政期、訓政期、憲政期の三期に分つてゐるのに、軍政期から一足飛びに憲政期に移つたため人民を訓練する時間が全然無く、この「革命方略」を行はなかつたことが最大の過誤であつたといふ意味のことを述べてゐるが、実際にはその当時はそんな計画通りに進めるやうな状態では無かつたのであらう)／大總統になるや袁は五月政府を再び北京に移し、この政府の移転と共に魯迅も北京へ移つた。居を宣武門外南半截胡同紹興会馆藤花館にトし、官職としては社会教育司第一科科长に任せられたが、八月には更に教育部僉事に昇任した。

(3) (1) そんな状態の下にむしろん革命が円滑に進行する筈は無い。

(2) (1) 革命はうまく進行する筈が無かつた。

同じ

すといふ内約があつたものらしく、結局は袁の実力がものを言つたのであつた。立憲共和の新中華民国の大總統に軍閥の巨頭袁世凱を推すといふことはそもそも革命の精神に非常に反することであり、ここに革命の最大の失敗があつたが、これももとはと言へば革命派が真に実力によらずに袁といふ軍閥との妥協の下に事を為したといふことであつた。(孫文は後に、「革命方略」には革命進行の時期を軍政期、訓政期、憲政期の三期に分つてゐるのに、軍政期から一足飛びに憲政期に移つたため人民を訓練する時間が全然無く、この「革命方略」を行はなかつたことが最大の過誤であつたといふ意味を述べてゐるが、実際にはその当時はそんな計画通りに進めるやうな状態では無かつたのであらう)／大總統になるや袁は五月政府を再び北京に移し、この政府の移転と共に魯迅も北京に移つた。居を宣武門外南半截胡同紹興会馆藤花館にトし、官職としては社会教育司第一科科长に任せられたが、八月には更に教育部僉事に昇任した。

同じ

すといふ内約があつたものらしく、結局は袁の実力がものを言つたのであつた。立憲共和の新中華民国の大總統に軍閥の巨頭袁世凱を推すといふことはそもそも革命の精神に非常に反することであり、ここに革命の最大の失敗があつたが、これももとはと言へば革命派が真に実力によらずに袁といふ軍閥との妥協の下に事を為したといふことであつた。(孫文は後に、「革命方略」には革命進行の時期を軍政期、訓政期、憲政期の三期に分つてゐるのに、軍政期から一足飛びに憲政期に移つたため人民を訓練する時間が全然なく、この「革命方略」を行なわなかつたことが最大の過誤であつたといふ意味のことを述べてゐるが、実際にはその当時はそんな計画通りに進めるやうな状態では無かつたのであらう)／大總統になるや袁は五月政府を再び北京に移し、この政府の移転と共に魯迅も北京へ移つた。居を宣武門外南半截胡同紹興会馆藤花館にトし、官職としては社会教育司第一科科长に任せられたが、八月には更に教育部僉事に昇任した。

(3) (1) 革命はうまく進行する筈が無かつた。

(34)間もなく所謂第二革命、第三革命が起り、又袁は民国五年騒擾中に死去するに至つたが、官僚軍閥の勢は尚牢固として抜くべからざるものがあり革命の実は容易に結ばれなかつた。が、四千年にわたる長い専制政治の後であつて見ればそれもむしる当然と言へるであらう。直接間接を問はず革命を妨礙するものは袁につづく無数の官僚閥だけでなく、實際政治に参与して来るにつれ革命派内にも渺からず出現したのであつた。

(35)袁が大總統になるについては、革命派は袁の将来に於ける専権を慮り、大總統の権限を狭め参議院の権限を拡大した臨時約法をつくり、正式憲法制定まで之に依らせることにしたが、参議院の大多数である国民党(中国同盟会の後身)は常に大總統を抑へようとすし両者の間には争闘が絶えず、遂に翌民国二年七月には政府軍と国民党軍との戦争(第二革命)にまで発展し、国民党は敗北し孫文は台湾に逃れるにまで至つた。／＼袁は民国三年一月には議会の停止を命じ、次いで又大總統を中心とする修正約法を公布し、これによつて凡ての政権が委く大總統に隷属することとし、更にその専制の野望は發展して帝政運動にまでなつた。／＼が、この帝政運動は進行するにつれて国民党一派が猛烈に反対したのは言ふまでもなく、袁親近の部下さへも渺からず彼のもとを去るやうになり、その上にも日、英、仏、露諸国の帝政反対の共同警告さへあり、又雲南の唐繼堯が独立を宣言し討袁軍を組織した(第三革命)のに次いで貴州、四川など呼応して立つ等のごとあり、袁は次第に著しく国内に蔓延して来た反袁空気のさ中華民國五年六月閏々の

(36)袁が大總統になるについては、革命派は袁の将来に於ける専権を慮り、大總統の権限を狭め参議院の権限を拡大した臨時約法をつくり、正式憲法制定まで之に依らせることにしたが、参議院の大多数である国民党(中国同盟会の後身)は常に大總統を抑へようとすし両者の間には争闘が絶えず、遂に翌民国二年七月には政府軍と国民党軍との戦争(第二革命)にまで発展し、国民党は敗北し孫文は台湾に逃れるにまで至つた。／＼袁は民国三年一月には議会の停止を命じ、次いで又大總統を中心とする修正約法を公布し、これによつて凡ての政権が委く大總統に隷属することとし、更にその専制の野望は發展して帝政運動にまでなつた。／＼が、この帝政運動は進行するにつれて国民党一派が猛烈に反対したのは言ふまでもなく、袁親近の部下さへも渺からず彼のもとを去るやうになり、その上にも日、英、仏、露諸国の帝政反対の共同警告さへあり、又雲南の唐繼堯が独立を宣言し討袁軍を組織した(第三革命)のに次いで貴州、四川など呼応して立つ等のごとあり、袁は次第に著しく国内に蔓延して来た反袁空気のさ中華民國五年六月閏々の

に同じ

(37)袁が大總統になるについては、革命派は袁の将来に於ける専権を慮り、大總統の権限を狭め参議院の権限を拡大した臨時約法をつくり、正式憲法制定まで之に依らせることにしたが、参議院の大多数である国民党(中国同盟会の後身)は常に大總統を抑へようとすし両者の間には争闘が絶えず、遂に翌民国二年七月には政府軍と国民党軍との戦争(第二革命)にまで発展し、国民党は敗北し孫文は台湾に逃がれるにまで至つた。／＼袁は民国三年一月には議会の停止を命じ、次いで又大總統を中心とする修正約法を公布し、これによつて全ての政権が委く大總統に隷属することとし、更にその専制の野望は發展して帝政運動にまでなつた。／＼が、この帝政運動は進行するにつれて国民党一派が猛烈に反対したのは言ふまでもなく、袁親近の部下さへも渺からず彼のもとを去るやうになり、その上にも日、英、仏、露諸国の帝政反対の共同警告さへあり、又雲南の唐繼堯が独立を宣言し討袁軍を組織した(第三革命)のに次いで貴州、四川など呼応して立つ等のごとあり、袁は次第に著しく国内に蔓延して来た反袁空気のさ中華民國五年六月

<p>(340) 魯迅は南京から北京へ移つた当時は教育部社会司第一科々長といふ職にあつたが、間もなく八月には昇つて教育部僉事になつた。がこの革命草創期の混乱そのものの政局に彼が不満を覚えなかつた筈が無い。が彼は黙々と役人の職に就いてゐた。外面から見れば実に平凡極まる役人生活が続いた。</p>	<p>うちに病死した。</p> <p>(106) 袁の死後は副總統の黎元洪が大總統に就任し、国民党の要望に従ひ旧約法、旧国会復活を声明はしたが、何しろ革命の地盤が少しも固まつてゐないこととて革命は依然としてはかばかしい成果を見せず、旧官僚軍閥は常に武力を以て言論派を圧制するといふ状態であつた。かういふ革命草創期の混乱そのものの政局に魯迅が不満を覚えなかつた筈はない。が彼は黙々と外面から見れば実に平凡極まるその役人生活をつづけてゐた。</p>	<p>々のうちに病死した。</p> <p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(68) 袁の死後は副總統の黎元洪が大總統に就任し、国民党の要望に従ひ旧約法、旧国会復活を声明はしたが、何しろ革命の地盤が少しも固まつていないこととて革命は依然としてはかばかしい成果を見せず、旧官僚軍閥は常に武力を以て言論派を圧制するという状態であつた。かういふ革命草創期の混乱そのものの政局に魯迅が不満を覚えなかつた筈はない。が彼は黙々と外面から見れば実に平凡極まるその役人生活を続けていた。</p> <p>(69) 彼の親友許壽裳の</p> <p>(69)三十二才。</p> <p>に同じ</p> <p>(69)三十三才。</p> <p>(69)三十四才。</p> <p>(69)この年公余に</p>
<p>(341) 魯迅の</p> <p>に同じ</p>	<p>(106) 彼の親友許壽裳の</p> <p>(106)三十二歳。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p> <p>(83)三十一歳</p>	<p>(69) 彼の親友許壽裳の</p> <p>(69)三十二才。</p>
<p>に同じ</p>	<p>(106) (前略)</p> <p>(107)三十三歳。</p>	<p>「該当箇所なし」</p> <p>に同じ</p>	<p>に同じ</p> <p>(83)三十二歳。</p>	<p>に同じ</p> <p>(69)三十三才。</p>
<p>に同じ</p>	<p>(107)三十四歳。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(83)三十三歳。</p>	<p>(69)三十四才。</p>
<p>に同じ</p>	<p>(107)此の年公余に</p> <p>(107)三十五歳。</p>	<p>(84)公余に</p>	<p>に同じ</p> <p>(83)三十四歳。</p>	<p>(69)この年公余に</p> <p>(69)三十五才。</p>
<p>に同じ</p>	<p>(107)二弟作人</p>	<p>(84)弟作人</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(107)翻刻し、成る。</p>	<p>(84)翻刻す。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(107)此の年、公余に</p>	<p>(84)公余に</p>	<p>に同じ</p>	<p>(69)この年公余に</p>

<p>「該当箇所なし」</p> <p>の唯一の願ひであつた。」</p>	<p>(34)彼自身その頃の生活について次のやうに言つてゐる。「S会館(紹興会館のこと)の内に三間続きの」と棟があり、言ひ転へによるとむかし中庭の槐樹の上で或る女が首を縊つて死んだことがあつたさうである。今その槐樹はもう攀ぢ上れない程高くなつてゐるが、この家には未だに住む人がゐない。幾年もの間私はこの家に寓居して古碑を写してゐた。滞在中訪ねて来る人もめつたにゐなかつたし、古碑の中ではどんな問題にも主義にもぶつからなかつた。そして私の生命はいい具合に暗々に消え去つて行つた。それこそが私の唯一の願ひであつた。」</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(108)拓本を蒐集研究す。</p> <p>(108)三十七歳。</p> <p>(108)彼自身その頃の生活について次のやうに言つてゐる。(S会館(紹興会館)の内に三間続きの」と棟があり、言ひ転へによるとむかし中庭の槐樹の上で或る女が首を縊つて死んだことがあるさうである。今その槐樹はもう攀ぢ上れない程高くなつてゐるが、この家には未だに住む人がゐない。幾年もの間私はこの家に寓居して古碑を写してゐた。滞在中訪ねて来る人もめつたにゐなかつたし、古碑の中ではどんな問題にも主義にもぶつからなかつた。そして私の生命はいい具合に暗々に消え去つて行つた。それこそが私の唯一の願ひであつた。」</p>	<p>同じ</p>	<p>(107)五月、会館(紹興会館)補樹書屋に移居す。／十二月、暇を請ひ</p>	<p>(107)三十六歳。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(85)拓本の蒐集研究に従ふ。</p> <p>(85)彼自身その頃の生活について、自分は幾年もの間、言ひ転へによるとむかし中庭の槐樹の上で或る女が首を縊つて死んだことがあるさうで、そのため住む人のない、S会館内の三間つづきの」と棟に寓居して古碑を写してゐたが、滞在中訪ねて来る人もめつたにゐなかつたし、古碑の中ではどんな問題にも主義にもぶつからなかつた、そして自分の生命はいい具合に暗々に消え去つて行つた、それこそが自分の唯一の願ひであつた、といふ意味のことを述べている。</p>	<p>同じ</p>	<p>(85)五月、紹興会館補樹書屋に移居す。／十二月、暇を請ひ</p>	<p>同じ</p>
<p>(85)この生活中の魯迅の心が平靜であつた筈はないだらう。多分彼の心には懷疑と絶望のながい液汁がいっぱひたまつてゐたことと思ふ。</p>	<p>(8)拓本を蒐集研究する。</p> <p>(84)三十六歳。</p> <p>(8)彼自身その頃の生活について次のやうに言つてゐる。(S会館(紹興会館)の内に三間続きの」と棟があり、言ひ転へによるとむかし中庭の槐樹の上で或る女が首を縊つて死んだことがあるさうである。今その槐樹はもう攀ぢ上れない程高くなつてゐるが、この家には未だに住む人がゐない。幾年もの間私はこの家に寓居して古碑を写してゐた。滞在中訪ねて来る人もめつたにゐなかつたし、古碑の中ではどんな問題にも主義にもぶつからなかつた。そして私の生命はいい具合に暗々に消え去つて行つた。それこそが私の唯一の願ひであつた。」</p>	<p>同じ</p>	<p>(8)五月、会館(紹興会館)補樹書屋に移居する。／十二月、暇を請ひ</p>	<p>(84)三十五歳。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(70)彼自身その頃の生活について次のやうに言つてゐる。「S会館(紹興会館)の内に三間続きの」と棟があり、言ひ転へによると昔中庭の槐樹の上で或る女が首を縊つて死んださうである。今その槐樹はもう攀ぢ上れない程高くなつてゐるが、この家には未だに住む人が居ない。幾年もの間私はこの家に寓居して古碑を写してゐた。滞在中訪ねて来る人もめつたにゐなかつたし、古碑の中ではどんな問題にも主義にもぶつからなかつた。そして私の生命はいい具合に暗々に消え去つて行つた。それこそが私の唯一の願ひであつた。」</p>	<p>同じ</p>	<p>(70)五月、会館(紹興会館)補樹書屋に移居す。／十二月、暇を請ひ</p>	<p>(70)三十六才。</p>

<p>(342)ものは書かなくても惜しくは無いが、支那文学に関する研究をさせるなら多少は人の思ひつかなったことも言へると言つたことがあつた程国文学に対しては</p>	<p>(28)ものを書かなくても惜しくはないが、支那文学に関する研究をさせるなら多少は人の思ひつかなったことも言へる、と言つたことがあつた程国文学にたいしては</p>	<p>(85)ものを書かなくても惜しくはないが、中国文学に関する研究をさせるなら多少は人の思ひつかなったことも言へる、と言つたことがあつた程国文学にたいしては</p>	<p>同じ</p>	<p>(70)ものを書かなくても惜しくはないが、支那文学に関する研究をさせるなら多少は人の思ひつかなったことも言へる、と言つたことがあつた程文学に対しては</p>
<p>(342)彼の役人生活は十五年間続き、後年彼は「官僚をしてゐた」と自らの役人生活を自嘲してゐるが、その彼の所謂官僚生活の内容については殆んど知られてゐず、ここで私もそれに触れ得られないのは残念である。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>
<p>(342)別に新文化発生の</p>	<p>(105)別に、礼教道德に誤られた長い伝統の封建的社会からの解放を目指す新文化の</p>	<p>同じ</p>	<p>(85)別に、礼教道德に誤られた長い伝統の封建的社会からの解放を目指す新文化の</p>	<p>同じ</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(105)新らしく取つて代るものはデモクラシーと科学精神であつた。</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(70)新らしく取つて代るものはデモクラシーと科学精神であつた。</p>
<p>(342)当時</p>	<p>(110)そして</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(110)その文科学長</p>	<p>(87)この文科学長</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(342)主宰者</p>	<p>(110)主宰</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(342)まさにこの運動の最尖端的存在</p>	<p>(105)この運動の最先鋒であり、中心人物</p>	<p>(8)この運動の最先鋒であり中心人物</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(342)言葉、白話を以て文章を書くといふところにあり、それだけで見れば一応</p>	<p>(105)言葉即ち白話を以て文章を書くといふところにあり、ごく簡単に言へば言</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(70)言葉即ち白話をもつて文章を書くといふところにあり、ごく簡単に言へば言</p>

<p>我が国の言文一致運動に酷似してゐるが、それまでの古文体の文章が形式偏重の、全然内容空疎なものであつた点でその革命性は我が言文一致運動よりはるかに大きいものがある。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>
<p>(一三) 胡適の文章のうちに唱へられた「八不主義」についてそれを見よう。「八不主義」とは、第一、内容の無い文章を作らぬ／第二、古人を模倣しない／第三、文法に合はない文章を作らぬ／第四、病気でもないのに苦悶を発しない／第五、陳腐な口調や定まり文句を使はぬ／第六、典故を使はぬ／第七、対語対句を使はぬ／第八、俗語俗文を避けぬ／の八ヶ條であり、この條文では消極的語調になつてゐるが、この第八條が即ち白話文章の提唱に當つてゐ、この一條こそはそれまでの七ヶ條の結論ともなつてゐるものであると同時に、その七ヶ條はこの一條の内容の説明にも當つてゐるものである。さて、この七ヶ條についての説明は略して、最後の白話文章の條だけについて言ふと、この言文一致文学といふものは必ずしも胡適の新発明に係るものではなく、すでに「水滸伝」とか「西遊記」とか「儒林外史」「紅樓夢」等幾多の大文学が白話</p>	<p>文一致運動といふことにならぬが、問題ははるかに広範囲にわたつてゐた。</p>
<p>(一四) 胡適の文章のうちに唱へられた「八不主義」についてそれを見よう。「八不主義」とは、第一、内容のない文章を作らぬ。／第二、古人を模倣しない。／第三、文法に合はない文章を作らぬ。／第四、病気でもないのに苦悶を発しない。／第五、陳腐な口調や定まり文句を使はぬ。／第六、典故を使はぬ。／第七、対語対句を使はぬ。／第八、俗語俗文を避けぬ。／の八ヶ條であり、この條文では消極的語調になつてゐるが、この第八條が即ち白話文章の提唱に當つてゐ、この一條こそはそれまでの七ヶ條の結論ともなつてゐるものであると同時に、その七ヶ條はこの一條の内容の説明にも當つてゐるものである。さて、この七ヶ條についての説明は略して、最後の白話文章の條だけについて言ふと、この言文一致文学といふものは必ずしも胡適の新発明に係るものではなく、すでに「水滸伝」とか「西遊記」とか「儒林外史」「紅樓夢」等幾多の大文学が白話</p>	<p>文一致運動といふことにならぬが、問題ははるかに広範囲に渡つてゐた。</p>
<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(一五) 胡適の文章のうちに唱へられた「八不主義」についてそれを見よう。「八不主義」とは、第一、内容のない文章を作らぬ／第二、古人を模倣しない／第三、文法に合はない文章を作らぬ／第四、病気でもないのに苦悶を発しない／第五、陳腐な口調や定まり文句を使はぬ／第六、典故を使はぬ／第七、対語対句を使はぬ／第八、俗語俗文を避けぬ／の八ヶ條であり、この條文では消極的語調になつてゐるが、この第八條が即ち白話文章の提唱に當つてゐ、この一條こそはそれまでの七ヶ條の結論ともなつてゐるものであると同時に、その七ヶ條はこの一條の内容の説明にも當つてゐるものである。さて、この七ヶ條についての説明は略して、最後の白話文章の條だけについて言ふと、この言文一致文学といふものは必ずしも胡適の新発明に係るものではなく、すでに「水滸伝」とか「西遊記」とか「儒林外史」「紅樓夢」等幾多の大文学が白話</p>	<p>文一致運動といふことにならぬが、問題ははるかに広範囲に渡つてゐた。</p>

<p>(3-4)この間の事情を知るにいい周作人の文章がある。／「白話文の難かしい」は、その内容となるべき感情なり思想なりが必要であるといふことであります。古文にはそんなものは無くともよろしいのですが、白話文は内容が無いと作れないのであります。白話文は袋のやうなもので、何を入れてもよろしいが、しかし何も入れないといふのでは困ります。そのうへ何を入れても、原物の形状は外からそっくり見えま</p>	
<p>(1)この間の事情を知るにいい周作人の文章がある。／「白話文の難かしい」は、必ずその内容となるべき感情なり思想なりが必要であります。古文にはそんなものは無くともよろしいのですが、白話文は内容が無いと作れないのであります。白話文は袋のやうなもので、何を入れてもよろしいが、しかし何も入れないといふわけには行きませぬ。そのうへ何を入れても、原物の形状は外からそっくり見えま</p>	<p>話によつて書かれてゐるのであるが、ただそれが文学の本道として発展してゐず、且つそれらの作者もそれを文学の正道とする意識の下には書いてゐなかつたのであり、それにつき胡適はこれら白話に依る文学だけが真の活文学であつたとなし、初めて意識的に白話表現の文学に於ける正統性を主張したのであつた。そんなわけで白話の文学といふものは過去に於てすでに存在してゐたものではあつたが、一般に行はれてゐる古文体の文章が甚だしく形式偏重の、全然内容空疎なものであつた点でその革新性は我が国の言文一致運動よりははるかに大きいものがある。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>樓夢」等幾多の大文学が白話によつて書かれてゐるのであるが、ただそれが文学の本道として発展してゐず、且つそれらの作者もそれを文学の正道とする意識の下には書いてゐなかつたのであり、それにつき胡適はこれら白話による文学だけが真の活文学であつたとなし、初めて意識的に白話表現の文学に於ける正統性を主張したのであつた。そんなわけで白話の文学といふものは過去に於てすでに存在してゐたものではあつたが、一般に行はれてゐる古文体の文章が甚だしく形式偏重の、全然内容空疎なものであつた点でその革新性は我が国の言文一致運動よりははるかに大きいものがある。</p>
<p>同じ</p>	
<p>(2)この間の事情を知るにいい周作人の文章がある。／「白話文の難かしい」は、必ずその内容となるべき感情なり思想なりが必要であります。古文にはそんなものは無くともよろしいのですが、白話文は内容が無いと作れないのであります。白話文は袋のやうなもので、何を入れてもよろしいが、しかし何も入れないといふわけには行きませぬ。そのうへ何を入れても、原物の形状は外からそっくり見えま</p>	<p>つて書かれてゐるのであるが、ただそれが文学の本道として発展してゐず、且つそれらの作者もそれを文学の正道とする意識の下には書いてゐなかつたのであり、それにつき胡適はこれら白話に依る文学だけが真の活文学であつたとなし、初めて意識的に白話表現の文学に於ける正統性を主張したのであつた。そんなわけで白話の文学といふものは過去に於て既に存在してゐたものではあつたが、一般に行われてゐる文語体の文章が甚だしく形式偏重の、全然内容空疎なものであつた点でその革新性は我が国の言文一致運動よりははるかに大きいものがある。</p>

<p>す。古文は箱のやうなもので、四角なものしか入れられませぬ。円いものだと詰められないのです。しかも最も好いのは何と云つてもそれを空のままにして、何も入れないことではありません。大抵何も言ふことが無いのどうしても言はなければならぬといふ場合、古文は最も役に立ちます。たとへば遠方の親戚から寄越した手紙を受取つて、これに対して何と云つたものが挨拶に困り、しかもどうして返事を出さねばならぬといふやうな場合、若し白話で書けば、簡単な一二行で済んでしまつて、それでは無論始末がわるいのであります。が若しも古文を用ひますと、旧調をそのままつけて云ふことが出来、空つぽで内容は何もなくとも、八行の書簡箋は結構いつばいに埋められるわけでありませぬ。」(松枝茂夫訳)</p>	<p>は箱のやうなもので、四角なものしか入れられませぬ。円いものだと詰められないのです。しかも最も好いのは何と云つてもそれを空のままにして、何も入れないでおくことではありません。大抵何も言ふことが無いのどうしても言はなければならぬといふ場合、古文は最も役に立ちます。たとへば遠方の親戚から寄越した手紙を受取り、これに対して何と云つて見様もなく、しかもどうして返事を出さねばならぬといふやうな場合、若しも白話で書けば簡単な一二行で済んでしまひ、それでは無論始末がわるい、若しも古文を用ひますと、旧調をそのままつけて云ふことが出来、空つぽで内容はなくとも、八行の書簡箋は結構いつばいに埋められるわけでありませぬ。」</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>うなもので、四角なものしか入れられませぬ。円いものだと詰められないのです。しかも何と云つても最も好いのはそれを空のままにして、何も入れないで置くことではありません。大抵何も言つことが無いのどうしてと言わなければならぬといふ場合、若しも白話で書けば簡単な一二行で済んでしまひ、それでは無論始末が悪いが、若しも古文を用ひますと、旧調をそのままつけて言うことができ、空つぽで内容はなくとも、八行の書簡箋は結構いつばいに埋められるわけでありませぬ。」</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(342) 依て</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(73) よつて</p>
<p>(342) 瞬く間</p>	<p>(113) よつて</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(114) またたく間</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(114) この文学革命については後年周作人が胡適とは別な立場から見解を述べてゐる。何れがより正しいかの議論は別として、この周作人の見解はたしかに一見識であり、且つ支那文学</p>	<p>(89) この文学革命については後年周作人が胡適とは別な立場から見解を述べてゐる。何れがより正しいかの議論は別として、中国文学の古来からの流れを語つてゐて教へられるところ多</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(73) この文学革命については後年周作人が胡適とは別な立場から見解を述べてゐる。何れがより正しいかの議論は別として、この周作人の見解はたしかに一見識であり、且つ支那文学</p>

の古来からの流れを語つてゐて教へられるところ多いので簡単に紹介して見ることにする。その説くところによると、支那の文学には古来から言志派（詩は志を言ふ）と載道派（文は以て道を載す）の二つの異つた潮流があり、この二潮流は常に他を反動として生起させ、絶えず互に入れ代つて起伏してをり、例へば晩周には言志派、兩漢には載道派つづいて魏晉六朝には再び言志派、次の唐には又も載道派といつた具合にその後につづく五代、兩宋、元、明、明末、清、民国といふ時代の間に交互に興廃して来てゐると言ひ、そんな見解から民国に入つての白話文学が胡適の言ふやうに古来からの文学の唯一の目的物では決して無く、永年起伏をつづけて来た言志、載道から成る波型線の、ちやうど言志の波頭にそれが当つてゐるまでだと言ふのである。この二派の消長の状態については可なりくはしい説明があるのだがそれは略すこととして、この民国の新言志派文学が白話の形式を取つたといふことについては、白話が今日の志を言ふに適した表現であるから取られたまでだと言ひ、古文は死んだ文学だといふ、又、古文と白話の区別を簡単に見過ぎてゐる胡適

いものがあるので、簡単に紹介して見ることにする。その説くところによると、中国の文学には古来から言志派（詩は志を言ふ）と載道派（文は以て道を載す）の二つの異つた潮流があり、この二潮流は常に他を反動として生起させ、絶えず互に入れ代つて起伏してをり、例へば晩周には言志派、兩漢には載道派、つづいて魏晉六朝には再び言志派、次の唐には又も載道派といつた具合にその後につづく五代、兩宋、元、明、明末、清、民国といふ時代の間に交互に興廃して来てゐると言ひ、そんな見解から民国に入つての白話文学が胡適の言ふやうに古来からの文学の誰一の目的物では決してなく、永年起伏をつづけて来た言志、載道から成る波型線の、ちやうど言志の波頭にそれが当つてゐるまでだと言ふのである。この二派の消長の状態については可なりくはしい説明があるのだがそれは略すこととして、この民国の新言志派文学が白話の形式を取つたといふことについては、白話が今日の志を言ふに適した表現であるから取られたまでだと言ひ、古文は死んだ文学だといふ、又、古文と白話の区別を簡単に不賛成を表明してゐる。

古来からの流れを語つてゐて教へられるところが多いので簡単に紹介して見ることにする。その説くところによると、支那の文学には古来から言志派（詩は志を言ふ）と載道派（文は以て道を載す）の二つの異つた潮流があり、この二潮流は常に他を反動として生起させ、絶えず互に入れ代つて起伏してあり、例へば晩周には言志派、兩漢には載道派つづいて魏晉六朝には再び言志派、次の唐には又も載道派といつた具合にその後につづく五代、兩宋、元、明、明末、清、民国といふ時代の間に交互に興廃して来てゐると言ひ、そんな見解から民国に入つての白話文学が胡適の言ふやうに古来からの文学の唯一の目的物では決して無く、永年起伏をつづけて来た言志、載道から成る波型線の、ちやうど言志の波頭にそれが当つてゐるまでだと言ふのである。この二派の消長の状態については可なりくはしい説明があるのだがそれは略すこととして、この民国の新言志派文学が白話の形式を取つたといふことについては、白話が今日の志を言ふに適した表現であるから取られたまでだと言ひ、古文は死んだ文学だと言ひ、又、古文と白話の区別を簡単に見過ぎてゐる胡適

	(342) 古代 ₁₂	(115) さて前へ戻つて、 古代 ₁₂	同じ	同じ
	(342) 12 ₁₂	(115) 動靜 ₁₂	同じ	同じ
	12 _同	(116) (三十三歳)	同じ	(90) (三十二歳)
				(74) (三十三才)

第五章 呐喊（一）

	(343) 民国七年に入つてのこと、或る日銭玄同が紹興会館の魯迅の寓居を訪れ、「新青年」に小説執筆をすすめた。	(119) 民国六年夏、魯迅の旧友銭玄同が魯迅を紹興会館の寓居を訪れ、「新青年」に小説執筆をすすめた。魯迅は答へて言つた。「たとへばどこにも窓がなく、どうしても壊すことが出来ない鐵の部屋の内到大勢の人が熟睡してゐるとする、やがてみんなは悶死するだらう。併しそれは昏睡から死滅に入るのだから決して死の悲哀は感じない。それを今君が大声をあげていくらか目の覚めかかつてゐる幾人かを醒めさせれば、この不幸な少数者に救ひやうのない臨終の苦しみを受けさせることになる。君はそれでも彼等に気の毒とは思はないか」／「併し幾人かはすでに起き上つたとしたなら、君はこの鐵部屋を打ち壊せる希望が全然無いと	(93) 民国六年夏、魯迅の旧友銭玄同が魯迅を紹興会館の寓居を訪れ、「新青年」に小説執筆をすすめた。魯迅は答へて言つた。「たとへばどこにも窓がなく、どうしても壊すことの出来ない鐵の部屋の内到大勢の人が熟睡してゐるとする、やがてみんなは悶死するだらう。併しそれは昏睡から死滅に入るのだから決して死の悲哀は感じない。それを今君が大声をあげていくらか目の覚めかかつてゐる幾人かを醒めさせれば、この不幸な少数者に救ひやうのない臨終の苦しみを受けさせることになる。君はそれでも彼等に気の毒とは思はないか」／「併し幾人かはすでに起き上つたとしたなら、君はこの鐵部屋を打ち壊せる希望が全然無いとは	同じ	(76) 民国六年夏、魯迅の旧友銭玄同が魯迅を紹興会館の寓居を訪れ、「新青年」に小説執筆をすすめた。魯迅は答へて言つた。「たとへばどこにも窓が無く、どうしても壊すことのできない鐵の部屋の内到大勢の人が熟睡してゐるとする、やがてみんなは悶死するだらう。併しそれは昏睡から死滅に入るのだから決して死の悲哀は感じない。それを今君が大声をあげていくらか目の覚めかかつてゐる幾人かを醒めさせれば、この不幸な少数者に救ひやうのない臨終の苦しみを受けさせることになる。君はそれでも彼等に気の毒とは思はないか」／「併し幾人かはすでに起き上つたとしたなら、君はこの鉄部屋を打ち壊せる希望が全然無いとは

の説に不賛成を表明してゐる。

の説に不賛成を表明してゐる。

<p>(343) それに心じて魯迅の筆名に依て最初の小説(厳密には初めてではなく民国革命の成つた前年、故郷にゐた当時ある金持をモデルに、革命前夜を扱つた諷刺的作品を書き、二三年後に周作人の手を経て「小説月報」に載せられたことがある。)</p> <p>「狂人日記」を書いた。もちろん白話に依つたもので、「新青年」第五巻第五号に発表された。</p>	<p>(343) この作品の精神は甚だしく雑誌「新青年」の精神とマツチしてゐた。「新青年」がデモクラシーと科学精神とに依て礼教道徳に誤り、またれた長い伝統の封建的旧社会かからの解放を目指してゐたのに対し、彼の小説も礼教攻撃に根本精神があつた。その限りに於ては彼の思想は必ずしも独特なものではなかつた。</p>	<p>(120) この小説は家族制度と礼教攻撃に根本精神があり、その意味では甚だしく「新青年」の精神とマツチしてゐるものであつた、と同時に必ずしも独特の思想のものではなかつた。</p>	<p>(343) それに心じて魯迅の筆名に依て最初の小説(厳密には初めてではなく民国革命の成つた前年、故郷にゐた当時ある金持をモデルに、革命前夜を扱つた諷刺的作品を書き、二三年後に周作人の手を経て「小説月報」に載せられたことがある。)</p> <p>「狂人日記」を書いた。もちろん白話に依つたもので、「新青年」第五巻第五号に発表された。</p>
<p>(343) 彼は併しさういふイデオロギーの下に書き乍らもイデオロギーを「イデオロギー」として決して生のままに出さなかつたし、説明的文章も全然用ゐず、狂人の感情、神経に全篇を収斂して立派に芸術作品に仕上げてゐた。</p>	<p>(120) ただ魯迅はさういふ明確なイデオロギーのもとに書き乍らもイデオロギーを「イデオロギー」として決して生のままに出さなかつたし、説明的文章も全然用ゐず、狂人の感情、神経に全篇を収斂して立派にこれを芸術作品に仕上げてゐた。</p>	<p>(120) ただ魯迅はさういふ明確なイデオロギーのもとに書き乍らもイデオロギーを「イデオロギー」として決して生のままに出さなかつたし、説明的文章も全然用ゐず、狂人の感情、神経に全篇を収斂して立派にこれを芸術作品に仕上げてゐた。</p>	<p>は言ひ得ない」 銭玄同は答へた。</p>
<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(97) 翌年魯迅は魯迅といふ筆名を使い最初の短篇小説(厳密には小説執筆は初めてではなく、郷里の教員時代に書いたことは既述の通り)「狂人日記」を書いた。もちろん白話によつたもので、「新青年」第五巻第五号に発表された。</p>	<p>言ひ得ない」 銭玄同は答へた。</p>
<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(93) 翌年魯迅は魯迅(魯は母親の実家の姓であつた)といふ筆名を使い最初の短篇小説(厳密には小説執筆は初めてではなく、郷里の教員時代に書いたことは既述の通り)「狂人日記」を書いた。もちろん白話によつたもので、「新青年」第五巻第五号に発表された。</p>	<p>言ひ得ない」 銭玄同は答へた。</p>
<p>同じ</p>	<p>(76) この小説は家族制度と礼教攻撃に根本精神があり、その意味では甚だしく「新青年」の精神とマツチしてゐるものであつた、と同時に必ずしも独特の思想のものではなかつた。</p>	<p>(76) 翌年魯迅は魯迅といふ筆名を使い最初の短篇小説(厳密には小説執筆は初めてではなく、郷里の教員時代に書いたことは既述の通り)「狂人日記」を書いた。もちろん白話によつたもので、「新青年」第五巻第五号に発表された。</p>	<p>言ひ得ない」 銭玄同は答へた。</p>

<p>(343)この作品については彼自らそれ迄に読んだ百篇ほどの外国作品と少しばかりの医学知識だけが拠り所であつたと告白してゐるが、その題名から言つても、著想から言つても、殊に彼がゴーゴリが好きであつた点などから考へ合はせてゴーゴリの「狂人日記」にヒントを得てゐるのではないかなどとも私には臆測せられない。</p>	<p>(28)この作については、それ迄に読んだ百篇ほどの外国作品と少しばかりの医学知識だけが拠り所であつたと彼自身告白してゐるが、その題名、著想から、殊に彼がゴーゴリ愛好者であつたことも思ひ合はせてゴーゴリの「狂人日記」にヒントを得てゐたことはたしかであらう。</p>	<p>(97)この作については、それ迄に読んだ百篇ほどの外国作品と少しばかりの医学知識だけが拠り所であつたと彼自身告白してゐるが、その題名、著想から、殊に彼がゴーゴリ愛好者であつたことも思ひ合はせてゴーゴリの「狂人日記」にヒントを得てゐたことはたしかであらう。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(72)この作については、それ迄に読んだ百篇ほどの外国小説と少しばかりの医学知識だけが拠りどころであつたと彼自身告白してゐるが、その題名、著想から、殊に彼がゴーゴリ愛好者であつたことも思ひ合はせてゴーゴリの「狂人日記」にヒントを得てゐたことはたしかであらう。</p>
<p>(343)よいといふだけの問題ではなく、白話小説の最初の傑作といふ点で二重の</p>	<p>(12)よかつたからといふだけの問題ではなく、白話小説の最初の佳作といふ点で二重</p>	<p>(95)よかつたからといふだけの問題ではなく、白話小説の最初の佳作といふ点で、二重</p>	<p>に同じ</p>	<p>(71)良かつたからというだけの問題ではなく、白話小説の最初の佳作という点で二重</p>
<p>(343)彼は白話文学</p>	<p>(12)彼はじつに白話文学</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(343)発足</p>	<p>(12)発足</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>に同じ</p>	<p>(12)ならばこれが</p>	<p>(95)ならば、これが</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(343)第四の</p>	<p>(12)第四回の</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(12)時に齡三十八歳、医専を止めて文学運動に志してから十二年目であつた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(77)時に齡三十八才、医専を止めて文学運動に志してから十二年目であつた。</p>
<p>(343) 以来魯迅は求められるままに次々と小説を書きつづけ、</p>	<p>(12) これをきつかけとして魯迅は次々に小説を書きつづけ、</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(77) これをきつかけとして魯迅は次々に小説を書きつづけ</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(12)同時に随筆をもさかんに書き出したが、忘れてはならないのは魯迅はあくま</p>	<p>(95)同時に随筆をもさかんに書き出したが、忘れてはならないのは魯迅はあくま</p>	<p>に同じ</p>	<p>(77)同時に随筆をもさかんに書き出したが、忘れてはならないのは魯迅はあくま</p>

(34) さて、文学革命が初

(35) 彼が初めて小説を

(36) 彼が初めて小説を

(37) 彼が初めて小説を

(38) 彼が初めて小説を

めて唱へられた民国六年頃
に比べると、阿Q正伝の
出た民国十年頃には僅かの
間に支那新文化界も見違へ
る程活気を加へて来てゐる
ので、それについての民国
十年前後の概観を一応この
あたりでする必要がありさ
うだ。／＼民国八年五月四日
に起つた所謂五回運動こそ
はこの新文化運動を大きく
推進させる基ともなつた特
筆すべき大事件であつた。
急進的な青年学生たちの為
政者にたいする不満反感が
ヴェルサイユ会議に出席の
支那代表にたいして政府が
山東譲渡を認めるやうに打
電したとのニュースが公表
されたのを機会に大きく爆
発して、北京十三大学の学
生団による大デモンストレ
ーションが行はれ、この学
生隊は、親日派の大臣曹汝
霖の邸宅を襲つて、折柄来

でも支那人性改革といふ
ことにその執筆の根本目標
を置いてゐたことである。そ
れ故魯迅は何等か文学上
の仕事によつてこの目標に
沿ひたいといふ気持はこれ
までの数年間の沈黙生活の
うちにも必ずしも絶滅して
ゐたわけでは無いと思は
れるが、併し小説家になら
うといふ意欲や野心が明確
に彼にあつたとは思はれな
い。

でも支那人性改革といふこ
とにその執筆の根本目標を
置いてゐたことである。そ
れ故魯迅は何等か文学上の
仕事によつてこの目標に沿
ひたいといふ気持は、これ
までの数年間の沈黙生活の
うちにも必ずしも絶滅して
ゐたわけでは無いと思は
れるが、併し小説家になら
うといふ意欲や野心が明確
に彼にあつたとは思はれな
い。

でも支那人性改革といふこ
とにその執筆の根本目標を
置いてゐたことである。そ
れ故魯迅は何等か文学上の
仕事によつてこの目標に沿
ひたいといふ気持は、これ
までの数年間の沈黙生活の
うちにも必ずしも絶滅して
ゐたわけでは無いと思は
れるが、併し小説家になら
うといふ意欲や野心が明確
に彼にあつたとは思はれな
い。

でも支那人性改革というこ
とにその執筆の根本目標を
置いてゐたことである。そ
れ故魯迅は何等か文学上の
仕事によつてこの目標に沿
ひたいといふ気持はこれ迄
の数年間の沈黙生活のうち
にも必ずしも絶滅してい
た訳では無いと思われるが、
併し小説家にならうとい
ふ意欲や野心が明確に彼
にあつたとは思われない。

(34) さて、文学革命が初
めて唱へられた民国六年頃
に比べると、阿Q正伝の
出た民国十年頃には僅かの
間に支那新文化界も見違へ
る程活気を加へて来てゐる
ので、それについての民国
十年前後の概観を一応この
あたりでする必要がありさ
うだ。／＼民国八年五月四日
に起つた所謂五回運動こそ
はこの新文化運動を大きく
推進させる基ともなつた特
筆すべき大事件であつた。
急進的な青年学生たちの為
政者にたいする不満反感が
ヴェルサイユ会議に出席の
支那代表にたいして政府が
山東譲渡を認めるやうに打
電したとのニュースが公表
されたのを機会に大きく爆
発して、北京十三大学の学
生団による大デモンストレ
ーションが行はれ、この学
生隊は、親日派の大臣曹汝
霖の邸宅を襲つて、折柄来
(35) 彼が初めて小説を
発表した年の翌年民国八年
五月四日に所謂「五四運動」
が起つた。運動は政府がヴ
エルサイユ会議に出席の支
那代表にたいして山東譲渡
を認めるやうに打電したと
のニュースが公表されたの
を機会に勃発したのであつ
たが、結局はそれを口火と
して急進的な青年学生たち
の為政者にたいするかねが
ねの不満が爆発したもので、
北京十三大学の学生団によ
つて大デモンストレー
ションが行はれ、この学生
隊は遂に親日派の大臣曹汝
霖の邸宅を襲ひ、曹は早く
も逃走したが、折柄来合せ
せてみ逃げおくれた樽の中
にかくれた駐日公使章宗祥
をひきずり出して鞭うち、
更に家屋や家具を破壊した
上に、邸宅に火を放つにま
で至つた。／＼この運動は全
國的に絶大な支持を受け、学
(36) 彼が初めて小説を
発表した年の翌年民国八年五
月四日に所謂「五四運動」
がおこつた。運動は政府が
ヴェルサイユ会議に出席の
中国代表にたいして山東讓
渡を認めるやうに打電した
のを機会に勃発したのであ
つたが、結局はそれを口火
として急進的な青年学生た
ちの為政者にたいするかね
がねの不満が爆発したもの
で、北京十三大学の学生団
によつて大デモンストレー
ションが行はれ、この学生
隊は遂に親日派の大臣曹汝
霖の邸宅を襲ひ、曹は早く
も逃走したが、折柄来合せ
せてみ逃げおくれた樽の中
にかくれた駐日公使章宗祥
をひきずり出して鞭うち、
更に家屋や家具を破壊した
上に、邸宅に火を放つにま
で至つた。／＼この運動は全
國的に絶大な支持を受け、学
(37) 彼が初めて小説を
発表した年の翌年民国八年五
月四日に所謂「五四運動」
が起つた。運動は政府がヴ
エルサイユ会議に出席の中
国代表にたいして山東讓渡
を認めるやうに山東讓渡
を認めるやうに打電したと
のニュースが公表されたの
を機会に勃発したのであつ
たが、結局はそれを口火とし
て急進的な青年学生たちの
為政者に対するかねがねの
不満が爆発したもので、北
京十三大学の学生団によつ
て大デモンストレーション
が行はれ、この学生隊は遂
に親日派の大臣曹汝霖の
邸宅を襲ひ、曹は早くも逃
走したが、折柄来合せて
い、逃げおくれた樽の中
にかくれた駐日公使章宗祥
をひきずり出して鞭うち、
更に家屋や家具を破壊した
上に、邸宅に火を放つにま
で至つた。／＼この運動は全
國的に絶大な支持を受け、学
(38) 彼が初めて小説を
発表した年の翌年民国八年五
月四日に所謂「五四運動」
が起つた。運動は政府がヴ
エルサイユ会議に出席の支
那代表に対して山東讓渡を
認めるやうに打電したとの
ニュースが公表されたのを
機会に勃発したのであつた
が、結局はそれを口火とし
て急進的な青年学生たちの
為政者に対するかねがねの
不満が爆発したもので、北
京十三大学の学生団によつ
て大デモンストレーション
が行はれ、この学生隊は遂
に親日派の大臣曹汝霖の
邸宅を襲ひ、曹は早くも逃
走したが、折柄来合せて
い、逃げおくれた樽の中
にかくれた駐日公使章宗祥
をひきずり出して鞭うち、
更に家屋や家具を破壊した
上に、邸宅に火を放つにま
で至つた。／＼この運動は全
國的に絶大な支持を受け、学

<p>合はせてゐ、逃げ遅れて樽の中にかくれた駐日公使章宗祥をひきずり出して鞭うち、又家屋や家具を破壊した上に、遂に邸宅に火を放つた。この運動は全国的に支持を受け、曹、章等は解職されて学生側の完全な勝利に帰した。この勝利の感銘が支那学生の心に長く刻印せられてその後も事ある毎に学生運動勃発の因となつたが、彼等がいかにこの勝利の意味を重大視してゐたかは後に彼等がこの運動を指して「支那のルネッサンス」と称したことに依つても知られるであらう。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>
<p>(345) この年には「新青年」の友軍として雑誌「新潮」が創刊され、又同じく文化雑誌「少年中国」の創刊もあり、民国十年には魯迅、周作人、葉紹鈞、沈雁氷（後に茅盾の筆名による）謝冰心女士、落華生、鄭振鐸等をメンバーとして「文学研究会」が結成せられ、「人生のための芸術」の旗じるし</p>	<p>(123) この年には「新青年」の友軍として雑誌「新潮」が創刊され、又同じく文化雑誌「少年中国」の創刊もあり、次いで民国十年には魯迅、周作人、葉紹鈞、沈雁氷（後に茅盾の筆名による）謝冰心女士、落華生、鄭振鐸等をメンバーとして「文学研究会」が結成せられ、「人生のための芸術」</p>	<p>(97) この年には「新青年」の友軍として雑誌「新潮」が創刊され、また同じく文化雑誌「少年中国」の創刊もあり、次いで民国十年には魯迅、周作人、葉紹鈞、沈雁氷（後に茅盾の筆名による）謝冰心女士、落華生、鄭振鐸等をメンバーとして「文学研究会」が結成せられ、「人生のための芸術」</p>	<p>(96) この年には「新青年」の友軍として雑誌「新潮」が創刊され、又同じく文化雑誌「少年中国」の創刊もあり、次いで民国十年には魯迅、周作人、葉紹鈞、沈雁氷（後に茅盾の筆名による）謝冰心女士、落華生、鄭振鐸等をメンバーとして「文学研究会」が結成せられ、「人生のための芸術」</p>	<p>(78) この年には「新青年」の友軍として雑誌「新潮」が創刊され、又同じく文化雑誌「少年中国」の創刊もあり、次いで民国十年には魯迅、周作人、葉紹鈞、沈雁氷（後に茅盾の筆名による）謝冰心女士、落華生、鄭振鐸等をメンバーとして「文学研究会」が結成せられ、「人生のため</p>
<p>界未曾有の混乱が捲き起されたが、結果は曹汝霖、章宗祥等の解職となり学生側の完全な勝利に帰した。この勝利の感銘が中国学生の心に長く刻印せられてその後も事ある毎に学生運動勃発の因となつたが、彼等がいかにこの勝利の意味を重大視してゐたかは後に彼等がこの運動を指して「中国のルネッサンス」と称したことに依つても知られるであらう。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>

の下に「小説月報」に拠つて華々しい活動が始められ、続いて翌年にはこれに対抗して「芸術至上主義」を標榜する郭沫若、郁達夫、張資平、成仿吾をムムバーとする「創造社」が上海に成立する等のことあり、一方民国九年にはすでに北京大学を退いた陳独秀に依つて新文化は決河の勢で支那社会に氾濫するに至つた。

(343) 民国十年四十一歳の年、「晨报副刊」に巴人といふ筆名で後に世界的名声を博するに至つた「阿Q正伝」を連載した。

(343) この作品について言ふべきことは多い。が、今はそれにゆつくり触れてゐられない。

をムットーに「小説月報」に拠つて華々しい活動が始められ、続いて翌年にはこれに対抗して「芸術至上主義」を標榜する郭沫若、郁達夫、張資平、成仿吾(すべて日本留学生出身)をムムバーとする「創造社」が上海に成立する等のことあり、一方民国九年にはすでに北京大学を退いた陳独秀によつて新文化は決河の勢で支那社会に氾濫するに至つた。／かういふ空気の中で魯迅の制作がつづけられた。

(24) 中で民国十年「晨报副刊」に巴人といふ筆名で連載した中篇小説「阿Q正伝」が轟々の反響を惹き起した。(これは後に各国語に翻訳され世界的に知られると同時に魯迅の名を不朽なものとした)

(24) 阿Qは一言にして言へば支那人の代名詞である。支那四千年の伝統がつくり上げた一個の悲しむべき性格である。自大にして事大、反省心も無ければ意志も無く、ただ囚襲の慣例と目前の利益に左右される甚だしく貧しい、頹廢的民族性を象徴した一つの人格である。／阿Qの描き方には一種の諷刺的手法があり、この作品は諷刺を旨指

をムットーに「小説月報」に拠つて華々しい活動が始められ、続いて翌年にはこれに対抗して「芸術至上主義」を標榜する郭沫若、郁達夫、張資平、成仿吾(すべて日本留学生出身)をムムバーとする「創造社」が上海に成立する等のことあり、一方民国九年にはすでに北京大学を退いた陳独秀によつて新文化は決河の勢で中国社会に氾濫するに至つた。／かういふ空気の中で魯迅の制作がつづけられた。

(98) 中で民国十年「晨报副刊」に巴人といふ筆名で連載した中篇小説「阿Q正伝」が轟々の反響を捲き起した。(これは後に各国語に翻訳され世界的に知られると同時に魯迅の名を不朽なものとした)

(98) 阿Qは一言にして言へば中国人の代名詞である。中国四千年の伝統がつくり上げた一個の悲しむべき性格である。自大にして事大、反省心も無ければ意志も無く、ただ囚襲の慣例と目前の利益に左右される甚だしく貧しい、頹廢的民族性を象徴した一つの人格である。／阿Qの描き方には一種の諷刺的手法があり、この作品は諷刺を旨指

をムットーに「小説月報」に拠つて華々しい活動が始められ、続いて翌年にはこれに対抗して「芸術至上主義」を標榜する郭沫若、郁達夫、張資平、成仿吾(すべて日本留学生出身)をムムバーとする「創造社」が上海に成立する等のことあり、一方民国九年にはすでに北京大学を退いた陳独秀によつて新文化は決河の勢で中国社会に氾濫するに至つた。／かういふ空気の中で魯迅の制作がつづけられた。

同じ

(97) 阿Qは一言にして言へば中国人の代名詞である。中国四千年の伝統と歴史がつくり上げた一個の悲しむべき性格である。自大にして事大、反省心も無ければ意志も無く、ただ囚襲の慣例と目前の利益に左右される甚だしく貧しい、頹廢的奴隸的民族性を象徴した一つの人格である。／阿Qの描き方には一種の諷刺的手法があり、この作品は

(97) 阿Qは一言にして言へば中国人の代名詞である。支那四千年の伝統が作り上げた一個の悲しむべき性格である。自大にして事大、反省心も無ければ意志も無く、ただ囚襲の慣例と目前の利益に左右される甚だしく貧しい、頹廢的民族性を象徴した一つの人格である。／阿Qの描き方には一種の諷刺的手法があり、この作品は諷刺を旨指した作

の芸術」をムットーに「小説月報」に拠つて華々しい活動が始められ、続いて翌年にはこれに対抗して「芸術至上主義」を標榜する郭沫若、郁達夫、張資平、成仿吾(すべて日本留学生出身)をムムバーとする「創造社」が上海に成立する等のことあり、一方民国九年にはすでに北京大学を退いた陳独秀によつて新文化は決河の勢で支那社会に氾濫するに至つた。／かういふ空気の中で魯迅の制作がつづけられた。

(79) 中で民国十年「晨报副刊」に巴人といふ筆名で連載した中篇小説「阿Q正伝」が轟々の反響を惹き起した。(これは後に各国語に翻訳され世界に知られると同時に魯迅の名を不朽なものとした)

(79) 阿Qは一言にして言へば支那人の代名詞である。支那四千年の伝統が作り上げた一個の悲しむべき性格である。自大にして事大、反省心も無ければ意志も無く、ただ囚襲の慣例と目前の利益に左右される甚だしく貧しい、頹廢的民族性を象徴した一つの人格である。／阿Qの描き方には一種の諷刺的手法があり、この作品は諷刺を旨指した作

(15) ただ魯迅の「阿Q成因」といふ文章の中に引用されてある高一涵の文章の一節がこの作品の一つの性格を語つてゐて面白いから紹介することにしよう。「私は阿Q正伝が一とくさりづつ次に発表された時のことを憶えてゐるが、多くの人は皆やがて罵倒が自分の頭上に来はしないかとびくびくしてゐたものだ。現にある友人などは私に面と向つて、昨日の阿Q正伝のあるくだりは彼自身を罵倒してゐるらしいと言ひ、そんなわけでは阿Q正伝は何某の作に違ひないと言ひ、その秘密を知つてゐるのはその何某だけであるからであり、そこから疑心暗鬼を生じ、凡そ阿Q正伝中に罵られてゐることは悉く彼の秘密だと思ふのであつた。」

した作品と見られ易いが、事實は愛情を底に秘めた冷徹なりアリズムに終始してゐる作品であり、リアリスティックに書かれれば書かれる程阿Qの特殊な性格が作品に諷刺的外貌を帯びさせるのである。が、若し眞の諷刺といふものがリアリズムに徹したところならばこの作品もたしかに眞正の意味での諷刺作品ではあらう。

(16) 魯迅の「阿Q成因」といふ文章の中に高一涵の文章の一節が引用されてゐるが、この作品の一つの性格を語つてゐて面白い。「私は阿Q正伝が一とくさりづつ次に発表された時のことを憶えてゐるが、多くの人は皆やがて罵倒が自分の頭上に来はしないかとびくびくしてゐたものだ。現にある友人などは私に面と向つて、昨日の阿Q正伝のあるくだりは彼自身を罵倒してゐるらしいと言ひ、そんなわけでは阿Q正伝は何某の作に違ひないと言ひ、その秘密を知つてゐるのはその何某だけであるからであり、そこから疑心暗鬼を生じ、凡そ阿Q正伝中に罵られてゐることは悉く彼の秘密だと思ふのであつた。」

した作品と見られ易いが、事實は愛情を底に秘めた冷徹なりアリズムに終始してゐる作品であり、リアリスティックに書かれれば書かれる程阿Qの特殊な性格が作品に諷刺的外貌を帯びさせるのである。が、若し眞の諷刺といふものがリアリズムに徹したところならばこの作品もたしかに眞正の意味での諷刺作品ではあらう。

(17) この「阿Q正伝」が発表された当時、多くの人は皆やがて罵倒が自分の頭上に来はしないかとびくびくし、又、昨日の阿Q正伝のあるくだりは彼自身を罵倒してゐるらしいと言ひ、そんなわけでは阿Q正伝は何某の作に違ひない、何故なら彼のその秘密を知つてゐるのは何某だけだからだと思ふ状態だ、殆んどあらゆる人が戦々競々としてゐたといふことだが、それほどにもこの作品はあらゆる中国人の急所を衝いてゐた。昨日までの旧中国人の姿だなどと安閑としてゐるなさい、きつ先きは新中国人として得々としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじまつた人性及び国民性の追求がここにはじめて大きく

諷刺を指摘した作品と見られ易いが、事實は愛情を底に秘めた冷徹なりアリズムに終始してゐる作品であり、リアリスティックに書かれれば書かれる程阿Qの特殊な性格が作品に諷刺的外貌を帯びさせるのである。が、若し眞の諷刺といふものがリアリズムに徹したところならばこの作品もたしかに眞正の意味での諷刺作品ではあらう。

(18) 魯迅の「阿Q成因」といふ文章の中に高一涵の文章の一節が引用されてゐるが、この作品の一つの性格を語つてゐて面白い。「私は阿Q正伝が一とくさりづつ次に発表された時のことを憶えてゐるが、多くの人は皆やがて罵倒が自分の頭上に来はしないかとびくびくしてゐたものだ。現にある友人などは私に面と向つて、昨日の阿Q正伝のあるくだりは彼自身を罵倒してゐるらしいと言ひ、そんなわけでは阿Q正伝は何某の作に違ひないと言ひ、その秘密を知つてゐるのはその何某だけであるからであり、そこから疑心暗鬼を生じ、凡そ阿Q正伝中に罵られてゐることは悉く彼の秘密だと思ふのであつた。」

品と見られ易いが、事實は愛情を底に秘めた冷徹なりアリズムに終始してゐる作品であり、リアリスティックに書かれれば書かれる程阿Qの特殊な性格が作品に諷刺的外貌を帯びさせるのである。が、若し眞の諷刺といふものがリアリズムに徹したところならばこの作品もたしかに眞正の意味での諷刺作品ではあらう。

(19) 魯迅の「阿Q成因」といふ文章の中に高一涵の文章の一節が引用されてゐるが、この作品の一つの性格を語つてゐて面白い。「私は「阿Q正伝」が一とくさりづつ次に発表された時のことを憶えてゐるが、多くの人は皆やがて罵倒が自分の頭上に来はしないかとびくびくしてゐたものだ。現にある友人などは私に面と向かつて、昨日の「阿Q正伝」のあるくだりは彼自身を罵倒してゐるらしいと言ひ、そんなわけでは阿Q正伝は何某の作に違ひないと言ひ、その秘密を知つてゐるのはその何某だけであるからであり、そこから疑心暗鬼を生じ、凡そ「阿Q正伝」中に罵られてゐることは悉く彼の秘密だと思ふのであつた。」

程にもこの作品はあらゆる支那人の急所を衝いてゐたのであつた。彼が初めて東京へわたつた頃からはじめて新支那人として得得としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじめてた人性及国民性の追求がここには魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

あらゆる支那人の急所を衝いてゐた。昨日までの旧支那人の姿だなどと安閑としてゐられない、きつ先きは新支那人として得得としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじめてた人性及国民性の追求がここには魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

(126) 同じ頃に彼は「故郷」といふ作品を書いてゐるが、それは民国八年十二月に故郷の家をたたむために帰郷した時の経験を綴つたものらしく、その中に本篇第一章で記した潤土との再会のこと記されてゐる。彼は書いてゐる。

「該当箇所なし」

「該当箇所なし」

花開いたわけではある。そこに魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

あらゆる中国人の急所を衝いてゐた。昨日までの旧中国人の姿だなどと安閑としてゐられない、きつ先きは新中国人として得得としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじめてた人性及国民性の追求がここには魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

(96) 同じ頃に彼は「故郷」といふ作品を書いてゐるが、それは民国八年十二月に故郷の家をたたむために帰郷した時の経験を綴つたもので、その中に本篇第一章で記した潤土との再会のこと記されてゐる。

(96) 彼は身の丈が倍くらゐになり、以前の丸々とした紅い頬が灰色がかつた黄色になり、その上大そう深い皺が出来てゐた。目は彼の父つあんによく似てゐて、ぐるりが腫れぼつたぐるりが腫れぼつたぐるりになつてゐる。頭にフェルトのきたない帽子を冠り、身には一枚の極く薄い綿入れをまとひ、体はすつかりちぢこまつてゐた。手には一つの紙包と一本の長い煙管

同じ

同じ

あらゆる中国人の急所を衝いてゐた。昨日までの旧中国人の姿だなどと安閑としてゐられない、きつ先きは新中国人として得得としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじめてた人性及国民性の追求がここには魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

(80) 同じ頃に彼は「故郷」といふ作品を書いてゐるが、それは民国八年十二月に故郷の家をたたむために帰郷した時の経験を綴つたものらしく、その中に本篇第一章で記した潤土との再会のこと記されている。彼は書いてゐる。

この作品はあらゆる支那人の急所を衝いてゐた。昨日までの旧支那人の姿だなどと安閑としてゐられない、きつ先きは新支那人として得得としてゐる人たちの心臓をも強く刺し通すのであつた。あの彼が初めて東京へわたつた頃からはじめてた人性及国民性の追求がここには魯迅の作家力量の大成が見られると同時に国家と国民を一身に抱擁した人間的偉大さがあつた。

(80) 彼は身の丈が倍くらゐになり、以前の丸々とした紅い頬が灰色がかつた黄色になり、その上大そう深い皺が出来てゐた。目は彼の父つあんによく似てゐて、ぐるりが腫れぼつたぐるりが腫れぼつたぐるりになつてゐる。これは海辺で耕作する人は終日潮風に吹かれるので大抵こんなになるのだとは自分も知つてゐる。彼は頭にフェルトのきたない帽子を冠り、

<p>「該当箇所なし」</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	
<p>(128) 後に魯迅が彼に暮し向きのことを訊ねた。彼は頭をふつて言った。「とても心でえものです。六番目の子供までが手助けしてありますが、それでもうまく食つていけません……それに世の中もよく治まつてゐないものだから……どの方面でも銭はとられるし、き</p>	<p>(128) 「や、閩さんか、よく来たな」魯迅は言つたが、閩土は固苦しい態度で、「旦那さま」と言つた。それから後ろの子供の方を振り返つて、「水生や、旦那さまに頭を下げないかい」と言ひ、少し顔色が悪く、痩せて、頸に銀の輪飾りは無かつたが二十年前の閩土そつくりの子供を曳き出した。彼は又言つた。「大奥様、お便り頂戴して有難うございました。私はいもうれしくて仕様がな</p>	<p>り、身には一枚の極く薄い綿入れをまとひ、体はすつかりちぢこまつてゐた。手には一つの紙包と一本の長い煙管とを持つてゐた。その手も、私の憶えてゐる血色のいい丸々と肥えたものではなく、<i>yellowish</i>に荒れ、ひび破れて松の木の皮のやうであつた。」</p>
<p>(129) 後に魯迅が彼に暮し向きのことを訊ねると、彼は頭をふつて言った。「とても心でえものです。六番目の子供までが手助けしてありますが、それでもうまく食つていけません……それに世の中もよく治まつてゐないものだから……どの方面でも銭はとられるし、き</p>	<p>(129) 「や、閩さんか、よく来たな」魯迅は言つたが、閩土は固苦しい態度で、「旦那さま」と言つた。それから後ろの子供の方を振り返つて、「水生や、旦那さまに頭を下げないかい」と言ひ、少し顔色が悪く、痩せて、頸に銀の輪飾りは無かつたが二十年前の閩土そつくりの子供を曳き出した。彼は又言つた。「大奥様、お便り頂戴して有難うございました。私はいもうれしくて仕様がな</p>	<p>とを持つてゐた。その手も、魯迅が憶えてゐる血色のいい丸々と肥えたものではなく、さらさら荒れ、ひび破れて松の木の皮のやうであつた。」</p>
<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	
<p>(130) 後に魯迅が彼に暮し向きのことを訊ねた。彼は頭をふつて言った。「とても心でえものです。六番目の子供までが手助けしてありますが、それでもうまく食つていけません……それに世の中もよく治まつてゐないものだから……どの方面でも銭はとられるし、き</p>	<p>(130) 「や、閩さんか、よく来たな」魯迅は言つたが、閩土は固苦しい態度で、「旦那さま」と言つた。それから後ろの子供の方を振り返つて、「水生や、旦那さまに頭を下げないかい」と言ひ、少し顔色が悪く、痩せて、頸に銀の輪飾りは無かつたが二十年前の閩土そつくりの子供を曳き出した。彼は又言つた。「大奥様、お便り頂戴して有難うございました。私はいもうれしくて仕様がな</p>	<p>身には一枚の極く薄い綿入れをまとい、体はすつかりちぢこまつていた。手には一つの紙包と一本の長い煙管とを持つていた。その手も、私の憶えている血色のいい丸々と肥えたものではなく、さらさら荒れ、ひび破れて松の木の皮のやうであつた。」</p>

「該当箇所なし」	「該当箇所なし」	
(129) この帰郷の後で魯	<p>(128) 魯迅は作品の終りの方に書いてある。「私は身を横へて船底にじやぶじやぶと当る水音を聴きながら、自分は自分の路を進みつつあることを感じた。私は思った、私は閩土とは竟にこんなにかげ隔てられてしまったのだ。だが私たちの後輩にしてもやはり同じで、現に宏児（魯迅の甥）はいま水生のことを思っているではないか。私は再び彼等が私に似ないやうに、また、お互に隔てが出来ないやうに希望する……けれども私は又彼等と同じやうになるとしても、決して私のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることを願はないし、又決して閩土のやうな苦しい麻痺の生活をするやうになることを願はない。またその他の人々のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることも願はない。彼等は新しい、私たちがまだ見も知らないやうな生活をしなければならぬのだ。」</p>	<p>まつた掟はないし、収穫も駄目ですし、ものを作つてそれを売りに出せば、何度も税金を取立てられて元は切れてしまひ、といつて売らないでは腐らしてしまふだけですし……」</p>
(101) この帰郷の後で魯	<p>(101) こんなふうで、故郷も魯迅にはただ重苦しかつた。自身の苦しい放浪の生活、閩土の苦しい麻痺の生活、その上二人がこんなにかげ隔てられてしまつたことなどから大人の生活に絶望を感じ、せめて仲よく遊び戯れる自身の甥の宏児と閩土の子の水生等子供たちの将来に新しい日の来ることを願ふより外ないのであつた。</p>	<p>まつた掟はないし、収穫も駄目ですし、ものを作つてそれを売りに出せば、何度も税金を取立てられて元は切れてしまひ、といつて売らないでは腐らしてしまふだけですし……」</p>
(101) この帰郷の後で魯	<p>(100) 魯迅は作品の終りの方に書いてある。「私は身を横へて船底にじやぶじやぶと当る水音を聴きながら、自分は自分の路を進みつつあることを感じた。私は思った、私は閩土とは竟にこんなにかげ隔てられてしまったのだ。だが私たちの後輩にしてもやはり同じで、現に宏児（魯迅の甥）はいま水生のことを思っているではないか。私は再び彼等が私に似ないやうに、また、お互に隔てが出来ないやうに希望する……けれども私は又彼等と同じやうになるとしても、決して私のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることを願はないし、又決して閩土のやうな苦しい麻痺の生活をするやうになることを願はない。またその他の人々のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることも願はない。彼等は新しい、私たちがまだ見も知らないやうな生活をしなければならぬのだ。」</p>	<p>(100) 魯迅は作品の終りの方に書いてある。「私は身を横へて船底にじやぶじやぶと当る水音を聴きながら、自分は自分の路を進みつつあることを感じた。私は思った、私は閩土とは竟にこんなにかげ隔てられてしまったのだ。だが私たちの後輩にしてもやはり同じで、現に宏児（魯迅の甥）はいま水生のことを思っているではないか。私は再び彼等が私に似ないやうに、また、お互に隔てが出来ないやうに希望する……けれども私は又彼等と同じやうになるとしても、決して私のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることを願はないし、又決して閩土のやうな苦しい麻痺の生活をするやうになることを願はない。またその他の人々のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることも願はない。彼等は新しい、私たちがまだ見も知らないやうな生活をしなければならぬのだ。」</p>
(82) この帰郷の後で魯迅	<p>(82) 魯迅は作品の終りの方に書いてある。「私は身を横へて船底にじやぶじやぶと当る水音を聴きながら、自分は自分の道を進みつつあることを感じた。私は思った、私は閩土とは竟にこんなにかげ隔てられてしまったのだ。だが私たちの後輩にしてもやはり同じで、現に宏児（魯迅の甥）はいま水生のことを思っているではないか。私は再度彼等が私に似ないやうに、また、お互に隔てが出来ないやうに希望する……けれども私は又彼等と同じやうになるとしても、決して私のやうな苦しい放浪の生活をするやうになることを願われないし、又決して閩土のやうな苦しい麻痺の生活をするやうになることも願わない。彼等は新しい、私たちがまだ見も知らないやうな生活をしなければならぬのだ。」</p>	<p>つた掟はないし、収穫も駄目ですし、ものを作つてそれを売りに出せば何れも税金を取り立てられて元は切れてしまひ、といつて売らないでは腐らしてしまふだけですし……」</p>

<p>「該当箇所なし」</p>	
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(108) 今日ここに周作人一族と共に魯迅の母親や妻が現存して住んでゐる筈である。</p>
<p>(108) この家のことが出たついでに言ふと、盲目詩人エロシエンコがしばらくこの家に魯迅一家の世話になつてゐたことがある。多分民国十一年頃のことと思ふ。漂泊の旅を続けてゐたエロシエンコが日本を追は</p>	<p>迅家一族が移り住むために、その少し前公用庫八道彎の一屋が買はれ、修繕されてすでに魯迅、周作人兄弟に住まはれてゐた。余談にわたるが、この家は今日尚周作人の住居に充てられてゐ、一昨年夏北京に遊んだ折私も一度訪れたことがあるが、その私の記憶によれば、門があつて、門番小屋があつて、又円型の門があつて中庭があつてその奥に主屋がある普通の支那家屋と特別異つたところは無く、特に印象に残つてゐる点と言へば周作人の応接間とその隣の部屋が所狭いまでに内外古今の書籍に埋められてゐたことと、その門前の、大通りから奥まつた道にまるで沙漠を思はせるほどにも厚く砂塵がたまつてゐたことである。</p>
<p>(109) この家のことが出たついでに言ふと、盲目詩人エロシエンコがしばらくこの家に魯迅一家の世話になつてゐたことがある。多分民国十一年頃のことと思ふ。漂泊の旅を続けてゐたエロシエンコが日本を追は</p>	<p>迅家一族が移り住むために、その少し前公用庫八道彎の一屋が買はれ、修繕されてすでに魯迅、周作人兄弟に住まはれてゐた。余談にわたるが、この家は今日尚周作人の住居に充てられてゐ、昭和十四年夏北京に遊んだ折私も一度訪れたことがあるが、その私の記憶によれば、門があつて、門番小屋があつて、又円型の門があつて中庭があつてその奥に主屋がある普通の中国家屋と特別異つたところは無く、特に印象に残つてゐる点と言へば周作人の応接間とその隣の部屋が所狭いまでに内外古今の書籍に埋められてゐたことと、その門前の、大通りから奥まつた道に、まるで沙漠を思はせるほどにも厚く砂塵がたまつてゐたことである。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(82) 今日ここに周作人一族と共に魯迅の母親や妻が現存して住んでゐる筈である。</p>
<p>(82) この家のことが出たついでに言ふと、盲目詩人エロシエンコがしばらくこの家に魯迅一家の世話になつてゐたことがある。多分民国十一年頃のことと思ふ。漂泊の旅を続けてゐたエロシエンコが日本を追は</p>	<p>迅家一族が移り住むために、その少し前公用庫八道彎の一屋が買はれ、修繕されてすでに魯迅、周作人兄弟に住まわれてゐた。余談にわたるが、この家は今日尚周作人の住居に充てられてゐ、一昨年夏北京に遊んだ折私も一度訪れたことがあるが、その私の記憶によれば、門があつて、門番小屋があつて、又円型の門があつて中庭があつてその奥に主屋がある普通の支那家屋と特別異つたところは無く、特に印象に残つてゐる点と言へば周作人の応接間とその隣の部屋が所狭いまでに内外古今の書籍に埋められてゐたことと、その門前の、大通りから奥まつた道にまるで沙漠を思はせるほどにも厚く砂塵がたまつてゐたことである。</p>

れて後北京へ来てこの家に滞在して北京大学の講師となつてゐたのである。エロシエンコには点字を普通の文字に書き下したり、本を読み聞かせる助手が必要だつたのだが、その役には呉克剛が好意的に当り、仕事の性質上やはり魯迅の家に寄寓してゐた。魯迅がそれほどの世話をしたのは彼の親切心にもよるが、エロシエンコが好きだつたのもあらう。／＼エロシエンコは呉克剛を相手に終日読書や労作に従つてゐたが、晩飯の後だけは休息の時間で、その時には彼は七絃琴を奏で乍ら静かにエスプレントの歌をうたつたり、又昔譚でもするやうに自分のふるさとの話から、ヨーロッパ、印度、ヒルマ、日本、さてはアフリカ等諸国の話を楽しさうに呉克剛に物語つた。／＼教育部の勤めを終へて帰り、夕飯を済ませた魯迅も折々この会談に加はり、エロシエンコと魯迅の間では終始日本語を用ゐて話された。／＼この頃魯迅はエロシエンコ等に部屋を提供したためか、前からさうなのか、表門の傍らに続いた小さな、天井の低い部屋を書齋としてゐた。呉克剛の記してゐるところによると、魯迅はその部屋に夜遅くまで机に向つてゐ、エロシエンコも夜の仕事が好き

れて後北京へ来てこの家に滞在して北京大学の講師となつてゐたのである。エロシエンコには点字を普通の文字に書き下したり、本を読み聞かせる助手が必要だつたのだが、その役には呉克剛が好意的に当り、仕事の性質上やはり魯迅の家に寄寓してゐた。魯迅がそれほどの世話をしたのは彼の親切心にもよるが、エロシエンコが好きだつたのもあらう。／＼エロシエンコは呉克剛を相手に終日読書や労作に従つてゐたが、晩飯の後だけは休息の時間で、その時には彼は七絃琴を奏で乍ら静かにエスプレントの歌をうたつたり、又昔譚でもするやうに自分のふるさとの話から、ヨーロッパ、印度、ヒルマ、日本、さてはアフリカ等諸国の話を楽しさうに呉克剛に物語つた。／＼教育部の勤めを終へて帰り、夕飯を済ませた魯迅も折々この会談に加はり、エロシエンコと魯迅の間では終始日本語を用ゐて話された。／＼この頃魯迅はエロシエンコ等に部屋を提供したためか、前からさうなのか、表門の傍らに続いた小さな、天井の低い部屋を書齋としてゐた。呉克剛の記してゐるところによると、魯迅はその部屋に夜遅くまで机に向つてゐ、エロシエンコも夜の仕事が好き

れて後北京へ来てこの家に滞在して北京大学の講師となつてゐたのである。エロシエンコには点字を普通の文字に書き下したり、本を読み聞かせる助手が必要だつたのだが、その役には呉克剛が好意的に当り、仕事の性質上やはり魯迅の家に寄寓してゐた。魯迅がそれほどの世話をしたのは彼の親切心にもよるが、エロシエンコが好きだつたのもあらう。／＼エロシエンコは呉克剛を相手に終日読書や労作に従つてゐたが、晩飯の後だけは休息の時間で、その時には彼は七絃琴を奏で乍ら静かにエスプレントの歌をうたつたり、又昔譚でもするやうに自分のふるさとの話から、ヨーロッパ、印度、ヒルマ、日本、さてはアフリカ等諸国の話を楽しさうに呉克剛に物語つた。／＼教育部の勤めを終へて帰り、夕飯を済ませた魯迅も折々この会談に加はり、エロシエンコと魯迅の間では終始日本語を用ゐて話された。／＼この頃魯迅はエロシエンコ等に部屋を提供したためか、前からさうなのか、表門の傍らに続いた小さな、天井の低い部屋を書齋としてゐた。呉克剛の記してゐるところによると、魯迅はその部屋に夜遅くまで机に向つてゐ、エロシエンコも夜の仕事が好き

れて後北京へ来てこの家に滞在して北京大学の講師となつてゐたのである。エロシエンコには点字を普通の文字に書き下したり、本を読み聞かせる助手が必要だつたのだが、その役には呉克剛が好意的に当り、仕事の性質上やはり魯迅の家に寄寓してゐた。魯迅がそれほどの世話をしたのは彼の親切心にもよるが、エロシエンコが好きだつたのもあらう。／＼エロシエンコは呉克剛を相手に終日読書や労作に従つてゐたが、晩飯の後だけは休息の時間で、その時には彼は七絃琴を奏で乍ら静かにエスプレントの歌をうたつたり、又昔譚でもするやうに自分のふるさとの話から、ヨーロッパ、印度、ヒルマ、日本、さてはアフリカ等諸国の話を楽しさうに呉克剛に物語つた。／＼教育部の勤めを終へて帰り、夕飯を済ませた魯迅も折々この会談に加はり、エロシエンコと魯迅の間では終始日本語を用ゐて話された。／＼この頃魯迅はエロシエンコ等に部屋を提供したためか、前からさうなのか、表門の傍らに続いた小さな、天井の低い部屋を書齋としてゐた。呉克剛の記してゐるところによると、魯迅はその部屋に夜遅くまで机に向つてゐ、エロシエンコも夜の仕事が好き

「該当箇所なし」

なので、時々は呉克剛も夜まで手伝ひ、仕事に倦んだ時二人で中庭へ散歩に出ると、魯迅の部屋には必らず燈火があかあかと輝いてゐ、又深夜に彼が声を立てて本を読んでゐたこともあつたといふ。

なので、時々は呉克剛も夜まで手伝ひ、仕事に倦んだとき二人で中庭へ散歩に出ると、魯迅の部屋には必らず燈火があかあかと輝いてゐ、又深夜に彼が声を立てて本を読んでゐたこともあつたといふ。

なので、時々は呉克剛も夜まで手伝ひ、仕事に倦んだ時二人で中庭へ散歩に出ると、魯迅の部屋には必らず燈火があかあかと輝いてゐ、又深夜に彼が声を立てて本を読んでゐたこともあつたといふ。

で、時々は呉克剛も夜まで手伝ひ、仕事に倦んだ時二人で中庭へ散歩に出ると、魯迅の部屋には必らず燈火があかあかと輝いてゐ、又深夜に彼が声を立てて本を読んでいたこともあつたといふ。

(125) 魯迅は、小説、随筆を書く一方翻訳の仕事にも従つた。武者小路実篤の戯曲「ある青年の夢」、アルツイパーシェフの小説「労働者セベエリヨーフ」、エロシエンコの童話劇「桃色の雲」等がこの時期の翻訳の主なものである。尚拓本の蒐集、研究も相変らず続けてゐ、又民国十一年、十二年にかけて「瑛康集」を校したりした。さういふ様々の仕事の上にも尚民国九年秋から北京大学及び北京高等師範学校に講師となつて支那小説史を講じはじめた。／かういふ有様で、つまり教育部官吏としての仕事(その内容は残念乍ら詳かでない)は除いて、彼の仕事は小説、随筆、翻訳といふひろい意味の文学創作に属するものと、拓本研究並に古小説研究、講義といふ国文学研究に関するものとの二つに分けることが出来た。ところでこの国文学研究に関するものはしばらく措き、小説、随筆、翻訳の方の仕事について言ふ

(127) 魯迅は、小説、随筆を書く一方翻訳の仕事にも従つた。武者小路実篤の戯曲「ある青年の夢」、アルツイパーシェフの小説「労働者セベエリヨーフ」、エロシエンコの童話劇「桃色の雲」等がこの時期の翻訳の主なものである。尚拓本の蒐集、研究も相変らず続けてゐ、又民国十一年、十二年にかけて「瑛康集」を校したりした。さういふ様々の仕事の上にも尚民国九年秋から北京大学及び北京高等師範学校に講師となつて中国小説史を講じはじめた。／かういふ有様で、つまり教育部官吏としての仕事(その内容は残念乍ら詳かでない)は除いて、彼の仕事は小説、随筆、翻訳といふひろい意味の文学創作に属するものと、拓本研究並に古小説研究、講義といふ国文学研究に関するものとの二つに分けることが出来た。ところでこの国文学研究に関するものはしばらく措き、小説、随筆、翻訳の方の仕事について言ふ

(128) 魯迅は、小説、随筆を書く一方翻訳の仕事にも従つた。武者小路実篤の戯曲「ある青年の夢」、アルツイパーシェフの小説「労働者セベエリヨーフ」、エロシエンコの童話劇「桃色の雲」等がこの時期の翻訳の主なものである。尚拓本の蒐集、研究も相変らず続けてゐ、又民国十一年、十二年にかけて「瑛康集」を校したりした。さういふ様々の仕事の上にも尚民国九年秋から北京大学及び北京高等師範学校に講師となつて中国小説史を講じはじめた。／かういふ有様で、つまり教育部官吏としての仕事(その内容は残念乍ら詳かでない)は除いて、彼の仕事は小説、随筆、翻訳といふひろい意味の文学創作に属するものと、拓本研究並に古小説研究、講義といふ国文学研究に関するものとの二つに分けることが出来た。ところでこの国文学研究に関するものはしばらく措き、小説、随筆、翻訳の方の仕事について言ふ

(83) 魯迅は、小説、随筆を書く一方翻訳の仕事にも従つた。武者小路実篤の戯曲「ある青年の夢」、アルツイパーシェフの小説「労働者セベエリヨーフ」、エロシエンコの童話劇「桃色の雲」等がこの時期の翻訳の主なものである。尚拓本の蒐集、研究も相変らず続けてゐ、又民国十一年、十二年にかけて「瑛康集」を校したりした。さういふ様々の仕事の上にも尚民国九年秋から北京大学及び北京高等師範学校に講師となつて支那小説史を講じはじめた。／かういふ有様で、つまり教育部官吏としての仕事(その内容は残念ながら詳かでない)は除いて、彼の仕事は小説、随筆、翻訳といふ広い意味の文学創作に属するものと、拓本研究並に古小説研究、講義といふ国文学研究に関するものとの二つに分けることが出来た。ところでこの国文学研究に関するものはしばらく措き、小説、随筆、翻訳の方の仕事について言ふ

と、それらの仕事は各々形や方式は異つても同じ一つの幹から分れた別々の枝に過ぎず、一貫して底を流れるものはしばしば言つたやうな支那人性改革の欲望であつた。ここで読者は、魯迅は結局は文学を道具に使つた社会改良主義者なのかといふ疑ひを抱かれるかも知れないが、決してさうではなく、彼は押しも押されぬ第一流の小説家であり、芸術家であつた。(ただ彼は小説家・芸術家に止まつてゐなかつただけである)そして私は彼が必らずしも芸術家を志さなかつたのにそのやうに勝れた芸術家であつたことを面白く思ふ。それは一つには言ふまでもなく彼の文学勉強がいかに加減なものでなかつたためであらうが、一つには彼の天性豊富な芸術的天分に由来するものと思ふ。

と、それらの仕事は各々形や方式は異つても同じ一つの幹から分れた別々の枝に過ぎず、一貫して底を流れるものはしばしば言つたやうな支那人性改革の欲望であつた。ここで読者は、魯迅は結局は文学を道具に使つた社会改良主義者なのかといふ疑ひを抱かれるかも知れないが、決してさうではなく、彼は押しも押されぬ第一流の小説家であり、文学者であつた。(ただ彼は小説家・文学者に止まつてゐなかつただけである)そして私は彼が必らずしも芸術家を志さなかつたのにそのやうに勝れた芸術家であつたことを面白く思ふ。それは一つには言ふまでもなく彼の文学勉強がいかに加減なものでなかつたためであらうが、一つには彼の天性豊富な芸術的天分に由来するものと思ふ。

と、それらの仕事は各々形や方式は異つても同じ一つの幹から分れた別々の枝に過ぎず、一貫して底を流れるものはしばしば言つたやうな支那人性改革の欲望であつた。ここで読者は、魯迅は結局は文学を道具に使つた社会改良主義者なのかといふ疑ひを抱かれるかも知れないが、この問題は当然起つてもいいもので、たしかに彼は社会改良主義者であつたことに間ちがひはない。ただ、そのために文学を道具に使つたといふことになる、さう言ひ切つてしまつては誤りになる。なるほど魯迅は文学で国を救はうと志を立てたほどだから、その意識の上では文学を手段と考へてゐた節はあるが、そこでも知れないが、それはどこまでも作品以前の意識で、じつさいに作品に立ち向ふ際には、さういふ意識から離れて、純粹に芸術意識に終始してゐたやうに思はれる。がかう言ひ切つてしまふのもじつは問題なのだ、要は作品が問題であつて、作品がさういふ目的を離れて、独立して存在し得てゐる、その点に彼の芸術性があつたことを、私は言ひたいのである。／＼その意味で、彼は必らずしも芸術家を志さなかつたか、すぐれた芸術家であつたの

と、それらの仕事は各々形や方式は異つても同じ一つの幹から分れた別々の枝に過ぎず、一貫して底を流れるものはしばしば言つたやうな支那人性改革の欲望であつた。ここで読者は、魯迅は結局は文学を道具に使つた社会改良主義者なのかといふ疑ひを抱かれるかも知れないが、決してさうでなく、彼は押しも押されぬ第一流の小説家であり、芸術家であつた。(ただ彼は小説家・芸術家に止まつてゐなかつただけである)そして私は彼が必らずしも芸術家を志さなかつたのにそのやうに勝れた芸術家であつたことを面白く思ふ。それは一つには言ふまでもなく彼の文学勉強がいかに加減なものでなかつたためであらうが、一つには彼の天性豊富な芸術的天分に由来するものと思ふ。

<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(34) 魯迅は民国十四年まで小説を書き続け、その数は二十五篇。「阿Q正伝」一篇が中篇であつた以外は悉く短篇である。作品は二つの創作集に収められ、前半期のものは「呐喊」、後半期のものは「彷徨」と題されてゐる。必ずしも厳密に区別づけ出来るわけでは無いが、表題が示してゐるや</p>	
<p>(35) 魯迅は民国七年から十一年までに十五篇の小説を書いてゐた。それが一本にまとめられることになつて、魯迅はそれに「呐喊」と題した。そして彼が意識する与否にかかわらず彼はもう一個の「小説家」であつた。</p>	<p>(35) ただ魯迅自身はあくまで書きさへすればよく、聞達を求めず、学者文人の名も欲しなかつたので、署名もさまざまにし、「新青年」に書く小説には魯迅の筆名を用ゐたが、他に巴人を用ゐたり、又隨筆には大てい唐俟と署名してゐるやうな状態で、当時世間では巴人とは蒲伯英ではあるまいかと非常に疑つてゐたが、魯迅についてはまるで見当がつかず、教育部内では時々議論紛々、毀誉一でなかつたが、魯迅はその傍にすました顔であつた（周作人の「魯迅について」より）といふやうな現象が起るのであつた。</p>	
<p>に同じ</p>	<p>(36) ただ魯迅自身はあくまで書きさへすればよく、聞達を求めず、学者文人の名も欲しなかつたので、署名もさまざまにし、「新青年」に書く小説には魯迅の筆名を用ゐたが、他に巴人を用ゐたり、又隨筆には大てい唐俟と署名してゐるやうな状態で、当時世間では巴人とは蒲伯英ではあるまいかと非常に疑つてゐたが、魯迅についてはまるで見当がつかず、教育部内では時々議論紛々、毀誉一でなかつたが、魯迅はその傍にすました顔であつた、といふやうな現象が起るのであつた。</p>	
<p>に同じ</p>	<p>(37) 魯迅はあくまで書きさへすればよく、聞達を求めず、学者文人の名も欲しなかつたので、署名もさまざまにし、「新青年」に書く小説には魯迅の筆名を用ゐたが、他に巴人を用ゐたり、又隨筆には大てい唐俟と署名してゐるやうな状態で、当時世間では巴人とは蒲伯英ではあるまいかと非常に疑つてゐたが、魯迅についてはまるで見当がつかず、教育部内では時々議論紛々、毀誉一でなかつたが、魯迅はその傍にすました顔であつた（周作人の「魯迅について」より）といふやうな現象が起るのであつた。</p>	<p>だ。そこを私は面白く思ふ。それには、一つには言ふまでもなく彼の文学勉強がいよいよ加減なものでなかつたのもあらうが、一つには彼の天性豊富な芸術的天分によるものであらう。</p>
<p>(85) 魯迅は民国七年から十一年までに十五篇の小説を書いてゐた。それが一本にまとめられることになつて、魯迅はそれに「呐喊」と題した。そして彼が意識する与否にかかわらず彼はもう一個の「小説家」であつた。</p>	<p>(84) ただ魯迅自身はあくまで書きさへすればよく、聞達を求めず、学者文人の名も欲しなかつたので、署名もさまざまにし、「新青年」に書く小説には魯迅の筆名を用ゐたが、他に巴人を用ゐたり、又隨筆には大てい唐俟と署名してゐるやうな状態で、当時世間では巴人とは蒲伯英ではあるまいかと非常に疑つてゐたが、魯迅についてはまるで見当がつかず、教育部内では時々議論紛々、毀誉一でなかつたが、魯迅はその傍にすました顔であつた（周作人の「魯迅について」より）といふやうな現象が起るのであつた。</p>	

うに作品は次第に悲愁、暗鬱を加へ、時には底冷たい絶望の氣をも帯び、漸く文化界一般とは歩調を異にした孤高味を帯びて来てゐた。

「該当箇所なし」

(74) この創作集「呐喊」についてちよつと触れて置きたいことがある。この「呐喊」を「創造社」派の批評家成仿吾が批評して「庸俗」となしたが、巻末の古代に材を取つた作品「不周山」一篇を最傑作と推し、魯迅は漸くここから純文芸の宮廷に入るだらうと言つたのに対し、魯迅はこの「不周山」には後半からいくらか不純な意識が加はつてゐること甚だ満足してゐなかつたので「呐喊」の第二版（及びその後）には特に「不周山」を除外して成仿吾に一大痛棒の返礼を喰らはせた。（この作品はずつと後に歴史物だけを集めて出した「故事新編」の中へ入れてゐる）

(74) 思ふに魯迅は片時も現実から眼をそらさないといふ意味では冷徹な現実家であるが、その現実に徹することに依て起る改革的熱情時にそれは叫びとなり、時にうめきとなり、時に溜息となり、時に怒りとなつて現はれるが、さういふ情的方面にも人一倍激しいものがあつて、かくして彼は透

(75) 魯迅は先にも言つたやうに作家として、随つて人間としても冷徹なりアリストであつた。そしてその創作上に於けるリアリズムは概して個々の人間によりは全体としての支那人に向けられてゐた。もちろんこの全体は個と離れたものではなく、要は彼が個を見、個を考へる時に全体を忘れ

「該当箇所なし」

(75) この創作集「呐喊」についてちよつと触れて置きたいことがある。この「呐喊」を「創造社」派の批評家成仿吾が批評して「庸俗」となしたが、巻末の古代に材を取つた作品「不周山」一篇を最傑作と推し、魯迅は漸くここから純文芸の宮廷に入るだらうと言つたのに対し、魯迅はこの「不周山」には後半からいくらか不純な意識が加はつてゐること甚だ満足してゐなかつたので「呐喊」の第二版（及びその後）には特に「不周山」を除外して成仿吾に一大痛棒の返礼を喰らはせた。（この作品はずつと後に歴史物だけを集めて出した「故事新編」の中へ入れてゐる）

(75) 魯迅は先にも言つたやうに作家として、随つて人間としても冷徹なりアリストであつた。そしてその創作上に於けるリアリズムは概して個々の人間によりは全体としての中国人に向けられてゐた。もちろんこの全体は個と離れたものではなく、要は彼が個を見、個を考へる時に全体を忘れ

「該当箇所なし」

(75) この創作集「呐喊」についてちよつと触れて置きたいことがある。この「呐喊」を「創造社」派の批評家成仿吾が批評して「庸俗」となしたが、巻末の古代に材を取つた作品「不周山」一篇を最傑作と推し、魯迅は漸くここから純文芸の宮廷に入るだらうと言つたのに対し、魯迅はこの「不周山」には後半からいくらか不純な意識が加はつてゐること甚だ満足してゐなかつたので「呐喊」の第二版（及びその後）には特に「不周山」を除外して成仿吾に一大痛棒の返礼を喰らはせた。（この作品はずつと後に歴史物だけを集めて出した「故事新編」の中へ入れてゐる）

(75) 魯迅は先にも言つたやうに作家として、随つて人間としても冷徹なりアリストであつた。そしてその創作上に於けるリアリズムは概して個々の人間によりは全体としての中国人に向けられてゐた。もちろんこの全体は個と離れたものではなく、要は彼が個を見、個を考へる時に全体を忘れ

「該当箇所なし」

(85) この創作集「呐喊」についてちよつと触れて置きたいことがある。この「呐喊」を「創造社」派の批評家成仿吾が批評して「庸俗」となしたが、巻末の古代に材を取つた作品「不周山」一篇を最傑作と推し、魯迅は漸くここから純文芸の宮廷に入るだらうと言つたのに対し、魯迅はこの「不周山」には後半からいくらか不純な意識が加はつてゐること甚だ満足してゐなかつたので「呐喊」の第二版（及びその後）には特に「不周山」を除外して成仿吾に一大痛棒の返礼を喰らはせた。（この作品はずつと後に歴史物だけを集めて出した「故事新編」の中へ入れてゐる）

(85) 魯迅は先にも言つたやうに作家として、随つて人間としても冷徹なりアリストであつた。そしてその創作上に於けるリアリズムは概して個々の人間によりは全体としての支那人に向けられてゐた。もちろんこの全体は個と離れたものではなく、要は彼が個を見、個を考へる時に全体を忘れ

徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であつたわけであるが、主観が客観に吸収され客観が主観に吸収されてゐるとも言へるその二つのものの美妙な渾一に依つて、読者も知られてゐる通りあの一種類の特な象徴的作風が生れて来てゐたもののやうに私には考へられる。

たことなく、全体を考へる時それは個を遊離してゐないといふことになるのだが、彼が好んでするこの支那人全体にたいする結論を特定の人間に藉りて表現する方法は、他の多くの作家たちによつて行はれる特定の個人を描いて普遍を志すやり方とはまさに逆である。一方彼は常に冷厳な現実であると同時に、その改革の熱情に燃やされてゐる意味ではげしい主情家でもあり、かくして彼は透徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であり、そこに冷たい暖かさ、暖かい冷たさといふやうな一種独特な感触が生成せられると同時に、主観が客観に吸収され客観が主観に吸収されてゐるとも言へるその二つのものの美妙な渾一によつて作品そのものは生生とした息吹を持ち乍らも前に言つた彼の人間表出の特殊のやり方からその人間印象はしばしば一種複合写真に感じられるやうな実感的に明確性を欠くところがあり、代りにそれだけ「支那人」(或は「ある時に於けるある支那人たち」の真実がじかにほのぼのと浮き上るといふ現象を生じ、そこに彼独特の象徴的作風が生じてゐたのであつた。

たことなく、全体を考へる時それは個を遊離してゐないといふことになるのだが、彼が好んでするこの中国人全体にたいする結論を特定の人間に藉りて表現する方法は、他の多くの作家たちによつて行はれる特定の個人を描いて普遍を志すやり方とはまさに逆である。一方彼は常に冷厳な現実であると同時に、その改革の熱情に燃やされてゐる意味ではげしい主情家でもあり、かくして彼は透徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であり、そこに冷たい暖かさ、暖かい冷たさといふやうな一種独特な感触が生成せられると同時に、主観が客観に吸収され客観が主観に吸収されてゐるとも言へるその二つのものの美妙な渾一によつて作品そのものは生々とした息吹を持ち乍らも前に言つた彼の人間表出の特殊なやり方からその人間印象はしばしば一種複合写真に感じられるやうな実感的に明確性を欠くところがあり、代りにそれだけ「中国人」(或は「ある時に於けるある中国人たち」の真実がじかにほのぼのと浮き上るといふ現象を生じ、そこに彼独特の象徴的作風が生じてゐたのであつた。

たことなく、全体を考へる時それは個を遊離してゐないといふことになるのだが、彼が好んでするこの中国人全体にたいする結論を特定の人間に藉りて表現する方法は、他の多くの作家たちによつて行はれる特定の個人を描いて普遍を志すやり方とはまさに逆である。一方彼は常に冷厳な現実であると同時に、その改革の熱情に燃やされてゐる意味ではげしい主情家でもあり、かくして彼は透徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であり、そこに冷たい暖かさ、暖かい冷たさといふやうな一種独特な感触が生成せられると同時に、主観が客観に吸収され客観が主観に吸収されてゐるとも言へるその二つのものの美妙な渾一によつて作品そのものは生生とした息吹を持ち乍らも、前に言つた彼の人間表出の特殊のやり方からその人間印象はしばしば一種複合写真に感じられるやうな実感的に明確性を欠くところがあり、代りにそれだけ「中国人」(或は「ある時に於けるある中国人たち」の真実がじかにほのぼのと浮き上るといふ現象を生じ、そこに彼独特の象徴的作風が生じてゐたのであつた。

たことなく、全体を考へる時それは個を遊離してゐないといふことになるのだが、彼が好んでするこの支那人全体にたいする結論を特定の人間に藉りて表現する方法は、他の多くの作家たちによつて行はれる特定の個人を描いて普遍を志すやり方とはまさに逆である。一方彼は常に冷厳な現実であると同時に、その改革の熱情に燃やされてゐる意味ではげしい主情家でもあり、かくして彼は透徹した瞳と紅い血液の溢れた心臓との同時的所有者であり、そこに冷たい暖かさ、暖かい冷たさといふやうな一種独特な感触が生成せられると同時に、主観が客観に吸収され客観が主観に吸収されてゐるとも言へるその二つのものの美妙な渾一によつて作品そのものは生々とした息吹を持ち乍らも前に言つた彼の人間表出の特殊のやり方からその人間印象はしばしば一種複合写真に感じられるやうな実感的に明確性を欠くところがあり、代りにそれだけ「支那人」(或は「ある時に於けるある支那人たち」の真実がじかにほのぼのと浮き上るといふ現象を生じ、そこに彼独特の象徴的作風が生じてゐたのであつた。

第六章 彷徨（一）

* の、第六章に対する該当箇所は、以下のみ。

《 民国十三年五月卅日には国民党の煽動者が上海で英国官憲に射殺されたのをきっかけに所謂五卅事件が起り、それが全支那に波及して騒然たる事態を惹き起したが、次いで民国十五年には遂に魯迅等が北京退去を余儀なくされた近因である三・一八が起つた。事の起りは張作霖、馮玉祥の争闘から奉天派の艦隊の進航を防ぐため馮側が大沽沖に水雷を敷設して港を封鎖したことから八ヶ国列強が期限附最後通牒を送つたのにたいし、学生、労働者団が段祺瑞執政に毅然たる態度を取ることを要求したことにあつた。三月十八日先づ天安門前で大集會が行はれ、次いでその数千人の集團は執政府へ押しかけたが、その門前で守衛に発砲せられて四十八名が死去し、二百名近くが負傷した。この事件は魯迅に北京はも早人の世では無いと痛憤させた。しかもこの惨事の後間もなく六人の北京教育界の大立物に逮捕令が下り、更に四十四人の作家、教授、新聞記者にもそれが下りさうであつた。魯迅もその四十四人の内に入つてゐた。彼は転々と外国病院に逃れて難を避け乍らも幾篇かの悲壯、痛烈な文章を綴つて段執政政府に迫つた。が、その年八月彼は同じく難を郷里の廈門大学に逃れた林語堂の斡旋で廈門大学教授に招聘され、北京を捨てて廈門へ去つた。》(345)

(139) 甄塔湖	に同じ	に同じ	(88) 甄塔湖 <small>せんたうこ</small>
(139) 買い取り	(111) 買い取り	に同じ	(88) 買い取り
(139) 及	(111) 及び	に同じ	に同じ
(140) 「莽原」	に同じ	に同じ	(88) 「莽原」 <small>まうげん</small>
(140) 「中国小説史略」	(112) 「支那小説史略」	に同じ	に同じ
(140) 支那小説	(112) 中国小説	に同じ	に同じ
(140) 支那小説研究史上	(112) 中国小説研究史上	に同じ	に同じ
(140) 言はれるもの	に同じ	に同じ	(88) いわれるもの
(140) 支那	(112) 中国	に同じ	に同じ
(140) 要る	に同じ	に同じ	(89) 要る
(141) 支那人	(113) 中国人	に同じ	に同じ
(141) 上海支那人	(113) 上海中国人	に同じ	に同じ

(13) 拡大して大々的	(13) 拡大して、大々的	同じ	同じ
(14) 罷課、商店	同じ	同じ	(89) 罷課商店
(14) 曳いて	同じ	同じ	(89) 引いて
(14) 同時にそれ迄	(113) 同時に、それ迄	同じ	(89) 同時にそれまで
(14) ポロチン	同じ	同じ	(89) ポロジン
(14) 支那進出に初まる	(114) 中国進出に始まる	(111) 中国進出に初まる	同じ
(14) 支那の新文化	(114) 中国の新文化	同じ	同じ
(14) かういふ一種茫然として	(114) かういふ茫然として	同じ	(90) こういふ一種茫然として、
(14) 発刊	同じ	同じ	(90) 発行
(14) 据え学生	同じ	(112) 据え、学生	同じ
(14) 出来した。	同じ	同じ	(90) 起った。
(14) ばかりでなく、暗に	115ばかりでなく暗に	同じ	同じ
(14) 唐有壬	同じ	同じ	(90) 唐有壬 <small>とういうじや</small>
(14) 為し	同じ	同じ	(91) なし
(15) 又時に次のやうに魯迅の痛いところを衝いて鋭く迫つてもある。「彼は『象牙の塔を出でて』の後記に『文学者と政治家』の一文を訳したくない理由に説き及んで言つてゐる。『中国現在の政客官僚たちとの事を談ずるのは、牛に対して琴を弾ずるやうなものである。両方面の接近といふことについては北京にも始終あり、幾多の醜態と悪行は皆この新らしくしかも暗	(116) 又、彼は官僚にたいして顔を反けて嘔吐しようとするが、	(113) 又時に次のやうに魯迅の痛いところを衝いて鋭く迫つてもある。「彼は『象牙の塔を出でて』の後記に『文学者と政治家』の一文を訳したくない理由に説き及んで言つてゐる。『中国現在の政客官僚たちとの事を談ずるのは、牛に対して琴を弾ずるやうなものである。両方面の接近といふことについては北京にも始終あり、幾多の醜態と悪行は皆この新らしくしかも黒	(16) 又時に次のやうに魯迅の痛い所を衝いて鋭く迫つてもいる。「彼は『象牙の塔を出でて』の後記に『文学者と政治家』の一文を訳したくない理由に説き及んで言つてゐる。『中国現在の政客官僚たちとの事を談ずるのは、牛に対して琴を弾ずるやうなものである。両方面の接近といふことについては北京にも始終あり、幾多の醜態と悪行は皆この新らしくしかも暗

黒の陰影の中に開演せられてをり、ただまだ作者が言つてゐるらしい好看板が考へ出されただけである」と。君（詩人徐志摩）はこれでも彼が『青年叛徒の領袖』として恥しくないと思つてか。彼のあの官僚を見るとすぐ顔を反けて嘔吐しようとする気持はよく紙上に現はれてはゐる。けれどもまだ、けれども

(145) 兪事をしてゐる。彼自身の自伝に依れば

(145) ぬないとのことだ。

(145) 『無恥の代表の彭水彝』が総長となつた時も教育部に、甚だしきは『無恥の代表の章士釗』が彼の職を免じた後も彼は尚大声で『兪事といふ官はまあ決してそれほど区々たるものわけでもない』とわめてゐる。どうしてそこで彼の後釜をねらふものがあつたか、どうして軽重するに足らないと思ふ人間が『他人の概を懐く』ものか、こんなふうで、こんなふうで……それでも『青年叛徒の領袖』のやつであらうか。

暗の陰影の中に開演せられてをり、ただまだ作者が言つてゐるらしい好看板が考へ出されただけである」と。君（詩人徐志摩）はこれでも彼が『青年叛徒の領袖』として恥しくないと思つてか。彼のあの官僚を見るとすぐ顔を反けて嘔吐しようとする気持はよく紙上に現はれてはゐる。けれどもまだ、けれども

(149) 兪事をしてゐる。彼自身の自伝によれば

(149) ぬないらしく、

(149) 『無恥の代表の彭水彝』が総長となつた時も教育部に、甚だしきは『無恥の代表の章士釗』が彼の職を免じた後も彼は尚大声で『兪事といふ官はまあ決してそれほど区々たるものわけでもない』とわめてゐる。……など相当きつさき鋭く魯迅の痛いところを衝いてゐる。

の陰影の中に開演せられており、ただまだ作者が言つてゐるらしい好看板が考へ出されただけである」と。君（詩人徐志摩）はこれでも彼が『青年叛徒の領袖』として恥しくないと思つてか。彼のあの官僚を見るとすぐ顔を反けて嘔吐しようとする気持はよく紙上に現はれてはゐる。けれどもまだ、けれども

に同じ

(150) ぬないとのことだ。

(150) 『無恥の代表の彭水彝』が総長となつた時も教育部に、甚だしきは『無恥の代表の章士釗』が彼の職を免じた後も彼は尚大声で『兪事といふ官はまあ決してそれほど区々たるものわけでもない』とわめてゐる。……どうしてそこで彼の後釜をねらふものがあつたか、どうして軽重するに足らないと思ふ人間が『他人の概を懐く』ものか、こんなふうで、こんなふうで……それでも『青年叛徒の領袖』のよつであるうか。

(146) 『彷徨』の中の作品は『呐喊』時代の作品に比べて必ずしも著しく異つてゐるとは言はず、概してやはり支那人の旧弊や頹廢やを鋭く突いたふうのものなのだが、それらは時には以前程の重厚さを持たず、又以前にも時に見られた悲愁の感傷はかつての美しさを失ひ、底冷たい凄涼さを加へて来るといふことが出来る。

(146) 『彷徨』の中の作品は『呐喊』時代の作品に比べて必ずしも著しく異つてゐるとは言はず、概してやはり支那人の旧弊や頹廢やを鋭く突いたふうのものなのだが、それらは時には以前程の重厚さを持たず、又以前にも時に見られた悲愁の感傷はかつての美しさを失ひ、底冷たい凄涼さを加へて来るといふことが出来る。

(150) 『彷徨』の中の作品は『呐喊』時代の作品に比べて必ずしも著しく異つてゐるとは言はず、概してやはり支那人の旧弊や頹廢やを鋭く突いたふうのものなのだが、それらは時には以前程の重厚さを持たず、又以前にも時に見られた悲愁の感傷はかつての美しさを失ひ、底冷たい凄涼さを加へて来るといふことができる。

<p>(一五)「孤独者」の終りで彼が、 「彼は不似合な衣冠につつまれて、 静かに横はつてゐた。眼をつぶり、 口を閉ぢ、口もとにさながら氷の やうに冷い微笑を浮べて、このを かしの死屍を冷笑つてゐるかのや うであつた。／＼釘づけする音が響 き渡ると同時に哭声が迸り出た。 この哭声は私には聴いてゐられな いものであつた。私は已むなく中 庭へ逃げ出し、脚まかせに歩いて、 われ知らず表門を出てしまつた。 (中略)／＼私は足早に歩いた。何 やら重苦しいものの中から衝き出 たく思つたやうだつたが、どうに</p>	<p>(一五)といふのも恐らく外界の新文 化運動はますます熾烈さを加へて 来てゐたにもかかはらず、それと は反比例して次第に彼が絶望的に なつてゐたためであらう。</p>	
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(一六) かういふ作品的傾向から 見ると、外界の新文化運動はま すます熾烈さを加へて来てはゐ たが、又それに刺戟されたかの やうに魯迅自身さまざまの仕事 とは反比例して魯迅の内面生活 はますます暗く絶望的になつて 行つてゐたやうに思はれる。</p>	<p>ものである。即ちもともと魯迅 の作品は、写実をつきつめた諷 刺的傾向のものと、絶望的な暗 さを抒情した傾向のものとの二 大別出来るのだが、「呐喊」では 「阿Q正伝」が代表してゐるや うに諷刺的傾向のものの方が 重きをなしてゐたのにひきかへ、 「彷徨」ではその傾向のものは やうやく色あせ、代りにうそ寒 い灰白色の抒情的傾向のもの の「孤独者」や「酒樓」が巻 中の中心作品となつてゐるので ある。</p>
<p>(一七)「孤独者」の終りで彼が、 「彼は不似合な衣冠につつまれて、 静かに横はつてゐた。眼をつぶり、 口を閉ぢ、口もとにさながら氷の やうに冷い微笑を浮べて、このを かしの死屍を冷笑つてゐるかのや うであつた。／＼釘づけする音が響 き渡ると同時に哭声が迸り出た。 この哭声は私には聴いてゐられな いものであつた。私は已むなく中 庭へ逃げ出し、脚まかせに歩いて、 われ知らず表門を出てしまつた。 (中略)／＼私は足早に歩いた。何 やら重苦しいものの中から衝き出 たく思つたやうだつたが、どうに</p>	<p>(一七)といふのも恐らく外界の新文 化運動はますます熾烈さを加へて 来てゐたにもかかはらず、それと は反比例して、圧迫のきびしさも あり、次第に彼が絶望的になつて ゐたためであらう。</p>	
<p>(一八)「孤独者」の終りで彼が、 「彼は不似合な衣冠につつまれて、 静かに横たわつてゐた。眼をつぶ り、口を閉ぢ、口もとにさながら 氷のやうに冷たい微笑を浮べて、 このをかしの死屍を冷笑つてゐる かのやうであつた。／＼釘づけする 音が響き渡ると同時に哭声が迸り 出た。この哭声は私には聴いてい られないものであつた。私は已む なく中庭へ逃げ出し、脚まかせに 歩いて、われ知らず表門を出てし まつた。(中略)／＼私は足早に歩い た。何やら重苦しいものの中から 衝き出たく思つたやうだつたが、</p>	<p>(一八)といふのも恐らく外界の新文 化運動はますます熾烈さを加へて 来ていたにもかかわらず、それと は反比例して次第に彼が絶望的に なつていたためであらう。</p>	

もならなかつた。耳の中に何か藻掻き出さうとするものがあつて、しばらく、しばらくして、つひに藻掻き出して来たのは、どうやら長い嘯のやうであつた、一匹の傷を受けた狼が真夜中に曠野のなかで泣き叫ぶやうな、惨傷のなかに憤怒と悲哀とを雜へたものであつた」と書いた時、彼は作中の主人公の「一生を自分の手で孤独をつくり、またそれを口へ入れて咀嚼して味ふところの人間」の一生を悲しんだのであつたが、それはとりもなほさず彼自身の生にたいする思ひであつた。さうしてやうやく彼は文化界一般とは歩調を異にした孤高の風を帯びて来てゐた。

／この頃の彼の散文詩（彼は二十数篇の散文詩を書いてゐる）の一つに「こじき」といふのがあり、これがよく彼の当時の灰色の心境を語つてゐる。／私は剝げ落ちた高い壁に沿つて歩きほこぼこした砂埃を踏んでゐた。ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起つて壁の上へのぞき出た高い木の枝のまだ枯れ切らない葉が頭の上で揺れ動く。／微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。一人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもないのに、おじぎで邪魔し、追ひすがつて哀呼する。／私はその声音、態度を嫌悪する。私は彼がすこしも悲しんでゐず、兎戯に近いのを憎悪する。私は彼のその追ひすがつての哀呼にむかむかする。／私は歩き、ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。／一

もならなかつた。耳の中に何か藻掻き出さうとするものがあつて、しばらく、しばらくして、つひに藻掻き出して来たのは、どうやら長い嘯のやうであつた、一匹の傷を受けた狼が真夜中に曠野のなかで泣き叫ぶやうな、惨傷のなかに憤怒と悲哀とを雜へたものであつた」と書いた時、彼は作中の主人公の「一生を自分の手で孤独をつくり、またそれを口へ入れて咀嚼して味ふところの人間」の一生を悲しんだのであつたが、それはとりもなほさず彼自身の生にたいする思ひであつた。さうしてやうやく彼は文化界一般とは歩調を異にした孤高の風を帯びて来てゐた。

／この頃の彼の散文詩（彼は二十数篇の散文詩を書いてゐる）の一つに「こじき」といふのがあり、これがよく彼の当時の灰色の心境を語つてゐる。／私は剝げ落ちた高い壁に沿つて歩きほこぼこした砂埃を踏んでゐた。ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起つて壁の上へのぞき出た高い木の枝のまだ枯れ切らない葉が頭の上で揺れ動く。／微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。一人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもないのに、おじぎで邪魔し、追ひすがつて哀呼する。／私はその声音、態度を嫌悪する。私は彼がすこしも悲しんでゐず、兎戯に近いのを憎悪する。私は彼のその追ひすがつての哀呼にむかむかする。／私は歩き、ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。／一

どうにもならなかつた。耳の中に何か藻掻き出さうとするものがあつて、しばらく、しばらくして、つひに藻掻き出して来たのは、どうやら長い嘯のやうであつた。一匹の傷を受けた狼が真夜中に曠野のなかで泣き叫ぶやうな、惨傷のなかに憤怒と悲哀とを雜へたものであつた」と書いた時、彼は作中の主人公の「一生を自分の手で孤独をつくり、又それを口へ入れて咀嚼して味ふところの人間」の一生を悲しんだのであつたが、それはとりも直さず彼自身の生に対する思ひであつた。さうしてやうやく彼は文化界一般とは歩調を異にした孤高の風を帯びて来てゐた。

／この頃の彼の散文詩（彼は二十数篇の散文詩を書いてゐる）の一つに「こじき」といふのがあり、これがよく彼の当時の灰色の心境を語つてゐる。／私は剝げ落ちた高い壁に沿つて歩きほこぼこした砂埃を踏んでゐた。ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起つて壁の上へのぞき出た高い木の枝のまだ枯れ切らない葉が頭の上で揺れ動く。／微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。一人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもないのに、おじぎで邪魔し、追ひすがつて哀呼する。／私はその声音、態度を嫌悪する。私は彼が少しも悲しんでゐず、兎戯に近いのを憎悪する。私は彼のその追ひすがつての哀呼にむかむかする。／私は歩き、ほかにも幾人かの人がてんで歩いてゐる。微風が起り、あたりは砂埃でいっぱいだ。／一

<p>(151)沈み込んで、実人生と離れるやうな気がする。が、外国の本但し印度のものは除くを</p>	<p>(151)却けてゐる。彼は言つてゐる ／「私は</p>	<p>人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもなく、ただ唾で、手をひらいて身ぶりを装つてゐる。／私はこの身ぶりを憎悪する。しかも彼はすこしも唾でなど無いかも知れない。これも一つのものごひの手段に過ぎない。／私は施しをしない、私には施しの心が無い。だが私は施しをする者以上でうるさがりやと疑ひと憎しみを与へてやる。／私は倒れた泥壁に沿つて歩き、こはれた煉瓦が壁のこはれ目に積まれてあり、壁の内には何も無い。微風が起つて秋寒が私の袷をしみ透し、あたりは砂埃でいつぱいだ。／私は自分はどうな手段でものごひしようかと考へる。呼び声はどんな声音にするか、唾を装ふにはどんな手ぶりにしたらいいか……／ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／私は施しも得られず、施しの心も得られず、又施しをする者以上の人のうるさがりも疑ひも憎しみも得られないだらう。／私は何もせず無言でものごひすることにして。／せめて私は虚無は得られるであらう。／微風が起つてあたりは砂埃でいつぱいだ。ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／砂埃、砂埃……</p>
<p>(152)気がする。が、外国の本(印度のものは除く)を</p>	<p>(152)却け、自分は</p>	<p>人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもなく、ただ唾で、手をひらいて身ぶりを装つてゐる。／私はこの身ぶりを憎悪する。しかも彼はすこしも唾でなど無いかも知れない。これも一つのものごひの手段に過ぎない。／私は施しをしない、私には施しの心が無い。だが私は施しをする者以上でうるさがりやと疑ひと憎しみを与へてやる。／私は倒れた泥壁に沿つて歩き、こはれた煉瓦が壁のこはれ目に積まれてあり、壁の内には何も無い。微風が起つて秋寒が私の袷をしみ透し、あたりは砂埃でいつぱいだ。／私は自分はどうな手段でものごひしようかと考へる。呼び声はどんな声音にするか、唾を装ふにはどんな手ぶりにしたらいいか……／ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／私は施しも得られず、施しの心も得られず、又施しをする者以上の人のうるさがりも疑ひも憎しみも得られないだらう。／私は何もせず無言でものごひすることにして。／せめて私は虚無は得られるであらう。／微風が起つてあたりは砂埃でいつぱいだ。ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／砂埃、砂埃……</p>
<p>(153)沈み込んで実人生と離れるやうな気がする。が外国の本但し印度のものは除くを</p>	<p>に同じ</p>	<p>人の子供が私にものごひをする。裕も着てゐるし、悲しさうでもなく、ただ唾で、手をひらいて身ぶりを装つてゐる。／私はこの身ぶりを憎悪する。しかも彼はすこしも唾でなど無いかも知れない。これも一つのものごひの手段に過ぎない。／私は施しをしない、私には施しの心が無い。だが私は施しをする者以上でうるさがりやと疑ひと憎しみを与へてやる。／私は倒れた泥壁に沿つて歩き、こはれた煉瓦が壁のこはれ目に積まれてあり、壁の内には何も無い。微風が起つて秋寒が私の袷をしみ透し、あたりは砂埃でいつぱいだ。／私は自分はどうな手段でものごひしようかと考へる。呼び声はどんな声音にするか、唾を装ふにはどんな手ぶりにしたらいいか……／ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／私は施しも得られず、施しの心も得られず、又施しをする者以上の人のうるさがりも疑ひも憎しみも得られないだらう。／私は何もせず無言でものごひすることにして。／せめて私は虚無は得られるであらう。／微風が起つてあたりは砂埃でいつぱいだ。ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／砂埃、砂埃……</p>
<p>(95)沈み込んで、実人生と離れるやうな気がする。が、外国の本但し印度のものは除くを</p>	<p>(95)却けている。彼は言つてゐる ／「私は</p>	<p>の子供が私にものごひをする。裕も着ているし、悲しさうでもなく、ただ唾で、手をひらいて身ぶりを装つてゐる。／私はこの身ぶりを憎悪する。しかも彼はすこしも唾でなどないかも知れない。これも一つのものごひの手段に過ぎない。／私は施しをしない、私には施しの心が無い。だが私は施しをする者以上でうるさがりやと疑ひと憎しみを与へてやる。／私は倒れた泥壁に沿つて歩き、こはれた煉瓦が壁のこはれ目に積まれてあり、壁の内には何も無い。微風が起つて秋寒が私の袷をしみ透し、あたりは砂埃でいつぱいだ。／私は自分はどうな手段でものごひしようかと考へる。呼び声はどんな声音にするか、唾を装ふにはどんな手ぶりにしたらいいか……／ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／私は施しも得られず、施しの心も得られず、又施しをする者以上の人のうるさがりも疑ひも憎しみも得られないだらう。／私は何もせず無言でものごひすることにして。／せめて私は虚無は得られるであらう。／微風が起つてあたりは砂埃でいつぱいだ。ほかにも幾人かの人があつて歩いてゐる。／砂埃、砂埃……</p>

<p>(151) 気になる。／中国の本は人に世に出ることを勧める言葉はあつても、</p>	<p>(152) 気になる。中国の本は人に世に出ることを勧めてはあてても、</p>	<p>(153) 気になる。中国の本は人に世に出ることを勧める言葉はあつても、</p>	<p>(154) 気になる。／中国の本は人に世に出ることを勧める言葉はあつたにしても、</p>
<p>(151) である。／私は中国の</p>	<p>(118) である。さういふ意味で、自分は中国の</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(151) 思ふ。／中国の本をあまり見なくて、</p>	<p>(118) 思ふ。中国の本を見なくて</p>	<p>同じ</p>	<p>(95) 思う。／中国の本をあまり見なくて、</p>
<p>(151) 大切なことは『行』であつて『言』ではない。</p>	<p>(118) 大切なのは「行」であつて「言」ではない。</p>	<p>同じ</p>	<p>(95) 大切なことは『行』であつて『言』ではない。</p>
<p>(152) なし</p>	<p>(118) ない、といふ意味のことを発表してゐる。</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(152) ほどだつたが、更にこのことを文学素養といふことに関連して言つてゐる他の言葉に見よう。／「最近上海出版のある期刊を見たが、矢張り白話を立派に書くためには立派な古文を読まねばならぬ」と説き、その例証として挙げた人名中の一人は私だつた。これはまつたく私に身ぶるひさせた。他人のことはさておいて、自分のことなら、かつて沢山の旧書を見たことがあるといふのは確かである。教授するために今もやつぱり見てゐる。そのため耳目に染みつき、白話文を作るのに影響して、いつもその字句や文格が流露して来るのを免れない。だが自分では却つてこの古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感してゐる。思想の上から言つても、莊周や韓非の毒にやられてゐないとはいへなく、時には頗る気ままであり、時には頗る峻急</p>	<p>(116) ほどで、魯迅はこの中国古典と文学素養といふことに関連して改めて一文を書いてゐるが、その魯迅の意見にはあるあひまゝの魯迅が中国の青年が国文学の中から生活を求めることには極力反対だつたのは事実だつたらうが、彼の文章そのものが伝統をよく咀嚼した強みに立つてゐる事情からしても彼が伝統の文章を学び取ることにどこまで反対であつたかにはある疑問がある。彼が、自身につき、古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないためにいつも息づまるやうな重苦しさを感してゐる、と言つてゐるのも多分に一部復古主義者にたいして言ひかけてゐるのであつて見れば、必ずしも顔面通りには受け取れないものがある。とは言へ彼の国文学研究そのものが文学創作に必要を感じてはじめたといふより</p>	<p>(116) ほどだつたが、更にこのことを文学素養といふことに関連して言つてゐる彼の言葉に見よう。／「最近上海出版のある期刊を見たが、矢張り白話を立派に書くためには立派な古文を読まねばならぬ」と説き、その例証として挙げた人名中の一人は私だつた。これはまつたく私に身ぶるひさせた。他人のことはさておいて、自分のことなら、かつて沢山の旧書を見たことがあるといふのは確かである。教授するために今もやつぱり見てゐる。そのため耳目に染みつき、白話文を作るのに影響して、いつもその字句や文格が流露して来るのを免れない。だが自分では却つてこの古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感してゐる。思想の上から言つても、莊周や韓非の毒にやられてゐないとはいへなく、時には頗る気ままであり、時には頗る峻急</p>	<p>(96) ほどだつたが、更にこのことを文学素養といふことに関連して言つてゐる他の言葉に見よう。／「最近上海出版のある期刊を見たが、矢張り白話を立派に書くためには立派な古文を読まねばならぬ」と説き、その例証として挙げた人名中の一人は私だつた。これはまつたく私に身ぶるひさせた。他人のことはさて置いて、自分のことなら、かつて沢山の旧書を見たことがあるといふのは確かである。教授するために今もやつぱり見てゐる。そのため耳目に染みつき、白話文を作るのに影響して、いつもその字句や文格が流露して来るのを免れない。だが自分では却つてこの古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感してゐる。思想の上から言つても、莊周や韓非の毒にやられてゐないとはいへなく、時には頗る気ままであり、時には頗る峻急</p>

だ。孔孟の書は私は最も早くから読んで、最もよく知つてゐるが、しかも却つて私とは相関するところが無いやうだ。大方は懶惰のためでもあらうが、往々自分でも楽に解釈して、一切の事物は転変しつゝあるのだから、多少とも中間的な物はあるわけだと思つてゐる。動物物の間でも、無脊椎と脊椎動物の間にも、すべて中間の物がある。或ひは簡単にかう言ふことも出来る、進化の連鎖の上にあつては一切のものが中間物だ、と。文章改革の初まりの時に、幾人かの純粹でない作家があるのは当然のことで、さうしかあり得ないし、又さうあることも必要だ。彼の任務は先覚者の後にゐて、ある新声を喚び出すことだ。又古い陣地からやつて来たために、情形が比較的是つきりわかり、裏切つて一撃を加へるなら、たやすく強敵の死命を制することも出来る。だがやはり光陰と共に去つて逝き、次第に消え滅ぶべきもので、ただか橋梁中の一木一石に過ぎなく、決して前途の目標や手本ではない。続いて起る者はちがつてをるべきで、天性の聖者でもない限り、積習は当然俄かにとり除くことは出来ないにせよ、しかし前よりは新しい姿はあり得る筈だ。文章について言ふならば、今尚旧書の中から生活を求める必要はない、それよりも生きてゐる人間の唇舌を源泉にし、文章を一層言葉に近づけ、一層生氣を加へるべきである。現在の民衆の言葉の貧弱さと欠陥をどう救済し、豊富なものにするかになると、これは頗る大問

は少年時の習慣につづく北京移住当初の沈黙時代の趣味的研究に根源をもつてゐるといふのが真相に近い実情からして、彼のその素養を創作の上で意識的に大して重視してゐなかつたばかりでなく、結局彼の心を占めてゐたものは中途半端な完成よりは新しい未完成であつたといふのは真実かも知れない。しかも尚彼が古典の熱心な研究者であつたといふ事実は彼の体内に漲つてゐる民族の血の、伝統に眷恋させるものがあつたことを否定出来ないのではなかつたか。魯迅は色々の点で矛盾の強かつた人である。

だ。孔孟の書は私は最も早くから読んで、最もよく知つてゐるが、しかも却つて私とは相関するところが無いやうだ。大方は懶惰のためでもあらうが、往々自分でも楽に解釈して、一切の事物は転変しつゝあるのだから、多少とも中間的な物はあるわけだと思つてゐる。動物物の間でも、無脊椎と脊椎動物の間にも、すべて中間の物がある。或ひは簡単にかう言ふことも出来る、進化の連鎖の上にあつては一切のものが中間物だ、と。文章改革の初まりの時に、幾人かの純粹でない作家があるのは当然のことで、さうしかあり得ないし、又さうあることも必要だ。彼の任務は先覚者の後にゐて、ある新声を喚び出すことだ。又古い陣地からやつて来たために、情形が比較的是つきりわかり、裏切つて一撃を加へるなら、たやすく強敵の死命を制することも出来る。だがやはり光陰と共に去つて逝き、次第に消え滅ぶべきもので、ただか橋梁中の一木一石に過ぎなく、決して前途の目標や手本ではない。続いて起る者はちがつてをるべきで、天性の聖者でもない限り、積習は当然俄かにとり除くことは出来ないにせよ、しかし前よりは新しい姿はあり得る筈だ。文章について言ふならば、今尚旧書の中から生活を求める必要はない、それよりも生きてゐる人間の唇舌を源泉にし、文章を一層言葉に近づけ、一層生氣を加へるべきである。現在の民衆の言葉の貧弱さと欠陥をどう救済し、豊富なものにするかになると、これは頗る大問

だ。孔孟の書は私は最も早くから読んで、最もよく知つてゐるが、しかも却つて私とは相関するところが無いやうだ。大方は懶惰のためでもあらうが、往々自分でも楽に解釈して、一切の事物は転変しつゝあるのだから、多少とも中間的な物はあるわけだと思つてゐる。動物物の間でも、無脊椎と脊椎動物の間にも、すべて中間の物がある。或ひは簡単にかう言ふことも出来る、進化の連鎖の上にあつては一切のものが中間物だ、と。文章改革の初まりの時に、幾人かの純粹でない作家があるのは当然のことで、さうしかあり得ないし、又さうあることも必要だ。彼の任務は先覚者の後にゐて、ある新声を喚び出すことだ。又古い陣地からやつて来たために、情形が比較的是つきりわかり、裏切つて一撃を加へるなら、たやすく強敵の死命を制することも出来る。だがやはり光陰と共に去つて逝き、次第に消え滅ぶべきもので、ただか橋梁中の一木一石に過ぎなく、決して前途の目標や手本ではない。続いて起る者は違つてゐるべきで、天性の聖者でも無い限り、積習は当然俄かにとり除くことは出来ないにせよ、しかし前よりは新しい姿はあり得る筈だ。文章について言ふならば、今尚旧書の中から生活を求める必要はない、それよりも生きてゐる人間の唇舌を源泉にし、文章を一層言葉に近づけ、一層生氣を加へるべきである。現在の民衆の言葉の貧弱さと欠陥をどう救済し、豊富なものにするかになると、これは頗る大問題で、

題で、あるいは旧文の中から若干の材料をとつて来て使ふといふ必要もあらう。(下略)／＼この魯迅の言葉にはあるあいまいさがある。支那の青年が国文学の中から生活を求めることには彼は極力反対だったのは事実だとしても伝統の文章を学び取ることは恐らく反対では無かつたであらう。そして彼の文章そのものが伝統をよく咀嚼した強味に立つてゐる事情からすれば彼が「古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感じてゐる」といふ言葉もいくらかは割引して聞く必要がありさうだ。しかも彼がさういふのには、多分に一部復古主義者にたいして言ひかけてゐるものがあるのであり、むしろ逆説などではない。もとも国文学研究そのものが文学創作に必要を感じてはじめてといふよりは少年時の習慣につづく北京移住当初の沈黙時代の趣味的研究に根源をもつてゐると言ふのが真相に近い実情からして、彼がその素養を創作の上で意識的には大して重視してゐなかつたばかりでなく、結局彼の心を占めてゐたものは中途半端な完成よりは新しい未完成であつたのかも知れない。しかも尚彼が古典の熱心な研究者であつたといふ事実は彼の体内に漲つてゐる民族の血の伝統に着恋させるものがあつたためでもあらうか。魯迅は色々の点で矛盾の強かつた人のやうである。

(156) 初まつてゐた。魯迅の返事に

題で、あるいは旧文の中から若干の材料をとつて来て使ふといふ必要もあらう。(下略)／＼この魯迅の言葉にはあるあいまいさがある。中国の青年が国文学の中から生活を求めることには彼は極力反対だったのは事実だとしても伝統の文章を学び取ることは恐らく反対では無かつたであらう。そして彼の文章そのものが伝統をよく咀嚼した強味に立つてゐる事情からすれば彼が「古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感じてゐる」といふ言葉もいくらかは割引して聞く必要がありさうだ。しかも彼がさういふのには、多分に一部復古主義者にたいして言ひかけてゐるものがあるのであり、むしろ逆説などではない。もとも国文学研究そのものが文学創作に必要を感じてはじめてといふよりは少年時の習慣につづく北京移住当初の沈黙時代の趣味的研究に根源をもつてゐると言ふのが真相に近い実情からして、彼がその素養を創作の上で意識的には大して重視してゐなかつたばかりでなく、結局彼の心を占めてゐたものは中途半端な完成よりは新しい未完成であつたかも知れない。しかも尚彼が古典の熱心な研究者であつたといふ事実は、彼の体内に漲つてゐる民族の血の伝統に着恋させるものがあつたことによるものでもあらうか。魯迅は色々の点で矛盾の強かつた人のやうである。

(122) 初まつてゐた。魯迅の返事に

あるいは旧文の中から若干の材料をとつて来て使うといふ必要もあらう(下略)／＼この魯迅の言葉にはあるあいまいさがある。支那の青年が国文学の中から生活を求めることには彼は極力反対だったのは事実だとしても伝統の文章を学び取ることは恐らく反対では無かつたであらう。そして彼の文章そのものが伝統をよく咀嚼した強みに立つてゐる事情からすれば彼が「古老の亡霊を背負つてゐて、脱離することが出来ないのに苦しみ、いつも息づまるやうな重苦しさを感じてゐる」といふ言葉もいくらかは割引して聞く必要がありさうだ。しかも彼がさういふのには、多分に一部復古主義者に対して言ひかけてゐるものがあるのであり、むしろ逆説などではない。もとも国文学研究そのものが文学創作に必要を感じてはじめてといふよりは少年時の習慣に続く北京移住当初の沈黙時代の趣味的研究に根源を持つてゐると言ふのが真相に近い実状からして、彼がその素養を創作の上で意識的には大して重視してゐなかつたばかりでなく、結局彼の心を占めてゐたものは中途半端な完成よりは新しい未完成であつたのかも知れない。しかも尚彼が古典の熱心な研究者であつたといふ事実は彼の体内に漲つてゐる民族の血の伝統に着恋させるものがあつたためでもあらうか。魯迅は色々の点で矛盾の強かつた人のよつてである。

(98) 始まつてゐた。魯迅の返事に

は魯迅の心懐が率直に語られていて面白いから一つ紹介して見ることにするが、先づ廣平女士のある手紙に曰く、／＼現代の病根を攻め落す工作を『最も早く』、『最も有効に』そして『あまり遅れ』ないやうにする唯一の近道はいふまでもなくやはり先生の言はれる『火と剣』であります。第二革命で孫中山が外国へ逃亡した時からもうそれを覚つてゐたので極力党軍の組織をはかつてゐたわけですが、しかも未だにどれだけの建設もありません。その上にも現在急速に解決を要する問題は一刻も猶予は出来ませず、若しいくらかの準備の時を必要とし、時の進行に應じて少しづつ効を収めようとするなら、恐らくは国魂を枯魚の肆に求めることになるであらう。これは桎梏杞人の憂であります。ですから私の考へでは民意に違反する乱臣賊子にたいしては三寸の剣に依つて一撃を与へ、その後で天を仰いで長嘯し、剣に伏して死ぬに如くはないと存じます。さうすれば僅かに数人の犠牲で賊の胆を冷やし妄動しないやうにさせることが出来ます。犠牲になるものは言ふまでもなく胆あり勇ある人でなく、てはいけません。必ずしも學識優越の人でなくてもかまひません。云々／＼このくだりに對して魯迅は次のやうに答へてゐる。／＼御手紙中の意見については僕は全く必らず間違つてゐるとは言つて見ようが無い、が、ただ不賛成です。一つは全局の見通しから、今一つは自分の偏見から。第一こ

は魯迅の心懐が率直に語られていて面白いから一つ紹介して見ることにするが、先づ廣平女士のある手紙に曰く、／＼現代の病根を攻め落す工作を『最も早く』、『最も有効に』そして『あまり遅れ』ないやうにする唯一の近道はいふまでもなくやはり先生の言はれる『火と剣』であります。第二革命で孫中山が外国へ逃亡した時からもうそれを覚つてゐたので極力党軍の組織をはかつてゐたわけですが、しかも未だにどれだけの建設もありません。その上にも現在急速に解決を要する問題は一刻も猶予は出来ませず、若しいくらかの準備の時を必要とし、時の進行に應じて少しづつ効を収めようとするなら、恐らくは国魂を枯魚の肆に求めることになるであらう。これは杞人の憂であります。ですから私の考へでは民意に違反する乱臣賊子にたいしては三寸の剣に依つて一撃を与へ、その後で天を仰いで長嘯し、剣に伏して死ぬに如くはないと存じます。さうすれば僅かに数人の犠牲で賊の胆を冷やし妄動しないやうにさせることが出来ます。犠牲になるものは言ふまでもなく胆あり勇ある人でなく、てはいけません。必ずしも學識優越の人でなくてもかまひません。云々／＼このくだりに對して魯迅は次のやうに答へてゐる。／＼御手紙中の意見については僕は全く必らず間違つてゐるとは言つて見ようが無い、が、ただ不賛成です。一つは全局の見通しから、今一つは自分の偏見から。第一こ

は魯迅の心懐が率直に語られていて面白いから一つ紹介して見ることにするが、先づ廣平女士のある手紙に曰く、／＼現代の病根を攻め落す工作を『最も早く』、『最も有効に』そして『あまり遅れ』ないやうにする唯一の近道はいふまでもなくやはり先生の言はれる『火と剣』であります。第二革命で孫中山が外国へ逃亡した時からもうそれを覚つてゐたので極力党軍の組織をはかつてゐたわけですが、しかも未だにどれだけの建設もありません。その上にも現在急速に解決を要する問題は一刻も猶予は出来ませず、若しいくらかの準備の時を必要とし、時の進行に應じて少しづつ効を収めようとするなら、恐らくは国魂を枯魚の肆に求めることになるであらう。これは杞人の憂であります。ですから私の考へでは民意に違反する乱臣賊子にたいしては三寸の剣に依つて一撃を与へ、その後で天を仰いで長嘯し、剣に伏して死ぬに如くはないと存じます。さうすれば僅かに数人の犠牲で賊の胆を冷やし妄動しないやうにさせることが出来ます。犠牲になるものは言ふまでもなく胆あり勇ある人でなく、てはいけません。必ずしも學識優越の人でなくてもかまひません。云々／＼このくだりに對して魯迅は次のやうに答へてゐる。／＼御手紙中の意見については僕は全く必らず間違つてゐるとは言つて見ようが無い、が、ただ不賛成です。一つは全局の見通しから、今一つは自分の偏見から。第一こ

ありません。そしてかういふ人は今非常に少く、あつたとしたら尚更軽々しく使つてしまつてはなりません。それによしんば一二回かういふ事が起つたにしても、實際は国民を震動させるに足りないでせう。彼等はまだ非常に麻痺してゐて、悪い輩に至つては警備を嚴重にこそすれ、心を改めようとはしません。それにそれは悪い影響を引き起し易く、例へば民国二年に袁世凱もこの方法を用ゐたやうなもので、革命家が使ふのは多くは青年ですが、彼のは金で下層民を雇ふのであつて、数から言つたらやはりこちらが馬鹿を見ます。ただあの時は革命家等の人を雇つて更に殺させ合つたので、此の道は一層墮落し、今ではたとへ復活させても一時の憂さばらしにはなつても大局とは関係無いと思ひます。第二は、僕の性質はこんなふうなので、自分のしないことはあまり賛成しないのです。僕は時には辛辣に批評もできるし、又曾つて青年に冒険を煽動したこともあるが、ただ知り合ひの人にはその文章を批評することが出来ず、又冒険するのを見るのを恐れます。明らかにこれは矛盾で、何事もし出かしの得ない病だとは知り乍ら改めやうもなくてゐるのです。如何とも出来ない。まあ成るやうにさせて置ませう。」／魯迅は彼女への書信には呼びかけ名を特に「廣平兄」として通常の男性宛のものと異らなくしてゐる。

(一〇)が、後に彼女は彼の愛人となつた。そして更にその後には彼の

(一〇)後に彼の愛人となり、そして更にその後には彼の妻となつ

ありません。そしてかういふ人は今非常に少く、あつたとしたら尚更軽々しく使つてしまつてはなりません。それによしんば一二回かういふ事が起つたにしても、實際は国民を震動させるに足りないでせう。彼等はまだ非常に麻痺してゐて、悪い輩に至つては警備を嚴重にこそすれ、心を改めようとはしません。それにそれは悪い影響を引き起し易く、例へば民国二年に袁世凱もこの方法を用ゐたやうなもので、革命家が使ふのは多くは青年ですが、彼のは金で下層民を雇ふのであつて、数から言つたらやはりこちらが馬鹿を見ます。ただあの時は革命家等の人を雇つて更に殺させ合つたので、此の道は一層墮落し、今ではたとへ復活させても一時の憂さばらしにはなつても大局とは関係無いと思ひます。第二は、僕の性質はこんなふうなので、自分のしないことはあまり賛成しないのです。僕は時には辛辣に批評もできるし、又曾つて青年に冒険を煽動したこともあるが、ただ知り合ひの人にはその文章を批評することが出来ず、又冒険するのを見るのを恐れます。明らかにこれは矛盾で、何事もし出かしの得ない病だとは知り乍ら改めやうもなくてゐるのです。如何とも出来ない。まあ成るやうにさせて置ませう。」／魯迅は彼女への書信には呼びかけ名を特に「廣平兄」として通常の男性宛のものと異らなくしてゐる。

に同じ

ありません。そしてかういふ人は今非常に少く、あつたとしたら尚更軽々しく使つてしまつてはなりません。それによしんば一二回かういふ事が起つたにしても、實際は国民を震動させるに足りないでせう。彼等はまだ非常に麻痺してゐて、悪い輩に至つては警備を嚴重にこそすれ、心を改めようとはしません。それにそれは悪い影響を引き起し易く、例へば民国二年に袁世凱もこの方法を用ゐたやうなもので、革命家が使ふのは多くは青年ですが、彼のは金で下層民を雇うのであつて、数から言つたらやはりこちらが馬鹿を見ます。ただあの時は革命家等の人を雇つて更に殺させ合つたので、此の道は一層墮落し、今ではたとへ復活させても一時の憂さばらしにはなつても大局とは関係無いと思ひます。第二は、僕の性質はこんなふうなので、自分のしないことはあまり賛成しないのです。僕は時には辛辣に批評もできるし、又曾つて青年に冒険を煽動したこともあるが、ただ知り合ひの人にはその文章を批評することができず、又冒険するのを見るのを恐れます。明らかにこれは矛盾で、何事もし出かしの得ない病だとは知り乍ら改めやうもなくてゐるのです。如何ともできない。まあ成るやうにさせて置きましょう。」／魯迅は彼女への書信には呼びかけ名を特に「廣平兄」として通常の男性宛のもの

(一〇)が、後に彼女は彼の愛人となつた。そして更にその後には彼の

<p>妻となった。</p>	<p>た人であり、私はこの手紙の往復の頃より十二年ぐらゐ後（一九三七年）に彼女に会つてゐる。</p>	<p>同じ</p>	<p>妻となった。</p>
<p>(159) 私が一九三七年に初めて会つた彼女はこの手紙の往復の頃より十二年後の、すでに未亡人となつてゐた彼女であり、年齢は見たところ三十七八歳ぐらゐ、比較的大柄なからだの上の、</p>	<p>(120) その頃の彼女はすでに未亡人となつてゐ、年齢は見たところ三十七八歳ぐらゐ、比較的大柄な身体の上の、</p>	<p>同じ</p>	<p>(100) 私が一九三七年に初めて会つた彼女はこの手紙の往復の頃より十二年後の、すでに未亡人となつてゐた彼女であり、年齢は見た所三十七八才ぐらゐ、比較的大柄なからだの上の、</p>
<p>(160) 表情がなぜか今でも</p>	<p>同じ</p>	<p>(124) 表情が、今でも</p>	<p>(100) 表情が、なぜか今でも</p>
<p>(160) 進路を防ぐため</p>	<p>(121) 針路を防ぐため</p>	<p>(124) 進路を防ぐため、</p>	<p>同じ</p>
<p>(160) たいし</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(100) 対し</p>
<p>(161) 迫つた。序章に私が引いた「仮にこのやうな青年を殺し尽してしまつたなら」に初まる一節及び「惨ましい象はもう私の目を見るに忍びなくさせた」に初まる一節は共にその時書かれたものである。殊に、彼は</p>	<p>(122) 迫つたり、又は</p>	<p>同じ</p>	<p>(101) 迫つた。序章に私が引いた「仮にこのやうな青年を殺し尽してしまつたなら」に初まる一節及び「惨ましい象はもう私の目を見るに忍びなくさせた」に初まる一節は共にその時書かれたものである。殊に、彼は</p>
<p>(161) 兼ねて</p>	<p>(122) 豫て</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(161) たいしては憤怒</p>	<p>(122) たいしては憤怒</p>	<p>(125) たいしては、憤怒</p>	<p>(101) 対しては憤怒</p>
<p>(162) その中で彼は「私は十八日の朝初めて午前中に群集が執政府にたいして請願するといふことを知つた。午後になつて衛隊が突然発砲し数百人の死傷者を出し、劉和珍君も殺害されたものの一人だといふ凶報に接した。だが私はさういふ噂についてはとにかく非常に疑ひを抱いてゐた。私は従来此の上も悪い悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたが、それでも</p>	<p>(123) 魯迅はこの三月十八日を民国以来最も暗黒の日と記し、愛国の青年男女を虐殺し、しかも誣いて「暴徒」となす政府の態度を、禽獣にも劣ると為し、曾つてない激越な言葉で反抗煽動の語を吐いてゐる。</p>	<p>(125) その中で彼は「私は十八日の朝初めて午前中に群集が執政府にたいして請願するといふことを知つた。午後になつて衛隊が突然発砲し数百人の死傷者を出し、劉和珍君も殺害されたものの一人だといふ凶報に接した。だが私はさういふ噂についてはとにかく非常に疑ひを抱いてゐた。私は従来此の上も悪い悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたが、それでも</p>	<p>(102) その中で彼は「私は十八日の朝初めて午前中に群集が執政府にたいして請願するといふことを知つた。午後になつて衛隊が突然発砲し数百人の死傷者を出し、劉和珍君も殺害された者の一人だといふ凶報に接した。だが私はさういふ噂についてはとにかく非常に疑ひを抱いてゐた。私は従来この上も悪い悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたが、それでも私</p>

私は尚下劣兇残がこれほどまでになり得ようとは想像も出来なければ信ずることも出来なかつた。殊にも堪へず微笑してゐたなごやかな劉和珍君が謂れなく府門の前に血を流すやうなことになるうとは？／けれどもその日のうちに事實は証明された。証拠は即ち彼女自身の死骸だ。外にも一つあるのは楊徳群君のそれである。しかもそれがただの殺害でなくまつた多くの虐殺だつたことを証明してゐるといふのはからだに棍棒の傷痕のあることである。／しかも段政府は令を發して彼女等を『暴徒』と言つた。／つづいて流言が出て、彼女等は人に利用されたのだと言はれた。と悲憤し、更に末尾へ行つて、私は先きに言つた、私は從來この上もない悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたこと。だがこの度だけはいくつかが、私が大に私の意想外に出た。一つは当局者がこれほど凶残であつたこと、一つは流言家がこれほど下劣であつたこと、一つは中国の女性が難に臨んでこれほど従容としてゐたことがそれである。／私が中国の女子の事を処理するのを目にしたのは去年以来のこと、少数ではあつたが、その熟練と堅固さ、百折尚屈しない氣概を見てしばしば感嘆したものだ。この度の弾雨の中に互に助け合ひ身を殞しても尚惜しまぬ事實に至つては、更に中国の女子の勇毅が陰謀秘計に遭ひ、圧制數千年に及んでゐるにも拘らず終に滅亡してゐなかつたことを証明するに足るものである。若しこの度の死傷者の将来にたい

私は尚下劣兇残がこれほどまでになり得ようとは想像も出来なければ信ずることも出来なかつた。殊にも堪へず微笑してゐたなごやかな劉和珍君が謂れなく府門の前に血を流すやうなことになるうとは？／けれどもそのうちに事實は証明された。証拠は即ち彼女自身の死骸だ。外にも一つあるのは楊徳群君のそれである。しかもそれがただの殺害でなくまつた多くの虐殺だつたことを証明してゐるといふのは、からだに棍棒の傷痕のあることである。／しかも段政府は令を發して彼女等を『暴徒』と言つた。／つづいて流言が出て、彼女等は人に利用されたのだと言はれた。と悲憤し、更に末尾へ行つて、私は先きに言つた、私は從來この上もない悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたこと。だがこの度だけはいくつかが、私が大に私の意想外に出た。一つは当局者がこれほど凶残であつたこと、一つは流言家が下劣であつたこと、一つは中国の女性が難に臨んでこれほど従容としてゐたことがそれである。／私が中国の女子の事を処理するのを目にしたのは去年來のこと、少数ではあつたが、その熟練と堅固さ、百折尚屈しない氣概を見てしばしば感嘆したものだ。この度の弾雨の中に互に助け合ひ身を殞しても尚惜しまぬ事實に至つては、更に中国の女子の勇毅が陰謀秘計に遭ひ、圧制數千年に及んでゐるにも拘らず終に滅亡してゐなかつたことを証明するに足るものである。若しこの度の死傷者の将来にたいする意義

は尚下劣兇残がこれほどまでになり得ようとは想像もできなければ信ずることもできなかつた。殊にも堪へず微笑してゐたなごやかな劉和珍君が謂れなく府門の前に血を流すやうなことになるうとは？／けれどもその日のうちに事實は証明された。証拠は即ち彼女自身の死骸だ。外にも一つあるのは楊徳群君のそれである。しかもそれがただの殺害でなくまつた多くの虐殺だつたことを証明してゐるといふのはからだに棍棒の傷痕のあることである。／しかも段政府は令を發して彼女等を『暴徒』と言つた。／つづいて流言が出て、彼女等は人に利用されたのだと言はれた。と悲憤し、更に末尾へ行つて、私は先きに言つた、私は從來この上もない悪意で中国人を邪推することを憚らなかつたこと。だがこの度だけはいくつかが、私が大に私の意想外に出た。一つは当局者がこれ程下劣であつたこと、一つは流言家がこれ程下劣であつたこと、一つは中国の女性が難に臨んでこれほど従容としてゐたことがそれである。／私が中国の女子の事を処理するのを目にしたのは去年以來のこと、少数ではあつたが、その熟練と堅固さ、百折尚屈しない氣概を見てしばしば感嘆したものだ。この度の弾雨の中に互に助け合ひ身を殞しても尚惜しまぬ事實に至つては、更に中国の女子の勇毅が陰謀秘計に遭ひ、圧制數千年に及んでゐるにも拘らず終に滅亡してゐなかつたことを証明するに足るものである。若しこの度の死傷者の将来に対する意義

<p>する意義を求めるならば、ここにこそその意義があるであらう。／＼いい加減に生きてゐる者は淡紅の血の色の中にほんやりかすかな希望を見るであらうが、まことの勇士は更に奮然として前へ進む」と、昂然と煽動の語を吐いてゐる。</p>		<p>を求めるならば、ここにこそその意義があるであらう。／＼いい加減に生きてゐる者は淡紅の血の色の中にほんやりかすかな希望を見るであらうが、まことの勇士は更に奮然として前へ進む」と、昂然と煽動の語を吐いてゐる。</p>	<p>を求めるならば、ここにこそその意義があるであらう。／＼いい加減に生きてゐる者は淡紅の血の色の中にほんやりかすかな希望を見るであらうが、まことの勇士は更に奮然として前へ進む」と、昂然と煽動の語を吐いている。</p>
---	--	---	---

第七章 「廈門行」() ()

* の、第七章に対する当該箇所は、以下のみ。
 《も早紙数も無いところへこの回で私はこの伝を一と先づ終結させねばならないのだ。最大スピードを以てその後の進行を語ることとしよつ。その前に少く説明を加へねばならないが、魯迅は民国九年から教育部の役人を勤める傍ら北京大学、北京高等師範学校の講師を兼任し、後に更に北京女子高等師範学校及び世界語専門学校講師をも兼ねて来てゐたが、北京を離れる頃には彼は厦門へ、彼女は広東へと向つた。彼女も広東の女子師範の教職に就くのであつた。この年は又蒋介石の国民革命軍が共産党と合作の下に北伐を開始した年であつた。そんなわけで時局の中心は北京から遠く広東へ移つてゐる。「創造社」の郭沫若や郁達夫は広東中山大学で教職に就いてゐ、中にも郭は北伐軍出征と同時にかつての芸術至上主義とは凡そうらはらにペンと剣に代へて決然軍営に身を投じてゐた。／＼厦門の生活は一言にして言へば彼には堪えられないものであつた。退屈でもあり、不愉快でもあつたのだ。》
 (3-45)

	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(106) 鼓浪嶼<small>ころうしよ</small></p>
<p>(167) 鼓浪嶼</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(106) 良く</p>
<p>(167) よく</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(168) 支那文学史二時間で</p>	<p>(125) 中国文学史二時間で</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(168) 尠なく</p>	<p>(126) 尠くなく</p>	<p>(131) 尠くなく</p>	<p>(106) 少くなく</p>
<p>(168) 出来上つてゐず</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(106) でき上つてゐず</p>
<p>(169) 帰らず日曜</p>	<p>に同じ</p>	<p>(132) 帰らず、日曜</p>	<p>に同じ</p>
<p>(169) 状態が僅か</p>	<p>に同じ</p>	<p>(132) 状態が、僅か</p>	<p>に同じ</p>
<p>(169) 出来上つた</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(107) でき上つた</p>

<p>(169)合せて</p> <p>(170)その書の序文で彼は言ふ、「曾つて時に私はしばしば子供の頃故郷で食べた野菜や果物 菱角だとか羅漢豆だとか、真菰の芽だとか香瓜だとかを思ひ出すのだつたが、すべて皆美味しくて口あたりがよかつた、すべて皆曾つて私に故郷を恋しがらせる蠱惑であつた。だが後に久し振りで味はつて見たら何程のこともなかつた。それらは記憶の上でだけ尚昔のままの意味が残つてゐたのだ。それらは或は一生の間私を騙して私を時々振り返らせるのかも知れない。」</p>	<p>(127)合せて</p> <p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>(167)合せて</p> <p>(108)その書の序文で彼は言つ、「曾つて時に私はしばしば子供の頃故郷で食べた野菜や果物 菱角だとか羅漢豆だとか、真菰の芽だとか香瓜だとかを思い出すのだつたが、すべて皆美味しくて口あたりがよかつた、すべて皆曾つて私に故郷を恋しがらせる蠱惑であつた。だが後に久し振りに味わつて見たら何程のこともなかつた。それらは記憶の上でだけ尚昔のままの意味が残つてゐるのだ。それらは或は一生の間私を騙して私を時々振り返らせるのかも知れない。」</p>
<p>(170)「不周山」式の古代の</p> <p>(171)された。魯迅は</p>	<p>(127)古代の</p> <p>同じ</p>	<p>同じ</p> <p>(134)された。／魯迅は</p>	<p>同じ</p>
<p>(172)試みに十月六日附の手紙の一節を引いてその書き振りを示して見よう。／「だが学校の状態はまづたゞひどくよくありません。朱山根の一派がすでに国学院で大に勢力を占め、××(××)が又ここへ来て法律系の主任になる筈で、これから『現代評論』の色彩が廈門大学に瀰漫しようとしてゐます。北京では国文系が對抗してゐましたが、この国学院は胡適之(胡適のこと適之は号)陳源(陳丙澐のこと)の類を沢山集めてゐて、僕は少しも希望が無い気がします。考へて御覧なさい、兼子はこんなに曖昧になつて来たのです。彼が朱山根を招聘し、山根がすぐ田難干、辛家本、田千頃の三人を推薦したらそれを受け、田千頃が</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>(108)試みに十月六日付の手紙の一節を引いてその書き振りを示して見よう。／「だが学校の状態はまづたゞひどくよくありません。朱山根の一派がすでに国学院で大に勢力を占め、××(××)が又ここへ来て法律系の主任になる筈で、これから『現代評論』の色彩が廈門大学に瀰漫しようとしてゐます。北京では国文系が對抗してゐましたが、この国学院は胡適之(胡適のこと適之は号)陳源(陳丙澐のこと)の類を沢山集めてゐて、僕は少しも希望が無い気がします。考へて御覧なさい、兼子はこんなに曖昧になつて来たのです。彼が朱山根を招聘し、山根がすぐ田難干、辛家本、田千頃の三人を推薦したらそれを受け、田</p>

<p>又蘆梅、黄梅の二人を推薦したら又受けてゐるのです。こんなふうだつたら僕等のやうな個体は当然排斥されます。だから僕はせいぜい本学期的終りには厦門大学を去らうと大いに考へてゐるのです。彼等は一実際永久にここにゐるつもりでゐ、情勢は北大の時よりもっと悪いのです。」</p>			<p>千頃が又蘆梅、黄梅の二人を推薦したら又受けてゐるのです。こんなふうだつたら僕等のやうな個体は当然排斥されます。だから僕はせいぜい本学期的終りには厦門大学を去らうと大いに考へてゐるのです。彼等は一実際永久にここにゐるつもりでゐ、情勢は北大の時よりもっと悪いのです。」</p>
<p>(173)近代支那初まつて</p>	<p>(129)近代中国始まつて</p>	<p>(135)近代中国初まつて</p>	<p>(180)近代支那初まつて</p>
<p>(173)聘せられて</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(109)聘<small>め</small>されて</p>
<p>(174)一と晩ちゆう</p>	<p>に同じ</p>	<p>(136)一と晩ちゆう</p>	<p>(110)一晚中</p>
<p>(174)なく</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(110)無く</p>
<p>(174)身近が</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(110)身近</p>
<p>(174)彼は、／回思す夜襲<small>わか</small>岐<small>わか</small>れに臨みての語／堅城を破らずんば矢つて帰らずと！／今日屍と成つて馬革に横はる。／禁じ難し清涙の君が衣に滴るを。／夜半ひとり</p>	<p>(130)彼は夜半ひとり</p>	<p>(136)彼は、／回思す夜襲<small>わか</small>岐<small>わか</small>れに臨みての語／堅城を破らずんば矢つて帰らずと！／今日屍と成つて馬革に横はる。／禁じ難し清涙の君が衣に滴るを。／夜半ひとり</p>	<p>に同じ</p>
<p>(175)でかけて</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(111)出掛けて</p>
<p>(175)さまざま</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(111)様々の</p>
<p>(175)ため魯迅の</p>	<p>に同じ</p>	<p>(137)ため、魯迅の</p>	<p>に同じ</p>
<p>(175)たいして</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(112)対して 二箇所</p>
<p>(176)廣平女士宛の手紙の次の一節がそれを証明し、且つ二人の学校に於ける地位を明かしてゐる。／「散会の後である教員が僕に話したので、数人の今度一緒に来た人物の僕排斥がだんだんはげしく</p>	<p>(131)そして、彼は林語堂にたいしてこの腐敗した空気のなかから早く去るべきだといふことを忠告したかつたのだが、それを言へるほどにも二人の間は親しくなかつたのでしばらくはそ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(112)広平女士宛の手紙の次の一節がそれを証明し、且つ二人の学校に於ける地位を明かしてゐる。／「散会の後である教員が僕に話したので、数人の今度一緒に来た人物の僕排斥がだんだん激しくな</p>

のままにしておいたが、

なつてゐることを知りました。といふのは彼等の語気からはその人はもう嗅ぎつけてゐたのですが、しかも尚彼等は彼と連絡したいらしいのです。彼はそこで嘆息して言ひました。／＼玉堂（林語堂のこと、玉堂は本名）は敵が随分多いんです、だが国学院に対して敢て手を下さないのは兼士とあなたの二人がゐられるからだけです。兼士が行つてもあなたがゐられればまだ持ちますが、もしあなたが行かれるなら敵は憚るものが無くなるので、玉堂の国学院はすぐ動揺しはじめるでせう。玉堂が失敗すれば彼等もゐられません。しかも彼等は、一方あなたを排斥し乍ら又一方それぞれ家族を迎へて長久の計を為す準備をしてゐます。まつたく馬鹿らしいことです。云々。と。／＼僕はこれは確かだと思ひます。この学校はちやうど『三国志演義』みたいで、互に銃や剣を持つてゐ、人殺しを見られます。北京の学界は都市の中で軋軋してゐたが、ここは小島の上で軋軋してをり、土地は變つてゐるが軋軋は同じです。（中略）僕はこのには少しも未練は無く、困るのはやはり玉堂です。だが僕と玉堂の交りはまだ彼にかういふことを説き明す程度へは行つてゐません。よしんば言つたところが彼が信ずるかどうかもわかりません。だから僕は何も言はずに自分のことをやつてゐるより仕方がありません。彼等が僕を攻め倒さうと思つても急にはむつかしいことだし、僕はここで年末から来年まで自分の樂しみを眺めてゐます。玉堂のこと

つてゐることを知りました。といふのは彼等の語気からはその人はもう嗅ぎつけていたのですが、しかも尚彼等は彼と連絡したいらしいのです。彼はそこで嘆息して言ひました。／＼玉堂（林語堂のこと、玉堂は本名）は敵が随分多いんです、だが国学院に対して敢て手を下さないのは兼士とあなたの二人がゐられるからだけです。兼士が行つてもあなたがゐられればまだ持ちますが、もしあなたが行かれるなら敵は憚るものが無くなるので、玉堂の国学院はすぐ動揺し始めるでせう。玉堂が失敗すれば彼等もゐられません。しかも彼等は、一方あなたを排斥し乍ら又一方それぞれ家族を迎へて長久の計を為す準備をしてゐます。まつたく馬鹿らしいことです。云々。と。／＼僕はこれは確かだと思ひます。この学校はちやうど『三国志演義』みたいで、互に銃や剣を持つてゐ、人殺しを見られます。北京の学界は都市の中で軋軋してゐたが、ここは小島の上で軋軋しており、土地は變つてゐるが軋軋は同じです。（中略）僕はこのには少しも未練は無く、困るのはやはり玉堂です。だが僕と玉堂の交りはまだ彼にかういふことを説き明かす程度へは行つてゐません。よしんば言つたところが彼が信ずるかどうかもわかりません。だから僕は何も言わずに自分のことをやつてゐるより仕方がありません。彼等が僕を攻め倒さうと思つても急にはむつかしいことだし、僕はここで年末から来年迄自分の樂しみを眺めています。玉堂のことは

<p>は僕は多分心にかけ乍らも何も出来ないうてせう。」／が、</p> <p>(178) なかつた</p> <p>(178) 去留</p> <p>(178) 去ることに</p> <p>(179) はじめてみた</p> <p>(179) 人たち</p> <p>(179) ことがその</p>	<p>同じ</p> <p>(132) 去就</p> <p>(132) 去ることを</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p>	<p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p>	<p>僕は多分心に掛け乍らも何もできないでしょう。」／が、</p> <p>(112) 無かつた</p> <p>同じ</p> <p>同じ</p> <p>(115) 始めていた</p> <p>(113) 人達</p> <p>(113) ことが、その</p>
---	--	---	--

にあなたは援助できます。だが援助した後も彼等は尚非常に不満足で、その上怨むのです。といふのは彼等はあなたの収入が非常に多いと思ふので、その一点で即ち援助しないといふことに等しくなるのです。で、あなたが力をつくして援助すると言へばそれがあなたの吝嗇を詐つてゐることになるのです。将来若しかしてうまく行かないとすぐにわつと散り、ひどいものになると邪魔をしようとして、そのあなたを訪ねた時に見た態度や、衣飾や、住家などを攻撃の材料にします。これが前の吝嗇にたいする罰です。かういふ状態を僕は皆味ひました。今多分あなたはこの味を嘗めはじめてゐるのです。これはいかにも人を悩ませ、いらさせますが、味つてみるのモいい、といふのは世事を知られば一層眞実が深まつて来ますから。だがかういふ状態は永続できません。しばらくの間経験した後では恍然大悟と大悟し、毅然として彼等を遺棄するやうになります。さうしなければよしんば自己の全部を犠牲にしたところで彼等はやつぱり満足せず、且つやつぱり救はれもしないのです。(十月二十八日の分より)又、この数年に僕は随分文学青年に会ひましたが、その経験の結果彼等の僕にたいする態度は大抵使へる時は極力使ひ、詰責できる時は極力詰責し、攻撃できる時はむろん極力攻撃する、といふふうに感じました。そのために僕は進退去就に非常に戒心するやうになり、これは或は衰頹の一端かも知れないが、ただ僕はこれ

それについてモ忍ばれないところもあり容易に決心がつかないかつた。だが彼は間もなく決心した、即ち 従来彼は青年から受ける攻撃や嘲笑には反撃しなかつたのだが、ある種の青年の、彼が棺桶のなかへ逃げたにしても尚屍を討たうとするやうなものに我慢し切れなくなり、今後はいかなる青年にたいしてもれば拳で応へ、刀が来れば刀で応へることにしようとしたのであつた。

ふのにあなたは援助できます。だが援助した後も彼等は尚非常に不満足で、その上怨むのです。といふのは彼等はあなたの収入が非常に多いと思ふので、その一点で即ち援助しないといふことに等しくなるのです。で、あなたが力をつくして援助すると言へばそれがあなたの吝嗇を詐つてゐることになるのです。将来若しかしてうまく行かないとすぐにわつと散り、ひどいものになると邪魔をしようとして、そのあなたを訪ねた時に見た態度や、衣飾や、住家などを攻撃の材料にします。これが前の吝嗇にたいする罰です。かういふ状態を僕は皆味ひました。今多分あなたはこの味を嘗めはじめてゐるのです。これはいかにも人を悩ませ、いらさせますが、味つてみるのモいい、といふのは世事を知られば一層眞実が深まつて来ますから。だがかういふ状態は永続できません。しばらくの間経験した後では恍然大悟と大悟し、毅然として彼等を遺棄するやうになります。さうしなければよしんば自己の全部を犠牲にしたところで彼等はやつぱり満足せず、且つやつぱり救はれもしないのです。(十月二十八日の分より)又、この数年に僕は随分文学青年に会ひましたが、その経験の結果彼等の僕にたいする態度は大抵使へる時は極力使ひ、詰責できる時は極力詰責し、攻撃できる時はむろん極力攻撃する、といふふうに感じました。そのために僕は進退去就に非常に戒心するやうになり、これは或は衰頹の一端かも知れないが、ただ僕はこれ

たは援助できます。だが援助した後も彼等は尚非常に不満足で、その上怨むのです。といふのは彼等はあなたの収入が非常に多いと思ふので、その一点で即ち援助しないといふことに等しくなるのです。で、あなたが力をつくして援助すると言へばそれがあなたの吝嗇を詐つてゐることになるのです。将来若しかしてうまく行かないとすぐにわつと散り、ひどいものになると邪魔をしようとして、そのあなたを訪ねた時に見た態度や、衣飾や、住家などを攻撃の材料にします。これが前の吝嗇に対する罰です。かういふ状態を僕は皆味ひました。今多分あなたはこの味を嘗めはじめてゐるのです。これはいかにも人を悩ませ、いらさせますが、味つてみるのモいい、といふのは世事を知られば一層眞実が深まつて来ますから。だがかういふ状態は長つづきできません。しばらくの間経験した後では恍然大悟と大悟し、毅然として彼等を遺棄するやうになります。さうしなければよしんば自己の全部を犠牲にしたところで彼等はやつぱり満足せず、且つやつぱり救われもしないのです。(十月二十八日の分より)又、この数年に僕は随分文学青年に会ひましたが、その経験の結果彼等の僕にたいする態度は大抵使へる時は極力使ひ、詰責できる時は極力詰責し、攻撃できる時はむろん極力攻撃する、といふふうに感じました。そのために僕は進退去就に非常に戒心するやうになり、これは或は衰頹の一端かも知れないが、ただ僕はこれ

も環境がさうしたと思ふのです。／＼実際は僕もまだ少しは野心があり、広東へ行つたら『紳士』たちにたいしてやつぱり打撃を加へようと思つてゐます。ひよつとしたらまあ北京へ帰れなくなるが、何でもありません。第二は創造社と連合して同一戦線を張り旧社会に攻め寄せ、再び努力して文章を書くことです。(十一月七日の分より)／＼又、／＼僕は静かな夜に、以前の経験を追憶して、現在の社会は大抵利用すべき時は極力利用し、打つべき時は極力打ち、自分に有利でさへあればいいといふやうに感じます。僕は北京ではあんなに忙しく、来客は絶えなかつたが、段祺瑞、章士釗の圧迫を受けるが早い、ある人々はすぐに原稿を返してくれと言ひ、僕が選んだり、序文を書いたりするの欲しくなりました。甚だしいのにならと尚機に乗じて攻撃し、僕が飯に呼んだのさへ罪状で、それは彼等に運動したといふことになり、好いお茶を彼に出したのも罪状で、それは僕の奢侈の証拠といふことになるのです。自分の浮沈に藉りて人々の顔や言葉の変化を見るのは非常に為になり、面白くもあるが、僕の修養の期間はあまりに浅く、時にはやつぱり憤激から免れられません。そのために又いつも今後行くべき道について逡巡するのです。(一)心を殺していくらかの金を蓄へ、将来何事もなさず自分本位にコツコツ暮す、(二)もう自己を顧みず、人のために仕事をし、将来飢餓に瀕しても厭はず、又他人の悪罵をも意にかけない、

れも環境がさうしたと思ふのです。／＼実際は僕もまだ少しは野心があり、広東へ行つたら『紳士』たちにたいしてやつぱり打撃を加へようと思つてゐます。ひよつとしたらまあ北京へ帰れなくなるが、何でもありません。第二は創造社と連合して同一戦線を張り旧社会に攻め寄せ、再び努力して文章を書くことです。(十一月七日の分より)／＼又、／＼僕は静かな夜に、以前の経験を追憶して、現在の社会は大抵利用すべき時は極力利用し、打つべき時は極力打ち、自分に有利でさへあればいいといふやうに感じます。僕は北京ではあんなに忙しく、来客は絶えなかつたが、段祺瑞、章士釗の圧迫を受けるが早い、ある人々はすぐに原稿を返してくれと言ひ、僕が選んだり、序文を書いたりするの欲しくなりました。甚だしいのにならと尚機に乗じて攻撃し、僕が飯に呼んだのさへ罪状で、それは彼等に運動したといふことになり、好いお茶を彼に出したのも罪状で、それは僕の奢侈の証拠といふことになるのです。自分の浮沈に藉りて人々の顔や言葉の変化を見るのは非常に為になり、面白くもあるが、僕の修養の期間はあまりに浅く、時にはやつぱり憤激から免れられません。そのために又いつも今後行くべき道について逡巡するのです。(一)心を殺していくらかの金を蓄へ、将来何事もなさず自分本位にコツコツ暮す、(二)もう自己を顧みず、人のために仕事をし、将来飢餓に瀕しても厭はず、又他人の悪罵をも意にかけない、

境がさうしたと思ふのです。／＼実際は僕もまだ少しは野心があり、広東へ行つたら『紳士』たちにたいしてやつぱり打撃を加へようと思つてゐます。ひよつとしたらまあ北京へ帰れなくなるが、何でもありません。第二は創造社と連合して同一戦線を張り旧社会に攻め寄せ、再び努力して文章を書くことです。(十一月七日の分より)／＼又、／＼僕は静かな夜に、以前の経験を追憶して、現在の社会は大抵利用すべき時は極力利用し、打つべき時は極力打ち、自分に有利でさへあればいいといふやうに感じます。僕は北京ではあんなに忙しく、来客は絶えなかつたが、段祺瑞、章士釗の圧迫を受けるが早い、ある人々はすぐに原稿を返してくれと言ひ、僕が選んだり、序文を書いたりするの欲しくなりました。甚だしいのにならと尚機に乗じて攻撃し、僕が飯に呼んだのさへ罪状で、それは彼等に運動したといふことになり、好いお茶を彼に出したのも罪状で、それは僕の奢侈の証拠といふことになるのです。自分の浮沈に藉りて人々の顔や言葉の変化を見るのは非常に為になり、面白くもあるが、僕の修養の期間はあまりに浅く、時にはやつぱり憤激から免れられません。そのために又いつも今後行くべき道について逡巡するのです。(一)心を殺していくらかの金を蓄へ、将来何事もなさず自分本位にコツコツ暮す、(二)もう自己を顧みず、人のために仕事をし、将来飢餓に瀕しても厭わず、又他人の悪罵をも意にかけない、(三)再

(三)再び何か仕事をし、若し所謂「同人」さへもが皆背後から銃撃したなら、生存と報復のために如何なることも敢て為す、ただ僕の友達(廣平女士のこと)だけは失ひたくない。この第二条は僕はすでに二個年行つて遂にあまりに馬鹿らしいと思ひました。最初の一条は先づ資本家の庇護によらねばならないので堪へ切れないかも知れませんが、最後の一条は頗る剣呑で、見据えもつかず(生活上)その上又相当忍ばれないところもありました。それ故まつたく決心を下しがたく、手紙を書いて僕の友人(廣平女士)に相談しようと思ふ次第です、一条の光を垂れ給へ。(十一月十五日の分より)又、
 青年の僕にたいする攻撃や嘲笑には僕は従来反撃しませんでした。彼等はまだ脆弱だが、やつぱり僕の方は比較的踏みつけられるのをこらへることが出来ます。ところが彼はますますつけ上り、いつまでも罵倒を止めず、まるで僕がよしんば棺桶の中へ逃げたにしても尚屍を討たうとするやうな様子です。それで僕は昨日決めたのです、如何なる青年にたいしてもう情にとらはれまいと。先づ公開文をつくり、彼が僕の名を利用し、しかも他人が僕の名前を使ふのにたいしては笑罵を加へる等の情状を暴露して、彼の喋々と談ずる長文よりもずつと毒々しくし、『語絲』『莽原』『新女性』『北新』の四つの出版物へのせます。僕はすでにこれ以上彷徨することなく、拳が来れば拳で応へ、刀が来れば刀で応へることに決めたので、非

(三)再び何か仕事をし、若し所謂「同人」さへもが皆背後から銃撃したなら、生存と報復のために如何なることも敢て為す、ただ僕の友達(廣平女士のこと)だけは失ひたくない。この第二条は僕はすでに二個年行つて遂にあまりに馬鹿らしいと思ひました。最初の一条は先づ資本家の庇護によらねばならないので堪へ切れないかも知れませんが、最後の一条は頗る険呑で、見据えもつかず(生活上)その上又相当忍ばれないところもありました。それ故まつたく決心を下しがたく、手紙を書いて僕の友人(廣平女士)に相談しようと思ふ次第です、一条の光を垂れ給へ。(十一月十五日の分より)又、
 青年の僕にたいする攻撃や嘲笑には僕は従来反撃しませんでした。彼等はまだ脆弱だが、やつぱり僕の方は比較的踏みつけられるのをこらへることが出来ます。ところが彼はますますつけ上り、いつまでも罵倒を止めず、まるで僕がよしんば棺桶の中へ逃げたにしても尚屍を討たうとするやうな様子です。それで僕は昨日決めたのです、如何なる青年にたいしてもう情にとらはれまいと。先づ公開文をつくり、彼が僕の名を利用し、しかも他人が僕の名前を使ふのにたいしては笑罵を加へる等の情状を暴露して、彼の喋々と談ずる長文よりもずつと毒々しくし、『語絲』『莽原』『新女性』『北新』の四つの出版物へのせます。僕はすでにこれ以上彷徨することなく、拳が来れば拳で応へ、刀が来れば刀で応へることに決めたので、非

び何か仕事をし、若し所謂「同人」さへもが皆背後から銃撃したなら、生存と報復のために如何なることも敢て為す、ただ僕の友達(廣平女士のこと)だけは失ひたくない。この第二条は僕はすでに二個年行なつて遂にあまりに馬鹿らしいと思ひました。最初の一条は先づ資本家の庇護によらねばならないので堪へ切れないかも知れませんが、最後の一条は頗る険呑で、見据えもつかず(生活上)その上又相当忍ばれないところもありました。それ故まつたく決心を下しがたく、手紙を書いて僕の友人(廣平女士)に相談しようと思ふ次第です、一条の光を垂れ給へ。(十一月十五日の分より)又、
 青年の僕にたいする攻撃や嘲笑には僕は従来反撃しませんでした。彼等はまだ脆弱だが、やつぱり僕の方は比較的踏みつけられるのをこらへることが出来ます。ところが彼はますますつけ上り、いつまでも罵倒を止めず、まるで僕がよしんば棺桶の中へ逃げたにしても尚屍を討たうとするやうな様子です。それで僕は昨日決めたのです、如何なる青年に對してもう情にとらわれまいと。先づ公開文をつくり、彼が僕の名を利用し、しかも他人が僕の名前を使ふのに對しては笑罵を加へる等の情状を暴露して、彼の喋々と談ずる長文よりもずつと毒々しくし、『語絲』『莽原』『新女性』『北新』の四つの出版物へ載せます。僕はすでにこれ以上彷徨することなく、拳が来れば拳で応へ、刀が来れば刀で応へることに決めたので、非常に気持良くなりまし

常に気持よくなりました。(十一月二十日の分より)又、僕は今文章をつくる青年にたいして実際いくらか失望してゐます。僕の見るところでは望のある青年は大抵は戦争に行つてゐるのかも知れません。筆墨を弄んでゐるものについては、真に幾分でも社会のためにはまだ会つてゐません。彼等は多くは新しい看板をかけた利己主義者です。しかし彼等は自分では僕よりも十年も二十年も新らしいと思つてゐるのです。僕はほんとに彼等は自己を知る明が無いと思ひます。(十二月二日の分より)これに類する言葉を魯迅は尚幾度か手紙のうちに吐露してゐる。少しくどくなるが、最後に厦門での最後の厦門出發の三四日前(一月十一日附)のものの一節を引いてこの紹介を終りにしよう。これはあなたも知つてゐることだが、この三四年だけでも僕はよく識つてゐる、又は初めて識つた文学青年にたいしてどうだつたでせう、尽力できることがあれば尽力するだけで、何等悪い気持は持つてゐませんでした。それだに男たちと来たら彼等自身の間でも嫉妬を抑へ切れず、どこのつまりは争ひはじめ、一方が不満だとすぐに僕を打ち殺して今一方への助力を無くさせようと思ふのです。又女生徒が僕のそばにゐるのを見ると彼はすぐに流言をつくるのです。かういふ流言は事の無にかかはらず、僕が女と顔を合せないでゐない限りは必ず彼等がつくり出すのです。彼等は新思想家のやうな顔

常に気持よくなりました。(十一月二十日の分より)又、僕は今文章をつくる青年にたいして実際いくらか失望してゐます。僕の見るところでは望のある青年は大抵は戦争に行つてゐるのかも知れません。筆墨を弄んでゐるものについては、真に幾分でも社会のためにはまだ会つてゐません。彼等は多くは新しい看板をかけた利己主義者です。しかし彼等は自分では僕よりも十年も二十年も新らしいと思つてゐるのです。僕はほんとに彼等は自己を知る明が無いと思ひます。(十二月二日の分より)これに類する言葉を魯迅は尚幾度か手紙のうちに吐露してゐる。少しくどくなるが、最後に厦門での最後の厦門出發の三四日前(一月十一日附)のものの一節を引いてこの紹介を終りにしよう。これはあなたも知つてゐることだが、この三四年だけでも僕はよく識つてゐる、又は初めて識つた文学青年にたいしてどうだつたでせう、尽力できることがあれば尽力するだけで、何等悪い気持は持つてゐませんでした。それだに男たちと来たら彼等自身の間でも嫉妬を抑へ切れず、どこのつまりは争ひはじめ、一方が不満だとすぐに僕を打ち殺して今一方への助力を無くさせようと思ふのです。又女生徒が僕のそばにゐるのを見ると彼はすぐに流言をつくるのです。かういふ流言は事の無にかかはらず、僕が女と顔を合せないでゐない限りは必ず彼等がつくり出すのです。彼等は新思想家のやうな顔

た。(十一月二十日の分より)又、僕は今文章をつくる青年にたいして実際いくらか失望してゐます。僕の見るところでは望のある青年は大抵は戦争に行つてゐるのかも知れません。筆墨を弄んでゐる者については、真に幾分でも社会のためにはまだ会つてゐません。彼等は多くは新しい看板をかけた利己主義者です。しかし彼等は自分では僕よりも十年も二十年も新らしいと思つてゐるのです。僕はほんとに彼等は自己を知る明が無いと思ひます。(十二月二日の分より)これに類する言葉を魯迅は尚幾度か手紙の中に吐露してゐる。少しくどくなるが、最後に厦門での最後の厦門出發の三四日前(一月十一日附)のものの一節を引いてこの紹介を終りにしよう。これはあなたも知つてゐることだが、この三四年だけでも僕はよく識つてゐる、又は初めて識つた文学青年に対してどうだつたでせう、尽力できることがあれば尽力するだけで、何等悪い気持は持つてゐませんでした。それだに男たちと来たら彼等自身の間でも嫉妬を抑へ切れず、どこのつまりは争ひはじめ、一方が不満だとすぐに僕を打ち殺して今一方への助力を無くさせようと思ふのです。又女生徒が僕のそばにゐるのを見ると彼はすぐに流言をつくるのです。かういふ流言は事の無にかかはらず、僕が女と顔を合せないでゐない限りは必ず彼等がつくり出すのです。彼等は新思想家のやうな顔を

うな顔をしてゐるが、骨の内はまるで暴君酷吏、探偵、小人です。若しも僕が再び隠忍し、譲歩するならば彼等はますますつけ上り、底止するところを知りません。僕は彼等を軽蔑します。僕は前にはたまたま愛に想ひ到りましたが、いつもすぐに我乍ら恥しくなり、それに相対しないのを怖れ、それ故敢て誰一人をも愛しません。けれども彼等の言行思想の内幕を見極めればすぐに自分はあるいふ人間にまで身を低める必要は決して無いといふ自信がつくのです。僕は愛することは出来ず！

／選択もなく並べ過ぎた観があるが、要は手紙に書かれてある内容よりは魯迅の潔癖性及び怒りの感情を具象的に伝へたかつたがためである。青年たちの裏切りのことは一々具体的に書いてないからくはしいことはわからぬが、その例の潔癖な性質からしていくぶん誇張もあるのではないかと思はれる。といふのは具体的に書かれてあるのは主として長虹といふ青年のことであり、この青年は魯迅に原稿登載の世話を受けたりしてゐたのだが、しばしば魯迅のところへやつて来たのは、魯迅も後で知つたのだが廣平女士に会ひたいためであり、彼女にひそかに思ひを寄せてゐたのであつたが、彼女に魯迅と共に北京を去られてしまつたので急に魯迅に悪罵を浴せ始めたといふ特殊の事情の下にある青年であつた。そんな関係のため魯迅は特に心が尖つてゐたのであらうが、一般論的に言つて魯迅の気持

をしてゐるが、骨の内はまるで暴君酷吏、探偵、小人です。若しも僕が再び隠忍し、譲歩するならば彼等はますますつけ上り、底止するところを知りません。僕は彼等を軽蔑します。僕は前にはたまたま愛に想ひ到りましたが、いつもすぐに我乍ら恥しくなり、それに相対しないのを怖れ、それ故敢て誰一人をも愛しません。けれども彼等の言行思想の内幕を見極めればすぐに自分はあるいふ人間にまで身を低める必要は決して無いといふ自信がつくのです。僕は愛することが出来ず！

／選択もなく並べ過ぎた観があるが、要は手紙に書かれてある内容よりは魯迅の潔癖性及び怒りの感情を具象的に伝へたかつたがためである。青年たちの裏切りのことは一々具体的に書いてないからくはしいことはわからぬが、その例の潔癖な性質からしていくぶん誇張もあるのではないかと思はれる。といふのは具体的に書かれてあるのは主として長虹といふ青年のことであり、この青年は魯迅に原稿登載の世話を受けたりしてゐたのだが、しばしば魯迅のところへやつて来たのは、魯迅も後で知つたのだが廣平女士に会ひたいためであり、彼女にひそかに思ひを寄せてゐたのであつたが、彼女に魯迅と共に北京を去られてしまつたので急に魯迅に悪罵を浴せ始めたといふ特殊の事情の下にある青年であつた。そんな関係のため魯迅は特に心が尖つてゐたのであらうが、一般論的に言つて魯迅の気持

酷吏、探偵、小人です。若しも僕が再び隠忍し、譲歩するならば彼等はますますつけ上り底止するところを知りません。僕は彼等を軽蔑します。僕は前にはたまたま愛に想ひ到りましたが、いつもすぐに我乍ら恥しくなり、それに相対しないのを怖れ、それ故敢て誰一人をも愛しません。けれども彼等の言行思想の内幕を見極めればすぐに自分はあるいふ人間にまで身を低める必要は決して無いといふ自信がつくのです。僕は愛することが出来ず！

／選択もなく並べ過ぎた観があるが、要は手紙に書かれてある内容よりは魯迅の潔癖性及び怒りの感情を具象的に伝へたかつたが為である。青年たちの裏切りのことは一々具体的に書いてないから詳しいことはわからぬが、その例の潔癖な性質からしていくぶん誇張もあるのではないかと思はれる。といふのは、具体的に書かれてあるのは主として長虹という青年のことであり、この青年は魯迅に原稿登載の世話を受けたりしてゐたのだが、しばしば魯迅のところへやつて来たのは、魯迅も後で知つたのだが廣平女士に会ひたいためであり、彼女にひそかに思ひを寄せてゐたのであつたが、彼女に魯迅と共に北京を去られてしまつたので急に魯迅に悪罵を浴せ始めたといふ特殊の事情の下にある青年であつた。そんな関係のため魯迅は特に心が尖つてゐたのであらうが、一般論的に言つて魯迅の気持にはい

<p>(188)異り (189)忍びがたく (189)憤慨するところ (189)防止するため (190)書き (190)舞ひ込む (190)生徒たち (190)眼 (191)仕事もなく (191)あなため (191)帰ってくる (191)取り残された</p>	<p>無かつたとは言へないやうにも思はれる。そしてさういふ彼の徴候は同時に過去に於て彼がいかに青年たちのために尽したかといふことを証明するものでもあつてあつた。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(188)異なり (189)忍び難く (189)憤慨する所 (189)防止する為 (189)描き (190)舞込む (190)生徒達 (190)目 (190)仕事も無く (190)いない為 (190)帰つて来る (190)とり残された</p>
<p>(191)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(191)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>
<p>(192)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(192)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>
<p>(193)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(193)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>
<p>(194)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(194)学校を去つた後で彼女は魯迅宛の手紙中に書いてある。→まつたくこの派別のややこしさといざこざは長く北京の簡単の中にいたもの予想もできないことです。私などは女子師範で一部の人が学校の暗黒を感じ改革を欲してゐるのを見て、その意見に賛成し、それ</p>

<p>れたのに後になると仲間がどこかへ行つてしまふ、校長が辞職するで、私のやうな世故に馴れないため代りが出来てから手を引かうなどと思つてゐる馬鹿者だけが取り残され、用も無いのに学校に残つてゐて徒らに罵られるといふ始末です。でもこれはまだたいしたことでもないんです後で聞いたことですが、同僚の一人はさきには最も激烈で、事件の起つた当の初は旧派の学生にたいしては許すべからざることを固く主張し、何かと革新派の学生のために帷幄の計をめぐらしてゐたのですが、その人が却つて私を共産党だといふのです。その人は、私が誤つて彼等を同志にし、仲間に入り入れたが、今はその非を知り、私が共産党とわかつたので事を共にしない、云々と言ふのです。」</p>	<p>(192)合言葉であつた。廣平女士をさう言つて罵るものは、彼女が校長の廖冰筠女士の一味であり、その校長の兄の廖仲凱が、国民党左派だといふところから論理立てて言ふのであつた。</p>	<p>(192)合言葉であり、廣平女士が親しくしてゐた校長の廖冰筠女士の兄の廖仲凱が国民党左派だといふ一点だけを根拠にして、よく彼女を「共産党」と言つて罵るものもゐるのであつた。</p>	<p>(192)合言葉であつた。広平女士をさういふで罵るものは、彼女が校長の廖冰筠女士の一味であり、その校長の兄の廖仲凱が、国民党左派だといふところから論理立てて言つのであつた。</p>
<p>(193) 魯迅と</p>	<p>(137) こんなんふうで、この頃の魯迅と</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(193)訴へ合ふ〔二箇所〕</p>	<p>(137)訴へ合ふ</p>	<p>同じ</p>	<p>(121)訴え合つ</p>
<p>(193)もの同士</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(121)者同士</p>
<p>(193)引き揚げる</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(121)ひきあげる</p>
<p>(193)約二十人位るもの学生が</p>	<p>(138)約二十人位の学生が</p>	<p>同じ</p>	<p>(121)約二十人位もの学生が</p>

第八章 「広東受難」() ~)

* の、第八章に対する該当箇所は、以下のみ。
 へそれで翌年初め招聘を受けたのを機に更に広東中山大学へ移った。この年の四月十二日蔣は上海で共産党駆逐のクーデターを行ひそれが広東へも波及し、労働者、農民、急進的知識階級人三千余人が殺戮された。彼と関係深い学生たちも多数逮捕された。彼は憤激して学校当局へ辞表を叩きつけた。辞意は容れられなかつたが、しかも彼は頑強に出校を拒んだ。／彼は左傾した。彼の突然の左傾の心理にははつきり了解しがたい節もあるが、根本的には支那が支那として独自に改革されることに絶望した結果ではないかと私には推測される。(3-46)

(194)まかせてゐた。	(138)任せてゐた。	同じ	同じ
(197)見られたためにその	同じ	(155)見られたために、その	同じ
(197)悦びはほんやり想像出来るが	同じ	同じ	(124)喜びはほんやり想像できるが
(197)見当らぬ。	141 見当らない。	同じ	同じ
(197)隣々	同じ	同じ	(124)そうそう
(198)よごと思ひます。	(142)よごと思ふ	同じ	(125)良いと思ひます。
(199)がありません。	(142)などない、	同じ	同じ
(199)よごごと	同じ	同じ	(125)良いごと
(199)興趣のあることでありませう。少しく仰山な言ひ方をするなら、例へば柳の樹を植ゑるやうなもの、柳の樹が大きくなり濃い影が日を蔽ふやうになれば、百姓は一と働らきしてお午にはその柳の樹の下に坐つて飯を食ひ、休息を取ることも出来るといふわけです。	(142)興味のあることである	同じ	(125)興趣のあることでありませう。少しく仰山な言ひ方をするなら、例へば柳の木を植ゑるやうなもの、柳の木が大きくなり濃い影が日を蔽ふやうになれば、百姓は一と働らきしてお午にはその柳の木樹の下に坐つて飯を食ひ、休息をとることもできるという訳です。
(199)一首の詩は孫伝芳を嚇かし走らせることは出来ませんが、一発	(124)詩を作つても孫伝芳を嚇かし走らせることは出来ないが、	同じ	(125)一首の詩は孫伝芳を嚇かし走らせることはできませんが、一発

					の砲は轟くや孫伝芳を走らせました。
	(199) 思つてゐますが、私個人はとかく懐疑を覚えてゐます。	(199) 思つてゐるが、私個人はとかく懐疑を抱いてゐる。	同じ	(157) 真実であります、／と言ひ、	(125) 思つていますが、私個人はとかく懐疑を覚えてゐます。
	(199) 真実であります、と言ひ、	(143) 真実である、といふ意味の「こと」を述べ、	(157) 真実であります、	(125) 真実であります、と言ひ	(125) 真実であります、と言ひ
	(200) せず、恐らくものし得なかつたのであらうが、それには彼自身その余裕を失つてゐたのであらう。	(143) しなかつたのには、他にもむろん理由はあるが彼自身その余裕を失つてゐたのも一つの原因であらう。	同じ		(125) せず、恐らくものし得なかつたのであらうが、それには彼自身その余裕を失つてゐたのであらう。
(200) 当初中山	(143) 当初、中山	同じ	同じ	同じ	同じ
(200) 充つて	同じ	同じ	同じ	(126) あつて	(126) あつて
(200) 出つくわつて	同じ	(157) 出つくわつて、	同じ	(126) 出つくわつて主	(126) 出つくわつて主
(200) 言ひがたい	同じ	同じ	同じ	(126) 言い難い	(126) 言い難い
(200) しまつしたり	同じ	同じ	同じ	(126) 始末したり	(126) 始末したり
(201) 言へば他のもの	同じ	(158) 言へば、他のもの	同じ	(126) 言へば他のもの	(126) 言へば他のもの
(201) 他のもの	同じ	同じ	同じ	(126) 他のもの	(126) 他のもの
(201) いふ始末	同じ	同じ	同じ	(126) 言つ始末	(126) 言つ始末
(201) 11の日革命	(144) 11の日、革命	同じ	同じ	同じ	同じ
(201) すでに	同じ	同じ	同じ	(126) 既に	(126) 既に
	(201) この南京攻略の日に世界を聳動させた一事件が起つた。革命軍が日本を含む数ヶ国の外国領事館を襲撃し、在留外人に略奪暴行を加へた所謂南京事件がそれである。それまでの革命軍はその軍隊のイ	(145) 此の頃からそれまで合作をつづけてゐた国民党と共産党はやうやく離反の徴を見せはじめたが、四月十二日に至つてそれは遂に明確な形をとつて現はれた。	(158) この南京攻略の日に世界を聳動させた一事件が起つた。革命軍が日本を含む数ヶ国の外国領事館を襲撃し、在留外人に掠奪暴行を加へた所謂南京事件がそれである。それまでの革命軍はその軍隊のイ	(126) この南京攻略の日に世界を聳動させた一事件が起つた。革命軍が日本を含む数ヶ国の外国領事館を襲撃し、在留外人に掠奪暴行を加へた所謂南京事件がそれである。それ迄の革命軍はその軍隊のイ	

デオロギーはともかくとして、兵士の行動そのものは英国を除く各国間には概してあまり不評ではなかつたのであつたが、この事件でその信用は一度に地に墜ちた。この事件は一般に共産党がソ連の指令に従つて起したと見られてゐ、といふのは国民党と共産党は合作はしてゐるものの結局は互に利用し合つてゐるまでなので、この長江線の完全確保、浙江財閥の吸収といふところまで漕ぎつけた時が両党分離の危機とする見解から、先手を打つて国民党蒋介石一派を外交的に窮地に陥れるためにたくらまれたといふのである。／それはともかく四月十二日に至つて国共分離は明確な形をとつて現はれた。共産党弾圧の所謂蒋介石のクーデターが初まつたのである。

「該当箇所なし」

(23)筆者の私はその当時杭州に合せて、この蔣クーデターの前後に私の勤め先である領事館近傍の練兵場でしきりに労働者群の訓練が行はれてゐたのを私は目撃したことがあつた。後でわかつたのだが、それは蒋介石一派が守り立ててつくらせた商工連合会(?)なる団体に属する労働者群であり、共産党系の総工会と対抗させるためのものであつた。果してこの団体数千人が一日市内大示威遊行を試みたのであるが、その同じ日に総工会も同じ挙に出、両団体は街の一角で遭遇して、大乱戦に陥りさうな形勢にまで至つたのであつたが、官憲は総工会側に発砲して退散させ、たしか若干の死傷者もあつたやうに記憶する。

デオロギーはともかくとして、兵士の行動そのものは英国を除く各国間には概してあまり不評ではなかつたのであつたが、この事件でその信用は一度に地に墜ちた。この事件は一般に共産党がソ連の指令に従つて起したと見られてゐ、といふのは国民党と共産党は合作はしてゐるものの結局は互に利用し合つてゐるまでなので、この長江線の完全確保、浙江財閥の吸収といふところまで漕ぎつけた時が両党分離の危機とする見解から、先手を打つて国民党蒋介石一派を外交的に窮地に陥れるためにたくらまれたといふのである。／それはともかく四月十二日に至つて国共分離は明確な形をとつて現はれた。共産党弾圧の所謂蒋介石のクーデターが初まつたのである。

デオロギーはともかくとして、兵士の行動そのものは英国を除く各国間には概してあまり不評ではなかつたのであつたが、この事件でその信用は一度に地に墜ちた。この事件は一般に共産党がソ連の指令に従つて起したと見られてゐ、といふのは国民党と共産党は合作はしてゐるものの結局は互に利用し合つてゐるまでなので、この長江線の完全確保、浙江財閥の吸収といふところまで漕ぎつけた時が両党分離の危機とする見解から、先手を打つて国民党蒋介石一派を外交的に窮地に陥れるためにたくらまれたといふのである。／それはともかく四月十二日に至つて国共分離は明確な形をとつて現はれた。共産党弾圧の所謂蒋介石のクーデターが始まつたのである。

(24)筆者の私はその当時杭州に合せて、この蔣クーデターの前後に私の勤め先である領事館近傍の練兵場でしきりに労働者群の訓練が行はれてゐたのを私は目撃したことがあつた。後でわかつたのだが、それは蒋介石一派が守り立ててつくらせた商工連合会(?)なる団体に属する労働者群であり、共産党系の総工会と対抗させるためのものであつた。果してこの団体数千人が一日市内大示威遊行を試みたのであるが、その同じ日に総工会も同じ挙に出、両団体は街の一角で遭遇して、大乱戦に陥りさうな形勢にまで至つたのであつたが、官憲は総工会側に発砲して退散させ、たしか若干の死傷者もあつたやうに記憶する。

(25)筆者の私はその当時杭州に合せて、この蔣クーデターの前後に私の勤め先である領事館近傍の練兵場でしきりに労働者群の訓練が行なわれていたのを私は目撃したことがあつた。後でわかつたのだが、それは蒋介石一派が守り立てて作らせた商工連合会(?)なる団体に属する労働者群であり、共産党系の総工会と対抗させるためのものであつた。果してこの団体数千人が一日市内大示威遊行を試みたのであるが、その同じ日に総工会も同じ挙に出、両団体は街の一角で遭遇して、大乱戦に陥りさうな形勢にまで至つたのであつたが、官憲は総工会側に発砲して退散させ、たしか若干の死傷者もあつたやうに記憶する。

(203) さて、広東では前記大殺戮の行はれたと	(145) とくろで、この広東の大殺戮と	同じ	同じ	(127) さて、広東では前記大殺戮の行はれたと
(203) まじって	同じ	同じ	同じ	(127) 混って
(204) が結果	同じ	同じ	同じ	(128) が、結果
(204) が彼は	同じ	同じ	同じ	(128) が、彼は
(204) させて見て	同じ	同じ	同じ	(128) させてみて
(204) が彼は	同じ	同じ	同じ	(128) が、彼は
(204) やせて当時	(146) やせて、当時	同じ	同じ	同じ
(205) 横はり	同じ	(161) 横はり	(128) 横わり	(128) 横わり
(205) 「諸子」	(147) 「諸子」	同じ	同じ	同じ
(205) 「酒・薬・女・仏	同じ	同じ	(128) 「酒・薬・女・仏	(128) 「酒・薬・女・仏
(206) 後に彼は広東について次のやうに書いてゐる。／＼「当時私は広州にたいして愛憎はなかつた。したがつて悲喜もなく、褒貶もなかつた。私は夢幻を抱きながら来て、実際に会うや否や夢境から放逐され、ただいささかの索漠をとどめさせられただけであつた。私は広州が結局中国の一部であつて、珍しい花果や特別な言葉が游子の耳目をかき乱すことは出来るにしても、しかし実際は私の往つたことのある他のところと格別異つてゐないことを感じた。かりに中国が一幅の人間でないもの絵図であるとする、各省の図様は実は相違するところなく、差異はただ用ゐられた色彩だけである。黄河	「該当箇所なし」	同じ	同じ	(206) 後に彼は広東について次のやうに書いてゐる。／＼「当時私は広州にたいして愛憎はなかつた。したがつて悲喜もなく、褒貶もなかつた。私は夢幻を抱きながら来て、実際に会うや否や夢境から放逐され、ただいささかの索漠をとどめさせられただけであつた。私は広州が結局中国の一部であつて、珍しい花果や特別な言葉が游子の耳目をかき乱すことは出来るにしても、しかし実際は私の往つたことのある他のところと格別異つてゐないことを感じた。かりに中国が一幅の人間でないもの絵図であるとする、各省の図様は実は相違するところなく、差異はただ用ゐられた色彩だけである。黄河

<p>以北の数省は黄色と灰色とで画かれ、江浙は淡墨と淡緑、厦門は淡紅と灰色、広州は深緑と深紅だ。私は当時実はまだ遊行したことがないやうに感じて、だから又特別の罵詈訕の言葉もなく、ひたすら素馨と香蕉とに傾注しようとしたのだ。だがこれも後に回想して生じた感じなのかも知れない、当時は実はまだこんなにはつきりしてはあなかつた。」</p>	<p>(207) 一方の政治の方はと言ふと、曩に国共分裂に依つて</p>	<p>(208) 彼自身の言葉を借りれば、「私は従来進化論を信じてゐて、総じて将来は必ず過去に勝り、青年は必ず老人に勝るものと思つてゐたので、青年にたいしては私は敬重したあまり、往々自分が十刀を与へられても私は彼に一箭を返しただけだつた」のが、彼は自分のさういふ態度が誤つてゐたと思ひ初めた。広東の地で、同じく青年であり乍ら二大陣営に分れて、或は投書して密告したり、或は官を助けて人を捕へさせた事実を眼にして以来彼の従来物の考へ方は微塵に粉碎され、青年であるからと言つて無条件には尊重出来なくなつたのであつた。そして彼は二大青年群の一方の方へはつきり味方しはじめたのであつた。それについて彼は「決して唯物史観の理論もしくは革命文芸の作品が私を疊感したからではなく」と言つてゐるが、</p>
<p>(209) 彼の弱者を助け権力を持たな</p>	<p>(207) 一方国共分裂後の政治の方はと言ふと</p>	<p>(208) 進化論を信じてゐて、総じて将来は必ず過去に勝り、青年は必ず老人に勝るものと思つてゐたので、青年にたいしては一も二もなく尊敬してゐたのだが、彼は自分のさういふ態度が誤つてゐたと思ひ始めた。広東の地で、同じく青年であり乍ら二大陣営に分れて、或は投書して密告したり、或は官を助けて人を捕へさせた事実を眼にして以来彼の従来物の考へ方は微塵に粉碎され、青年であるからと言つて無条件には尊重出来なくなつたのであつた。そして彼は二大青年群の一方の方へはつきり味方し始めたのであつた。それについて彼は「決して唯物史観の理論もしくは革命文芸の作品に疊感されたからではない」と言つてゐるが、</p>
<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(209) 従来から彼にあつた、半植民</p>
<p>は黄色と灰色とで描かれ、江浙は淡墨と淡緑、厦門は淡紅と灰色、広州は深緑と深紅だ。私は当時実はまだ遊行したことがないように感じて、だから又特別の罵詈訕の言葉もなく、ひたすら素馨と香蕉とに傾注しようとしたのだ。だがこれも後に回想して生じた感じなのかも知れない、当時は実はまだこんなにはつきりしてはいなかつた。」</p>	<p>(209) 一方の政治の方はと言ふと、曩に国共分裂に依つて</p>	<p>(208) 彼自身の言葉を借りれば、「私は従来進化論を信じてゐて、総じて将来は必ず過去に勝り、青年は必ず老人に勝るものと思つてゐたので、青年にたいしては私は敬重したあまり、往々自分が十刀を与へられても私は彼に一箭を返しただけだつた」のが、彼は自分のさういふ態度が誤つてゐたと思ひ初めた。広東の地で、同じく青年であり乍ら二大陣営に分れて、或は投書して密告したり、或は官を助けて人を捕へさせた事実を眼にして以来彼の従来物の考へ方は微塵に粉碎され、青年であるからと言つて無条件には尊重出来なくなつたのであつた。そして彼は二大青年群の一方の方へはつきり味方しはじめたのであつた。それについて彼は「決して唯物史観の理論もしくは革命文芸の作品が私を疊感したからではなく」と言つてゐるが、</p>

<p>(210) 16 脱出行</p>	<p>いものに味方し、苦しめられるもののためにたたかふといふ従来から彼にあつた一種の人道主義的</p>	<p>(209) その当時の気持を彼は後年増田涉に次のやうに端的に語つてゐる。／＼国民党は有為な青年を陥罪に落し込んだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車だ革命は共産党が国民党を引つぱることによつて成功するのだと言つた、或は革命の恩人だといふのでボロヂンの前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党になつた。すると今度は共産党なるが故に彼等を片端から殺戮した。この点は旧式軍閥の方がまだ人がいい。彼等は最初から共産党を容れず最後までその主義を守つた。彼等の主義が嫌なものはだから寄りつかないとか反抗するとかすればそれでいい。だが国民党のとつたやり方はまるでベテンだ。その殺し方がまたひどかつた。例へば同じ殺すにしても脳天へ一発の弾丸を打てばそれで目的は達せられる筈なのに、刻み斬りだとか生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人を騙して虐殺の材料にするやうな国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生を沢山殺した。」</p>
<p>(149) 脱出行</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>地といふ特殊な環境に育まれた彼独特の人間主義的</p>
<p>に同じ</p>	<p>(210) その当時の気持を彼は後年増田涉に次のやうに端的に語つてゐる。／＼国民党は有為な青年を陥罪に落し込んだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車で、革命は共産党が国民党を引つぱることによつて成功するのだと言つた、或は革命の恩人だといふのでボロヂンの前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党になつた。すると今度は共産党なるが故に彼等を片端から殺戮した。この点は旧式軍閥の方がまだ人がいい。彼等は最初から共産党を容れず最後までその主義を守つた。彼等の主義が嫌なものはだから寄りつかないとか反抗するとかすればそれでいい。だが国民党のとつたやり方はまるでベテンだ。その殺し方がまたひどかつた。例へば同じ殺すにしても脳天へ一発の弾丸を打てばそれで目的は達せられる筈なのに、刻み斬りだとか生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人を騙して虐殺の材料にするやうな国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生を沢山殺した。」</p>	<p>はぐ い者に味方し、苦しめられる者のために戦うといふ従来から彼にあつた一種の人道主義的</p>
<p>に同じ</p>	<p>(211) その当時の気持を彼は後年増田涉に次のやうに端的に語つてゐる。／＼国民党は有為な青年を陥罪に落し込んだ。初めは、共産党は機関車で国民党は列車だ、革命は共産党が国民党を引つぱることによつて成功するのだと言つた、或は革命の恩人だと言つたのでボロヂンの前で学生一同に最敬礼をさせたりした。だから青年は誰もが感激して共産党になつた。すると今度は共産党なるが故に彼等を片端から殺戮した。この点は旧式軍閥の方がまだ人がいい。彼等は最初から共産党を容れず最後までその主義を守つた。彼等の主義が嫌なものは、だから寄りつかないとか反抗するとかすればそれでいい。だが国民党のとつたやり方はまるでベテンだ。その殺し方がまたひどかつた。例へば同じ殺すにしても脳天へ一発の弾丸を打てばそれで目的は達せられる筈なのに、刻み斬りだとか、生き埋めだとか、親兄弟までも殺したりした。僕はそれ以来、人を騙して虐殺の材料にするやうな国民党はどうしてもいやだ。憎しみがこびりついてしまった。僕の学生をたくさん殺した。」</p>	<p>い者に味方し、苦しめられる者のために戦うといふ従来から彼にあつた一種の人道主義的</p>

* の、第九章に対する該当箇所は、以下のみ。
 《間もなく彼は許広平女士と共に上海にわたり、ここに新たに彼女を妻としての共同生活を営み乍ら（彼の旧妻は母親等と共に北京の家に残つてゐた）専ら短評的エッセイに筆陣を張つたが、彼は支那及支那人に絶望してゐ乍らも最後まで支那及支那人を愛することを止めず、そこに彼が国民作家と言はれるにふさはしいものがあつた。／＼上海生活は彼の死に至るまでまる九年間続けられたが、その間の彼の生活については当然略さなければならぬ。中途半端なところで読者諸君と別れるのは残念だが何れ近く別な形でこの伝を完成させるつもりであるからその時再び読んでもらえれば幸である。》
 (3-46)

「該当箇所なし」	「該当箇所なし」	(153) なし	「該当箇所なし」
(213) 無し	(153) なし	(153) 同じ	(153) 同じ
(214) 蘇連（五箇所）	同じ	同じ	(134) ソ連
(215) 内容は、社会	同じ	同じ	(135) 内容は社会
(215) 支那文壇	(155) 中国文壇	同じ	同じ
(215) 主張してゐた	同じ	(135) 主張してゐる	(135) 主張していた
(216) 薄べらな、チャーナリスティックな騒々しい身ぶりに我慢出来なくて	(216) 薄ッぺらな、ジャーナリスティックな騒々しい身振りに我慢出来なくて	同じ	(235) 薄べらな、ジャーナリスティックな騒々しい身ぶりに我慢できなくて
(216) 魯迅は前に北京で関係してゐて、それが北京で禁止に遭つたので、改めて上海へ移し、今度は編集までひき受けた「語絲」を機関誌として持ち前の鋭鋒でたゆまず彼等を反撃してゐたが、その論旨、論調は大凡次のやうなものであつた。／＼「あらゆる革命以前の	「該当箇所なし」	(216) 魯迅は前に北京で関係してゐて、それが北京で禁止に遭つたので、改めて上海へ移し、今度は編集までひき受けた「語絲」を機関誌として持ち前の鋭鋒でたゆまず彼等を反撃してゐたが、その論旨、論調は大凡次のやうなものであつた。／＼「あらゆる革命以前の	(236) 魯迅は前に北京で関係してゐて、それが北京で禁止に遭つたので、改めて上海へ移し、今度は編集までひき受けた「語絲」を機関誌として持ち前の鋭鋒でたゆまず彼等を反撃してゐたが、その論旨、論調は大凡次のやうなものであつた。／＼「あらゆる革命以前の

幻想的或ひは理想的革命詩人は、自分の謳歌し希望してゐた現実につかつて死ぬ運命が大いにあり得る、しかも現実の革命がもしこの種の詩人的幻想或ひは理想を粉碎しなかつたとするならば、その革命もやはり布告の上の空談に過ぎないのだ。だがエセーニンとソボリーリとはまだ大して非難すべきではない、彼等が前後して自己のために輓歌を歌つたのは、彼等に眞実があつたからだ。彼等は自身の沈没で革命の前進を証明したのだ。彼等は結局傍観者ではなかつたのだ。／＼又、／＼「けれども革命家は決して自己を批判することを怖れない、彼は知ること極めて明瞭であり、彼等は明言を敢てする。ただ中国だけは特別であり、人の後からトルストイを『穢らしい説教者』と称することは知つてゐるが、中国の『目前の状態』にたいして却つて『事実として、社会の各方面も亦黒雲密に籠めてゐる勢力の支配を受けてゐる』ことを感じてゐるだけで、彼（トルストイ）が『政府の暴力、裁判行政の喜劇的仮面を剥ぎ去つた』勇気の幾分の一さへ持つてゐないのだ。人道主義が徹底しなかつたことは知つてゐるが、然し『人を殺すこと草の如く声を聞かず』といふ時にも人道主義式の抗争さへもないのだ。剥ぎ取る^とと抗争することとはただ『咬文嚼字』に過ぎず、決して『直接行動』ではない。私は決して文章を書く人が直接行動に走ることを希望するものではない、私は文章を書く人は概して文章を書き得るだけだといふことを知つ

幻想的或ひは理想的革命詩人は、自分の謳歌し希望してゐた現実につかつて死ぬ運命が大いにあり得る、しかも現実の革命がもしこの種の詩人的幻想或ひは理想を粉碎しなかつたとするならば、その革命もやはり布告の上の空談に過ぎないのだ。だがエセーニンとソボリーリとはまだ大して非難すべきではない、彼等が前後して自己のために輓歌を歌つたのは、彼等に眞実があつたからだ。彼等は自身の沈没で革命の前進を証明したのだ。彼等は結局傍観者ではなかつたのだ。／＼又、／＼「けれども革命家は決して自己を批判することを怖れない、彼は知ること極めて明瞭であり、彼等は明言を敢てする。ただ中国だけは特別であり、人の後からトルストイを『穢らしい説教者』と称することは知つてゐるが、中国の『目前の状態』にたいして却つて『事実として、社会の各方面も亦黒雲密に籠めてゐる勢力の支配を受けてゐる』ことを感じてゐるだけで、彼（トルストイ）が『政府の暴力、裁判行政の喜劇的仮面を剥ぎ去つた』勇気の幾分の一さへ持つてゐないのだ。人道主義が徹底しなかつたことは知つてゐるが、然し『人を殺すこと草の如く声を聞かず』といふ時にも人道主義式の抗争さへもないのだ。剥ぎ取る^とと抗争することとはただ『咬文嚼字』に過ぎず、決して『直接行動』ではない。私は決して文章を書く人が直接行動に走ることを希望するものではない、私は文章を書く人は概して文章を書き得るだけだといふことを知つ

幻想的或ひは理想的革命詩人は、自分の謳歌し希望してゐた現実につかつて死ぬ運命が大いにあり得る、しかも現実の革命がもしこの種の詩人的幻想或ひは理想を粉碎しなかつたとするならば、その革命もやはり布告の上の空談に過ぎないのだ。だがエセーニンとソボリーリとはまだ大して非難すべきではない、彼等が前後して自己のために輓歌を歌つたのは、彼等に眞実があつたからだ。彼等は自身の沈没で革命の前進を証明したのだ。彼等は結局傍観者ではなかつたのだ。／＼又、／＼「けれども革命家は決して自己を批判することを怖れない、彼は知ること極めて明瞭であり、彼等は明言を敢てする。ただ中国だけは特別であり、人の後からトルストイを『穢らしい説教者』と称することは知つてゐるが、中国の『目前の状態』にたいして却つて『事実として、社会の各方面も亦黒雲密に籠めてゐる勢力の支配を受けてゐる』ことを感じてゐるだけで、彼（トルストイ）が『政府の暴力、裁判行政の喜劇的仮面を剥ぎ去つた』勇気の幾分の一さへ持つてゐないのだ。人道主義が徹底しなかつたことは知つてゐるが、然し『人を殺すこと草の如く声を聞かず』といふ時にも人道主義式の抗争さへも無いのだ。剥ぎ取る^とと抗争することとはただ『咬文嚼字』に過ぎず、決して『直接行動』では無い。私は決して文章を書く人が直接行動に走ることを希望するものではない、私は文章を書く人は概して文章を書き得るだけだといふことを知つ

てゐる。／残念なことに少しおくれはしたが、創造社は一昨年株式を募集し、去年弁護士をたのみ、今年になつて漸く『革命文学』の旗を掲げ、復活した批評家成仿吾はとにかく『芸術の宮』を守護する職掌を離れ、『大衆の獲得』に赴かうとし、その上革命文学者に『最後の勝利を保証』してやつた。この飛躍も必然的だとも言へる。文芸にたづさはる人々は大抵敏感であつて、絶えず自己の没落を感じ、且つそれを防がうとして、大海に漂流でもしてゐるやうに懸命にどこへでもしがみつゝ。／又、／この階級からあの階級に移つて行くことはむろんあり得ることです、けれども最も好いことは意識の如何を一つ一つ率直に述べ大衆に見せて、敵か味方かをはつきりさせることです。頭の中に多くの古い残滓をためてゐ乍ら、故意に欺瞞して芝居もどきに自分の鼻を指し、『俺こそは無産階級だ！』と言つてはなりません。今日の人々はもはや神経過敏になつてゐて、『露』の字（露西亞の露）を聴いただけで気絶しさうになり、唇さへも間もなく赤いことを許さないやうにならうとしてゐるのだから、出版物にたいしてはこれも怖るべし、あれも怖るべしです。そして革命文学者も亦他国の理論と作品とを多く紹介することを肯がはず、ただこのやうに自分の鼻を指してゐて、まるで前清の『旨を奉じて申斥』するのと同様に、人にはわけがわからないことにならうとしてゐます。／この『旨を奉じて申斥』するといふのは、帝制時代に役人

てゐる。／残念なことに少しおくれはしたが、創造社は一昨年株式を募集し、去年弁護士をたのみ、今年になつて漸く『革命文学』の旗を掲げ、復活した批評家成仿吾はとにかく『芸術の宮』を守護する職掌を離れ、『大衆の獲得』に赴かうとし、その上革命文学者に『最後の勝利を保証』してやつた。この飛躍も必然的だとも言へる。文芸にたづさはる人々は大抵敏感であつて、絶えず自己の没落を感じ、且つそれを防がうとして、大海に漂流でもしてゐるやうに懸命にどこへでもしがみつゝ。／又、／この階級からあの階級に移つて行くことはむろんあり得ることです、けれども最も好いことは意識の如何を一つ一つ率直に述べ大衆に見せて、敵か味方かをはつきりさせることです。頭の中に多くの古い残滓をためてゐ乍ら、故意に欺瞞して芝居もどきに自分の鼻を指し、『俺こそは無産階級だ！』と言つてはなりません。今日の人々はもはや神経過敏になつてゐて、『露』の字（露西亞の露）を聴いただけで気絶しさうになり、唇さへも間もなく赤いことを許さないやうにならうとしてゐるのだから、出版物にたいしてはこれも怖るべし、あれも怖るべしです。そして革命文学者も亦他国の理論と作品とを多く紹介することを肯がはず、ただこのやうに自分の鼻を指してゐて、まるで前清の『旨を奉じて申斥』するのと同様に、人にはわけがわからないことにならうとしてゐます。／この『旨を奉じて申斥』するといふのは、帝制時代に役人

ている。／残念なことに少しおくれはしたが、創造社は一昨年株式を募集し、去年弁護士をたのみ、今年になつて漸く『革命文学』の旗を掲げ、復活した批評家成仿吾はとにかく『芸術の宮』を守護する職掌を離れ、『大衆の獲得』に赴かうとし、その上革命文学者に『最後の勝利を保証』してやつた。この飛躍も必然的だとも言へる。文芸にたづさはる人々は大抵敏感であつて、絶えず自己の没落を感じ、且つそれを防ごうとして、大海に漂流でもしてゐるやうに懸命にどこへでもしがみつゝ。／又、／この階級からあの階級に移つて行くことはむろんあり得ることです、けれども最も好いことは意識の如何を一つ一つ率直に述べ大衆に見せて、敵か味方かをはつきりさせることです。頭の中に多くの古い残滓をためてゐ乍ら、故意に欺瞞して芝居もどきに自分の鼻を指し、『俺こそは無産階級だ！』と言つてはなりません。今日の人々はもはや神経過敏になつてゐて、『露』の字（露西亞の露）を聴いただけで気絶しさうになり、唇さへも間もなく赤いことを許さないやうにならうとしてゐるのだから、出版物にたいしてはこれも怖るべし、あれも怖るべしです。そして革命文学者も亦他国の理論と作品とを多く紹介することを肯がはず、ただこのやうに自分の鼻を指してゐて、まるで前清の『旨を奉じて申斥』するのと同様に、人にはわけがわからないことにならうとしてゐます。／この『旨を奉じて申斥』するといふのは、帝制時代に役人

	が過失を犯すと、皇帝がその役人 をある門の外に跪かせ、一人の太 監をつかはして斥罵させることで、 この時役人がいくらか金を使へば 黒倒は軽くて済むが、使はなけれ ば祖宗から子孫にまで罵言が及ぶ のである。		が過失を犯すと、皇帝がその役人 をある門の外に跪かせ、一人の太 監をつかはして斥罵させることで、 この時役人がいくらか金を使へば 黒倒は軽くて済むが、使はなけれ ば祖宗から子孫にまで罵言が及ぶ のである。		が過失を犯すと、皇帝がその役人 をある門の外に跪かせ、一人の太 監をつかはして斥罵させることで、 この時役人がいくらか金を使へば 黒倒は軽くて済むが、使はなけれ ば祖宗から子孫にまで罵言が及ぶ のである。
(220)信用出来なかつたので	に同じ	に同じ	に同じ	(138)信用できなかつたので、	
(220)商牌主義で	(156)商牌主義(似而非左翼主義) に同じ	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)ことは彼が	に同じ	(173)ことは、彼が	に同じ	に同じ	
(221)ついて自身、別の	(157)ついては自身、別の	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)からだ」と	(157)からだ」と	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)あつた。	に同じ	に同じ	に同じ	(139)あつた	
(221)彼が	(157)その	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)求め、「魯迅	(157)求め、魯迅	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)言へる。	(157)言へる	に同じ	に同じ	(139)言へる。	
(221)一人だ」と	(157)一人だ」と	に同じ	に同じ	に同じ	
(221)あらうが徐々に	(157)あらうが、徐々に	に同じ	に同じ	(139)あらうが徐々に	
(222)画室	に同じ	(173)画室(馮雪峰のペンネーム)	に同じ	に同じ	
(222)僅かに「魯迅を	(157)僅かに魯迅を	に同じ	に同じ	に同じ	
(222)任務でない」こと	(158)任務でないこと	に同じ	に同じ	に同じ	
(222)日迄	に同じ	(174)日まで	に同じ	(139)日まで	
(222)出かけた	に同じ	に同じ	に同じ	(139)出かけた	

第十章 上海生活(二)「〜」

<p>(227) たいこつ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(142) 対して</p>
<p>(227) 新しい戦士をつくり出す キ</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(142) 新しい戦士を作り出す</p>
<p>(222) すべてことわつた。</p> <p>「(22)彼は北京を発つ直前に夫人に宛てて次のやうに書いてゐる。／＼「北京は元來住みよく、図書館の古い本も多いが、ただ古い関係があるため一部の人は飯の種を提供したりしてくれるが、別の一部では僕が飯の種を奪ひに来たといふ疑ひを抱いてゐ、瓜田の中へ入らないことは出来てもさつさと遠くへ行つてしまはない限りは永遠に入らないと人に信じさせることはむづかしい。／＼D・H(DはDeaの頭文字、Hは害馬(haima)の頭文字、害馬は魯迅がずつと前夫人につけた綽名)よ、あなたどう思ひます、僕等はどこへ行きますか。僕等はやはり姓名をかくしてどこかの村里へ行き、一と言も言はずにみんな遊びませうか。」／魯迅はこのすぐ後に実際にこんな馬鹿げたことを考へてゐるわけではない、別に用も無いので勝手なお喋りをしただけだとことわつてゐるが、そんなお喋りをしたのも、ここでもある寂寞を感じさせられたためでもあらうか。</p> <p>「該当箇所なし」</p> <p>同じ</p> <p>(21)彼は北京を發つ直前に夫人に宛てて次のやうに書いてゐる。／＼「北京は元來住みよく、図書館の古い本も多いが、ただ古い関係があるため、一部の人は飯の種を提供したりしてくれるが、別の一部では僕が飯の種を奪ひに来たといふ疑ひを抱いてゐ、瓜田の中へ入らないことは出来てもさつさと遠くへ行つてしまはない限りは、永遠に入らないと人に信じさせることはむづかしい。／＼D・H(DはDeaの頭文字、Hは害馬(haima)の頭文字、害馬は魯迅がずつと前夫人につけた綽名)よ、あなたどう思ひます、僕等はどこへ行きますか。僕等はやはり姓名をかくしてどこかの村里へ行き、一と言も言はずにみんな遊びませうか。」／魯迅はこのすぐ後に実際にこんな馬鹿げたことを考へてゐるわけではない、別に用も無いので勝手なお喋りをしただけだとことわつてゐるが、そんなお喋りをしたのも、ここでもある寂寞を感じさせられたためでもあらうか。</p> <p>(23)彼は北京を發つ直前に夫人に宛てて次のやうに書いてゐる。／＼「北京は元來住みよく、図書館の古い本も多いが、ただ古い関係があるため一部の人は飯の種を提供したりしてくれるが、別の一部では僕が飯の種を奪ひに来たといふ疑ひを抱いてゐ、瓜田の中へ入らないことは出来てもさつさと遠くへ行つてしまわれない限りは永遠に入らないと人に信じさせることはむづかしい。／＼D・H(DはDeaの頭文字、Hは害馬(haima)の頭文字、害馬は魯迅がずつと前夫人につけた綽名)よ、あなたどう思ひます、僕等はどこへ行きますか。僕等はやはり姓名をかくしてどこかの村里へ行き、一と言も言はずにみんな遊びませうか。」／魯迅はこのすぐ後に実際にこんな馬鹿げたことを考へてゐるわけではない、別に用も無いので勝手なお喋りをしただけだと断つてゐるが、そんなお喋りをしたのも、ここでもある寂寞を感じさせられたためでもあらうか。</p>			

(227) 中では「私の	(161) 中では、私の	同じ	同じ	同じ
(227) 務めませんでした。	(161) 務めなかった、	同じ	同じ	同じ
(227) むろん	同じ	同じ	同じ	(142) 無論
(228) 文句でありました。	(161) 文句であった、	同じ	同じ	同じ
(228) 出現しませんでした。」と	(162) 現はれなかった、と	同じ	同じ	(142) 出現しませんでした」と
(228) デマ	(162) デマ「キー	同じ	同じ	同じ
(228) なかった	同じ	同じ	同じ	(142) 無かった
(228) 無かった	同じ	同じ	同じ	(142) なかった
(228) ことであり、	同じ	(188) ことであり（上海移居後はマルキシズムも勉強してみた）	同じ	同じ
(228) 攻撃であり	同じ	(188) 攻撃であり、	同じ	同じ
(229) 出来ない	同じ	同じ	(143) できない	
(230) 言ひ彼に	同じ	(181) 言ひ、彼に	(144) 言ひ彼に	
(230) 托した	(184) 託した	同じ	同じ	
(231) 顔ちゆう	同じ	(182) 顔ちゆう	(144) 顔中	
(232) それには次のやうに書かれてあつた。／「私は三十五人の同犯（七人は婦人）と一しよに昨日龍華に参りました。そして昨夜足枷をはめられました。政治犯にははじめての足枷の記録です。この事件の及ぼすところは甚だ大きい、私は当分出獄はむづかしいと思ひますので、書店のことは兄が私に代つてやつて下さることを望みます。	(232) それによると彼は三十五人の同犯（七人は婦人）と一しよに龍華へやられ、政治犯がかつてはめられたことのない足枷をはめられてゐ、当分出獄はむづかしいらしいとのこと、警察と公安局とは何度も周先生（魯迅のこと）の居所をたづねたが、自分はどうして知つてゐよう、などといふ文句も挿まれてゐた。	(232) それには次のやうに書かれてあつた。／「私は三十五人の同犯（七人は婦人）と一しよに昨日龍華に参りました。そして昨夜足枷をはめられました。政治犯にははじめての足枷の記録です。この事件の及ぼすところは甚だ大きい、私は当分出獄はむづかしいと思ひますので、書店のことは兄が私に代つてやつて下さることを望みます。	(232) それには次のやうに書かれてあつた。／「私は三十五人の同犯（七人は婦人）と一しよに昨日龍華に参りました。そして昨夜足枷をはめられました。政治犯にははじめての足枷の記録です。この事件の及ぼすところは甚だ大きい、私は当分出獄はむづかしいと思ひますので、書店のことは兄が私に代つてやつて下さることを望みます。	(232) それには次のやうに書かれてあつた。／「私は三十五人の同犯（七人は婦人）と一しよに昨日龍華に参りました。そして昨夜足枷をはめられました。政治犯にははじめての足枷の記録です。この事件の及ぼすところは甚だ大きい、私は当分出獄はむづかしいと思ひますので、書店のことは兄が私に代つてやつて下さることを望みます。

<p>す。今はまだいい、その上殿夫（白莽の本名）君について独逸語を学んでゐます。このことを周先生（魯迅）に告げて下さい、周先生に心配されぬやう望みます、私たちはまだ刑を受けてゐるわけではありません。警察と公安局とは何度も周先生の居所をたづねたが、私がどうして知つてゐよう。諸君心配しないで下さい。御多幸を祈る。 ／趙少雄一月二十四日／その裏には又次のやうに書かれてあつた。 ／「ブリキの飯碗を二三個ほしい、もし面会が出来なければ、品物を／趙少雄にわたしてくれと言へばよい。」</p>		<p>す。今はまだいい、その上殿夫（白莽の本名）君について独逸語を学んでゐます。このことを周先生（魯迅）に告げて下さい、周先生に心配されぬやう望みます、私たちはまだ刑を受けてゐるわけではありません。警察と公安局とは何度も周先生の居所をたづねたが、私がどうして知つてゐよう。諸君心配しないで下さい。御多幸を祈る。 ／趙少雄一月二十四日／その裏には又次のやうに書かれてあつた。 ／「ブリキの飯碗を二三個ほしい、もし面会が出来なければ、品物を／趙少雄にわたしてくれと言へばよい。」</p>	<p>す。今はまだいい、その上殿夫（白莽の本名）君について独逸語を学んでゐます。このことを周先生（魯迅）に告げて下さい、周先生に心配されぬやう望みます、私たちはまだ刑を受けてゐるわけではありません。警察と公安局とは何度も周先生の居所をたづねたが、私がどうして知つてゐよう。諸君心配しないで下さい。御多幸を祈る。 ／趙少雄一月二十四日／その裏には又次のやうに書かれてあつた。 ／「ブリキの飯碗を二三個ほしい、もし面会が出来なければ、品物を／趙少雄にわたしてくれと言へばよい。」</p>
<p>(233) 出来る</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(145) 出来る</p>
<p>(233) ブリキの碗はどいたか</p>	<p>(166) 無くて困つてゐる品はないか</p>	<p>同じ</p>	<p>(146) ブリキの碗は届いたか</p>
<p>(234) 交つてゐる</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(146) 混つてゐる</p>
<p>(234) まじつてゐる</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(146) 混つてゐる</p>
<p>(235) 序章に挙げて置いたが重ねて 同じに写す。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>同じ</p>	<p>(146) 序章に挙げて置いたが重ねて 同じに写す。</p>
<p>(235) 同じに</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(147) 実際は</p>
<p>(236) なかつた</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>	<p>(147) 無かつた</p>
<p>(236) 絶賞して、「唐人の</p>	<p>(168) 絶賞して、唐人の</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(236) 動かし、絶唱と言つていい</p>	<p>(168) 動かし、絶唱と</p>	<p>同じ</p>	<p>(147) 動かし、絶唱と言つていい</p>
<p>(236) 支那事変が初まる</p>	<p>(168) 日華戦争が始まる</p>	<p>(186) 日華戦争が始まる</p>	<p>(147) 支那事変が始まる</p>

(236)再び	同じ	同じ	同じ	(148)再度
(236)わたり増田	同じ	(186)わたり、増田	同じ	同じ
(237)三時頃まで	同じ	同じ	(148)三時頃迄	(148)三時頃迄
(237)夕方まで	同じ	同じ	(148)夕方迄	(148)夕方迄
(237)起きられて	同じ	同じ	(148)起きて	(148)起きて
(237)近いところ	同じ	同じ	(148)近い所に	(148)近い所に
(238)支那茶〔二箇所〕	同じ	(187)中国茶	同じ	同じ
(239)でかけ	(171)出かけ	同じ	同じ	同じ
(240)私たち	同じ	同じ	(150)私達	(150)私達
(240)三合	同じ	同じ	(150)一ノ三合	(150)一ノ三合
(241)よくない	同じ	同じ	(150)良くない	(150)良くない
(241)初まつて	(173)始まつて	同じ	(150)始まつて	(150)始まつて
(243)蒋介石の	(174)蒋介石政権の	同じ	同じ	同じ
(243)ことわつてゐる(序章参照)事実が	(174)ことわつてゐる事実が	同じ	同じ	(151)断っている(序章参照)事実が
(243)たいして魯迅は次のやうな返書を出してゐる。／＼日本に行つて暫らくの間生活することは、先から随分夢見て居たのですが、併し今ではよくないと思ひまして、やめた方が善いときめました。第一今に支那から離れると何も解らなくなつて、遂に書けなくなりまし、第二には生活する為に書くのですから、屹度『ジャーナリスト』の様なものになつて、どちに	(243)たいして魯迅は第一、今中国から離れると何も解らなくなつて、書けなくなる、第二、生活するために書くのだから、結局「ジャーナリスト」の様なものになる危険を挙げ、それにつけ加へて、佐藤先生も増田様も自分の原稿のために大いに奔走されるだらうから、そんな厄介なものが東京へ這入り込むのはよくないことだと言つてこと	(243)たいして魯迅は次のやうな返書を出してゐる。／＼日本に行つて暫らくの間生活することは、先から随分夢見て居たのですが、併し今ではよくないと思ひまして、やめた方が善いときめました。第一今に支那から離れると何も解らなくなつて、遂に書けなくなりまし、第二には生活する為に書くのですから、屹度『ジャーナリスト』の様なものになつて、どちにも為	(243)たいして魯迅は次のやうな返書を出してゐる。／＼日本に行つて暫らくの間生活することは、先から随分夢見ていたのですが、併し今ではよくないと思ひまして、やめた方が善いと決めました。第一今に支那から離れると何も解らなくなつて、遂に書けなくなりまし、第二には生活する為に書くのですから、屹度『ジャーナリスト』のやうなものになつて、どつちに	

<p>(245)初めた</p>	<p>(177)始めた</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(246)支那の</p>	<p>(177)中国の</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(249)促進する「ことに努力しはじめ、初めはテロリズムによつて映画会社や書店を襲撃破壊させてゐたが後には</p>	<p>(177)促進することに努力しはじめた。一方政府は</p>	<p>に同じ</p>	<p>(153)促進する「ことに努力しはじめ、初めはテロリズムによつて映画会社や書店を襲撃破壊させていたが後には</p>
<p>(245)所謂新生活運動を起して「我が民族固有の美德である</p>	<p>(176)「新生活運動」を起して、中国民族固有の徳である</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(245)短評も以上のやうな事情で国民政府</p>	<p>(176)短評も国民政府</p>	<p>に同じ</p>	<p>(153)短評も以上のような事情で国民政府</p>
<p>(245)帰宅後一詩をものしたが、その詩は序章にかけておいたからここには略す。</p>	<p>(176)（帰宅後ものした一詩は序章にかけておいた）</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(245)ひき起したのを見るや、政府は更に刺客を送つてその中心分子の一人楊杏仏を暗殺した。</p>	<p>(175)ひき起したが、それがたつて中心分子の一人楊杏仏が何者かに暗殺された。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(152)ひき起したのを見るや、政府は更に刺客を送つてその中心分子の一人楊杏仏を暗殺した。</p>
<p>(245)運動が</p>	<p>(175)運動は</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(245)出来た</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(152)できた</p>
<p>(245)伝はり、（事實は殺されなかつた）</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(151)伝わり（事實は殺されなかつた）</p>
<p>(245)北平</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(151)北平（蒋介石が南京を都として以後北京を「北平」と改称）</p>
<p>も為めになりません。その上佐藤先生も増田様も私の原稿の為に大に奔走なさるだろ のですから、そんな厄介なものが東京へ這入込むと実によくありません。（下略）（原文のまま）</p>	<p>わつてゐる。</p>	<p>になりません。その上佐藤先生も増田様も私の原稿の為に大に奔走なさるだろ のですから、そんな厄介なものが東京へ這入込むと実によくありません。（下略）（原文のまま）</p>	<p>も為めになりません。その上佐藤先生も増田様も私の原稿の為に大に奔走なさるだろ のですから、そんな厄介なものが東京へ這入込むと実によくありません。（下略）（原文のまま）</p>

(247) たいしては	に同じ	に同じ	に同じ	(154) 対しては
(247) たしかに	に同じ	に同じ	に同じ	(154) 確かに
(247) 初まつてゐた	(178) 始まつてゐた	に同じ	に同じ	(154) 始まつてゐた
(247) 死の時まで	に同じ	に同じ	に同じ	(154) 死の時迄
(248) 支那〔三箇所〕	(178) 中国	に同じ	に同じ	に同じ
(248) あつたのに近代	(179) あつたのに、近代	に同じ	に同じ	に同じ
(248) 新しい	に同じ	に同じ	に同じ	(154) 新しい
(248) 見越して彼は	に同じ	(194) 見越して、彼は	に同じ	に同じ
(249) 支那人〔三箇所〕	(179) 中国人	に同じ	に同じ	に同じ
(249) 支那	(180) 中国	に同じ	に同じ	に同じ
(249) 日支人	(180) 日華人	に同じ	に同じ	に同じ
(249) 仏蘭西の小説の	に同じ	に同じ	に同じ	(155) フランス小説の
(250) 大に	(180) 大いに	に同じ	に同じ	に同じ
(250) 支那語	(181) 中国語	に同じ	に同じ	に同じ
(250) 支那小学校	(181) 中国小学校	に同じ	に同じ	に同じ
(251) 支那〔二箇所〕	(181) 中国	に同じ	に同じ	に同じ
(251) 取つたりする	に同じ	に同じ	に同じ	(156) とつたりす
(251) 出来てゐない	に同じ	に同じ	に同じ	(156) できていない
(252) 支那人	(182) 中国人	に同じ	に同じ	に同じ
(252) ひき受けたが	(182) ひき受けたが	に同じ	に同じ	に同じ

(252)支那〔二箇所〕	(183)中国	ご同じ	ご同じ
(252)下に文字の	ご同じ	(198)下に、文字の	ご同じ
(252)たいして	ご同じ	(198)たいして、	(157)対して
(253)挙げてゐない	ご同じ	(198)挙げなかつた	(157)あげていない
(253)際彼は	ご同じ	(198)際、彼は	ご同じ
(253)支那文士	(183)中国文士	ご同じ	ご同じ
<p>(253)日本の「改造」に寄せた「SHAWとSHAWを見に来た人々を見る記」の冒頭でも彼は「私はSが好きだ。それはその作品、或は伝記を読んで好きになつたのではないので、只だ何処でか少許の警向を続んで、誰れかから彼はよく紳士社会の仮面を剥取ると云ふ事を聴いたから好きになつたのだ。もう一つは支那にも随分西洋の紳士の真似をする連中が居る、彼等は大抵Sをこのまじから、私は往々自分の嫌ふ人に嫌はれる人を善い人だと思ふときがある。」と述べてゐる。／又他の文章では「彼の語るのほんたうのことなのに、あくまで彼は冗談を言つてゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼自身は笑はないと言つて尤め立てる。彼の語るの率は率直な話であるのに、あくまで彼は諷刺してゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼は捌巧ぶつてゐると尤め立てる。」とも言つてゐる。</p>	<p>〔該当箇所なし〕</p>	<p>(198)日本の「改造」に寄せた「SHAWとSHAWを見に来た人々を見る記」(日本文)の冒頭でも彼は「私はSが好きだ。それはその作品、或は伝記を読んで好きになつたのではないので、只だ何処でか少許の警向を続んで、誰れかから彼はよく紳士社会の仮面を剥取ると云ふ事を聴いたから好きになつたのだ。もう一つは支那にも随分西洋の紳士の真似をする連中が居る、彼等は大抵Sをこのまじから、私は往々自分の嫌ふ人に嫌はれる人を善い人だと思ふときがある。」と述べてゐる。／又他の文章では「彼の語るのほんたうのことなのに、あくまで彼は冗談を言つてゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼自身は笑はないと言つて尤め立てる。彼の語るの率は率直な話であるのに、あくまで彼は諷刺してゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼は捌巧ぶつてゐると尤め立てる。」とも言つてゐる。</p>	<p>(158)日本の「改造」に寄せた「SHAWとSHAWを見に来た人々を見る記」の冒頭でも彼は「私はSが好きだ。それはその作品、或は伝記を読んで好きになつたのではないので、只だ何処でか少許の警向を続んで、誰れかから彼はよく紳士社会の仮面を剥取ると云ふ事を聴いたから好きになつたのだ。もう一つは支那にも随分西洋の紳士の真似をする連中が居る、彼等は大抵Sを好まないから、私は往々自分の嫌う人に嫌はれる人を善い人だと思ふ時がある」と述べてゐる。／又他の文章では「彼の語るのほんたうのことなのに、あくまで彼は冗談を言つてゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼自身は笑わないうつて尤め立てる。彼の語るの率は率直な話であるのに、あくまで彼は諷刺してゐると言ひ、彼に向つてははははと笑ひ、彼は捌巧ぶつてゐると尤め立てる。」とも言つてゐる。</p>
(254)支那	(183)中国	ご同じ	ご同じ

(254)支那文壇	(183)中国文壇	に同じ	に同じ
(254)退く	に同じ	に同じ	(158)退く
(255)うちに直った	(184)中に癒った	に同じ	(159)うちに直った
(255)わけであるが、そして此の頃にもまだ医者からはさつとは宣告されなかつたが、自分自身ではひそかに感付いて	(184)わけであるが、そしてこの頃にもまだ医者からはさつとは宣告されなかつたが、自分自身ではひそかに感付いて	(200)のであつた。／そしてまた医者からはさつとは宣告されなかつたが、自分自身ではひそかにそれを感付いて	(155)わけであるが、そして此の頃にもまだ医者からはさつとは宣告されなかつたが、自分自身ではひそかに感付いて

第十一章 晩年 上海生活(三)「〜」

(259)二十四、二十五年	(187)二十五 ^ル 年、二十五年	に同じ	に同じ
(259)違ひ、一階	に同じ	に同じ	(162)違ひ一階
(259)それほゞ	(187)それ程	に同じ	(162)それ程
(260)支那	(188)中国	に同じ	に同じ
(261)北支(二箇所)	(188)華北	に同じ	に同じ
(261)はげしかつた	(188)激しかつた	に同じ	(163)はげしかつた
(261)支那義勇軍	(189)中国義勇軍	に同じ	に同じ
(261)結果	(189)結果	に同じ	に同じ
(261)支那	(189)中国	に同じ	に同じ
(261)北支(二箇所)	(189)華北	に同じ	に同じ
(261)たいまつ	に同じ	に同じ	(163)たいまつ
(262)日滿支	(190)日滿華	に同じ	に同じ

(262) 起つた	(190) おこつた	同じ	同じ
(262) 現はれた	同じ	同じ	(164) 現れた
(262) 立ち上つた	(190) 立ち上つた	同じ	(164) 立ち上がった
(263) なかつたが、「民族	(191) なかつたが、民族	同じ	(164) なかつたかが、「民族
(263) である」との	(191) である」との	同じ	同じ
(264) 亦	同じ	同じ	(165) 又
(264) なく	同じ	同じ	(165) 無く
(264) ない	同じ	同じ	(165) 無い
(265) ため	同じ	同じ	(165) 為
(265) ない、我等	同じ	同じ	(165) ない。我等
(265) 希望する。」	(193) 希望する。」	同じ	同じ
(266) かけられる	同じ	同じ	(166) 掲げられる
(266) もとより	同じ	同じ	(166) もとより、
(266) 藉りて	同じ	同じ	(166) 借りて
(267) 抗×救国	(194) 抗日救国	同じ	同じ
(267) 階級的である。	同じ	(208) 階級的である	同じ
(267) たいする	同じ	同じ	(166) 対する
(267) 各人抗×の動機は或は同じくなく、抗×の立場も亦各々異なるかも知れないが、共に抗×であることは一であり、共に抗×の力となることは一である。文学の上に於	(194) 各人抗日の動機は或は同じくなく、抗日の立場も亦各々異なるかも知れないが、共に抗日であることは一であり、共に抗日の力となることは一である。文	同じ	(196) 各人抗×の動機は或は同じくなく、抗×の立場も又各々異なるかも知れないが、共に抗×であることは一であり、共に抗×の力となることは一である。文学の上に於

<p>ては我々は強ひて同じくあることを求めないが、抗×救国の上に於ては我々は一致団結して行動をより力強くさせなければならない。我々は強ひて抗×立場の画一を求めめるには及ばないが、ただ抗×の力は即刻統一されることを主張する。</p>	<p>学の上に於ては我々は強ひて同じくあることを求めないが、抗日救国の上に於ては我々は一致団結して行動をより力強くさせなければならない。我々は強ひて抗日立場の画一を求めめるには及ばないが、ただ抗日の力は即刻統一されることを主張する。</p>	<p>於ては我々は強ひて同じくあることを求めないが、抗×救国の上に於ては我々は一致団結して行動をより力強くさせなければならない。我々は強ひて抗×立場の画一を求めめるには及ばないが、ただ抗×の力は即刻統一されることを主張する。</p>	
(268) 出来る	同じ	同じ	(167) トキネ
(268) ことは今日	同じ	(209) トキネ 今日	同じ
(268) 始めて	(196) 初めて	同じ	同じ
(269) 居り	同じ	同じ	(168) おり
(270) 彼は	同じ	(211) D 医師は	同じ
(270) 支那人	(197) 中国人	同じ	同じ
(271) たいする〔二箇所〕	同じ	同じ	(169) 対する
(271) わかつた	同じ	同じ	(169) 解つた
(271) 一、二年	同じ	同じ	(169) 一二年
<p>(271) 氣持を九月五日に書いた「死」といふ随筆の中で次のやうに述べてある。／＼「私は如何やうにも彼の宣言を氣に懸けはしなかつたが、だがやはりいくらかは影響を受けた、日夜横になつたまま、話をする力も無く、書物を読む力もなく、新聞さへも手にふれず、それかといつて『心は古井の如く』鍛錬されてゐず、そこでただもの思ふ外はなく、そしてそれからといふもの時に『死』について想ひ及ばねばならなかつた。しかし思つたこと</p>	<p>(198) 氣持を、九月頃になつてから「死」といふ題の随筆の中に記してあるが、それによると、當時心にあるついた親族にのこす遺書は次のやうなものであつたといふ。</p>	<p>(212) 氣持を九月五日に書いた「死」といふ随筆の中で次のやうに述べてある。／＼「私は如何やうにも彼の宣言を氣に懸けはしなかつた。だがやはりいくらかは影響を受けた、日夜横になつたまま、話をする力も無く、書物を読む力もなく、新聞さへも手にふれず、それかといつて『心は古井の如く』鍛錬されてゐず、そこでただもの思ふ外はなく、そしてそれからといふもの時に『死』について想ひ及ばねばならなかつた。しかし思つたこと</p>	<p>(199) 氣持を九月五日に書いた「死」といふ随筆の中で次のやうに述べている。／＼「私は如何やうにも彼の宣言を氣に懸けはしなかつたが、だがやはりいくらかは影響を受けた、日夜横になつたまま、話をする力も無く、書物を読む力もなく、新聞さへも手にふれず、それかといつて『心は古井の如く』鍛錬されてゐず、そこでただ物思ふ外は無く、そしてそれからといふもの時に『死』について想ひ及ばねばならなかつた。しかし思つたこと</p>

<p>とは決して『廿年後はまた好漢<small>キョウカン</small>になるぞ』とか、もしくはどのやうに永く楠の木の棺の中に住んでゐようなどとか、又は臨終の前のこまごましたことではなかつた。この時、私ははじめて確信したのだ、私は結局人間が死んでも幽霊にはならないと信じてゐることを。私はただ遺囑を書いておかうと思ひついた、(中略)それにしても、私も一枚残しておかう。当時は相当思ひつめてゐたらしい、すべて親族に書いてやることだけで、その中にあるのはかつた。</p>		<p>とは決して『廿年後はまた好漢<small>キョウカン</small>になるぞ』とか、もしくはどのやうに永く楠の木の棺の中に住んでゐようなどとか、又は臨終の前のこまごましたことではなかつた。この時、私ははじめて確信したのだ、私は結局人間が死んでも幽霊にはならないと信じてゐることを。私はただ遺囑を書いておかうと思ひついた、(中略)それにしても、私も一枚残しておかう。当時は相当思ひつめてゐたらしい、すべて親族に書いてやることだけで、その中にあるのはかつた。</p>	<p>は決して『二十年後はまた好漢<small>キョウカン</small>になるぞ』とか、もしくはどのやうに長く楠の木の棺の中に住んでいようなどとか、又は臨終の前のこまごましたことではなかつた。この時、私は初めて確信したのだ、私は結局人間が死んでも幽霊にはならないと信じてゐることを。私はただ遺囑を書いておかうと思ひついた、(中略)それにしても、私も一枚残しておかう。当時は相当思ひつめてゐたらしい、全て親族に書いてやることだけで、その中にあるのはかつた。</p>
<p>(272)何人によらず</p>	<p>(199)何人からも</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(272)この限りではない。</p>	<p>(199)例外だ。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(273)如何なる記念に関することも</p>	<p>(199)「記念に関することは一切</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(273)立てる「ヤ」</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(170)立てる「ヤ」。</p>
<p>(273)事物</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(170)事実</p>
<p>(273)傷つけ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(170)傷つけ</p>
<p>(273) この外にも無論まだある、今は忘れてしまつた。ただ今なおほえてゐるの熱が出た時のこと、歐洲人が臨終に際して一種の儀式をして、他人に寛恕を請ひ、自分も亦他人を寛恕するのに思ひ及んだことがある。私の怨敵は多いといへる。もし新式の人がいて、私にたづねたとすれば、どのやうに答えよう? 私は考へて見た、そして決定したのはかうだ、彼等を怨恨させておかう、私もまた一つもゆるすまい。」</p>	<p>(199) 此のほかにも魯迅は、歐洲人は臨終に一種の儀式をして、他人に寛恕を請ひ、自分も亦他人を寛恕する習はしたが、自分は怨敵にはどこまでも怨恨させておき、その代り自分も亦一つも許すまい、といかにも魯迅らしい痛烈な言葉を述べてゐる。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(170) この外にも無論まだある、今は忘れてしまつた。ただ今なお憶えてゐるの熱が出た時のことと、歐洲人が臨終に際して一種の儀式をして、他人に寛恕を請ひ、自分も又他人を寛恕するのに思ひ及んだことがある。私の怨敵は多いといへる。もし新式の人がいて、私にたづねたとすれば、どのやうに答えよう? 私は考へて見た、そして決定したのはかうだ、彼等を怨恨させておかう、私もまた一つもゆるすまい。」</p>

(274) くゝる	(200) 位	くゝる	(171) くゝる
(274) むるのほやほり	(200) むるのほやほり	くゝる	(171) むるのほやほり
(275) 横はつた	くゝる	くゝる	(171) 横たわつた
(275) 中々	くゝる	くゝる	(171) 仲々
(275) 支那文壇	(200) 中国文壇	くゝる	くゝる
(275) ながら	くゝる	くゝる	(172) 乍ら
(276) きたつしる姿を仰ぎみながら	(201) きたつしる姿を仰ぎみながら	くゝる	(172) 着た後姿を仰ぎみながら
(276) 好かつたらので	(201) よかつたらので	くゝる	(172) 良かつたら飲んで
(276) のんでゐた。」	(202) のんでゐた。」	くゝる	(172) のんでいた。」
(277) 夏ちつを蒸される	くゝる	216 夏ちつを蒸される	(172) 夏中を蒸される
(277) すんでしきりになまなまの	くゝる	くゝる	(172) 進んでしきりに様々の
(277) 腫	(203) 眼	くゝる	くゝる
(278) ない	くゝる	くゝる	(173) 無い
(278) といった状態で、	くゝる	(217) のであつた。そんなふうで	(173) といった状態で、
(278) 無いので書き	くゝる	くゝる	(173) 無いので書き
(278) ゆけません	くゝる	くゝる	(173) 行けません
(278) といふやうな状態であつたが、	くゝる	(217) と言ひ、又	(173) といふやうな状態であつたが、
(278) 直つ	(204) 癒つ	くゝる	くゝる
(278) 直せる	(204) 癒せる	くゝる	くゝる

<p>(278) 少しづらぬ動いてゐたい、 (278) 直らぬ (279) 仕方がない (279) のぢぢ</p>	<p>(279) 手紙に不服を言つてゐる。／ 「名人との面会もやめる方がよい。 野口様の文章は僕の言つた全体を 書いて居ない、書いた部分も発表 の爲めか、そのまま書いて居ない。 長与様の文章はもう一層だ。僕は 日本の作者と支那の作者との意思 は自分の内通ずることは難しいだ らうと思ふ。先づ境遇と生活とは 皆な違ひます。」／すぐそれに続け て彼は「森山様の文章は読みまし た。林様の文章は遂に読まなかつ た、雑誌部に行つてさがしましたが が売切かもつない。」と書いてゐ、 又、それより先その前年の九月十 二日に胡風宛の手紙に亀井勝一郎 の文章にたいして「亀井の文章は、 立意の大部分が彼等の国内の人に 読ませることにあるのでせうが、勿 論『酒を藉りて愁を洗ふ』の気 味のあることを免れませぬ。実は、 私のある主張は、多くの青年の血 によつて換へて来たもので、彼は 見るとすぐ見出したのですが、我 々の中には却つて注意する人があ りやうです、これは真に『感慨 これに係ら』ざる能はざることで す。」と書いてゐる。</p>	<p>(279) 手紙に不服を言つてゐる。／ 「名人との面会もやめる方がよい。 野口様の文章は僕の言つた全体を 書いて居ない、書いた部分も発表 の爲めか、そのまま書いて居ない。 長与様の文章はもう一層だ。僕は 日本の作者と支那の作者との意思 は自分の内通ずることは難しいだ らうと思ふ。先づ境遇と生活とは 皆な違ひます。」／すぐそれに続け て彼は「森山様の文章は読みまし た。林様の文章は遂に読まなかつ た、雑誌部に行つてさがしましたが が売切かもつない。」と書いてゐ、 又、それより先その前年の九月十 二日に胡風宛の手紙に亀井勝一郎 の文章にたいして「亀井の文章は、 立意の大部分が彼等の国内の人に 読ませることにあるのでせうが、勿 論『酒を藉りて愁を洗ふ』の気 味のあることを免れませぬ。実は、 私のある主張は、多くの青年の血 によつて換へて来たもので、彼は 見るとすぐ見出したのですが、我 々の中には却つて注意する人があ りやうです、これは真に『感慨 これに係ら』ざる能はざることで す。」と書いてゐる。</p>	<p>(280) すでに民国廿二年及廿三年 と、両度にわたつて</p>	<p>(204) 癒らぬ に同じ に同じ</p>	<p>(204) 手紙で、野口様の文章は僕 の言つた全体を書いて居ない、 書いた部分もはばかるところあ つてか、そのまま書いて居ない、 長与様の文章は尚一層だ、僕は 日本の作者と中国の作者との意 思は自分の内通ずることは難し いだらうと思ふ、境遇と生活が 全然違ふのです、と不平をこぼ してゐる。</p>	<p>に同じ に同じ に同じ</p>	<p>(205) すでに二十二年及び二十三 年と、両度にわたつて</p>	<p>に同じ</p>	<p>(173) 少し位動いていたい。 に同じ (173) 仕方が無い (173) 延ばす</p>	<p>(174) 手紙に不服を言つてゐる。／ 「名人との面会もやめる方がよい。 野口様の文章は僕の言つた全体を 書いていない、書いた部分も発表 の爲めか、そのまま書いてない。長 与様の文章はもう一層だ。僕は日 本の作者と支那の作者との意思は 自分の内通ずることは難しいだろ うと思ふ。先づ境遇と生活とは皆 な違ひます。」／すぐそれに続け て彼は「森山様の文章は読みまし た。林様の文章は遂に読まなかつ た、雑誌部に行つて探しましたが、売 切かもつない。」と書いてゐ、又、 それより先その前年の九月十二日 に胡風宛の手紙に亀井勝一郎の文 章に対して「亀井の文章は、立 意の大部分が彼等の国内の人に読 ませることにあるのでしようが、勿 論『酒を藉りて愁を洗ふ』の気 味のあることを免れませぬ。実は、 私のある主張は、多くの青年の血 によつて換えて来たもので、彼は 見るとすぐ見出したのですが、我 々の中には却つて注意する人があ りやうです、これは真に『感慨 これに係ら』ざる能はざることで す。」と書いてゐる。</p>	<p>(174) 既に民国二十二年及び二十三 年と、両度に渡つて</p>
---	---	---	---	----------------------------------	--	----------------------------	--	------------	---	---	--

(280) 支那新進作家	(205) 中国新進作家	に同じ	に同じ
(281) よい時	に同じ	に同じ	(175) 良い時
(281) でかけ	に同じ	に同じ	(175) 出かけ
(281) 魯迅は	(205) 魯迅は	に同じ	に同じ
(282) らへ	に同じ	に同じ	(175) 楽
(282) 掛けた	に同じ	に同じ	(176) かけた
(283) 吸ひのこり	に同じ	に同じ	(176) 吸い残り
(283) した	(207) した	(220) した。	に同じ
(283) らへ	に同じ	に同じ	(176) 楽
(283) 話してゐたが、そこへ	に同じ	(220) 話してゐたがそこへ	(176) 話していたが、そこへ
(283) 間もなく	に同じ	に同じ	(176) 間もなく
(284) 日なことを	に同じ	に同じ	(176) 日なのを
(284) たつね〔二箇所〕	に同じ	に同じ	(176) 訊ね
(284) のつてゐる〔二箇所〕	に同じ	に同じ	(177) 載つてい
(284) 尚更に他に	に同じ	(221) 尚' 他に	に同じ
(284) 眼	に同じ	に同じ	(177) 目
(285) だぶひ。」	に同じ	に同じ	(177) だぶひ。」
(285) 眠りはじめた。	に同じ	に同じ	(177) 眠り始めた。
(285) らへ	に同じ	に同じ	(177) らへ
(286) 夜ちゆう	に同じ	(222) 夜ちゆう	(178) 夜中

(206) あたつて	に同じ	に同じ	(178) 当つて
(286) 絶え	(210) 絶え	に同じ	に同じ

第十二章 萬國殯儀館から萬國墓地へ（〜）

(289) つたへた	(213) 伝へた	に同じ	(180) 伝えた
(289) ちやうどよい	に同じ	(227) ちやうどよい	(180) 丁度良い
(289) よく	に同じ	に同じ	(180) 良く
(286) これをそのまま訳して叙述に代へることにする。／＼万国殯儀館のうちに私はいくらかあまり年の違はない友人たちと興奮した、しかも厳肅な四日間を過した。私は曾つてこのやうに感動させられたことは無い。靈堂のうちに静かに一人の老人が横はり、毎日朝から晩まで夥しい数の人々が、一人一人或いは五六人連れてやつて来てその彼にたいしていと深く礼をするのを、傍らに立つてゐて私の瞳はその一切を全く見止めた。	(203) その文章及びその他によつてその状況をほんの少しばかり伝へることにしよう。／＼靈堂のうちに静かに魯迅の死骸が横はり、毎日朝から晩まで夥しい数の人々が、一人一人或は五六人連れてやつて来て、その死骸にたいしていともいんぎんに礼をする。	に同じ	(180) これをそのまま訳して叙述に代へることにする。／＼万国殯儀館のうちに私はいくらかあまり年の違わない友人達と興奮した、しかも厳肅な四日間を過した。私は曾つてこのやうに感動させられたことは無い。靈堂のうちに静かに一人の老人が横たわり、毎日朝から晩まで夥しい数の人々が、一人一人或いは五六人連れてやつて来てその彼にたいしていと深く礼をするのを、傍らに立つていて、私の瞳はその一切を全く見止めた。
(200) 老人は入つて来て立ち止まつた	(204) 老人が入つて来て立ち止つた	に同じ	(180) 老人は入つて来て立ち止まつた
(290) 噀り泣いた	(214) 噀り泣く	に同じ	に同じ
(290) 又	(214) かと思ふと又	に同じ	に同じ
(290) 『もう一度見させて下さいませ、これ限りでございませすから』と哀求した。	(214) 『もう一度見させて下さいませ、これ限りでございませすから』と哀求す。	に同じ	に同じ

<p>(200) 靈堂の灯光はさして明るくない。一群の小学生が恭々しく前後二列に並び一斉に頭を擡げて引き伸ばしされた写真をぼんやりとみつめた。</p>	<p>(205) 時には又一群の小学生がやつて来、恭々しく前後二列に並び一斉に頭を擡げて引き伸ばしされた写真をぼんやりとみつめる。</p>	<p>(208) 靈堂の灯光はさして明るくない。一群の小学生が恭々しく前後二列に並び一斉に頭を擡げて引き伸ばしされた写真をぼんやりとみつめた。</p>	<p>(208) 靈堂の燈光はさして明るくない。一群の小学生が恭々しく前後二列に並び一斉に頭を擡げて引き伸ばしされた写真をぼんやりと見つめた。</p>
<p>(200) 鞠躬した。その他のものも皆すぐに頭を垂れた。</p>	<p>(212) 鞠躬する。と、他のものも皆すぐにそれにならぶ。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(208) 鞠躬した。その他の者も皆すぐに頭を垂れた。</p>
<p>(200) 下げた。子供等の心は最も純真である。</p>	<p>(214) 下げる。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(201) 今一人</p>	<p>(215) 一人</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(201) 友人</p>	<p>(216) 大切な友人</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(201) 『子供を救へ』さういふ老人の声が尚私の耳の辺にひびいてあるやうである。／私の知つてある雑誌社の工友が意外にもやつて来た。彼は顔を赤らめおぼつと靈堂の一角に一つ時佇んでゐたが、子供のやうに恭々しく三度の礼をするとしよんぼりと出て行つた。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(208) 『子供を救へ』さういふ老人の声が尚私の耳の辺にひびいてあるやうである。／私の知つてある雑誌社の工友が意外にもやつて来た。彼は顔を赤らめおぼつと靈堂の一角に一つ時佇んでゐたが、子供のやうに恭々しく三度の礼をするとしよんぼりと出て行つた。</p>	<p>(208) 『子供を救へ』さういふ老人の声が尚私の耳の辺にひびいてあるやうである。／私の知つてある雑誌社の工友が意外にもやつて来た。彼は顔を赤らめおぼつと靈堂の一角に一時佇んでいたが、子供のように恭々しく三度の礼をするとしよんぼりと出て行つた。</p>
<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(214) 日本人の弔問者も少くない。ある</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(201) 腫</p>	<p>(214) 眼</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>
<p>(201) した。彼女等のために私が幕を上げた時に私は彼女等が顔いつぱいに涙を流してゐるのを瞥見した。</p>	<p>(214) したが、その彼女等の顔にいつぱい涙が流れてゐた。</p>	<p>に同じ</p>	<p>(208) した。彼女等のために私が幕を上げた時に私は彼女等が顔いつぱいに涙を流しているのを瞥見した。</p>
<p>(201) そして間もなく幕の外から悲痛な泣き声がひびいて来た。</p>	<p>(214) しかも間もなく悲痛な泣き声はその二人から洩れ出した。</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>

<p>(201) 私の耳は聞き誤ることはない、かういふ泣き声を私は毎日少くとも数回は聞いたのである。さうして私もいつもそれに涙をひき出されるのである。</p>	<p>(201) 私の瞳も欺されることはない。私は粗布短衫をつけた労働者を見た、教科書を抱へた男女学生を見た、又、緑衣の郵便配達夫、黄衣の少年団、更に小商人、小職員から国籍不同、階級不同、職業不同、信仰不同の各種各様の人を見た。この無数の異つた顔の上に私は一つの同じい悲哀の表情を見た。これら一切の人は皆この一つの心のために遠くから近くからここへ引き寄せられて来たのである。</p>	<p>(202) そこにある間に私はいつも思つた、この我等すべてに敬愛された老人はほんたうに死んでしまつたのだらうか、と。私には信ぜられない気がした。だがそれらの悲哀の顔、それらの哀切な泣き声はつきりと私に告げるのである。この老人は決して二度と起き上つて温和な笑ひを浮べてわれわれに高談闊論することは出来ないのだといふことを。</p>	<p>(203) 二十一日の夜、もう十一時を過ぎてから私は数人の友人と家へ帰る用意をしてみた。霊堂は静寂に閉されてゐた。私は一人で霊柩の前へ行つて四五分間、静かに立つてゐた。私はうす暗い燈の光りで、棺のガラスの蓋を通してぼんやりとわれわれのよく知つてゐる顔をのぞき見た。</p>
<p>(204) そしてかういふ泣き声は毎日少くとも数回は聞かれるのであつた。</p>	<p>(204) 来る人の種類は種々雑多であつた、粗布短衫をつけた労働者もゐた、教科書を抱へた男女学生もゐた、又、緑衣の郵便配達夫、黄衣の少年団、更に小商人、小職員等々またく国籍不同、階級不同、職業不同、信仰不同の各種各様の人々であつた。そしてその顔には皆一つの同じい悲哀の表情があつた。</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(205) 魯迅が死んでから三日目の二十一日の午後遺骸が入棺された。</p>
<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>に同じ</p>	<p>(206) 二十一日の夜、もう十一時を過ぎてから、私は数人の友人と家へ帰る用意をしてみた。霊堂は静寂に閉されてゐた。私は一人で霊柩の前へ行つて四五分間、静かに立つてゐた。私はうす暗い燈の光りで、棺のガラスの蓋を通してぼんやりとわれわれのよく知つてゐる顔をのぞき見た。</p>
<p>(207) 私の耳は聞き誤ることはない、こつう泣き声を私は毎日少くとも数回は聞いたのである。さうして私もいつもそれに涙をひき出されるのである。</p>	<p>(207) 私の瞳も欺されることはない。私は粗布短衫をつけた労働者を見た、教科書を抱へた男女学生を見た、又、緑衣の郵便配達夫、黄衣の少年団、更に小商人、小職員から国籍不同、階級不同、職業不同、信仰不同の各種各様の人を見た。この無数の異つた顔の上に私は一つの同じい悲哀の表情を見た。これら一切の人は皆この一つの心の為に遠くから近くからここへ引き寄せられて来たのである。</p>	<p>(208) そこにいる間に私はいつも思つた、この我等全てに敬愛された老人はほんたうに死んでしまつたのだらうか、と。私には信ぜられない気がした。だがそれらの悲哀の顔、それらの哀切な泣き声はつきりと私に告げるのである。この老人は決して二度と起き上つて温和な笑ひを浮かべてわれわれに高談闊論することはできないのだといふことを。</p>	<p>(208) 二十一日の夜、もう十一時を過ぎてから私は数人の友人と家へ帰る用意をしてゐた。霊堂は静寂に閉されてゐた。私は一人で霊柩の前へ行つて四五分間、静かに立つてゐた。私はうす暗い燈の光りで、棺のガラスの蓋を通してぼんやりと我々のよく知つてゐる顔をのぞき見た。</p>

<p>(293) 腫</p>	<p>(215) 眼</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(293) その顔</p>	<p>(215) その魯迅の最期の顔</p>	<p>同じ</p>	<p>同じ</p>
<p>(293) ただよつてゐた。死の恐怖は少しもなく、まるでその老人は深い眠りに落ちてゐるやうである。</p>	<p>(215) ただよひ、まるで深い眠りに落ちてゐるやうであつた。</p>	<p>同じ</p>	<p>(293) ただよつてゐた。死の恐怖は少しも無く、まるでその老人は深い眠りに落ちているやうである。</p>
<p>(293) 匂ひがしくしくと私の胸に沁み入つた。私は思はないではあらねなかつた。これはよもや夢ではないのか、と。私は又思つた、若しかしてこの老人がむつくりと起き上つたならば？ と。だがある重苦しい声が私の心のうちに起つた。死んだものは蘇生することは出来ない！ 故人の遺骸はこの日の午後入棺されたのだつた。私は多くの友人について礼を行つた後人群の中に立つて遺骸の入棺を待つてゐた。ふと前の方に泣き声が上がつて私の心を突き刺した。私は堪へ切れなくなつて瞳に涙をためて振り返つて見たら、はからずも丈の高い友人が眼を赤くし、手を伸ばして別の友人の肩を懸命につかまへてゐるのが眼に入つた。</p>	<p>(215) 匂つた。魯迅の多くの友人が遺骸の入棺に立ち合つたが、あちらからもこちらからもすすり泣きの声が洩れはじめ、中には立つてゐるのに堪へられなくて、友人の方に懸命にすがつてゐるものも見られた。</p>	<p>(293) 匂ひがしくしくと私の胸に沁み入つた。私は思はないではあらねなかつた。これはよもや夢ではないのか、と。私は又思つた、若しかしてこの老人がむつくりと起き上つたならば？ と。だがある重苦しい声が私の心のうちに起つた。死んだものは蘇生することは出来ない！ 故人の遺骸はこの日の午後入棺されたのだつた。私は多くの友人について礼を行つた後人群の中に立つて遺骸の入棺を待つてゐた。ふと前の方に泣き声が上がつて私の心を突き刺した私は堪へ切れなくなつて瞳に涙をためて振り返つて見たら、はからずも丈の高い友人が眼を赤くし、手を伸ばして別の友人の肩を懸命につかまへてゐるのが眼に入つた。</p>	<p>(293) 匂ひがしくしくと私の胸に沁み入つた。私は思わないではあらねなかつた。これはよもや夢ではないのか、と。私は又思つた、若しかしてこの老人がむつくりと起き上つたならば？ と。だがある重苦しい声が私の心のうちに起つた。死んだ者は蘇生することは出来ない！ 故人の遺骸はこの日の午後入棺されたのだつた。私は多くの友人について礼を行つた後人群の中に立つて遺骸の入棺を待つてゐた。ふと前の方に泣き声が上がつて私の心を突き刺した。私は堪へ切れなくなつて瞳に涙をためて振り返つて見たら、はからずも丈の高い友人が眼を赤くし、手を伸ばして別の友人の肩を懸命につかまへてゐるのが眼に入つた。</p>
<p>(293) 私は半年間もある事件のためにこの友人を攻撃する文章を書いたが、この時彼の心の切なさを見て、自分の心も一層切なさを加へた。この刹那にはそこにある人の心は皆同じであつた、すべてが皆同じものを持つてゐた、それは即ち故人への念ひである。(中略) 〃私はいつまでもさうして立つてゐられなくなつた。遺容を拝みに</p>	<p>「該当箇所なし」</p>	<p>(293) 私は半年間もある事件のためにこの友人を攻撃する文章を書いたが、この時彼の心の切なさを見て、自分の心も一層切なさを加へた。この刹那にはそこにある人の心は皆同じであつた、すべてが皆同じものを持つてゐた、それは即ち故人への念ひである。(中略) 〃私はいつまでもさうして立つてゐられなくなつた。遺容を拝みに</p>	<p>(293) 私は半年間もある事件のためにこの友人を攻撃する文章を書いたが、この時彼の心の切なさを見て、自分の心も一層切なさを加へた。この刹那にはそこにいる人の心は皆同じであつた、すべてが皆同じものを持つてゐた、それは即ち故人への念ひである。(中略) 〃私はいつまでもさうして立つてゐられなくなつた。遺容を拝みに</p>

来るものが続々とやって来だした。中にも甚だしいのは遠い地方からわざわざやって来彼等の敬愛する人を最初にして即ち最後に見るのであつた。『もう少し見させて下さい』私が幕を引く時いつも眼付でそのやうにたのむものがある。だが場所がこんなに狭いの、後ろには待つてゐる人があんなに長い列をつくつてゐるし、他の友人たちも催促する。私たちはどうして個々の人みんなにゆつくり見させることが出来るか。ここの短い一瞥のうちにあの無数の人たちは深く深く彼等の損失を感じるのだつた。／午後の二時に靈柩は殯儀館を出た。送葬の行列は異常に秩序立ち、多くの人たちが悲痛に輓歌を唱つた。他にはただ厳肅な沈黙があるばかりである。／墓地に着いた。儀式を行つて後十三四人のものが靈柩をかついだ。あの今し方記念堂で哀詞を読んだ友人が突然人群の中から駆け寄つて来て彼の手を靈柩の下へ当てた。この情形は私を深く感動させた。私は少くともこの一瞬あらゆる心は皆靈柩の中に横はつてゐる老人に一つにつながれたことと思ふ。／靈柩の上に一枚の旗がかぶせてある。これは民衆代表が故人に捧げたもので、『民族魂』といふ大きな三字が書かれてゐる。／墓穴まで行く途中靈柩は次第に重くなつて来た。あの靈柩車を運転して来た西洋人が駆け寄つて来て、感動的に英語でたづねた。『私も手伝つてよろしいでせうか』私がうなづくと、彼は黙つて手を伸ばして靈柩の下へ当てた。／墓穴へ着いた時はもう

来るものが続々とやって来だした。中にも甚だしいのは遠い地方からわざわざやって来彼等の敬愛する人を最初にして即ち最後に見るのであつた。『もう少し見させて下さい』私が幕を引く時いつも眼付でそのやうにたのむものがある。だが場所がこんなに狭いの、後ろには待つてゐる人があんなに長い列をつくつてゐるし、他の友人たちも催促する。私たちはどうして個々の人みんなにゆつくり見させることが出来るか。ここの短い一瞥のうちにあの無数の人たちは深く深く彼等の損失を感じるのだつた。／午後の二時に靈柩は殯儀館を出た。送葬の行列は異常に秩序立ち、多くの人たちが悲痛に輓歌を唱つた。他にはただ厳肅な沈黙があるばかりである。／墓地に着いた。儀式を行つて後十三四人のものが靈柩をかついだ。あの今し方記念堂で哀詞を読んだ友人が突然人群の中から駆け寄つて来て彼の手を靈柩の下へ当てた。この情形は私を深く感動させた。私は少くともこの一瞬あらゆる心は皆靈柩の中に横はつてゐる老人に一つにつながれたことと思ふ。／靈柩の上に一枚の旗がかぶせてある。これは民衆代表が故人に献げたもので、『民族魂』といふ大きな三字が書かれてゐる。／墓穴まで行く途中靈柩は次第に重くなつて来た。あの靈柩車を運転して来た西洋人が駆け寄つて来て、感動的に英語でたづねた。『私も手伝つてよろしいでせうか』私がうなづくと、彼は黙つて手を伸ばして靈柩の下へ

来る者が続々とやって来だした。中にも甚だしいのは遠い地方からわざわざやって来彼等の敬愛する人を最初にして即ち最後に見るのであつた。『もう少し見させて下さい』私が幕を引く時いつも眼付でそのやうにたのむ者がいる。だが場所がこんなに狭いの、後ろには待つてゐる人があんなに長い列をつくつてゐるし、他の友人達も催促する。私たちはどうして個々の人みんなにゆつくり見させることができようか。ここの短い一瞥のうちにあの無数の人達は深く深く彼等の損失を感じるのだつた。／午後の二時に靈柩は殯儀館を出た。送葬の行列は異常に秩序立ち、多くの人達が悲痛に輓歌を唱つた。他にはただ厳肅な沈黙があるばかりである。／墓地に着いた。儀式を行つて後十三四人の者が靈柩をかついだ。あの今し方記念堂で哀詞を読んだ友人が突然人群の中から駆け寄つて来て彼の手を靈柩の下へ当てた。この情景は私を深く感動させた。私は少くともこの一瞬あらゆる心は皆靈柩の中に横わつてゐる老人に一つにつながれたことと思ふ。／靈柩の上に一枚の旗がかぶせてある。これは民衆代表が故人に献げたもので、『民族魂』といふ大きな三字が書かれてゐる。／墓穴まで行く途中靈柩は次第に重くなつて来た。あの靈柩車を運転して来た西洋人が駆け寄つて来て、感動的に英語でたづねた。『私も手伝つてよろしいでせうか』私がうなづくと、彼は黙つて手を伸ばして靈柩の下へ当てた。／墓穴へ着いた時はもう夕方であ

<p>はもう夕方であつた。みんなは靈柩を下へ置いた。木の台に帯を二本しばりつけ、その帯の上に靈柩を置いた。その帯を引つぱると靈柩が静かに降りて行くのだ。私はその傍らに後ろの人に押され乍ら立つてゐて、暮色蒼茫の中に白い上へ黒く書かれた『民族魂』が徐々に沈んで行くのを見た。それが完全に止まつて動かなくなつた時人々はセメントの墓蓋をかついで来た。それから私たちはすべてを失つた。／儀式が終つた、上弦の月が天の一角に現はれた。燈光の無い暗い中を群衆が潮の湧いたやうに散りはじめた。(下略)／私はただほんの少しばかりこれに具体的な事実を書き加へよう。</p>	<p>夕方であつた。みんなは靈柩を下へ置いた。木の台に帯を二本しばりつけ、その帯の上に靈柩を置いた。その帯を引つぱると靈柩が静かに降りて行くのだ。私はその傍らに後ろの人に押され乍ら立つてゐて、暮色蒼茫の中に白い上へ黒く書かれた『民族魂』が徐々に沈んで行くのを見た。それが完全に止まつて動かなくなつた時人々はセメントの墓蓋をかついで来た。それから私たちはすべてを失つた。／儀式が終つた、上弦の月が天の一角に現はれた。燈光の無い暗い中を群衆が潮の湧いたやうに散りはじめた。(下略)／私はただほんの少しばかりこれに具体的な事実を書き加へよう。</p>	<p>夕方であつた。みんなは靈柩を下へ置いた。木の台に帯を二本しばりつけ、その帯の上に靈柩を置いた。その帯を引つぱると靈柩が静かに降りて行くのだ。私はその傍らに後ろの人に押され乍ら立つてゐて、暮色蒼茫の中に白い上へ黒く書かれた『民族魂』が徐々に沈んで行くのを見た。それが完全に止まつて動かなくなつた時人々はセメントの墓蓋をかついで来た。それから私たちはすべてを失つた。／儀式が終つた、上弦の月が天の一角に現はれた。燈光の無い暗い中を群衆が潮の湧いたやうに散りはじめた。(下略)／私はただほんの少しばかりこれに具体的な事実を書き加へよう。</p>	<p>つた。みんなは靈柩を下へ置いた。木の台に帯を二本しばりつけ、その帯の上に靈柩を置いた。その帯を引つぱると靈柩が静かに降りて行くのだ。私はその傍らに後ろの人に押され乍ら立つていて、暮色蒼茫の中に白い上へ黒く書かれた『民族魂』が徐々に沈んで行くのを見た。それが完全に止まつて動かなくなつた時人々はセメントの墓蓋をかついで来た。それから私は全てを失つた。／儀式が終つた、上弦の月が天の一角に現はれた。燈光の無い暗い中を群衆が潮の湧いたやうに散りはじめた。(下略)／私はただほんの少しばかりこれに具体的な事実を書き加へよう。</p>
<p>(297) 二十日と二十一日二日間の魯迅弔問者は一万を越えたと言はれ、二十一日</p> <p>(298) 哀悼歌の合唱の声は天をどよもした。</p>	<p>(295) さて、出棺は二十一日の午後二時。その以前の魯迅弔問者は一万を越えたと言はれ、当日</p> <p>(299) しかも異常に秩序立ち、悲痛的な哀悼歌の合唱の声のほかにはただ厳肅な沈黙があるばかりであつた。</p>	<p>同じ</p> <p>同じ</p>	<p>(287) 二十日と二十一日二日間の魯迅弔問者は一万を越えたと言はれ、二十一日</p> <p>同じ</p>
<p>(298) ついで</p> <p>(298) その後が巴金の文章にもあつた又十四文学者に依る墓穴への靈柩運搬であつた。</p>	<p>(297) 続いて</p> <p>(299) 儀式が終つて、又先きの十四文学者に依つて靈柩が墓穴へ運搬された。靈柩の上に一枚の旗がかぶせてある。民衆代表が故人に捧げたもので、『民族魂』と大きな三字が書かれてゐる。それが墓穴へ着いた時はもう夕方であつた。みんなは靈柩を下へ置いた。木の台に帯を二本しばりつけ、その帯の上に靈柩を</p>	<p>同じ</p> <p>同じ</p>	<p>同じ</p> <p>(298) その後が巴金の文章にもあつた又十四文学者に依る墓穴への靈柩運搬であつた。</p>

置いた。帯が引つばられた。靈
柩が静かに降りはじめた。蒼茫
とした暮色の中に白い上へ黒く
書かれた「民族魂」が徐々に沈
んで行った。

補足資料編・単行本「あとがき」(全文)一覽(付「補遺」・「解説」)

：小田嶽夫『魯迅伝』(筑摩書房、昭16・3・15)

あとがき

比較的くはしい魯迅の伝記はかねがね私自身の読みたいものであった。で、数年前魯迅について研究深い増田渉氏にその執筆を望んだこともあったほどだが、氏は他の事で忙がしくそれにとりかかる気配も見えなかつた。そのうちに私自身のうちに書いて見たい欲望が徐々に頭をもたげて来た。途中中野重治氏の「魯迅伝」といふ一文が出て刺戟されることもあつたりして、いよいよその欲望がたかまつて来た。が自分の支那古典に蒙昧な点や現代文学についてもきはめて偏頗僅少な知識しか持つてゐない点から幾多の困難が予想せられて容易に着手できなかつた。たまたま昨年六月自分も一員で同人雑誌「新風」が創刊されることになり、同人諸君のすすめもあり、又同人雑誌といふ性質から万一の場合中途で放棄してもかまはないだらうといふ気安さも手伝ひその創刊号に序章を書いた。が右雑誌は創刊号限りで廃刊となり、「魯迅伝」の運命も甚だあまいものとなつたが、亀井勝一郎君等の激励などもあり、折から書下し執筆の依頼を受けたのを機会に書きつづける決心をした。つづいて雑誌「新潮」から梗概伝記の執筆依頼を受け、ごくあらましを三回に連載した。この連載で大凡の見当もついた一方、枚数の関係から思ふやうに書けなかつた右稿の不満を早く補ひたい気になり、急に十月初めから全力をこの書下しの稿に向けた。初め私は執筆前か執筆中に上海へでかけて魯迅と関係深い人たちからくはしい話もきき、魯迅の住んでゐた家などもしらべ、参考書もできるだけ集めたい意嚮であつたが、いろいろ

な理由からこれは実現できなかった。そんなわけで思ふやうに詳細に叙述の筆を延ばし得なかつたのはかへすがへすも残念であり、又事実と符合しない点も間々無きやを保し難いのを怖れるのであるが、それらの点については大方の叱正を俟ちたく思ふ。

魯迅についての研究は支那にはいくらかはあるが、伝記的に参考になるものはごく寥寥たる有様で、結局魯迅の全著作を主な頼りとするほかなかつた。それによつて魯迅の歩いた道を辿つて編述するかはらその時々魯迅をとりまく環境を簡単に書き添へたといふのが本伝の大凡であつて、伝記といふ性質上出来るだけ主観的な解釈や主張は避け、淡淡とした態度に終始することにとつとめた。が、今書き綴つた後をふり返つて見て必ずしもその通りには行つてゐないやうに思はれる。無意識のうち自ら一つの線に沿つて進んでゐたやうにも思はれる。といふのは「愛国」者といふ魯迅の面に知らず識らずのうちに叙述が集中して行つたやうな気もする。が一方これは生涯を通じて魯迅の心に最も熱く燃えてゐたものであつて見ればさうなるのも当然かも知れない。魯迅は青年期以後殆んど終生時の為政者、権力者にたいし憎悪、反感に燃えてゐたやうであつたが、それも彼の眞の「愛国」の情に根ざしてゐたことは、本伝を読まれた読者は容易に了解されたことと思ふ。

そんなわけで触れたいと思ひながらついでに避けて通つたやうな事柄も少からずある。魯迅は本文にも記したやうに相当長い間自己の体内を結核菌が蝕んでゐたことを晩年まで知らなかつたらしいが、魯迅の頭脳・感受性の鋭さや潔癖の性質はそれが肺疾の原因が結果かは分明しないが、私には何やらその病氣と関連して考へたいものであり、一方さういふ體質と性質の尖鋭型の人でありながら、正義のために、又人情のためには

自己を顧みないといふ一種俠氣肌ともいへる面も強かつた。さういふ意味では魯迅は偏狭のやうに見えながら決してさうでなく、実はただ強く純粋性に執した人のやうに思はれる。又魯迅があくまで西欧の科学文明に傾倒したといふことは当時の支那にあつては必然的なことだつたのであらうが、この傾向は事変以後に於ても支那の青年の心に強く根を張つてゐることと思はれるし、このことはこれは是非を論ずる前にわれわれが東亜の問題のことを考へる上に牢記しなければならぬばかりでなく、今日支那文化の過去、現在、未來を考へる上の一つの基軸のやうにも思はれる。この現象については、我が国などの場合は西欧文化の摂取はいかほどさかんな場合であつても、多かれ少なかれ無意識のうちにも日本的是に變形されるものが多かつたやうに思はれるのにひきかへ、支那の場合はそつくりそのままの移入が多かつたことを併せ考へる必要がありさうだ。

尚本文中に引用の訳文はそれぞれの人のそれぞれのりつばな訳のある分も、序章の書簡文一篇を改造社版魯迅全集中から借用した以外は統一を期する上からことごとく敢て自ら訳し直した。

次に本伝執筆の上増田渉氏、上海の内山完造氏に負ふところ少なく、殊にも増田氏には尽力を蒙るところ多かつた。誌して両氏への深謝の意としたい。

昭和十六年早春

小田 嶽 夫

：小田嶽夫『魯迅の生涯』（鎌倉文庫、昭24・9・20）

あとがき

筑摩書房版「魯迅伝」を私が世に送つたのは昭和十六年の三月のことであつたが、その書のとがきの一節に「比較的くはしい魯迅の伝記はかねがね私自身の読みたいものであつた。で、数年前魯迅について研究深い増田渉氏にその執筆を望んだこともあつたはのだが、氏は他の事で忙しくそれにとりかかるとの気配も見えなかつた。そのうちに私自身のうちに書いて見たい欲望が徐々に頭をもたげて来た。途中、中野重治氏の『魯迅伝』といふ一文が出て刺戟されるところもあつたりして、いよいよその欲望がたかまつて来た。が自分の中国古典に蒙昧な点や現代文学についてもきはめて偏頗僅少な知識しか持つてゐない点から幾多の困難が予想せられて容易に着手できなかつた。たまたま昨年六月自分も一員で同人雑誌『新風』が創刊されることになり、同人諸君のすすめもあり、又同人雑誌といふ性質から万一の場合中途で放棄してもかまはないだらうといふ気安さも手伝ひその創刊号に序章を書いた。が右雑誌は創刊号限

りで廢刊となり、『魯迅伝』の運命も甚だあいまいのものとなつたが、亀井勝一郎君等の激励などもあり、折から書卸し執筆の依頼を受けたのを機会に書きつづける決心をした」と記してをり、これが「魯迅伝」にとりかかる大凡の経緯であつた。

本書はこの「魯迅伝」にいくらか増補を加へ、且つ今日の日本の情勢をもとにある程度の訂正を施したものであるが、恐らく「魯迅伝」は戦災で大半焼かれてゐることと思ふし、又よしんば焼かれてゐないにしても新たな読者を此の書は求めてゐる筈だと私は敢て言ふ。といふのは過般の戦争で、弱いと思つてゐた、負がしたとばかり思つてゐた中国に日本は完全に打ち負かされた、その中国の勝利が自國だけの力で立ち得たものではないにしても、勝つたためには何かしらの強味があつた筈だし、その強味はわれわれの知らねばならないものであり、又昨日までの日本は政治的にはいつも圧迫を以て中国に対してゐたのが、今日以後は完全にそれが取り除かれたところに、兩國が真に手を握り合つて世界の進運につとめられるといふ新しい爽やかな關係が兩國のあひだに打ち樹てられようと思はれる此の際、日本人一般はもつともつと中国を研究する必要があると思はれるのだが、その必要にたいして此の貧しい著作は極めて微弱ではあるが応へてくれるところがあるだらうと信じられるからである。

魯迅が多くくの日本の文学者のやうに、象牙の塔にこもることをせず、文化人としてさまざまの問題の前に果敢、身を挺し、血みどろになつて闘つた態度についても、今日われわれはゆつくりと考へて見る必要がありさうだ。

中国が戦勝國になつたと言つても、恐らく地下の魯迅は必ずしもそれで中国の前途を樂觀視してはゐまいと思はれるが、それにしても魯迅の死んだ日が中国の暗黒のさ中であつたことを思へば感激は深く、その暗黒のさ中にあつて彼が同胞青年の胸に燃やした炎は今後ますます光芒を發揮して来るものやうに思はれる。

尚「魯迅伝」のあとがきにも記したことだが、魯迅についての研究は中国にはいくらかはあるが、伝記的に参考になるものはごく寥々たる有様で、結局魯迅の全著作を主な頼りとするほかなかつた。それによつて魯迅の歩いた道を進つて編述するかたは、その時々魯迅をとりまく環境を簡単に書き添へたといふのが本書の大凡であつて、出来るだけ主観的な解釈や主張は避け、淡々とした態度に終始することにつとめた。作家としての魯迅をもう少し精密に述べたい欲望をここでは捨て去つたのも、あくまで魯迅の生涯といふ伝記的なものに終始したかつたために外ならない。

昭和二十三年初秋

越後高田の寓居で

小田 嶽 夫

：小田嶽夫『魯迅伝』（乾元社、昭28・7・15）

あとがき

私の「魯迅伝」はかつて昭和十六年に一度上梓されたのであつたが、かねて多少手を加へたい気持があり、今回機会を得てそれを実行し、いはば決定版「魯迅伝」としたのが本書である。

以前の本のあとがきの冒頭に、私は次のやうに記した。

「比較的前はしい魯迅の伝記はかねがね私自身の読みたいものであつた。数年ก่อน魯迅について研究深い増田涉氏にその執筆を望んだこともあつたほどだが、氏は他の事で忙しくそれにとりかかるといふ気配も見えなかつた。そのうちに私自身のうちに書いて見たい欲望が徐々に頭をもたげて来た。途中中野重治氏の『魯迅伝』といふ一文が出て刺戟されるところもあつたりして、いよいよその欲望がたかまつて来た。が自分の中国古典に蒙昧な点や、現代文学についてもきはめて偏頗僅少な知識しか持つてゐない点から、幾多の困難が予想せられて、容易に着手できなかつた。たまたま昨年六月自分も一員で同人雑誌「新風」が創刊されることになり、同人諸君のすすめもあり、又同人雑誌といふ性質から万一の場合中途で放棄してもかまはないだらうという気安さも手伝ひ、その創刊号に序章を書いた。が同雑誌は創刊号限りで廃刊となり「魯迅伝」の運命も甚だあいまいのものとなつたが、亀井勝一郎君等の激励などもあり、折から書下し執筆の依頼を受けたのを機会に、書きつづける決心をした。云々。」以上が「魯迅伝」にとりかかつた大凡の経緯であり、又、

「魯迅についての研究は中国にはいくらかはあるが、伝記的に参考になるものはごく寥々たる有様で、結局魯迅の全著作を主な頼りとするほかなかつた。それによつて魯迅の歩いた道を辿つて編述するから、その時々々の魯迅をとりまく環境を簡単に書き添へたといふのが本伝の大凡であつて、伝記といふ性質上出来るだけ主観的な解釈や主張は避け、淡淡とした態度に終始することにとつとめた」とも記したが、本書も大綱に於てはこの線を出てゐず、戦後いろいろ中国で出てゐる魯迅研究からは殆んど取り上げなかつた。

此の書をふたたび世に送ることになつたことについては、むろんさうなる必然性があつたからであらうが、この必然性は言つて見れば甚だありがたくないものである。前の時には、日本が中国にたいする侵略国として、国民が中国にたいし何事かの意味で関心を深めてゐたのであつたが、今は全然異り、当時の中国に似た独立性稀薄な国の国民として、その立場から当時の中国を考える必要に迫られてゐるのである。その意味では幸か不幸か今日の読者はかつての読者より、その頃の中国を理解する資質に自然にめぐまれてゐるわけで、したがつて魯迅も一般日本人に

理解され易い状態にはなつて来てゐる。

ここで私の痛切な関心の的になるのは、魯迅が多くの日本文学者のやうに象牙の塔にこもることをせず、文化人としてさまざまの問題の前に果敢に身を挺し、血みどろになつて闘つた、といふことであるが、それよりもむしろある時期に（一九三〇年）、それまであつた文学者同士のいがみ合ひをキレイさつぱりと捨て、ほとんど全文学者が大同団結して、その中心に魯迅が立つた、敵に向つたといふ事実である。日本が今日のやうな半属国的なみじめな状態の場合には、日本の文学者もこれに倣ふべきであるか、あるひは日本の文学の伝統から言つてさうはカンタンに行かない、といふのがほんとうかはべつとして、ともかく現在のわれわれとはちがふ彼等のあり方には、十分注目すべきものがあることだけは事実であらう。

尚私が此の伝を書くことになつた動機について一言すると、学者（むろん私はさういふものではないが）的に魯迅を紹介するとか、評論家的に魯迅を批判するとかいつた点にはむろん無く、むしろ作家的に魯迅を描いて見たい、といふのがその根本であつた。それには私に魯迅に共通するものがあつた、といふよりは、逆に私に無くて、魯迅にあるものが豊富であることになつたという憧憬が因を為してゐる。魯迅の作風そのものは、置かれてゐる環境もちがふしむしる私には縁遠いものであるが、人間として、又文学者としての、魯迅の潔癖な精神、已協を許さない傲岸な、高邁な精神、これこそは私のかねがね尊敬して、ままないものであり、魯迅と取組むことによつて、些少でもさういふ精神をわが身に附けたいといふ願望が、いつのまにか私を此の仕事のはうへ向けたわけであつた。

だがその結果はどうであつたか？ 書いてゐるあひだはともかく、魯迅の息吹が身のまはりに立ちこめてゐるのであるが、筆を投じて見れば、やはり私はもとの杰阿弥にかへつてゐるのである。

次に、本書では作家としての魯迅、もしくは魯迅の小説作品についてあまり立ち入つた解説をしなかつたのが、遺憾な気持として残つてゐるが、これもさうしたくてゐながら、あくまで魯迅の生涯といふ伝記的なものに終始したかつたため、出来るだけ寄り道をすることを避けたいであつた。

も一つことはつておかなければならないことは本書中に引用の訳文はすでにそれぞれの人りのりつばな訳のある分も、統一を期する上からことごとく敢て自ら訳し直したが、序章の書簡文一篇だけは、原文が手もとにないため、改造社版大魯迅全集中のものを借用したことである。

尚、この伝記が出来上つたことについては、畏友増田涉氏、上海在住当時の内山完造氏に負ふところ少なく、茲に誌して両氏への深謝の意としたい。

昭和二十八年六月

小田嶽夫

：小田嶽夫『魯迅伝』（大和書房、昭41・10・28）

あとがき

比較的くわしい魯迅の伝記はかねがね私自身の読みたいものであった。数年前魯迅について研究深い増田渉氏にその執筆を望んだこともあったのだが、氏は他の事で忙しくそれにとりかかる気配も見えなかった。そのうちに私自身のうちに書いて見たい欲望が徐々に頭をもたげて来た。途中中野重治氏の「魯迅伝」という一文が出て刺戟されたところもあつたりして、いよいよその欲望がたかまつて来た。が自分の支那古典に蒙昧な点や、現代文学についてもきはめて偏頗僅少な知識しか持っていない点から、幾多の困難が予想せられて容易に着手できなかつた。たまたま昨年六月自分も一員で同人雑誌「新風」が創刊されることになり、同人諸君のすすめもあり、又同人雑誌といふ性質から万一の場合中途で放棄してもかまわないだろうという気安さも手伝い、その創刊号に序章を書いた。が右雑誌は創刊号限りで廃刊となり、「魯迅伝」の運命も甚だあいまいのものとなつたが、亀井勝一郎君等の激励などもあり、折から書下し執筆の依頼を受けたのを機会に書きつづける決心をした。つづいて雑誌「新潮」から梗概伝記の執筆依頼を受けごくあらましを三回に連載した。この連載で大凡の見当もついた一方、枚数の関係から思ふように書けなかつた右稿の不满を早く補いたい気になり、急に十月初めから全力をこの書下しの稿に向けた。初め私は執筆前か執筆中に上海へでかけて魯迅と関係深い人たちからくわしい話もきき、魯迅の住んでいた家などもしらべ、参考書もできるだけ集めたい意嚮であつたが、いろいろな理由からこれは実現できなかつた。そんなわけで思うように詳細に叙述の筆を延ばし得なかつたのはかえすがえすも残念であり、又事実と符合しない点もまま無きやを保し難いのを怖れるのであるが、それらの点については大方の叱正を俟ちたく思ふ。

魯迅についての研究は支那にはいくらかはあるが、伝記的に参考になるものはごく寥寥たる有様で、結局魯迅の全著作を主な頼りとするほかなかつた。それによつて魯迅の歩いた道を辿つて編述するかたわらその時々々の魯迅をとりまく環境を簡単に書き添えたというのが本伝の大凡であつて、伝記という性質上出来るだけ主観的な解釈や主張は避け、淡々とした態度に終始することにとつめた。が、今書き綴つた後をふり返つて見て必ずしもその通りには行つていないように思われる。無意識のうち自ら一つの線に沿つて進んでいたようにも思われる。というのは「愛国」者という魯迅の面に知らず識らずのうちに叙述が集中して行つたような気もする。が一方これは生涯を通じて魯迅の心に最も熱く燃えていたものであつればそうなるのも当然かも知れない。魯迅は青年期

以後殆んど終生時の為政者、権力者にたいし憎悪、反感に燃えていたやうであつたが、それも彼の眞の「愛国」の情に根ざしていたことは、本伝を読まれた読者は容易に了解せられたことと思ふ。

そんなわけで触れたいと思ひながらついでに避けて通つたような事柄も少からずある。魯迅は本文にも記したように相当長い間自己の体内を結核菌が蝕んでいたことを晩年まで知らなかつたらしいが、魯迅の頭脳・感受性の鋭さや潔癖の性質はそれが肺疾の原因か結果かは分明しないが、私には何やらその病氣と関連して考えたいものであり、一方そういう體質と性質の尖鋭型の人でありながら、正義のために、又人情のためには自己を顧みないという一種俠氣肌ともいえる面も強かつた。そういう意味では魯迅は偏狭のように見えながら決してそうではなく、実はただ強く純粋性に執した人のように思われる。又魯迅があくまで西欧の科学文明に傾倒したということは当時の支那にあつては必要なことだつたのであるが、この傾向は事変以後に於ても支那の青年の心に強く根を張つていることと思われるし、このことはこれは是非を論ずる前にわれわれが東亜の問題のことを考へる上に牢记しなければならぬばかりでなく、今日支那文化の過去、現在、未来を考へる上の一つの基軸のようにも思われる。この現象については、我が国などの場合は西欧文化の摂取はいかほどさかんな場合であつても、多かれ少かれ無意識のうちに日本の形に變形されることが多かつたように思われるのにひきかえ、支那の場合はそっくりそのままの移入が多かつたことを併せ考へる必要があるやうだ。

尚本文中に引用の訳文はそれぞれの人のそれぞれのりつぱな訳のある分も、序章の書簡文一篇を改造社版魯迅全集中から借用した以外は統一を期する上からことごとく敢て自ら訳し直した。

次に本伝執筆の上増田渉氏、上海の内山完造氏に負うところ少くなく、殊にも増田氏には尽力を蒙るところ多かつた。誌して両氏への深謝の意としたい。

昭和十六年早春

小田嶽夫

補遺

私の「魯迅伝」が昭和十六年に出たあと、いろいろと魯迅を対象にしたすぐれた書物が刊行された。例えば竹内好氏の「魯迅」、増田渉氏の「魯迅の印象」、尾崎秀樹氏の「魯迅との対話」、川上久壽氏の「魯迅研究」など。又、中国でもたくさんの本が出た。それらの書物によつて、私は

新らしく多くの事を知った。当然私は自分の「魯迅伝」が復刊される機会にめぐまれる場合には、訂正したり、増補したいという気持を強く抱かされた。そしてその復刊の機会にめぐまれた今考えて見るのに、中国人の書（翻訳のないもの）の知識を借りることはともかく、日本の同時代人の研究の業績を自己の書に取り入れるのは、いわば人の何とかですもつを取ることに成り、面白くない。

それで以前の「魯迅伝」は仮名使いを新仮名に、旧漢字を新漢字に改めるほかは大体元のままにし（現在では殆んど使わなくなっている「支那」という呼称も、又あとがきの中の、今では自分にもよく意味のわかなくなっている部分もそのままにした）。その代り、僅かばかりここに「補遺」として書き足すことにする。

「補遺」と言っても、大したことを書くこととするわけではない。私は「魯迅伝」が上梓になったあと、魯迅の「朝華夕拾」のなかの「百草園から三味書屋へ」の内容を簡略化して使えばよかった、というような気がした。それから広州での生活が簡に過ぎて（材料が無かった）のが不満であった。そのほかには上海で鹿地亘氏に聞いた、魯迅についてのエピソードなども使つべきだったかな、なども考えた。

「百草園から……」の中に書かれてあることは、戦後出た周遐壽（周作人の変名）の「魯迅の故家」（これは翻訳が出ている）に一層くわしく述べられているが、主として魯迅の文章に依るとすると、大体次のようなあんなばいだ。

魯迅の家のうらに「百草園」と呼ばれていた大きな庭があった。そこにある植物と言えは野生の草だけであつたが、魯迅にはそこが楽園であつた。

「青々とした野菜のうね、つるつるした石の井戸、高くのびたさいかちの木、紫つばい赤の桑の実は言うまでもない、蝉が木の葉の茂みのなかで鳴きつづけ、ふとつた黄蜂が菜の花の上に伏し、すばしいひばりがふいに草むらからまっしぐらに、雲へ向つて飛び立つことなども言つまでもない。ただまわりの低い土塀のあたりだけでも、かぎりないおもむきがあつた。」と魯迅は述べている。

動物としては蝉や黄蜂やひばりが出て来たが、他に低い鳴き声の油蛉もいたし、こおろぎもいたし、むかでもいたし、班箋もいた。班箋というのは、指でせなかをおさえると、ボンと音がして、おしりから煙のよつな液が出た。

何首鳥のつると木蓮のつるはからみ合っていたが、この何首鳥の根のことで、或る人が「中には人間の形をしたのがあり、それを食べると、仙人になれる」と言つた。

魯迅はその話に興味をそられ、さかんにあちらこちらの根をひっこぬいた。長くつながつた根をどこまでもぬいて行つて、とうとう土塀をこわしたこともあつた。が、目ざす人間の形をしたものは見つからな

つた。

キイチゴもあつて、その実は、小さいサンゴの玉をよせ集めた小さいまりのようで、すっぱくて、甘くて、色も味も、桑の実よりはずつとよかつた。

だが魯迅はやがてこの「楽園」と別れなければならなくなつた。「三味書屋」という書塾へ通わせられるようになったからであつた。

そこは百草園の門を出て東へ三町たらず、まっすぐ行き、石の橋をわたつて、又東へまがつたところにあつた。里ぬりの竹の門があつて、そこをくぐつて三番目のへやが書齋であつた。

まんなかに「三味書屋」と書いた額がかかつて、その下にふとつた、班点のある鹿が、古い大きな木の下に伏している絵の、かけ軸がつるしである。

魯迅たち生徒は、その額とかけ軸にむかつて、二度おじぎをするのであつた。だが、これは額やかけ軸にするのではなく、一回目は孔子さまへ、二回目は先生へする礼なのである。

先生は背の高い、やせた老人で、ひげも髪も「味塩」であつた。大きなめがねをかけていた。大へん品行のりつばな、質朴で、博学の人だときかされていたので、魯迅はこの先生の前ではひどくかたくなつた。

だが魯迅はかたくなりつばなしでいたわけではなかつた。彼は前に誰かから、東方朔という大学者（漢代の人）が「怪哉」という虫を知つていて、その虫は怨みの化身だが、酒をかけるで消える、ということを知つていて、かねてからの由来が知りたくてならなくていたのであつた。で、彼は「怪哉」の日の授業が終つたあと、帰りに、

「先生、『怪哉』っていう虫、どんな虫ですか」とたずねた。

「知らん！」とひとこと言つただけで、いかにも機嫌がわるく、何だか怒つてい

ような顔つきであつた。魯迅には意外であつた。先生は大学者なのだから、知らない筈はない、それなのに「知らん！」と言つた。これは知らないのではなく、言いたくないのだ、と彼は供心に考えた。彼は今までもよく、年上の人間が、知つていても言いたくないときはそう答える場面に、何度もぶつかつていたのであつた。

彼は又、先生にはこんな余計な質問をしてはいけなのかも知れない、とも思わされた。そして、それ以後はもう一切そういう質問をするのはさしひかえた。

三味書屋の裏にも小さな庭があり、生徒たちはよくこつそり書齋をぬけて出して、そこへ行き、花壇に上つて臘梅の花を折つたり、蝉のぬけがらを探したりした。蠅をつかまえ、蟻にやつて遊んだりもしたが、これは全然音がしないので、いちばん工合がよかつた。

先生は寛大で、しばらくは生徒たちの自由にまかせているが、あまり遊んでいるのが長くなると、はじめて、
「みんなどこへ行つた？」と言つた。

そこで生徒たちは一人ずつ次々に帰つて行く。先生は戒尺（生徒を打つ道具）を持つていたが、めつたに使わなかつた。跪く罰則もあつたが、これもあまり用いなかつた。大ていはじろりと睨むように見て、
「本を読め！」と大声で言つただけであつた。

みんなはのどをこじあけて、大声で読みはじめ。まるで鼎のわいたようなさわぎになる。みんなそれぞれそれちがつたものを読むのだが、先生は先生でべつなものを読む。だんだん生徒たちの声は低くなり、静かになるが、先生だけはいつまでも声の調子を落さない。顔を上向け、それを横に振つて、うしろへねじ向け、ねじ向けする。

先生がこうして朗読に夢中になっているあいだは、生徒たちには持つてこいの時間だつた。何人かのは紙ばりのカフトを指にはめて、芝居のまねをするが、魯迅は絵をかくのに一所けんめいだ。「荊川紙」という紙を、小説の挿絵の上に当てて、一枚一枚敷き写しに写すのだった。

読んだ本が殖えるにしたがつて、写した絵も殖えた。塾での本はあまり読まなかつたが、絵のほうの成績は大いにあがつた。いちばんまとまつたのは「蕩寇志」と「西游記」の挿絵で、もっとも厚い本になつた。だがこれはのちに彼の手を離れることになつた。金が必要になつて、或る金持ちの息子の級友に売つたのであつた。

魯迅はこのようではあつたが、根は真面目であり、或る日塾へ行くのに遅刻したことがあつたが、彼はそのことを非常に悔いた。そして、二度と遅刻しまいという決心で、自己の机に「早」という字をナイフで彫りつけたのであつた。

広州での魯迅については、私は十数年前のこと、たしか「在広州的魯迅」という題の薄っぺらな中国書を手に入れたのだった。それを讀まないうちに、書齋整理のさい見えなくしてしまい、今度も、極力さがしたが見付からず、中国書専門の店にもあつたが、入手出来なかつた。右の本にはどの程度のことか書いてあつたか不明だが、べつに許広平女史（魯迅夫人）の「魯迅回憶録」に、いくらか当時の記載がある。

彼女によれば、魯迅は広州へ行くについては、創造社と連合して一つの戦線を結成し、共同で旧社会旧勢力にたいする攻撃を展開する文芸運動を考えていたのだが、郭沫若はすでに広州を離れてい、連合戦線結成の夢はあえなく崩れた。身辺には頼るべき人としては許壽裳（魯迅と同郷の友人の学者、日本留学の時も、教育部の役人のときもいっしょであつた）一人しかいず、魯迅は孤独の悲哀を深く感じていた。

そしてそういう矢先に、あの蒋介石の共産党追放のクーデターがやつて来たのであつた。許広平女史は記している。

「激しく変化した時局を経て以後の魯迅は『夢幻を抱いて来て、ひとたび実際に会うと、忽ち夢境から追い出され、素漠だけを残された』と深く感じたのであつた。

併しじつさいは私たちは皆夢幻を抱いて来たのであつた。北洋軍閥が私たちを極度に追いつめたさい、南方は革命の空気が比較的濃厚なので、いくらか救われた気持なのであつた。南方へ来てから以後、いささか飯象を見、厦門の魯迅と広州の私、はじめは何れもこの飯象に迷わされ、簡単に信じ、よるこびが辞色にあらわれるのを免れなかつた。十月十日になつて魯迅が厦門の慶祝会を見、私と共に中山大学に対して尚希望を持つたのは、みな簡単に信じた一例で、しかもほんとうに深く人民の生活に入らなかつたのは、やはり「古い」側へ心をとられていたのであつた。

彼女は又言つた。
「私が再三魯迅に広東へ来るようすすめたのは、革命の広州に対し、貢獻してもらつて希望したからであつた。その頃広州の文芸界は、創造社の少しばかりの読物があるほかに非非常にさびしいものであつた。だから魯迅は北新や未名の出版物を広州の青年に紹介した。こういう出版物は理論で青年を教育する目的を達することは出来ないにしても、その頃の広州ではもうこういう文芸読物が容易に手に入らなくなつていたのであつた。

そのとき芳草街の北新書屋は某青年に又貸しされて空屋であつた。部屋が二つに台所で、前の部屋には書棚があり、うしろの部屋が住居であつた。私はその青年の知り合いの人を探し、青年を訪ねて、書籍を代理販売することにつき取りはからつてもらつた。その青年は非常に魯迅を信頼して、家を譲り、家具も含めて毎月九元の家賃を払えばいいことになつた。（中略）此のことから見ても、当時広州には私たちに対し熱心に協力する人が少くなかつたことがわかる。

私は広州を離れてから十年後、一九二六年に北から帰つたのだが、もう状況はひどく變つていて、當時は国共合作下にあつたが、もう反革命の暗流は出来上つていて、時機さえ成熟すれば、忽ち顔をそむけて敵対し、つづいて屠殺を以て共産党人に対しよつとしているものであつた。

こういう状況については、魯迅も私も全然思ひもつかなかつた。そしてその責任は私が負わなければならぬものである。すでに郭沫若先生は去ることを余儀なくされて来たのだが、それから見てわかるように、ここにはもう風雨が来ようとしていたのであつた。

私はそのときには年も若く、人生経験も浅く、政治の影響と、教育の足りないために、魯迅には熱心に樂觀を示したのであつた。そのために彼が広州へ来たのであり、その実情から言つと、私はその責任から逃れることは出来ない。

この非常にむずかしい局面にあつて、魯迅は血の教訓、残酷な事実が

ら、階級思想に対する深刻な認識を激発されたのだ。『もとはよく識つたこの階級（註・中産知識階級）を憎悪し、その滅びるのを少しも惜しいとは思わなかつたが、のちには事実の教訓によって、ただ新興の無産者だけに将来があると考えるようになった』（『二心集』序言から）と認識するに至つた。

戦後二三年の頃であつたか、私は伊馬春部氏から、一冊の薄っぺらな中国文の本を送られた。氏の友人で中国の戦場へ行つていた人がこつそり持ち帰つたものだとのことであり、が、氏には用のないものだからといふことで、私に贈られたのであつた。

著者が誰であつたかよく名前の知らない人であつたと記憶する、どういふ表題であつたかも忘れてしまつた（いま本が見付からなくなつてゐる）が、それは魯迅のことを書いた本であつた。

そのなかに魯迅の性格を知る参考になる面白い話が記されてあつた。魯迅には幼年時代よくさげすまれたり、だまされたりした、にくい人間がい、その人間にたいして魯迅は永く怨みつづけていた。

魯迅は日本遊学時代も、ひまひまに武芸を修めたむし死とのことだが、それといふのも目的は彼への復讐であつた。いつも匕首を身につけていたが、その匕首の鞘は、二カ所に白い皮紙を巻いて二片の木片をくつき合せてただけのものであつた。そんなふうにしていたのは、鞘がしつかりしないことを望んだのであり、というのも、そうしておけば仇とぶつかつた場合、特に中身を抜く必要はなく、匕首を突き刺しさえすれば、鞘は自然に二つに割れてうまく目的が達せられるからであつた。

ところで、その仇は、魯迅が日本から故郷へ歸つて見たところ、ちょうど人聞きのよくない重病にかかり、しかも重態におちいつてい、世間のうわさではその患部が脱落してしまつてゐるとのことであつた。これには魯迅も苦笑するほか無く、それ以来彼は片時もはなさなかつた匕首を片附けたとのことである。そして、のちに彼はこれを紙切りナイフとして使つたようになつた。

この話は魯迅の復讐觀念の強さを語るものと言える。一つ作品を引合ひに出すと、例えば「故事新編」のなかの「鑄劍」という作品は、全体を貫いているものは、悪辣な支配者にたいする反抗、戦闘なのだ、これを一つの復讐の物語りとしてゐるところに、魯迅の「復讐」にたいする志向がうかがわれる気がする。

魯迅の亡くなつた翌年、上海で鹿地亘氏から次のような話を聞いた。

或る日内山書店で鹿地氏は魯迅と會つて、折柄来合せていた二、三の中国人作家もまじえ、円テーブルをかこんで話し合つていた。そのうちふと魯迅が、テーブルの上にある巻煙草の箱をあぐさし、

「これはどなたのですか」と訊いた。鹿地氏が、

「そつですか、じゃ一本いただきましよう」と言つて、中から一本ぬき出した。

鹿地氏ははじめ意味がよくわからなかつたのだが、すぐに、そこにいた中国人作家の誰かを魯迅は好いていなかった、或いは反感を持つていたのだ、といふことをさどつた。だから、煙草がその男のものだったら、魯迅は手を出さなかつたのだ。

魯迅はそういうことを言うことによつて、或いはその某中国人にたいし敵意をあらわにするつもりだつたのかも知れないが、ともかく、魯迅の潔癖或いは執心を示す話のように思われる。

次は、内山完造氏が何か書いていたかも知れないが、私が直接聞いた話なので、それを紹介する。

魯迅は金は全部内山氏に預けておき、必要に応じて同氏から受け取つていたが、或るとき魯迅が内山氏に、

「老板、ほくのお金はどのくらい残つてゐるでしょうか」と訊いた。

「さあ、半年くらい持つだけのものがあるでしょう。どうしてですか」

「そつ。それならひとつケンカをはじめましょう。魯迅はそう答えた。このケンカというのは或いは「徐懋庸に答えると共に、抗日統一戦線の問題について」といふ文章（これは本文には出て来ないが、「国防文学」派と「民族革命的大衆文学」派との論戦に關係あるもの）のような気もする。この文章のすまじさが、私にそう思わせるのである。

魯迅はどの人でも、大ゲンカをはじめると、相手方のはげしい中傷譏誣なども、一時文筆の上での収入が杜絶するような破目に陥られることも、中国の文壇では起る不安もあるのか、魯迅は生活費が半年分あることを確認した上で、ケンカに着手したのであつた。

魯迅の妥協の無さ、戦闘精神のはげしさが、この話からもうかがえるではないか。

＊

私は「魯迅伝」の序章の終りのほうで、

「魯迅は一九三六年十月に死んでゐる。この彼の死んだ年の一九三六年以前と、翌年の一九三七年以後とでは中国の歴史に劃然とした色分けがつく。即ち日華事変以前と以後である。魯迅が生きていて事変に遭遇したなら如何の感想を抱いたかは軽々に判断を許されぬ。そして私は魯迅が事変の前夜に死んだ事に自分の感傷から無理にも何か意味をつけて考へたのである。事変が中国民族にとつても曙となるならば、魯迅は暗黒のさ中に死んだ事になるし、それがより悪い状態を持ち来すならば、せめても魯迅は救われた事になる。若し又中国がこういう大事

變の洗礼の後にも尚本體を改めず、旧態依然を続けるならば魯迅は空しく徒勞を続けたことになる」と記した。

ところで戦争の結果は読者諸君が御承知の通りである。中国は勝利者となつた。が、勝利者となつたあとで、国民党・共産党の合作が破れて

内戦となり、昭和二十四年（一九四九）には共産党が全面的に中国を制した。そして日本に対する勝利は米英の多大の援助の下に克ち得たものであったが、共産党の国民党に対する勝利のさいは、いずこからも援助を受けていないばかりでなく、国民党にたいして為した米国の莫大な援助を無効にさせたのであった。

共産中国のその後の推移から結論すれば、日本との戦争は中国にとつて明らかに曙を招来したのであり、日本人の私がそう言うのと厚かましい言い草とも取られるだろうが、じつはこれは現在の共産中国の為政者が言っている言葉なのである。

魯迅が蒋介石から逮捕令を出されていた人間であったことは、やはり本書の序章に出ていている。それに反して、共産中国の首領の毛沢東は、魯迅について次のように言っている。

「魯迅は文化新軍の最も偉大で最も勇ましい旗手であった。魯迅は中国文化革命の主将であり、しかも偉大な文学者であっただけでなく、偉大な思想家であり、偉大な革命家であった。魯迅の骨はじつに硬く、奴隷根性やへつらい気質は毛筋ほどもなかった。これは植民地、半植民地の人民が最も尊重しなければならない性格である。魯迅は文化戦線上で、全民族の大多数を代表し、敵人に向つて鋒を衝き、陣を陥れること最も正確で、最も勇敢で、最も堅決で、最も忠実で、最も熱烈な空前の民族英雄であった。魯迅の方向こそ中華民族新文化の方向である。」

本書の序章で又私は、
「孫文がいつも華々しく光り溢れたものを身につけた時代の英雄であったのにひきかえ、魯迅は寂しい孤独な一個の時代の受難者であった。そうしていかにもそれらしく魯迅は紫金山の壮麗な陵墓とは似ても似つかない上海郊外萬国墓地の一隅にひそやかに葬られている」と叙した。

が、今はちがう。すでに毛沢東が最大限の讃辞を浴せているのだから、魯迅の墓がいつまでも元のままの状態であるわけではない。果してそれは、上海の、魯迅の最後の住家に近い虹口公園内に、新しい装いで再建された。

二十メートル四方ほどの石畳の広場の中央に花壇があり、そのまん中に白い大理石の魯迅の坐像がある。その少しうしろは大きな石塀になっていて、その前に文字も何にも書いてない石棺のような形の一つの石が置かれてある。いかにも簡素な感じだが、うしろの石塀に横書きに刻まれている「魯迅先生之墓」の六字は可なり大きく、毛沢東の筆になるものである。簡素さが却つて豪華な感じになってい、又厳肅な気を漂わせている。

ちょうど十年前の秋、私は文化視察団の一員として中国を訪れたことがあり、この出来上つて間もない墓の前に花輪をささげたのであるが、恰かも日曜日に當つていたせいもあつてか、小学生や工人の団体が引きもきらず参拝に来る姿に、目をみはらされたものであった。

この公園内には又二階建ての、延べ二千六百平方メートルの、紹興の民家に模した魯迅記念館がある。魯迅の生涯が時代順に、写真、遺品、書籍、雑誌、新聞等が、単に魯迅個人だけでなく、魯迅の背後の環境をも闡明させるように、周到に集められ、構成されて、陳列されている。魯迅が生を閉じた最後の住居はこの公園の近くのことは先に述べたが、この家屋も魯迅記念館にされている。

北四川路の突き当りの裏側に當つて居る場所で、細い路地を入つた突き当りの手前右側、三階建ての長家づくりの建物の、一番はしの、間口二間にも足りないぐらゐの家である。一階のつつきは居間兼応接室、その奥は食堂、二階は書齋、三階は子供部屋になってい、これが世界的な文豪の住居かと首を上げたくなるような、簡素というよりもむしろ佻しい感じの住居である。

尚私は魯迅が大正十三年（民国十三年）五月から大正十五年（民国十五年）八月（四十三才から四十五才まで）、時の政府の圧迫から廈門へ逃れるまで、二年三ヶ月住んでいた、北京の阜成門内西三条胡同二十一号の家をも訪れた。

魯迅が北京を去つて以後、彼の老母及び妻は弟の周作人の家へ引き取られていた筈で、その後この家はどうなつていたのか聞きもしたが、私たちが行ったときは、この家はまだ記念物にはされていなかったが、そうなる道程のところだつたらしく、入口には煉瓦のあいだに石をはめて、「魯迅故居」の四字（魯迅の文字を取つていた）が彫りつけられてあり、なかに番人がひとりいた。

通りに面したところに細長い部屋がひとつあり、その横を通つて、われわれはすぐに中庭へ出る。せいせい十五、六坪ぐらいで、真四角な感じである。煉瓦が敷かれてい、右側と左側に、ライラックが一本ずつ植わつて居る。一本は白で、一本は紫だとのことである。

この中庭のおくが、魯迅のほんとうの住居で、と言つても、入つたところにもちよつとした小部屋があり、その正面のおくに、長四畳ぐらいの感じの、小さい書齋があり、その右側に壁をへだてて細長い部屋がひとつあるだけである。書齋はありし日のままにされているとのことだつたが、右側の壁に向けて、小さい机があり、その前に粗末な藤椅子が置かれてある。

机の上には右からの順に、大硯、筆筒、小硯、筆さし、墨入れ、牛の置物、枕時計、ランプが置かれてあつた。机の上の壁に、れいの藤野先生の写真が飾られてあつたとのことだが、この写真はガラスを張つた額に入れられ、机の上に置かれてあつた。

藤椅子のおくは寢台で、それでもう部屋はいっぱいである。正面のおくはガラス窓で、そこから裏の庭が見通されるようになって居る。この家は完全な中国式の建物で、多分そのガラス窓のところは、もとは障子になつて居たのを、魯迅が取り変えたものらしい。明け立てが出来な

くて、ただガラスをはめたりつくりである。魯迅は昼間でも仕事の合間には寝台に寝て、この窓から裏庭を眺めたのだらう。

その裏庭は中庭よりもちよつと狭い感じで、こちらは土の庭である。特に手は加えられていない、ごく素朴なものである。

書齋の右側の細長い部屋には、本(主に日本の書籍)がいっぱい詰まっていたが、ここはもとは老母の部屋だったとのことである。中庭をはさんで、右と左にもささやかな建物があるが、右は多分厨房であつたと思う。左は夫人の居間ででもあつたが。

ともかく、まったくゆとりがない、簡素で、きびしい感じの、が、何となく野趣もあるこの住居は、魯迅その人にかにもびつたりした感じであつた。

魯迅の純粹の創作集は「呐喊」と「彷徨」の二冊であることは、本文によつて知られたことと思うが、魯迅がこの家にいたのは「彷徨」の時代で、孫文の共和革命の結果に絶望的になつていた時代でもあつた。

魯迅の記念物は以上だけにとどまらず、紹興の魯迅の生家も紹興魯迅記念館になつてゐる。

朝日新聞記者林田重五郎氏はそれにつき次のように記している。

「家の前の道、東昌坊口は、昔ながらの敷石である。今は名前も魯迅路とかわつてゐる。道の北側に白力への高いへいをめぐらせた大きな家、昔の地主の住居で、いまは紹興魯迅記念館になつてゐる。生家は、まるでこの地主の家に付属した形で、高いへいの西のはずれに入口がある。生家へはいる。レンガの壁の土間の部屋(房子=フアンツ)、中庭(院子=ユワンツ)、また部屋と、うなぎの寝床のように奥へ奥へと続いてゆく。京都や大阪の船場の旧家によくあるような、住居の配置である。

院子に板石の腰掛がある。少年時代に、ここに腰をおろして、祖母からよく昔の物語を聞いたぞうだ。

房子のなかには、むかしのままの板のベッドや机。父が読書をした部屋もあれば、母のベッドもある。(中略)広い台所には、大きなカメが並んでゐた。祖父が清朝の官吏で、代々読書人の家柄だったことを物語る旧家らしい姿である。」

ところで面白いのは、この記念館に工務員(事務員)として、小説「故郷」に出て来る、魯迅の少年時代の友だちである閩土の孫の章貞氏(今年三十三才)が働いてゐることである。

彼は十年前、「人民画報」に一家の歴史を発表したことがあるぞうだが、前記朝日新聞の記者が訪れたときは、魯迅関係の資料を集めるため、農村へ出張中で、不在だったとのことであつた。

尚林田記者の記すところによれば、魯迅が少年時代に通つた質屋の家は意外に大きく、現在は小学校になつてゐ、又、質屋から受け取つた金で薬を買つた光裕堂という薬屋は、現在もあつて、「公私合営」になつてゐることである。

魯迅を記念し、或いは魯迅の名を冠したものは、以上のほかにも非常に多く、紹興には大記念館のほか、第一中学には魯迅の工作室があり、映画館、小学校、幼稚園に、魯迅の名を冠したものがある。そのほか北京には魯迅博物館、広州には魯迅記念館があり、又延安には魯迅芸術大学がある。西安の西北大学と厦門大学には魯迅記念室、浙江省の四明山には魯迅学院浙東分院、青島と旅大市には魯迅公園がある。又武漢東湖や天津の公園には魯迅の胸像がある。

おそろくまだ他にもあることと思うが、まるで魯迅等がその教えを打倒することにつとめた、かつての中国人の偶像孔子に、魯迅がとつて代つたような観がある。

魯迅は偶像を否定し、権威に反抗した人であつたが、今自身が偶像化され、権威になつてゐることに、或いは地下で苦笑しているかも知れない。

併し、たとえそうであつたにしても、魯迅は不当に崇拜されているわけでは決して無い。その崇敬に値するものは十分にあるのである。

ただ中国の暗黒のどん底で、ごく一部の人に哀惜されながら死んだ時のことを思うと、私には感慨ただならないものがある。

私の中国を訪れた昭和三十一年は、魯迅死去二十年後に當つて、魯迅の命日の十月十九日には、世界各国から文学者を招いて、盛大な魯迅記念式が北京で行われた。日本からは長与善郎、里見弴の二氏と、魯迅と親交のあつた内山完造氏がこれに列席した。

ところで、この魯迅記念式は北京でだけ行われたのではなく、国内主要都市全部で行われたのであつた。当日は私たちはちょうど重慶へ行つて、重慶での記念式典に列席した。

五千人を容れる大講堂(それは私たち外国人の客を泊める大宿舎に附属して建てられていた)でそれは行われたが、たまたま私が「魯迅伝」の著者だというわけで(拙著は中国にも翻訳が出ていて、一部の人には知られていたのであつた)、私も一場の講演をさせられた。

私ははじめに、魯迅が日本へ紹介されてゐる状況のあらましを語り、次いで魯迅と藤野先生の友情に言及し、そしてこの友清のとうとさを強調した。特別変つた見解を述べたわけでもなく、又強い表現も用いなかつたが、たまたま時の鳩山首相が日ソ国交回復交渉のためソビエトへ行つてゐたこと、中国も日本との国交回復の期待に燃えていた、ということもあつたのだらう、三度はばかり割れるような大拍手が起つた。

感想

亀井勝一郎

魯迅は一八八一年（明治十四年）九月二十五日、浙江省紹興城門に生れ、一九三六年（昭和十一年）十月十九日、上海で五十五歳の生涯を閉じた。今年（一九六六年）は逝世三十年にあたるわけである。私がおはじめてその作品に接したのは昭和十年（一九三〇年）であった。岩波文庫の一冊として魯迅選集の出たときである。当時の私に実に新鮮な感動を与えた。いまかえりみるとむろん私の理解には至らぬところが多く、また作品の背景をなす当時の中国の状況について無知無関心であったが、しかし青春の日の忘れぬ思い出として魯迅の作品はいつも心のなかに残っている。その日の感動を三十年後のいまふりかえっている。

当時私は魯迅について詳しいことを知りたいと思った。たまたま小田嶽夫氏を知り、氏が中国語に熟達しているとともに、中国の近代文学にも深い関心を抱いていることを知り、私は「魯迅伝」を書くことをすめた。それは昭和十四、五年の頃であったと思う。小田氏の「魯迅伝」の出来たのは原本の巻末をみると、昭和十六年三月（筑摩書房刊）であるから、十五年の大部分をこの執筆にあてられたのではないかと思う。いまからみたら、資料の上でも、解釈の上でも、欠点を指摘することが出来るかもしれない。それは専門家に委ねるとして、とにかく日本で最初のまとまった魯迅伝であるとともに、太平洋戦争へと移行していくこの激しい戦時色のなかで、こうした本が成立したという事実を私は一種の感動をもつてふりかえる。

厳重な検閲制度の存立していたことを思うべきである。小田氏は相当書きにくかったであろうし、原本の最後の章の「抗日」という表現など、伏字になっていた。魯迅の激烈な抵抗など当時としては充分伝ええなかつたであろうが、しかしそれだけに魯迅の悲哀と怒りと憂悶の深さは、文章のあいだににじみ出ている。この点で小田氏は主観を入れずに魯迅自身の文章をもつて語らせている。それが実に迫力をもっている。そういうかたちで魯迅の「愛国」の精神を小田氏は伝えようとしたのである。

序章で言っているように、魯迅は近代中国の魂の形成者であり、孫文とならんで中国にとつては近代史上の不滅の人物であり、つづいて毛沢東が登場するわけである。この三人の精神上の系譜を考えることも興味ふかいと思う。

小田氏は魯迅には直接会っていない。その歿後数ヶ月後に上海を訪れ、広平女士と遺児の海嬰さんに会っていることはこれも序章であきらかである。昭和十二年三月に上海を訪れたときであろう。私はさらに小田氏が中国語に熟達していると言ったが、氏はもともと「東京外国語学校支那語科」出身であり、卒業後は外務省（大正十一年）に入り、書記生として杭州領事館（大正十三年）につとめた。しかし文学への志深く、三年で外務省を辞して帰朝し、作家としての修行時代に入った。「城外」によつて第三回芥川賞を受けたのは、昭和十一年である。私はここで小田

氏の文学的経歴を詳しく紹介は出来ないが、いままで述べたところから言つても、当時として「魯迅伝」を書くに最もふさわしい人であつたと言つことが出来るであろう。日本の激しい時代とあわせて、中国における氏の生活体験が背景となつているからである。

魯迅逝世三十年に當つて、私はこの本を原本のまま復刻することを小田氏にすすめ、あわせて大和書房の大和君にその出版をお願いした。私はこの機会に、魯迅について書かれた多くの日本人の文章が、年代的に再検討されることを期待したのである。ささやかな論文とか感想であつても、過去三十余年間に、魯迅の文学が日本人のあいだにどのように受けとられ、評価されたか。同時に今後はどうなるか。この点では解放以後における中国文化界の魯迅評価も多くの参考になると思う。両国の文学者の共同討議のような機会を近い将来に期待したいものである。それによつて魯迅の真の姿のあきらかになることを私は期待したい。小田氏のこの本はわが国においての先駆的な仕事であることを銘記し、魯迅逝世三十年の今日復刻されたことを私は喜ぶものである。私の青春時代に魯迅から受けた感動とかさなりあつているだけに、なつかしい本である。

昭和四十一年秋

〔了〕

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）「日中戦争期「魯迅」受容の多角的研究 小田嶽夫・竹内好・太宰治を中心に」（課題番号21720068）による研究成果の一部である。